THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第三十年第六號　第三百八十號



現代唯一のしらが赤毛染はナイス
東京も大阪も大流行
ナイスの五大特長
■タツタ二十分で染ります。
■自然の髪と違はぬ艶黒々と。
■永く剝げず洗ふて褪めず。
■襟や枕に浸着せず、そして。
■用法は至極簡單です。
價
男子用 金二十五錢
小瓶 金三十五錢
大瓶 金大十錢
發賣 大阪、東京 丹平商會
全國到る處の藥店化粧品店に販賣す
ナイス
ナイス

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎世界論文集中の冠冕ーエマーソンを知らずして思想上の問題を語るは僭也。

慶應大學教授
戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

總クロース

上卷（六版）正價金壹圓四拾錢 郵稅金十二錢

下卷（三版）正價金壹圓貳拾錢 郵稅金十二錢

「今後はタゴールの時代也」とまで激賞せらるゝ現代思想界の寵兒タゴールが歐米の識者に多少批難せらるゝ唯一の點は彼れが『餘りに多くエマーソン的なる』こと也。併しながら吾等を以て之を見れば、是れ些かだもタゴールの聲價に累するものに非ずして、適ま以てエマーソンの益偉大なるを證するものに非ざるか。宇宙に新舊なし眞なるもの常に新なりとは是れ也。エマーソンの偉大深遠にして、幾ど何人も以て一指の更に高又大なるを加ふる能はざる自然乃至人生に關する千古不磨の奧理を闡明せること、益以て吾人の驚歎に値せずや。宜なるかな十九世紀の巨人トルストイはエマーソンの愛讀者として傳へられ、又十九世紀思想界の革命兒と呼ばるゝニイチエも（同世紀の文士哲學者にして一人の以て彼れの酷罵を蒙らざるもの無きに拘らず）エマーソンに對しては一言の以て之を貶せること無く、其著書中にも屢エマーソンの語を引用しては口を極めて之を稱讚せること。亦以てエマーソンが世界の思想界に於ける位置を知るに足らん。本書の價値多言を要せざるべし。敢て健實なる讀書家の一讀をすゝむ。

◎中外英字新聞評「簡潔にして光彩ある邦文を以て巧に飜譯せり寸鐵殺人の警句は殆んど毎行に盈つ…」

東京市本郷區西片町十番地　玄黃社　電話下谷一三一九番　振替東京七九九五番

信用なき店及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

現代評論選集

第五編

中澤臨川氏著

臨川論集

定價參拾五錢
郵送料金四錢

新刊出來

臨川氏が從來公にせる一切の評論より其の精髓と稱す可きものを集め以て一卷とせるもの也

新思想の解説者として新文明の指導者として、我が臨川氏は最も尊敬すべき人也。今や論壇多士濟々たるも溫かき心を有てる批評家、十分なる鑑賞をあらゆるものに徹せしめ得る博大の批評家として、何人がよく氏と雁行することを得ん。新しき論壇に最高の水準を示すものはまさに此の一卷也。

第一編 田中王堂論集 田中王堂氏著

第二編 片上伸論集 片上伸氏著

第三編 相馬御風論集 相馬御風氏著

第四編 阿部次郎論集 阿部次郎氏著

▼小形クロース製美本
―表紙に著者題言刷込―
一册參拾五錢郵税四錢づゝ

情話新集

賣切又賣切

各編皆增版出來

第一編 舞鶴心中 近松秋江作

第二編 舞妓姿 長田幹彦作

第三編 小さん金五郎 田村俊子作

竹久夢二氏裝書極美本

一册參拾五錢郵税四錢宛

東京市牛込區矢來町中の丸 **新潮社** 電話番町二二三三番 振替東京一七二四三番

縮刷全譯叢書

人間の記錄にして如斯偉大如斯沈痛なるものなし

ルッソオ著

全譯 懺悔錄

本當に自分といふものを考へさせられる書也

生田長江 大杉榮 譯

上下二册 上卷發賣

■總洋布最上製■
■定價金九十錢■
■郵送料八錢■

近代主義の第一人者としてのルッソオの偉大は玆に説くを須ゐざる也。此書は、彼が提げて審判の廷に立たんとするの覺悟を以て書ける赤裸々の自傳にして、實に血と涙とを以て記されたる懺悔錄也。すべて十二章二千五百有餘枚の雄篇、上卷に收めたる其の前半は彼が生ひ立ちより、二十五六歳に至る迄を叙せるものにして、一個鋭敏にして多感なる少年が、數奇なる運命に弄ばれ幾多の境遇に輾轉しつゝある間に、心身の次第に眼醒め行く狀を描く。其少年の空想の華やかさとりとめもなき戀の數々、更に性慾の發展のすさまじさ――彼は、些の憚る所なく巨細に之を書けり。彼は實に人間の人間也。彼の自分を描くは實にあらゆる人間を描くものにして、何人にも痛切なる共鳴を呼ぶの書、從つて何人にも興味多き書たり。しかも、我邦未だ信頼して讀み得べき譯なし、今新に生田大杉兩氏の共譯成る。人間最大の書、こゝに我等が有となれる也。

■下卷=印刷中・七月上旬發刊すべし=

東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町二二二三番　振替東京一七四二番

早稻田大學講師
元大阪高等商業學校長
文學士 平沼淑郎先生著

最新版

舌の先とペンの先

平沼先生の溫健着實にして徹底せる所説は宜く人情の眞意と活社會の實相と人生の機微を闡明し以て平生の抱負と主張とを絶叫せらる、其眞面目なる諷刺を藏し、嚴正なる内に痛罵は續出す。其奇警なる論鋒は識者の心膽を寒からしめ其深刻痛快なる筆彈は吾人を驚異せしむる所、先生の獨特にして本書の生命也。敢て此の快著を一般人士の必讀を要求す。

新裝頗美本四百頁
正價壹圓
送料金八錢

忽ち三版

■藤井文學士 西脇義二先生共著

知識のくら

海嘯を初め百二十餘項に亘り詳説せらる！風、雨、雷電及び電話の如き**自然界の事實**を最近科學の原理と古代の傳説とを調和し趣味的に説明せるものなれば取つて直ちに演説講話の話材となり、科學知識の寶庫たらん。

■新裝函入美本 全一冊六百頁 金一圓二十錢 送料金十二錢

本書の内容は、天、地、岩石、磁石、經度、緯度、太陽、月、星、彗星、隕石、日蝕、春夏秋冬、二十四節、氣、十二宮、十二支、赤道、黃道、氣帶、空氣、氣溫、氣壓、風引力、寒暖計、晴雨計、時計、太陽の出沒、地理里、空中電氣、電話、電氣、電車、無線電信、水、海水、土用、雨、雲、露、雹、雪、氷、虹、火山、地震、溫泉、石油、石炭、原野、湖、沼、海波、

發兌 振替東京二四八〇〇 東京市京橋區松川町 榮文館 ── 賣捌 全國到處の書籍店

現代の文壇に雪嶺先生あるは

修養の典範◉不朽の大著述

文學博士 三宅雪嶺先生著（六月中旬出來 送本着金順）

最新刊

想痕

◉菊判特製天金美裝箱入 全一冊紙數壹千四百頁 定價金參圓八拾錢 郵稅（內地金貳拾錢 支鮮各四十錢）

高遠の想、深邃の識、學東西を兼ねて德百代に高く、眼古今を空しうして觀察警拔論議正大、常に一世の師表たる者は、我が雪嶺先生に非ずして誰ぞ。先生は實に一代の偉人なり哲人なり高士なり、其の人と爲りや溫乎として玉の如く、諄々として人を敎え世を導くの態度は頗る親しむべしと雖も、一たび世を憂へ時を慨するに方りては

（次の頁に續く）

發兌 東京市本石町 至誠堂 振替東京一七四四番 電話本局長三六六六番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日本に富士山があるが如し

筆峰嚴厲にして秋霜烈日の如く淸節三十年社會の木鐸として天下の仰ぐ所となる、誠に思想界の一大明星にして又操觚界の一大權威たり。誰か其の崇高偉大なる人格を仰景せざる者ぞ▲先生の文章筐底積んで山を成すと雖も。後來容易に之を世に出すを許ざず。『想痕』は、其の山積中より特に先生會心の傑作三百餘篇を選擇蒐集したる者にして、歲事・修養・思潮・敎育・政事・人物・雜の七門に分ち修身處世の秘訣、天下國家の經綸より宇宙自然の妙機妙用に至る迄說き竭くして餘蘊なく、字々皆精金、句々咸な美玉、蔚然として一代の盛觀を極む。實に是れ一代の思想史にして兼ねて人間處世の一大經典たり。苟くも先生の高風を慕ひ先生の敎訓を獲んと欲する者は本書を措いて果して何物かある。

內容目

歲事

◎一月▲老か壯か舊か新か▲一歲を加ふ▲生命の長と幅と厚▲勤勉と餘裕▲寒月梅花を照す▲如何に活氣を養ふ◎二月▲大寒よりして立春▲紀元節は何を敎ふる▲梅花▲源は遠く水は淸かれ◎三月▲男兒祭及び女兒祭▲春◎四月▲是より花の季節▲皐祖祭と櫻花節▲四月三日▲遊ぶべき季節▲櫻花の季節は短きか▲花下の淸遊▲禍は心にあり▲若反の心と利反の腰◎五月▲五月幟と五月柱▲兩節句▲花風去り葉風來る◎六月▲正に六月の霖雨▲梅雨▲優等生よりも實力生◎七月▲七月の學生▲本月躍出の新人物▲何處に旅行する▲歸省する幾萬靑年▲歸省▲何處に如何に暑中を過ごすか▲夏は天然娛樂多し▲山か水泳か其他か◎八月▲消夏法に就き▲炎暑に於ける遊說▲遊泳▲無休暇より良成績▲暑中何をか得る▲陽氣なる夏▲夏期休暇の坐禪▲夏日將に盡きんとす◎九月▲休暇後に精神爽快か▲如何に學業に就くか▲天漸く高く淸し▲燈火稍可親とは何ぞ▲活動に可安靜に可▲秋季▲齊しく明月を觀る◎十月▲百錬して秋水の光▲天長節の過去將來▲九月十三夜の賞月◎十一月▲秋の小春日本晴れ▲銃獵▲秋景漸く冬景に變ず◎十二月▲冬に入りて何の感▲政治季節と火事▲雪▲年の終末▲老の到る到らざる▲其他

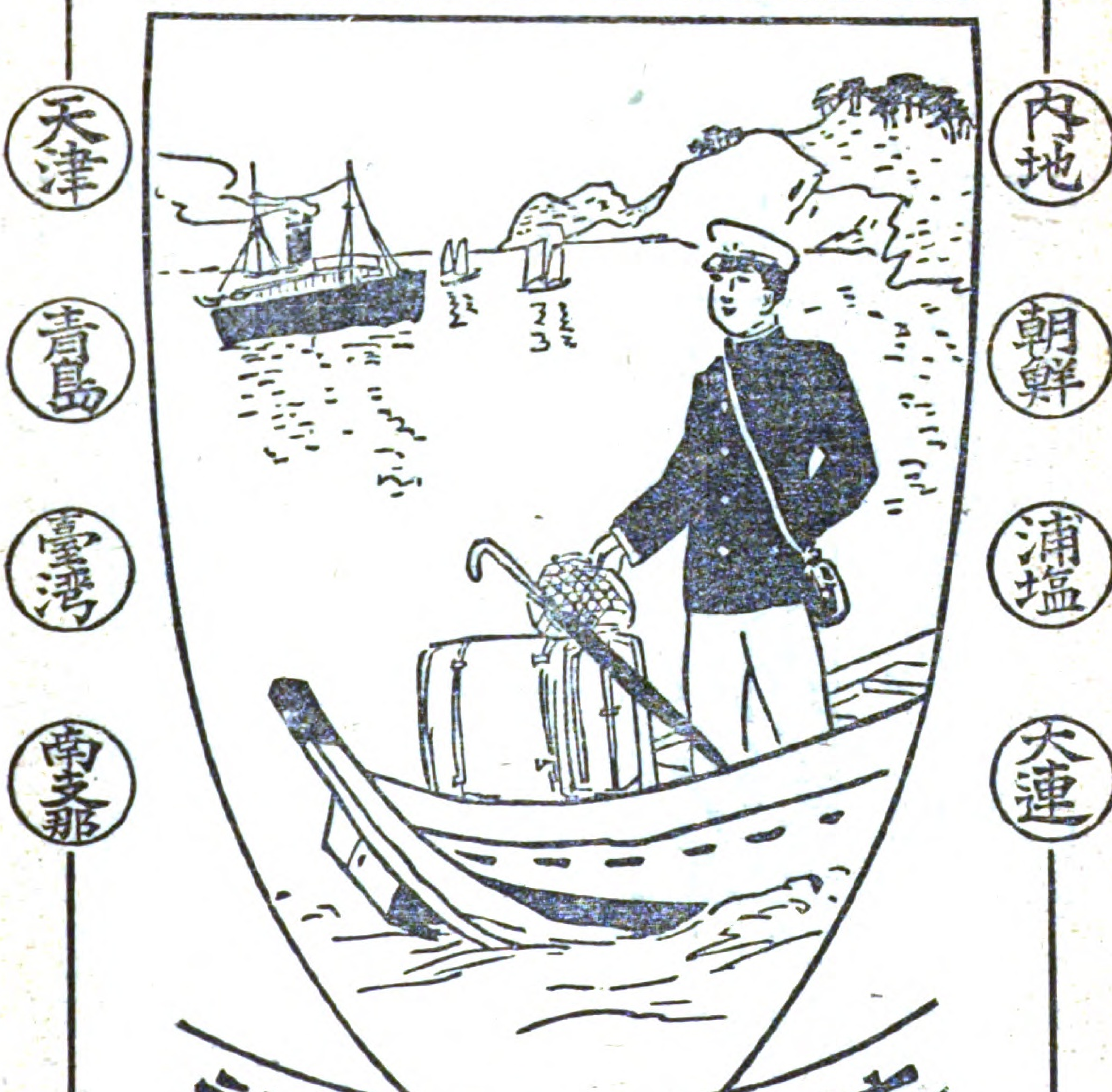
修養

▲人の志を論ず▲強き壓迫に堪へよ▲實力を以て虛勢に勝つの愉快▲有名無實▲日暮れて途遠ぎを嘆ずる勿れ▲運命を開拓するとは何の意義▲年齡と運命▲新人材は何處に出づるか▲何處に模範人物を求むる▲得要領及び不得要領を解說す▲獨立共行▲言と行▲時代を超出せよ▲意氣と風紀▲何の職業が最も愉快▲大臣以上を志ざせよ▲窮乏は天才の幸▲簡易生活の妙趣▲成敗を超脫せよ▲成功に就き▲勤儉の眞意義を解す▲黃金の効用▲用金と愛金と拜金▲商人▲

發兌 東京市本石町 至誠堂 電話本局長三六六六 振替東京一七四四番

學生夏季旅行運賃割引

自六月拾五日　至九月拾五日



大阪川口
大阪商船株式會社

詳細案内書ハ本店、支店、代理店へ御申込次第贈呈

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一、當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一、當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一、當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

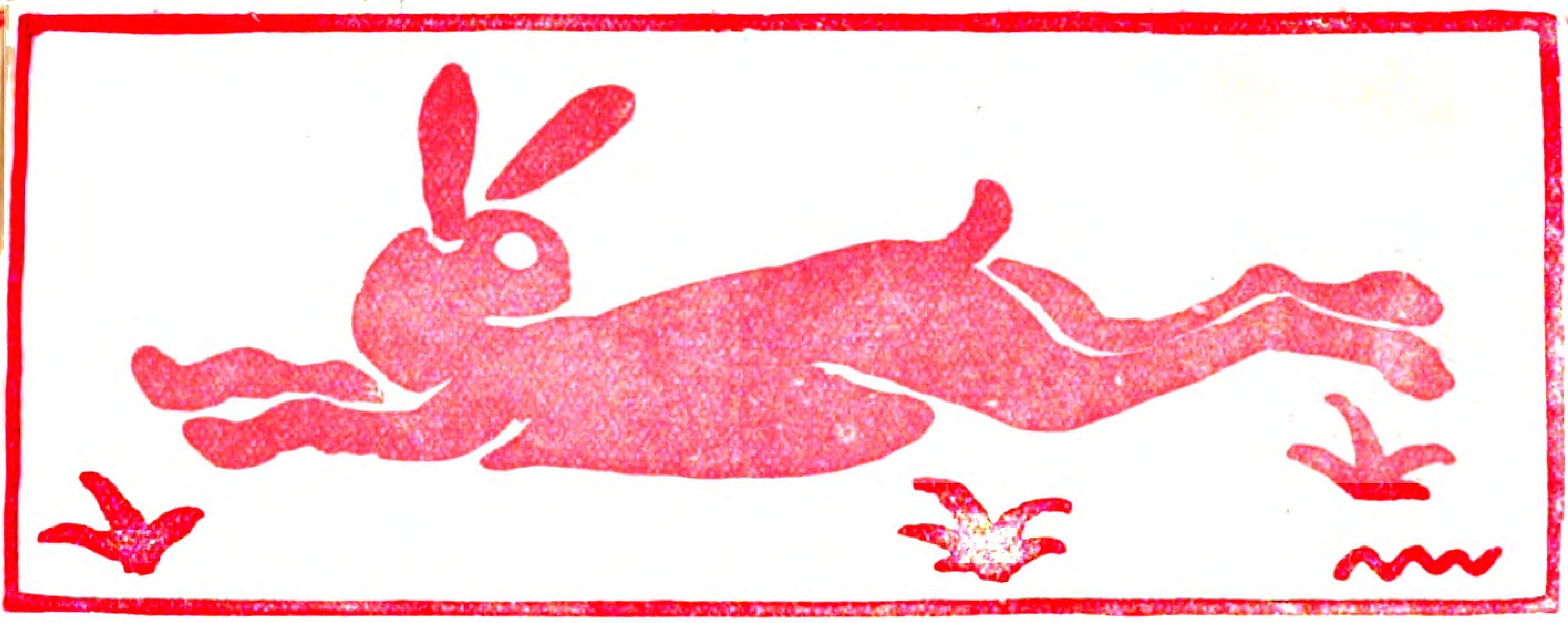
本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
（電長本局一八五六、五一五〇、一二八七番）
（振替貯金口座東京一七一七番）
支店 大阪市東區本町一ノ一三（電長本局二三一一番）

一、當會社は低利なる金融機關の設あり

一、當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一、當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第卅年六月號目次

▲公論

▲說苑



鴈治郎と延二郎

△評論

（創作）


營業品概目
○懷中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド 並ニ各寶石
○指環手釦 並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話局新橋 一二〇三 一二〇四
振替口座 七八〇七

SEGANTINI



Ave Maria

中央公論



六月號
第三十年第六號
第三百十八號

外交の失敗と善後策

(一) 大山鳴動して鼠一疋を出す

多大の期待を喚起すると同時に幾度か國交危機を叫ばしめし近時の日支交渉は終に平和を破るの不幸を見るに至らずして解決するを得たるも、其結果たるや極めて平凡なり、一項一條も懸直なしと叫びし當初の提出案に對せば最後通牒なるものは宛も脊髓を脱却せられし人體に異ならず、若しも斯計りの結果に滿足すべくんば何故に彼が如きの大騷動を演じたりや、世人をして大山鳴動鼠一疋を出すの感あらしむるもの宜なり、但だ故なく日支國交を破り兵火相見るの慘事に至らずして止みしは不幸中の幸なり。

一派の論者は袁總統を頑迷不靈なりと叫び支那當局の態度を以て暴慢、無禮、背信なりと痛罵したり、

然れども人は其脚地の異なるに從ひ意見を異にすることあるを免れず、我邦提出の案件は極東百年の長計に屬し穩正妥當なる論を待たざるも、支那に取りては浮沈の分るゝ所たるを以て袁政府の極力之を爭抗すべきは當初より知れ切りたることなり、我當局は須らく彼が心事を汲み其立場の困難を察し、先以て彼が體面を支持すべき方法を講ずべかりしなり、例せば談判の劈頭に當り我が朝野の間に唱へられしが如く内外に重望ある大官を特使として派遣するが如き正に其一案たり、然るに外相は斯の如き方法を排し傲然霞關の一室に籠居し時々電命を發し日置公使を蓄音器的に使用するを以て足れりと爲し、又時には出兵の噂を高くして北京を威嚇するの細策を弄し、爲めに支那政府を激怒せしめ益々强硬の態度を持せしめ、又た歐米を驚動して我が野心を猜疑せしめしが如き頗る拙劣の外交ならずや、殊に日本顧問官の傭聘、兵器同盟、南支那鐵道敷設權等の要求を含める第五項を希望條件と稱し自然他の要求と性質を異にする旨を英米政府に通知しながら、支那に對しては一厘一毛の懸値なき提案の一部として之が承諾を迫りしは支那及び歐米双方より多大の誤解を招くの因を爲し、即ち歐米をして我外交を一種のペテン外交なりと疑はしめ、支那をして我希望條件の撤回を期して折衝するの決心を爲さしめたりき、若しも我當局をして此般の情勢を解するの明と智とあらしめば其四月二十六日を以て第一讓步を爲すに當り斷然第五項を分離して之を後廻はしと爲し以て解決を謀るべかりしなり、然るに不幸にして其謀こゝに出でず依然として第五項の希望條件を最後要求と稱するものゝ中に加へ、想ひに青島還附を一種の景物として提供したるが如き事理を辨ぜざるも亦甚だしからずや、元來青島還附は開戰に先だつての對獨宣

言に明なる如く帝國の必然履行すべき約束なり、外務當局は該宣言に言ふ所のものは獨逸が素直に青島を我に引渡したる場合を指せるものにして、我が忠勇幾千の碧血を流して青島を奪取したる場合とは自ら形勢を異にすと辯明するも、吾人は之を以て大體に通ぜざる一種の三百的理屈と見做す、獨逸の手より之を請取るの方法は平和的なるにせよ又た戰鬪的なるにせよ、之を支那に還附するを必要としたる理由に至りては毫も變化あるべからず、我れ既に獨逸を尤めて却て其尤めに倣ふ可けんや、故に吾人は青島還附を當然なりと見做し、還附そのものを以て政府を責めんと欲せざるも、還附の時機方法及理由に至りては大に說なきこと能はず、元來青島還附は我が仁義公道を宇內に宣布する所以にして、其方法理由は最も正々堂々たらざるべからず、然るに我當局の事理を辨せざるや還附の時機方法を誤り、其理由を全然沒却し去り、我武士道の標徵たるべきものを緣日商人的交換用の景物と化せり、豈に慨歎に堪ゆべけんや、殊に五月一日談判再び行悩むや外務省は日置公使に致電して青島還附に關する前日の口約を取消さしめしは餘りに現金主義と云ふべく、而して更に最後通牒を發するに際しては再び前日の取消を取消して復た還附を口約するに至りては無定見も實に甚だしからずや、加ふるに我當局は四月二十六日の第一讓步を爲すに際し賢明なる識見を缺き、其の稱して讓步と云ふものの徹頭徹尾因循姑息の譏を免れずして、其支那の拒絕に遭ふべきは識者の多く豫期したる處、而して終に最後通牒を發せんとするまでも當局の自惚は未だ醒めず所謂希望條件なる第五項の爲め將に無名の戰端を開始すべき危機に迫らんとせしを元老の警告と一種外來の强壓とにより始めて解悟する處あり遂に第五項を撤回し青島還附を復活

し、以て支那をして殆んど拒絶するの理由なきに至らしめ僅かに平和の中に局を收むるを得り、若しも加藤外相をして初めに能く内外彼我の眞相を辨識し眞に懸値なしの條件を決定せしめ、重望ある大官を特派し我が支那政府を敬重するの意を致し、以て誠意誠心交渉の局に當らしめたらんには、實際多大の混雜を來し幾多の誤解と惡感情を遺して最後に贏ち得たるものより遙に多くの權利を無難に收むるを得たるや殆んど疑を容れず、其始めは餘りに吝嗇くさく後には餘りに寛大らしく、竟に袁總督をして欣々然として指定の期に先んじ我提案に承服するに至らしめたるは眞に惜みて餘あり、

有體に白狀せは吾人は平素加藤高明男の黨首たる資格に缺如するを思ふと同時其外交上の經綸手腕に對しては比較的多くの信頼を拂へり、男を以て陸奧小村に比較する程の崇拜心を抱くこと能はざりしも、現在の我外交界に在りては確かに出色の第一人ならんと思へり、然れども這般日支交渉の跡を顧りみて吾人は深く男の外交家としての手腕に失望せり、加藤外相は事の一面を見て每に其反面に備ふることを忘却するに似たり、去年八月歐洲大戰爭の勃發するや外相は遽々然として戰爭參加を決定し青島攻擊の企圖を立てたり、此時に當り彼れは獨墺の必ず英佛露に對し敗戰すべきを豫期せしなるべきも、萬一にも獨墺の却て協商三國に勝つか若しくは互角を以て引分けの終結となるべき場合を想像し之に應ずるの用心ありしか、日支交陟開始の後二月末頃なりしかと覺ゆ彼れは滿洲交代兵を繰上げて派遣し且其人數を增加し出兵の噂を以て大に世間を騷がしたることあり、此時彼は支那が我開戰を辭せざる決心あるを觀て速に我が要求を許容すべしと期待せしなるべきも、彼は果して歐米の質問の來らん時何と答ふべき

かを用意せしか、而して虚喝の眞相は必ず支那政府に看破せらるべきことを思はざりしか、外相の部下若しくは與黨より世間に傳へられたる報道に由れば列國は初より我對支提案に關してよく我眞意を諒として曾て意思の疎隔を見たることなしと云へり、然れども事實は大に然らず、漢冶萍附近の鑛山に對する一般の優先權と南支那鐵道の要求を事實上に撤回して僅かに英國の感情を緩和し得たるは蔽ふ可らざる事實にして、而かも若しも最高顧問、兵器同盟、警察改革を終まで主張し其故を以て支那と開戰するにも至りしならば英米の反感は終に如何の程度にまで激昂したらんも未だ知る可らず、假令歐洲開戰中は列强も手を拱いて傍觀すべしとするも、一たび平和克復するに至らば復讎は忽ち財政の壓迫となりて現はれ來るべきは元老の注意を待たずして知るべきも、外相果して之を想はざりしか、吾人は這般外交の跡に就きて加藤男を觀るに前日の信頼と對照して殆んど別人を見るの感なきを得ず、人あり吾人に告げて曰く加藤外相は始めより交渉の結果は其果して贏得たるの程度以上に功を收め得べからざるを知れり、然れども彼れは袁總統と交渉するには先方の慣用手段を學ぶを必要なりとして初めより大に驅引を事とせり、故に其最後の大讓歩は彼が豫定の行動なりと、然れども斯の如き觀察は大に加藤男を辯護せんと欲して却て最負の引倒しに終らん耳、今次の日支交渉を以て驅引の智慧較べとして觀察せば勝利は優に袁總統に歸すべければなり、又曰く加藤外相は同志會の總理にして大隈內閣の事實上の副總理なり、故に其外交上の措置往々內治上の必要に支配せらるゝことあるまた止むを得ずと、即ち交渉の中途に於ける出兵騷ぎの如きは總選擧に對する必要に出でたるものにして、支那に對する提案の一部は對支

硬派の歡心を買はんとする手段に過ぎずと解釋せんとせば必ずしも解釋し得られざるに非ず、然れども内交の必要より外交を左右せらるゝの危險は夙に加藤男の悉知する筈のことにして、吾人は寧ろ男が斯くまで政治の見識に於て墮落せりとは信ずるを欲せず、兎にも角にも這般日支交渉の大失態に終れるは蔽ふ可からざる事實にして、斯人をして更に歐洲戰後の和議に際し局に當らしむべきや否は我邦上下の大に熟考を要すべき問題なるべし、問責の議論の起る眞に止むを得ざるなり。

（二）　血は水よりも濃厚なり

日支交渉の必然の結果として、殊に外交拙劣の餘波として、支那全般に反日感情の燃上を見んとするは事實なるべし、吾人は各地に起らんとするボイコットの故に之を歎ずる耳ならず、ボイコットを生ずる所以の心的狀態の故に之を悲しむ、如何となれば此の心的狀態は即ち我日本及び日本人に對する誤解を意味すればなり、此誤解を一掃し兩兄弟國の和親提契を來たすは正さに彼我双方の識者先覺の一大責任ならずや、抑も同文同種とは素と空言に非ず、日支兩國人は何人も足一たび白人の國に到り同じく異人種異邦人の取扱を受くるに於て、又其各同胞が劣等人種として差別せらるゝを見るに於て、必ずや同病相憐むの感自ら油然として胸間に起らざるを得ざるべし、前年英艦の太沽砲臺を攻め却て支那の砲火に打惱まさるゝや、之を傍觀せる米艦遂に發砲して英艦を危急に救ひしことあり、當時米國は局外中立にてありながら英艦を援助せるは國際法の規則に背くに相違なきも、米の提督之を辯して曰く血は水よりも濃厚なりと、此語世間に傳へて米人の高誼を稱するも、尙この一語を玩味せば同文同種の妙味津々た

らずや、英國は我同盟國なり、米國は我開國の指導者なり、佛露亦た今や準同盟の親あり、然れども多くは是れ國際政治の必要上自然に接近し親和せるもの、米國の我と親交を持續するもの通商上の利害亦た與りて力なきに非ず、唯だ世間廣しと雖も我と同文同種にして、まさかの時に臨み血は水より濃厚なりの感をなすべき獨り支那人民あるのみ、更に之を支那人の立場より見れば苟も其國家の獨立を保ち其領土の保全を期せんには我邦の義俠に待つの外途ある可らず、他日富國强兵の基礎定まるの曉はイザ知らず支那現在の狀態に在りては我邦の後援を失ふては到底自立の道ある可らず、同時に之を我邦の立場より見れば日支經濟上の關係は年と共に益々親密ならんとして、此關係は實に我大和民族の興廢を意味すると云ふを妨げず、即ち我對支要求の條項の如きも之を低き近き見地より觀ば支那人として不服不滿の點も少なからざるべしと雖も東西の大局より打算し來れば日支双方の利益の爲め眞に止むを得ざるものあること決して解し難からじ、吾人は日支兩邦の要路識者を初め一般の人士深く大局に鑑み政治に、敎育に、實業に、協同努力の方法を講ずるに於て今後更に一層の力を傾注せんことを切に希望せずんばあらず。

日支提契の一大障碍は吾人が從來幾度か繰り返へして論じたるが如く兩國民相互の誤解にあり、近年支那留學生の我邦に來遊するもの前後幾萬人なるを知らず、彼等が我國の學問文明を慕ひ來るは宛も半世紀の昔我維新前後の青年が英米佛獨に遊學せしに髣髴たるものあり、然るに泰西諸國に遊學せし我邦人は概ね多大の感激を抱いて本國にかへれるに反し、我邦に來遊せし支那人中には多く種々の反感に驅

られて其國にかへるものあるに似たり、斯くの如き不幸の結果を見るに至れる責任は果して孰れの方面に歸すべきや、是れ大に研究を要する問題なるべきも、下宿屋の不完全、學校の不親切等は蔽ふ可らざる事實なるべし、加ふるに新聞雜誌等の支那の當路に關する記事を載せ又は日支關係を論ずるを見るに往々輕蔑の觀念にからるゝの跡あるを免れず、甚だしきは袁總統に對する記事に至りては隣邦の元首に對する禮に於て最も缺如たる處あるは吾人の常に慚愧に堪へざる處なり、若しも今の時に於て我邦人は痛く猛省して從來の態度を一變せざるに於ては日支間の親善は容易に得て期す可らず、且つ各種の障碍は國際間問題の起る毎に平生の反感に基き發生すべきこと言を竢たず、試みに支那の新聞雜誌をして我邦の要路に對して我が彼に對する如き慢侮の言辭を弄せしめよ乍ち國際間の一問題ともなるべきは察するに餘あり、支那民國の國勢微弱にして未だ無禮を問ふに遑なしとすべきも、其不快の感念は寧ろ却て深甚なるものあらん、讀者もし最近二三箇月に於ける我朝野言論の調子を回顧せば吾人の非難する處決して過當ならざるを知らん。

眼を轉じて支那の現狀を觀れば頽敗の表徵歷々たるが如きは苟も黄色人種の前途を念とするもの〻齊しく痛歎する所たらずんばあらず、吾人の所謂頽敗とはデカデンスを意味するものにして、文學技藝に於て獨創進取の氣象を缺き政治に於ては獻身犧牲の精神を缺き、徒らに自負自惚に流れて辯辭に長し、國家の高き地位を支持すべき實力の缺陷に氣付かざるの狀態を云ふ、此表徵は往古希臘人民が其未だ羅馬に併呑されざるに當り最も著しく具備したるは泰西歷史家の毎に指摘して以て後世の殷鑑となす所た

り、試みにテオドル・モムセンの羅馬史に就き其一斑を伺はんに、曰く

アケーヤ人等は（記者曰漢の景帝の時アケーヤは希臘の盟主たり）其國の獨立の實質乏しき丈けに尙更ら獨立の名を衒ふを以て其大切なる義務なりと信じたり、彼等は好んで戰時の權利義務を論じ羅馬國か一たび戰爭に從事する際に彼等が與へ得べき援兵の効能を吹聽せり、アケーヤの議會に於て某議員は之に臨場せる羅馬の代表者に向ひ嚢きにアケーヤは羅馬がカプア市を勝手に處分するを不問に置きしに、何故に今羅馬はアケーヤがメッシーネに對する處分に關し干涉するやと論じ大に滿場の喝采を博し且自らの選擧運動に利せり、抑も斯の如き言動あるは事理を辨ぜざるに由る、且つ自らの威嚴を損するものと云はんより寧ろ滑稽に類すと云はざるべからず、斯る精神狀態にあるアケーヤ人の自由を保護し大に其歡心を獲んと期待せし羅馬人が却て無政府の狀態を作り出だし且反感を惹起するに過ぎざりしは當然のことなりしも亦た實に痛歎の極なりけり、蓋しアケーヤ人が羅馬の保護を受くるを好まざるは國家の自由獨立を理想とするに基きしに相違なく又た羅馬反對の先鋒たりし二三の人士は忠勇義膽の人たりしこと疑ふ可らず、然ればとてアケーヤ人の此の愛國的行動なるものは遂に愚擧たるを免れず史上に赫々たる他の眞の愛國的行動の滑稽畫たるに過ぎざりしなり、何となればアケーヤ人は其國家的野心と氣位の高きに關はらず國中上下押並べて無能無力を自覺したればなり、俗論家も正義派も其內心には只だ羅馬の鼻息を窺ふに汲々たり、彼等は恐るべき命令の遂に羅馬より發せられざるを見て竊に安心せり、彼等は羅馬政府が內意を傳へ命令を以て强制せられざるに先だち任意に

羅馬の意に從ふべく勸誘するを見て怨憤せり、而して止むことを得ず羅馬の意に聽從するに際しては自個の體面を繕はんが爲め可成だけ多く先方の不快を催すべき方法に出でたり、即ち彼等は報告し說明し延期し逡巡し切羽詰るに至りて終に愛國的歎息と共に服從せり、總じてアケーヤ人の態度たるや若しも彼等が最後には開戰を辭せざるの覺悟あり、即ち奴隷たらんより亡國を欲せしならんには、賞讃の値あり少なくとも諒恕するに足れりと雖も、ピロポエメン又はリコルタス等の領袖輩さへも曾て國家の政治的自殺を思はず、彼等は能ふ可くんば國民の自由獨立ならんことを希望せり然れども如何なる場合にも國民の生存を欲したりき。

モムセンの論ずる所に依れば羅馬は當初希臘を版圖內に加ふるの意志なく、唯だ其指導の下に獨立を保存せしめんと欲したりしが、アケーヤ人の誠意なき態度は終に其國を亡ぼすに至れりと云ふ、事は二千年載の昔に在りて遠しと雖も人情は吾人の目前に在りて近し、不幸萬一にも支那が亡國となる場合ありとせば是れ外國の侵壓に因らんより職として支那人自らの過ちに因るなるべし、吾人は我隣邦の當局を初め志士愛國者慷慨家の能くモムセンの斷案を玩味して大に自反する處あり、與國の大策を確立し以て悔を千載に遺すことなからんことを希望せずんばあらず。

(三) 東蒙の開發

日支交涉の失敗と當局の問責は別個の問題として措き我國民は此際日支新條約に依り獲得すべき利權の利用に關し大に硏究するの必要あり、山東省に關しては歐洲の戰局平定の後に非されば我利權の確

定を期す可らず、且鐵道礦山等多くは既に獨人の調査を經て經營に着手したるが故に此際我邦人の特に研究を急ぐべき必要なきに似たり、南昌を中心とする南支那鐵道計畫は英國の意向に顧慮して一時談判を撤回したるを以て是亦た研究を急ぐの必要なく、現内閣の弱腰を以てしては南支那鐵道計畫は遂に多分は英國に讓歩せざるを得ざるに至らんも計り知る可らず、而して南滿洲に至りては鑛山の調査尚ほ多少の餘地あるが如しと雖も多くは南滿會社及び都督府の下に大體の研究を終了せりと見るも不可なし、獨り東部蒙古に至りては所謂朔北漠南の地茫々たる平野方幾百里、興安嶺の東南、遼西長城に至るの地、尚ほ邦人未知のもの多きに似たり、所謂我邦の勢力圈内に含有すべき東蒙古の疆界に至りては尚ほ明確を缺き、殊に多年英人の垂涎せる北支那鐵道の延長、例せば錦州より熱河を經て北京に至るべき線路の權利に至りては果して我邦の手中に落つべきや否や頗る懸念する處なき能はず、然れども大體に於て東部蒙古は我邦人の商工業、農牧業の經營に向ひ開放せらるゝに至れる以上は寸時も之を紙上の權利として抛擲し去るを許さゞるなり、大體に於て東蒙は農牧に適し、殊に牧畜には最も適する　のゝ如く、若しも經營其宜しきを得ば、羊毛、馬、牛等の供給に關し我邦は今後多く此方面に仰ぐを得るに至らん、多少此方面の探險に經驗ありと稱する人々の談に由れば東蒙の土地は總て蒙古王卅六王の領地に屬し、其拂下代金は上等地にして一町歩約十圓開拓費八圓乃至十圓、諸種の税金年約七十錢を要し、收穫は一町歩に雜穀十石を見込むべく、河流の附近には水田に適すべきの地も少なからずと云ふ、若夫れ鑛山に至りては石炭、金、銀、銅、鐵、亦た頗る豊富なるが如くなるも、未だ少しも探險を經ず其の計畫を決

定して經營を開始するは尙ほ將來にありと謂はざる可らず、要するに東蒙の地は農牧と云ひ鑛山と云ひ全然未開發野の狀態に在りと云ふを妨げずして、隣境の南滿の大に文明化せんとすると甚だしき對照を呈す、今や其富源を開發し此一帶の地域をして文明の恩澤に浴せしむるは方に我日本人の双肩に懸れり、東蒙は其廣袤の差素より加奈多又は濠洲と同日に論ずべからざるも、其の我國に對する關係より觀れば宛も加州又は濠洲の英本國に對するが如きものあり、吾人は我邦幾多有爲の青年が東蒙を以て其運命開拓の地となし率先して之が開發の任に當らんことを勸告す。

近年南洋の富源は頗る邦人の野心を唆かしたれば、新嘉坡其他東洋各地に到り事業を經營するもの多からんとするは大に人意を强ふするに足れり、吾人亦た此方面に對する邦人の發展を奬誘せずんばあらず、然れども滿蒙方面の發展に至りては自ら一種特別の意味に於て之を奬誘せざる可らず、南洋の護謨事業に於ける如く一攫千金の利を得るは滿蒙に期す可らずとするも、帝國の集團的擴大と民族の强健なる發展とは寧ろ大に天然と奮鬪の必要ある此方面に在りと云はざる可らず、南洋の富源素より大に開拓せざるべからずと雖も帝國及び民族の基礎は之を滿蒙方面に擴大せざる可らず、宛も英國が印度を以て其寶庫と爲すに關はらず其大帝國の基礎は之を加奈多、南阿、濠洲方面に擴大しつゝあるが如し、殊に極東の平和を支持すべき一大任務ある帝國に取り其滿蒙に於ける基礎を鞏固にするは急務中の急務なりと云ふべく、吾人は今日を機として　滿蒙經營の一大發展を期待せずんばあらず。

蓋し吾人の所謂東蒙經營とは勞働的移民を意味するに非ず、多數邦人の該地方に侵入して支那人若し

くは蒙古人と勞働の競爭を爲さんことは不可能事たらん、假りに東蒙の面積を十一萬六千方哩とし其人口を五百萬人(内支那人四百二十五萬人蒙古人七十五萬人)とせば一方哩の平均人口は四十三人、南滿洲の四十九人と多く擇ぶ處あらず、我帝國本土(北海道を除く)に比較すれば面積に於て双方相匹敵し人口に於て十分一に過ぎざるも、北海道(三十一人)よりも幾分稠密なり、此れ我勞働又は多數農民の移住に適せざる所以なり、然れども文明的の農牧に從事し鑛山業を起すが如き多く土民を使用するの機會ある事業を起すことは彼我人民の折合上よりも最も希望すべく、吾人は我が堅實なる冒險家の大奮發を奬誘せずんばあらず、而して此方面の發展を幇助すべき資本供給の便宜を設備すること蓋し刻下の急務にして正金銀行朝鮮銀行等の手の行き屆かざる比較的細微の貸出を事とする小機關の設備亦極めて必要なるべし、此等の點に付ては吾人亦大に我官民資本團の奮發を期待せざる可らず。

之を要するに我外交の結果は甚だ平凡にして當初の期待に背くこと多き耳ならず、徒らに各種の問題を提起して隣邦及び歐米の嫉視猜疑を惹起したるは看過す可らざる失態なり、此點に關しては世間自ら公論あるべく、又た相當の機關により必ず政府の責任を問ふことあるべし、然れども遂事は追ふ可らず、還般日支交渉の爲め著るしく疎隔したる日支人間の感情は如何にして融和すべき、我が新得の利權は之を如何にして利用すべき、是れ實に今日の急務なり、今や政界變動の影響として最も厭ふべき不眞面目の氣分は我邦上下の心を蔽はんとするに際し、慨世憂國の士は須らく此種の妖霧を排し民族本來の至誠を發揮して以て外交失敗の善後策を講ずるに於て毫も遺算なからんことを要す。

歐洲戰局如何

春來歐洲の戰況は聊か活氣を呈するの觀あり、佛白國境に於て聯合軍はイプル、アルラス各方面に獨軍を擊退せんとして多少の成功を見、露國境に於ては獨軍カルパシヤン山北に露の右翼を掩擊して奇功を奏し爲めに露軍の匈牙利侵入に小頓挫を來せしが如きも、戰局上大體に少しの進展を見る可らず、獨軍が艦隊掩護の下に東部普魯西の國境を越へてリバウ港を占領したるは一種の牽制運動に過ぎずして重要視すべきに非ず、唯だカルパンシヤン方面に送るべき露國援軍の一部を此方面に誘致せんとするを目的とせしなるべし、獨逸の主力は今白耳義方面にもあらず又た東普方面にもあらず正さにクラカウの東南にありて、其目的は露軍に一大打擊を加へ其匈牙利侵入を喰止めんとするに在り、元來獨軍の兵略は一時他の總ての方面には守勢を取り大軍を一方に集中して敵軍を粉碎せんと欲するに在り、最初に白耳義を突破して巴里襲擊を試み、次に大兵を東普魯西に集めてレネカンプ將軍を破り、更にワルサウ攻擊に移り、今又たカルパシヤン方面より勝を報ず、十二分に整頓せる鐵道輸送の便を利用し大部隊の集合により一方面の敵に猛襲するが故に必ず或る程度の勝利を占むること相違なきも、而かも從來の經驗に顧みれば未だ一回も豫期程の勝利を獲しことあらず、巴里方面よりは其功僅かに七八分にして未だ十分に達せざるに擊退せられ、東普方面にては一時國境外に敵を逐ひしも遂に再び國境内に退くを餘儀なくせられ、ワルサウ方面にては嚴寒中を犯かし最も激烈に爭ひしも遂に該市に達せずして敗退し、今次の

カルパシャン方面の猛襲また敵を粉碎するに至らずして止まんとするものゝ如し、畢竟ずるに獨軍の勇猛は實に侮る可らずと雖も兵數の餘裕到底英佛露の聯合軍に及ばず、其各方面の猛襲をなす毎に十分の目的を達せずして止むもの自ら兵力の不足を示すものに非ずや、聯合軍側に於ては大軍の運用獨逸軍の如く敏活ならず其策戰亦た彼れが如く巧妙ならざるに似たるも一方に大損あるも乍ち之を補充し敵をして其志を得ざらしむるもの自ら兵力の優勢を示すものと謂はざる可らず、之を譬へば獨逸は檻內にある一大猛虎なり、其咆哮し一方に向ふや傍觀者肌粟を生ずるも猛虎は遂に檻を脫す可らず終に狂暴奮鬪に疲れ斃れんのみ、宛も猛虎が檻の一方を突破して脫出する如く獨逸もし一方を突破し聯合軍を分離するを得ば是れ多大の成功ならんも、利害の關係より相聯結する英佛露は相抱擁し容易に離間の策に乘らず、戰局の前途は到底獨逸の屈服に終るより外ある可らず、然らば戰局は大體に無爲にして獨逸の疲弊を待つの外策なきやと云ふに必ずしも然らざるに似たり、吾人が手にせる情報に由れば聯合軍は今や英國が本月末を以て輸送を了らんとする新鋭一百萬人の戰線に立つの日を待つものゝ如く、之を動機として東西策應して最後の大運動を開始し秋期を以て獨逸の屈服を强ゐんとするものゝ如し、獨逸も亦た聯合軍の策戰を察するが故に英の新鋭が未だ北佛に來らざるに先だち一擊をカルパシャン方面の露軍に加へ踵を飜へして北佛方面に集中して最後の防戰を試みんと欲するに非ざるなきか、若しも此豫測をして當を得せしめば近時戰局の稍々活氣を呈するは山雨來らんとして風樓に滿つるの類にして眞正の龍鬪虎搏を見る果して遠からざるべきか。

中原の形勢斯の如くなるに際し局面の進展に多大の關係あるべきは伊太利の去就なり、數月前吾人は伊國の進退を推測して其容易に起たざるべきを論し置きしが、爾來伊國内の開戰熱は次第に昂騰し政府亦た二回の陸軍動員を行ひ、將に聯合軍に與みして開戰すること疑なしと報ぜられき、是れ主として墺國が伊國中立の賠償としてトレンチノー其他土地割讓に同意せんとするも伊の最も必要とするトリエストを與ふべきを肯んぜざるに由れるもの丶如く、其他トリポリの土人兵反亂の背後に獨逸人の教唆あるを疑ひ獨逸を怨めること、更に英佛の君府攻撃の進行と共に土耳古分割の避け難きを見て聯合軍側に加擔して老帝國遺產の一部に有付かんとする慾心にも由りしならん、然るに更に其後に至り報あり曰く伊國は墺國が大讓歩をなすの報に接し更に談判を繼續せんとすと、又曰く伊國サランドラ內閣は總辭職をなせり是れ民間保守黨の首領等と意見合はざるに由れりと、即ち墺は果してトリエストに關しても假令之を伊に割讓せざる迄も之に自治を許し以て伊國の起立を喰止めんとし、伊國保守黨一派は此讓歩に鑑み中立維持の爲め最後の努力を爲せるもの乎、而して伊國遂に開戰を思止まる可き乎、然れども伊太利はは擧國開戰に傾きて熱情燃るが如く盛に當局の優柔不斷を罵倒しつ丶あるが故に、親獨的政治家も遂に策を施すの餘地なかる可きか。伊國にして果して起たんか。其出兵方面は假りに墺國境に限るとするも自ら敵の大軍を此方に誘致すべく從つて中原の戰局に大影響あらんこと知る可し、且つ伊國海軍の出動は君府方面の戰局にも大影響あるべく從つて土國の敗亡を眼前に眺めては勃牙利、希臘、羅馬尼亦た其態度を鮮明にせざるを得ざるべし、少なくとも獨墺に對する多少の同情も殆んど枯渇し盡るに至らんこ

と想像に難しとせず、斯くて獨逸は僅かに北歐の諸小國に多少の同情あるを頼みとするに過ぎずして四面皆な楚歌の狀態に陷れる耳ならず、ルシタニヤ擊沈事件より米國の人心亦遂に獨逸より離反せんとするもの〻如し、米獨の問題は到底開戰を見るに至らざるべきも獨逸に取りて泣き面に蜂の感あるべし、吾人は指を屈して將に起らんとする佛白方面の大決戰の報を待つ、英國百萬の新銳果して戰局に大轉回を與ふるを得べきや否や、（五月十七日稿）

記者曰く前稿を校了して後報あり曰く伊國首相サランドラ氏は留任に決し、伊國政府は三國同盟を破棄すべく、而して戰爭參加宣言は伊國下院に於て五十四對三百七十七の大多數を以て可決せりと、眞に是れ近來の快報なり、歐洲の戰局是より將に動くべく、聯合軍の進展蓋し目を拭つて待つべし、（五月廿二日）

予が國民主義の主張

田中王堂

一、政論の退潮

私は、先年、中江兆民の物した一つの著書に於て、政治意識の發達の立場より、英國と、佛國と、獨逸とを比較したのを讀んだことがあつた。彼れは、其の中に、英國は已に政治國と成つて居る。佛國は政理國に成つて居るとはいへる、然し、まだ政治國に成つて居るとはいへぬ。獨逸に至つては、まだ政理國にも成つて居らぬ、況して、進んで政治國と成るのは遠き未來のことに屬する、といふやうなことを語つた。政治に於ても、他のあらゆる活動に於けると等しく、異なれる國民の性情に隨つて、理論と實行との間に存する關係の性質は種々に異なつて居るが、兎に角、兆民氏にしても、政治に關して優秀なる實行は必然に精到せる理論を其れの前提とすることを認得して居つただけは明らかである。

由來、英國人は人間の嘗て工夫した藝術の藝術たる政治に於ける天才の國民である。今日に到るまで、彼等が世々相傳の遺産として居る卓越せる政治上の知識と、才幹と、良心とは固より英國人全體の生活の勢力に依つてのみ始めて實現されたものに相違ない。然し、强ひて彼等の努力と智慧との結晶とし、化身として、幾人かの人物が擧げられ得るならば、私は爲政家を擧

げると同時に、否、其れにも先だちて、政論家を擧げねばならぬ。何故ならば、政治の進捗に取つて其れの賢明なる運用と、併せて、其れの透徹せる理會の肝要なことは云ふまでもないが、この眞理は英國の政治の發達に在つては、特殊の意味で、顯著に證明されて居るからである。今、假りに英國の政治史より、ホッブス、ロック、アダム・スミス、バアク、兩ミル等の政論家の名と事業とを控除するとしたならば、其の結果はどうであらうか。苟も、英國の政治の本質と由來とを知つて居る者は、其れの燦爛たる光輝の大半は、倏ちにして失せて了ふであらうと云ふことを想像することに於て、悉とく意見を一にするであらうと思はるゝ。固より、さうした時にも、猶ほ、後に、クロムウエル、ワルポオル、ピット、ヂスレリイ、グラッドストオン、等の如き爲政家の名と事業との殘ることは事實である。然し、如何に、是等の爲政家が、老巧なる世智を運用したにしても、さきの政論家の深遠なる識見の啓沃が無かつたならば、現に、吾人が觀るやうな英國の政治が實現され得たらうといふことは、到底理會出來ぬことである。されば、私は永へに吾人の驚歎に價するあの政治思想と政治機關とを創造するに與つて、爲政家等の功績が尠少であつたとは考へない。だゝ、私は政論家等の功績の更に偉大であつたといふことを信ずる者である。

然し、こゝに私は讀者に告げなければならぬ事がある。其れは、私が斯く語つて居るのは、主として過去の英國に就て語つて居るのであつて、現在の英國に就て語つて居るのでないといふことである。現在の英國に就ては、私は全然別種の觀察を作り、別種の評價を與へなければならぬことを遺憾とする。數年前、スペンダアなる一評家は『十九世紀及今後』誌上に於て、"A Plea for the Popular in Literature" なる一文を公けにして、切に英國に於ける文壇の衰頽を慨歎したのであつた。彼れの意見に從ふと、今日の英國の文壇は、漸く纖細なる技巧の末に墮して、一世の人心を風靡するに足る雄渾なる氣魄は全くそこに其の跡を絶つて了つ

たといふのである。そして彼れは、も一度どうかして、英國の文壇をカアライル、ラスキンの盛時に挽回する術はないかと且つ苦悶し、且つ摸索して居るのであつた。私は、この評家の意見と慷慨とに全然の同意を表する者ではないが、現下、英國の文藝に "the popular"（國民的）の要素の痛く缺乏して居ることは事實であつて、是れは、久しく英國の誇りとし來たつた汎義、高義に於ける政論、即ち文明批評としての政論が、英國の文壇の一角より消へ去つたといふことになるのである。而して、其れの自然の反響として、今日の英國の政治には理想と權威とが甚しく缺けて居る、尠なくとも、其等の存在を說明する有力なる言論が缺けて居るといふことになるのである。

チエンバレンの帝國政策、アスキス氏、ロイド・ジオルジ氏等の勞動政策は、孰づれも、內外の大勢と必要とに順應するために相應に思索と努力との費された計畫であるに相違ない。隨つて、是等には自づから剴切なる理由と深刻なる意義とが含まれて居るに相違ない。然るに拘はらず、如何にも其等の主張者より來たる辯明が平凡、板實のもので、人のロオマンチックの氣分を唆り、又は、ヒロエックの情操を興す底の經綸と理想との窺はるべきものの一つもないのは、一體どうしたわけであらう。

私は、之れが主なる原因として、現代の政策を强く感じ、深く知る、宏才、達識の批判者、解釋者を缺くことの一事を擧げねばならぬ。成程、バアク、ミルの由緒ある傳統の繼承者として卓然、俗流の上に亭立するフレデリック・ハリソン、ジョン・モオレエの二人者はあるが、彼等は過去の追懷者であつて、決して現在の開拓者ではない。十八世紀、十九世紀の思想の謳歌は彼等の能するところであらうが、二十世紀の氣運の開導は決して彼等の能するところではない。斯くして、民衆の本能の發動として生じた現時の勞動問題と、帝國政策とは、等しく、また、理性の判斷に依つて承認せられ、醇化せられないがために、頻りに、偏頗と、誇張と、誤解とを繰り返して居るのである。すでに、政論

發祥の聖地たる英國に於てさへ、この通りである。其の他の國々に於て勞動問題と帝國政策とが蠢爾として盲動に盲動を重ね、淺慮に淺慮を堆んで居るのは、實に其の理由はあるではないか。

二、帝國主義の由來

一時の政策の辯護、又は其れの辯難より全く離れて、存在の理由を有する文明批評としての政論は、如何なる問題に對しても、人間の性情の極致と、現代の傾向の歸趨とに據つて、其れの意義を闡明し、其れの價値を裁判することを特徴として居るところにあるのである。この自然の結果として、この種の政論の或る問題を考察する態度は、何時でも、一面、それの要權を承認すると同時に、一面、それの越權を匡正することに依つてそれの存在を深化することになる。生活に於ける斯かる種の政論が生活の統一に取つて大切なことは多くの言葉を要しないほど明らかである。然し、帝國主義が、まだ一度も、斯かる高處、濶處より考察されたことのないのは、如何にも不思議ではないか。

エミイル・ライヒは、彼れの著述『帝國主義』に於て、帝國主義と個人主義とは相反するもののやうに說いて居る。否、この著全體が、恰かも、個人主義と帝國主義とは、近世社會に於て、一日も兩立することを許さない二大主張であることを立證しようとして書かれたかの觀がある。私は、エミイル・ライヒがどんな性格の人であり、どんな敎養の士であるかを知らぬが、折角『帝國主義』とまで銘打つた著作を公にしながら、是れは、又、隨分思ひ切つて、不透明な觀察を爲し、思ひ切つて不徹底な推斷をしたものであると思ふ。彼れは、苟くも近世生活の要求と傾向とに照らして、帝國主義の起原と志向とを考覈することなく、纔かに或る特殊の事情が、姑く其れに賦へた一時の形態、若しくは、或る特殊の野心家が暫く其れに托した一時の政策を皮相に速了し、速斷して、其れが帝國主義である。其れだけが帝國主義の全體であるとしたのであらう。然し、私が現代文明の表現の最大なるものの一つとして、其れの中に甚深の意義を發見するところの帝國主

義は、決してエミイル・ライヒの見た、或は考へたやうなものからは遙かに違つたものである。

私が觀て以て帝國主義となすものは必然に個人主義を其れの中核として居るのである。否、眞正の帝國主義と僞似の帝國主義とを鑑別するに、私の持つて居る最後の、而して最も優越せる標準は其れが個人の幸福に立脚し、個人の解放を目的として居るか、どうかの吟味である。この見地からして、私は峻然、其れの起原を佛蘭西革命以後に劃しなければならぬ。何故ならば、個人はこゝに到つて、始めて前人の意識せざる意味に於て、自己の幸福と解放とに對する欲求と覺悟とを得たからである。

佛蘭西革命は『自由、平等、博愛、』を高く揭げて、其れの標語とした。然し、是等の孰づれの一つも最初の考案者の理想した通りに實行とならなかつた。孰づれを取つて見ても、殆んど當初の志向を認め難い程に多くの制限と、變更とを受けて居る。この自然の傾向を觀て、輕卒な革命主義、安價なロオマンチシズムに隨喜して居る人々は、十九世紀の下半より二十世紀に掛けての人類の退歩、墮落として失望したり、憤懣したりするのであるが、然し、過失は、この進行の側にあるのではなくして、反つて、この進行の非難者の側にあるのである。世人は、漠然たる憧憬より生ずる革命の宣言と、處世の理會に基づく改善の方針との間には雲泥の相違のあることを知らねばならぬ。而して、(尠なくも過去に在つては)、あらゆる改善の方針は、先づ革命の宣言より其の動力を得ることを必要なる順序としたのであるから、さきの抽象的の概念が幾多の條件や方便にまで具體化されるのは、高遠が卑近に墮落するのではなくして、衝動が理想に發展するのである。されば、かの光榮ある時代に方つて、あの偉大なる人々が、一たび人類に對つて高く標致した『自由、平等、博愛、』の警策は、其の後、其れの實現の進行に於て、どの位、制限せられ、變更せられ、而して、その制限と變更とは、今日に於て、猶ほ續けられて居るにしても、決して、當初の精神が放擲されて了つたでのはない。

たゞ、其れの志向が適當な方法に依つて、徐々に實現されて居るだけである。

こゝには、自由と、平等とに關する觀念の發展に就て語る時間もないし、又、恐らくさうする必要もあるまい。然し、當面の問題として、博愛に關する理想の進化に就ては、尠しく語る必要もあり、義務もある。

歐洲は、久しく基督敎の非現實的、非國民的の人生觀に依つて、各國民間に存在する特徴の相違を認識するの明を蔽はれて居つた。成る程、古くよりいづれの國も、外國との交渉は絶へずあつた。然し、其れは多くは、戰爭と、外交とに屬するものであつたから、いづれの國の有する外國の知識も、協同に資する正直な精神から得られたものではなくして、一向に詐僞と陷穽とに便する偏頗な目的から作られたものであつた。如何に、中世紀に於て、國民間に高明なる知識が缺乏して居つたかは、あのマキアヴエリの「帝王學」が、優に其の間の消息を傳へて居ると思ふ。彼れは、あの著に於て、異なる國民に對する巧妙なる術策の數々は其の煩に堪へないほどに縷述して居るが、全體として異なる國民の特徴に對する彼れの徹底した理會に至つては、殆ど些も窺ふことが出來ないのである。

この種の無知と、無識とは、久しく續いた。あの人類に曙光と生氣とを齎した文藝復興と雖も、其の興味は大體に於て、非歷史的、非國民的であつた。されば、生活の或る方面に關しては、あの運動が、人間に聰明と、鑑識とを與へたに拘はらず、國際間の理會に至つてはあの運動に依つて、大して改善されたやうには見えぬ。佛蘭西革命に際して、モンテスキユウ出で、あの不朽の名作「法律の精神」に依つて、初めて、近世的の意味に於て、歷史觀と國民觀とを宣傳したけれども、然し、一般に當時の社會を支配したものは、矢張り、非歷史的と非國民的との思想であつた。而して、因襲の保存者は無論のこと、其れの破壞者にしても、悉とく、其の窠臼を脱することは出來なかつたのである。

彼等は、異なれる國民の成立と、彼等の間の關係とに就て、何の理會も、知識も有たなかつた。然し、た

だ、過去の狹隘なる因襲を破却して、廣濶なる生活を創始しようとする一念からして、博愛は彼等に依つて高調を以て說かれた。彼等は何の手段を講ずることもなく、何の修養と反省とを積むこともなく、永久的交戰の狀態より、一躍して永久的平和の狀態に入り得るものと感じた。斯くして、彼等は、貨幣本位の制度を出づれば、必然に、當然に、自由貿易に入らなければならぬものと信じた、是等兩道の中間に、第三の中道の横はることを彼等は知らなかつたのである。

國際間の平和は、決して人間の性情と社會の現狀とを無視し、奇跡に依つて捕捉さるべきものではなくして、人間の性情と社會の傾向とを正視し、現存の勢力を正用してのみ實現さるものである。然し、其れは、兎に角、始めて、政治的に是れを欣求した十八世紀の巨人達の心の中には、極めて稀有の場合に閃く人類の天才が閃いて居つたのである。そして、私は尠なくも、帝國主義は其れの志向に於て、あの宣言の體現の第一步であると觀たいのである。

三、史家、シイレエの帝國主義論

事實を意識するにせよ、せざるにせよ、近世に於て、最も先きに帝國主義を實行したのは英國である。そして若し果してさうならば、其れは國民生活の內的要求より發したものでなければならぬ。然し、あの史家シイレエは、彼れの著『英國の澎張』に於て、切りに國內の小葛藤に齷齪して、自國の海外發展に氣付かぬ政黨者の短見、淺慮を冷笑しながら、自身にしても、徒らに英國の領土の擴大を謳歌するだけであつて、其れが、如何なる意味に於て、英國民の文明と、生活とに取つて重要なものであるかを尠しも說明して居らぬ。說明して居らぬのは、多分、透識して居らぬ爲めであらう。(これを思ふと、あの粗大なカアライルの方には確かに優れたところがある。何故ならば、彼れは消極的ながら、嘗て英國民の生活を本位として、印度全土の道德的價値を見出さうと努めたではないか。)

シイレエの云ふところを聽くに、英國民は彼等性來の本能に從つて、何等の目的も、又、必要もなく、つ

い、銃劍の一其れも極めて僅かの一力を以て印度を征服して了つた。然し、已に取つた以上は、其れを保管するのは英國民の責任であると云ふに過ぎない。私は、この書を讀んだ時に、生れて始めて、『勝利の悲哀』といふものの情調をしみ〲感得したのであつた。されば、誰れにしても、一廉の見識を持つたものならば、其の瑰麗なる文章に對して歎美を吝むものは一人もなからうが、又、其の思想の貧弱に對しては無限の失望を抱かないものは一人もあるまいと思はるゝ。英國民の取つたあらゆる手段、英國民の建てたあらゆる目的は悉く是認さるべきものでないにしても、(天の下に、是等の點で、全然非難を免れ得る國民が一つでも何處にあるか)、何故に、彼れは個人の幸福は、獨り國家の發展に依つて保障さるゝことを證明しようとしなかつたのであるか。そして、さうした結果、尠なくも、其れの志向に於て、帝國主義は個人主義の延長であり、充實であつて、始めて存在の理由を有ち來たることを證明しようとしなかつたのであるか。

四、帝國主義の原理

生きるといふことは、單一なる作用である。然しながら、其れを改善するに必要なる手掛かりを見出だすために、其れを二つの要素に分解する見地は、夙くより人間に依つて採用された。品性と境遇とが即ち其等である。そして、いつの時代に於ても幸福なる生活は、品性の整頓と、境遇の支配とに二重の注意を拂ふとに依つて、始めて得られることは實驗の上より假定されて來た。然し、是等兩要素に拂ふ注意の多寡と樣式とに至つては、決して、いつの時代でも同一であつたとは云へぬ。事實に照らして、是等の兩要素に拂ふ注意の多寡と樣式との異なるに隨つて、異なる宗敎や、政治や、藝術や、哲學や、科學や、產業が出現したと云つても宜い位である。

この興味から、生活の方針を大別して、古代のものと、近世のものとの二つとすることが出來る。文化が或る程度に達した後には、古代の取つた生活の方針は、品性の整頓を主として境遇の支配にさ程重きを置かな

かつたが、近世の取つて居る生活の方針は、品性の整頓と境遇の支配とに一樣に注意するやうになつた。否、どちらかといへば、反つて、境遇の支配の方に一層の努力を費して居るやうに見える。この事實よりして、何故に古代に在つては、宗教と藝術とが權威を擅にしたが、近世に到にては、科學と工業とが代はつて勢力を占むるやうになつたかが解かると思ふ。進化論は境遇と有機體との關係、交渉を吟味する一つの見方である。嚴密な意味に於ては、其れが、古代に在つては成立もせず、又、成立の必要も感ぜられなかつたのであるが、近代に到つては、樣式や方法こそ多少異なれ、勃然として興り、ヘルダア、フムボルト、ゲエテ、コント、ライエル、ラマアク、ヘエグル、而して、最後に總ての最大なるものたるダアヰンのやうな種々の天才に依つて、獨自に觀察を始められ、研究を進められたのであつた。之れには、近世生活に取つて甚深の意義がなければならぬ。而して、今日に到つては、唯一ならざるまでも、最も有効なる物の見方、處世の方法といへば、其れは屹度、進化論的のものであるか、其れでなければ、進化論的のものより分派したものに限らることになつた。

こゝには、生活は單一な機能でありながら、何故に其れが與へられたまゝでは、多少の反撥性を帶べる品性と境遇との二要素より成り立つかといふ問題を解釋する必要はない。兎に角、事實として、吾人の意志にて、即刻、勝手に左右することの出來ぬ境遇が、吾人の生活を作るに必須なる一半の要素であるからには、品性の整頓だけにて生活の改善を圖らふとして失敗を重ねた幾世紀間の所爲に鑑みて、其れと併せて、境遇の整頓に留意し、努力し始めたことは極めて自然の成り行きと謂はねばならぬ。そして、この企畫の正當であつたことは、到頭、近世生活の全面に黄金を以て大書された嚴然たる事實が絶大の雄辯を以て語つて居ると思ふ。個人が自己の威力と欲望の尊貴とを自覺して以來、自己の生活を改善するに有効なる方便として、彼れの境遇の改善に彼れの努力を傾けて來たのには十分

の理由がある。

個人の境遇といへば、日夜に彼れの身邊を襲ひ來たる一切の刺激を指すのであつて、地理的のもの、歴史的のもの、乃至、社會的のもの等、殆ど其の數に於ては無限であるが、彼れにして、或る文明の協同者であり、彼れにして、或る文明の繼承者である限りは、そこには、社會通用の價値を以て居る方針の系統が發見される。彼れは、彼れの欲望の滿足を求むるためには、先づ是等に隨順すると同時に、自己の特殊の要求に從つて、其等を改造し行かねばならぬ。彼れは、決して、直接に赤裸々の刺激に酬酢することはしない。彼れが酬酢するには、何時でも、先人の努力に成る、社會的、又は、國家的の媒介物を通じてするのである。而して、人の子と生れた彼れに取つては、斯くすることが、自己の特性を發揮し、自己の特性の好みに從つて生活するに、最も便利であり、愉快であるのである。私は、今、之れを包和價値と呼ばう。而して、この包和價値は、充實した個人價値の發展に必須なる前提である。姑らく、俗人の稱呼に從へば、(甚だ沒批判的ではあるが、)是れは即ち國民性である。

或る社會と國家とを組織し、或る文明を繼承して居るものは、個人にしても、其等の團體たる國民にしても、幸福なる生活を營むためには、この包和價値、即ち國民性を尊重することは大切であるが、個人の團體たる國民に取つては、彼等は、個人の如く、容易に集團として位置の移動の便宜を有たぬと云ふ極めて單純な理由からして、一層大切である。近世に勃興した帝國主義なるものは、この眞理の成式(formulation)に過ぎない、斯くして、自己の尊貴と威力とに特殊の自覺を得た現代の個人と國民とは、自己の幸福のために、自己を出來るだけ都合好き境遇に置く欲求から、帝國主義を取ることになつたと私は觀るのである。

五、異なれる國民性の並立及び其の價値

世界に於ても、宇宙に於ても、何が尊貴であると云つて、個人より尊貴なもの丶あらう筈はない。そして、こ丶に私が個人といへば、或る特殊の個人のことでは

なくして、尋常一般の個人のことである。されば、あらゆる人を一と數へ、一以下にも以上にも數へぬと宣した羅馬の法律と、凡べての人を目的として取扱へと敎へたカントと、最大多數の最大幸福は社會生活の目的であると說いたベンザムと、皆な等しく其の志向は正しく、其の意味には深いものがあると云はねばならぬ。本論の目的とするところも、徹上、徹下、個人の幸福、最も汎き、最も深き、最も賢き意味に於ける個人の幸福にあるので、其の他の何物にもないのである。斯かる意味に於ける個人の幸福と私の考へて居るものが、政治家の、或は宗敎家の考へて居るところのものと違ふかも知らぬ。然し、私としては、個人の從ふあらゆる條件、彼れの有つあらゆる欲求の交涉と葛藤とを考慮に入れ、而して後、算出されたものである。今、異なれる國民の並立と、其の價値の吟味に於ても、固より個人の幸福が中心要件となつて居るのである。

前に、地理的、歷史的、及び社會的の條件で定められた結果、そこに狀態と理想とを共通にする個人の集團が出來るといふことを云つた。是れが即ち國民である。さうすると、異なる地理的、歷史的、及び社會的の條件に依つて制限せられ、訓練せられ、助長せられた結果として、世界には異なる國民が出來るわけであつて、現に、吾人はかやうな異なる國民の存在を見るのである。然し、一國内に於て、そこに棲息する個人が、分業に依つて協同生活を營むだけの道德と文明とに達してからは、本能に於ても、職業に於ても、多く差別があればある程、其れだけ、有無の交換に於て、長短の補足に於て、豐富となり自由となるから、又、其れだけ、各人に取つて、望ましき狀態になるわけである。

今、列國間の關係に於ても、全然是れと同じ類推は成立つと思ふ。世界の各處に繁殖する國民が、永久の敵對狀態を脫して、貿易、其の他の方法に依つて、有無を交換し、長短を補足し合ふやうな、互解、相依の狀態に到着した後は、或る一つの國民はおのれ以外に、おのれのとは異なる文明を發達しつゝある國民を成る

だけ多く有つことが、最も望ましき國際間の狀態である。何故ならば、或る一つの國民は、どの位、富强であるとしても、到底、おのれ一つの力では、あらゆる國民が、各、其れに獨特の地理的、歴史的、乃至、社會的の事情から、獨自に發達しつゝある異なる政治や、道德や、藝術や、科學を發達させることは不可能であるからである。尤も、おのれとは違つた事情の下に在つて、違つた要求に依つて養成せらたたものであるから、其等の文明の總べてが同樣の意義で、同樣の程度に、大切であるといふことはない。文明の種類に依つては、大した利益を與へぬものもあらう、又、有害となるものもあらう。然し、さうしたところで、なほ、自國一個の力では如何にしても、到底發達させることの出來ない物は多々あるに相違ない。其等を十分に尊重し、其等を十分に自己の生活に利用することは、恰も自然界の利、若しくは、美を尊重し、利用すると同じく、よく聰明にして、全體に生きようとする各國民が、先づ自己に對して盡すべき義務である。而して、各の國民が總べての他の國民に對して、斯かる態度に出づるに及んで、こゝに、憧憬や、號呼に止まらずして、實質を有する國際間の眞の平和、即ち、それに與かる各國民の窮極の實在たり、單位たる各個人の滿足と、發展とを基礎としたる平和は、始めて、其の成立の曙光を見るに到るといふものである。

誰れかも云つたやうに、世間に最も超利己的の行爲と認められて居るものでも、よく〳〵吟味すれば、必らず或種の利己的の一核を含んで居るものであるから、又さうであつて、始めて人間に取つて、意味あり、價値ある行爲となるのであるから、國際間に在つても、眞の、そして、永久の理會と、親密と、尊敬とは、"Give-and Take" の關係を離れて生ずべき筈はない。それにしては、今日の爲政家や、外交家は偏頗にして固陋な觀念に囚はれてのみ自國の利益といふものを解釋せずして、もつと公平な、そして徹底した理會に據つて解決せねばならぬ。而して、吾人の已に達した文明は、力强く、彼等にさうすることを命じて居ると、私は信

ずるのである。

私は、決して空疎な人道主義の信奉者でも、宣傳者でもない。私は、どこまでも、實利主義者であり、現實主義者である。然し、利害といふ時には、自分の事にしても、他人の事にしても、乃至、一國の事にしても、人性の極致と、世運の傾向とを參照した上、幸福なる生活に必要なるあらゆる欲求の要請を商較して後に決定されたものでなければならぬ。そして、獨りこの大なる利害の立場よりして、世界の狀態は如何に在るべきか、如何に在らせねばならぬかは決定されねばならぬ。こゝに、世の爲政家、外交家等の帝國主義と、私の帝國主義との間には非常な相違がある。

私とて、人間に取つて、經濟的物件の極めて重大な意義を有つて居ることを知つて居る。現に、今日の文明の程度に於ては、人類の最大多數は、それの保障のために、彼等の時間と勞動との殆ど全部を費して居るのであるから、吾人は、眞に敬虔の態度、嚴粛の心地を以て、この問題に莅まねばならぬ。然し、私には、人の幸福のために、世界の文明全體を利用しようとする立場から、經濟的物件と文敎的事件とに對する世人の比較評價に關しても大なる異存はあるし、又、經濟的物件を獲得する方法に關しても世人の所爲には大なる異存がある。世人の多くは、自國の經濟狀態を發展するためには、あらゆる陰險な手段に愬へて、どの位、他の國民の文明や、國民性を破壞し、世界の正義の標準を低落せしめても宜いと考へて居るやうであるが、私は、それは、他の國民の文明や、國民性を尊重しながら、其れを利用し、世界の正義の標準を向上せしめるやうに爲され得るものであるし、又、さう爲すべきものである、そして、さうすることは、結局、自國の利益であると考へるものである。

今日の爲政家、外交家等は、宜しく、昔、ソクラテイスが危險思想を鼓吹して、雅典の青年を腐敗させると云ふ告發を受けて雅典の法庭に立つた時に、彼れが法官達に對つて答へた言葉の意義を味ふ必要があると思ふ。彼れは答へた「私は隣人が善良であるだけ、私の

受ける利益は多いと思ふ。又、これに反して、隣人が劣惡であるだけ私の受ける損害は大いと信ずる。さすれば、私は何を苦んで、故らに、損害を蒙るために彼等を腐敗させるやうな愚を爲さうか』と。

米國に於ける國法學者の第一人者たるバアジエスは嘗てかういふ說をなした。『英國が印度を征服したのは英國に政治の天才があり、印度に其れの能力が缺けて居つたからである。されば、印度が政治上の主權を失つたからといつて別に耻づるには及ばぬ。印度は、印度で、自分の天才の發露として誇つて居る宗敎を以て英國をも、世界をも征服すれば宜いではないか。何んでも天下の事は分業である』と。然し、私には、これは强者が弱者に對する冷酷な皮肉としか受け取れない。事實に照して、彼等は、どんなに立派な宗敎を有つて居るにしても、(其の實、現代の生活方針としては極めてつまらぬものではあるが)、彼等は、其れより來たる慰藉は、以て、政治上の主權を失つたことより生ずるあらゆる苦痛、あらゆる壓迫、あらゆる屈辱を償ふて餘まりあるものとして安心して居るか、どうか。(尠なくも、客觀、主觀の差別をさへ超越して、瞑想三昧に入つて了つた少數者を除いては。)或る國が政治上の主權を失ふといふことは、其の國の文明と國民性を失するといふことになり、隨つて、凡べての物が、其れの自由な、自然な發達を阻害されるといふことになるから恐ろしいのである。この點に關して、私はバアジエスの冷血な觀察よりも、ジョセフ・マジニの純なる愛國心に共鳴するものである。

或る人はかう云ふのである。『如何なる國柄にしても其れが滅亡するのは、皆、內的の腐敗から來るのであつて、決して、外的の壓迫から來るのではない。內的の腐敗は其れの因であつて、外的の壓迫は、偶、其れの緣となつたに過ぎない』と。固より、この觀察には大分の眞理のあることを否むわけに行かぬ。然し、小國が必らずしも其の內部の腐敗を竢たずして大國のために、其の主權を蹂躪されることのあるのは、今時の戰爭が十二分に證明したではないか。さうすると、世界に獨立

する權利を有するのは、獨り、多數の强兵を擁する國だけであるといふことになる。是れとて、論理上は、自分以外の總べてを向ふへ回はしても、安全である程の强兵を有さねばならぬといふことになる。然し、いづれの一國に取つても、是れは容易に實現され得る理想ではあるまい。

して見ると、大體に於ては、彼我の間の文明の"Give and Take"の關係より、互に他の一國民の獨立と自由とを尊重するより外に、窮極、世界の平和と幸福とを保障する道はないやうに思はる。

五、帝國主義の醇化

私の見るところでは、今日の帝國主義には、二個の全然別種の要素が混じて含まれて居る。近代に至つて、個人の自覺より生じたものと、中世紀以來、一身上の野心に包まれた歷代の帝王や外交家によつて繼承され來たつたものとである。勿論、對外關係に於て、或る方針が決定され、或る行動が取られる時に、是等兩要素は常に一緒になつてはたらいて居るのみならず、まだ、個人の自覺より來たる方は、歷代の帝王や外交家の訓練を經た習慣性より來たる方よりも、世智と實力とに於て大に劣るところがあるから、多くは、其れに捲き込まれて動いては居るが、兩者の目的にも手段にも、大分違つたところのあるのは事實である。前者は平和の方法に依つて自分の幸福を十全することを目的とし、後者は一向に領土の獲得、他國民の屈辱に依つて自分の功名心を滿足せしめようとして居る。然し、文藝復興と佛蘭西革命との後に生れ、光の子たる吾人は、民衆の帝國主義をして、帝王や外交家の帝國主義を溶解せしめ、穩妥の方法に依つて、世界の平和を增進しつゝ、人類の最大多數の最大幸福を圖らねばならぬ。

六、大國民の二資格

前大統領ルウスヴエルト氏は、勇氣と德操とを兼具することが健全なる市民の二資格である通り、强くあることと、正しくあることとは、偉大なる國民の併有すべき二資格であると觀て居るのである。斯くして、彼れは理想に於ける平和論者であつて、同時に、實際に於

ける軍備充實論者となつて居る。平常、彼れの云爲に對して慊らぬことの饒い私も、彼れのこの意見に就ては全然裏書きすることを躊躇せぬ者である。

個人間に在つては、彼等の共同生活の幸福を保障する爲めには、優者は劣者よりも一層の重荷を負ふのが當然であるとして、人々尠しも怪まない程度にまで吾人の有てる文明は達して居るのに、何故に國際間に於ては、猶ほ、强者は弱者を凌辱して、其等總ての幸福に直接多大の關係ある共同生活の平和を蹂躙することは、恰も强者に與へられた當然の權利であるかの如く承認されて居るのであらうか。國際間の關係は、個人間の關係よりも、利害に依つて影響せらるゝ範圍も一層廣いし、人命も一層多いのであるから、人性の優れた部分はこゝに一層發揮せられ、彼れの道德感はこゝに一層高調されねばならぬわけではないか。

今日、世界の大患は吾人の共有する終極の幸福のために、强大なる國の孰づれの一つも、實力を以て、國際間に高き道德の標準を示し得るものの無いことである。今度の戰亂に依つて暴露されたものゝ中で、何が最も悲むべきことであるといつて、潔き良心を以て、他に對つて、正義を說き得るものの一つも無いことに如くものはあるまいと思はるゝ。故なくして、他人の財產を掠取することの惡いといふことの如きは、個人間に在つては、夙とに人間の遺傳性にまでも植ゑ付けられた判斷である。然るに、國際間にあつては、今でもこの判斷は行はれて居らぬ。特に今度の戰亂に依つて、世人をして『何んでも取り得るである』と云ふ覺悟を新たにせしめたのは、實に今日の文明の中に在る人類に與へられた一大汚辱としか思はれない、國際間に在つては道理の如何は論ずる要はない、强者は何を爲しても差支へはない。この場合に、弱者は、只、泣き寢入るだけであるといふ理會は、實に、人類一般の生存に取つて、危險極まるものであると云はねばならぬ。斯くては、弱者が絕へず不安の狀態に在ることは無論のこと、强者と雖も、(何時おのれより强い勢力に出逢はぬとも限らぬ故)、等しく、絕へず不安の狀態に在る

ものと見ねばならぬ。然し、僞善化されない純なる個人の良心は、たとひ國際間の事なりとて、斯かる無法な行爲の行はるゝことを決して是認はしない。

私は、世界の强國たるものに對つて、自國の幸福と、人類の幸福とは、已に大體に於て、一致し得るほどの文化に到達して居ることをよく〳〵自覺し、體認して、其れが强くあると同時に正しくあることを、否、强くあればあるほど正しくあることを、おのれの義務とすることを切に勸告する者である。

七、國際間には果して道德なきか

國際間に道德は存在しないと云ふことは、よく權力關係のみにて、道德の起原を說く者の口にするところである。然し是れは果して事實に合するであらうか。成程、今度の獨逸と其の他の國々の態度とに依つて、如何にも面のあたり、この學說が證明されたかの觀があるが、私には、別に見方があり、意見がある。

眞に無難に、國際間に道德がないと云ひ得る狀態は、一つの部落と他の部落、又は、一つの種屬と他の種屬とは、個人としても、團體としても、常住、敵對狀態に在る外は無かつた時代（ホッブスのしたやうに、そんな時代があり得たと假定して）に就てのみ云はれ得ることである。この時代に在つては、團體としては無論のこと、個人としても、二つの異なる部落の間、若しくは種屬の間には、何等の理會も、何等の利益の交換もなく、相會ふや、否や、たゞ、互に他に危害を與へようとする本能しか有たなかつたのである。この狀態に於てのみ立派に、其の間には、道德關係はないと云はれ得ることと思ふ。然し、今日の列强間の關係はどうであるか。

今日に於ては、世界の各處に割據して、苟も、國を成して居る種屬の團體は、互に理會し、互に交際し、互に他の文明の所產と惠澤とを利用しつゝあるものである。個人としても、團體としても、出會ひがしらに、必らず命の取り遣りをするといふやうなことは夢にもない。特に、國籍を異にするにしても、個人間にあつては、彼等の祖國が一旦敵對狀態に入つた後と雖も、

相互の間には、道徳の情こそ興れ、決して憎惡の念などは生じはしない。この明白なる事實に徴して、國際間に道徳が存在しないと云ふ時に、そこには、尠なからず、語弊がある。極く、推し强めて云つたところで、國際間には、往々、道徳關係の中止(suspend)される場合があるといふのが最も事實に適した言葉である。そして、私が少しく考察を費して見たいのは、この事實に就てゞある。

この時々に起る國交斷絶なるものは、民衆の欲求に依つて爲さるゝか、或は、當時の爲政者の政策、又は野心に依つて爲さるゝか、正當な根柢に依つて爲さるゝか、或は、不當な强請に依つて爲さるゝか、國民の利害を標準として避け得らるべきものであるか、或は、避け得られぬものであるかが問題である。私は、民衆の欲求に依つて爲さるゝよりも、當局者の政策、又は野心に依つて爲さるゝことが多く、正當な根柢に依つて爲さるゝよりも、不當な要請に依つて爲さるゝ方が多いと信ずるものである。巳に、當時の爲政者の政策又は野心より來たり、又、避け得らるゝものであるとしたならば、この事實よりして、正當な根柢に依つてよりも、寧ろ不當な要請に依つて爲される方が多いと見ねばならぬ。私は最近の外交史と、戰爭史との事實に憑據して、斯くは斷言するものである。その結果、人間に取つて、最も恐るべく、最も厭ふべき、あらゆる慘禍を嘗め盡した後、何人が得る賞與も、何國が受くる報酬も、決して大したことでないことは、現に、餘まりに明白に立證されて居るではないか。

今日、國民としての道徳が個人としての其れよりも確かに低いといふことは實に駭くべく、且つは慨歎すべき事實である。然し、是れは何も人間は個人としてよりも國民として一層獰惡であるといふことを尠しも證明はしない。たゞ、彼等は因襲に囚はれて居るがために個人として彼等が有する報償關係を理會するほどに、明白に、剴切に、國民として彼等が有する報償關係を理會するの認識を缺いて居るためである。彼等にして、一たび新らしき情操に依つて、新らしき觀察を始

めたならば、彼等が是れまで夢想だにも及ばなかつたほどの、數多き、而して種々の異なる報償關係が國際間にあつて、國民としての彼等と、國民としての他の個人とを結び付けて居る事實を認識するに至るであらう。そして、報償の考察よりして、積極的にも、消極的にも、他の國民の幸福と、權利とに對して、一層も二層も、敬意を拂ふやうになるであらうと信ずる。

八、國際間の關係に對する見方の轉換

昔、アアキメデイスは『自分に一つの槓杆を與へて呉れ。さうしたならば、自分は乾度この地球を動かして見せる。』と云つたさうである。如何にも、世の中には、地球を動かさうとする殊勝な心掛けを持つて居る人は相應にある。只、彼等は、それに必要な槓杆を見出さないが爲めに、中途に當初の心掛けを放棄したり、或は折角の力を無益に消費して了ふことになるのである。たゞ時々、大人、豪傑あつて、その時代に適當する槓杆を工夫して、地球を動かして來た。

意義ある處世の方針は之れを大別して二種と觀ることが出來る。其の一つは、從來用ゐられた方針を洗練することで、も一つは、從來、用ゐられた方針とは違つたものを創設することである。前者が見方の修正ならば、後者は見方の轉換である。

この見方の轉換は、古來一代の風雲を捲起した多くの改革家に依つて採用されたものであつて、カントに依つてコパニカスの方法と呼ばれ、彼れの改革事業に採用されたのも、矢張りこの見方の轉換であつた。

然し、この見方の轉換の成立を吟味して見ると、さう不思議なものではないことが解かる。カントはその性質をかう説明した。コパニカスの時までは、天體運行の現象を、實際に天體が地球を廻轉するものと説明して來た。然るに、コパニカスは、この見方を轉換して、反つて、地球か太陽を廻轉するものとしたならば、一層よく説明が出來まいかと思ひ付いた。そして一たび其れを試みて成功した、と。カントの言葉はたゞこれだけであるが、こゝに吾人が多大の興味を以て詮索して見たいのは、どうしてコパニカスが見方の轉換の可能

に氣付く思索の解放を得たかと云ふことである。若し、如何なる場合に於ても、社會と個人との間に何等かの關係があると云ふことに幾分の眞理があるならば、社會は既に或る程度に見方の轉換を欲求して居つたのである。そして、天才コパニカスは、たゞ常人より一層鋭敏にこの衝動を感得し、一層精密にこの刺激を統一することが出來ただけである。私はあの事件の眞相を斯く解釋し、そして、私のこの解釋は事實の中核を摑へて居るものと自づから信じて居る。

今度の戰亂の結果に就ては、人によつて、思ひ思ひの想像に耽つて居ることであらう。然し、各國民にして、人性の極致と、社會の組織と、時代の傾向とを參照して、新たに見方の轉換を試みざる限り、大した變化を齎さてないであらうといふことだけは私にも斷言することが出來る。私は本論に於て、聊かこの見方の轉換を暗示しようとしたのである。

經濟市場開拓論

法學博士　小川鄕太郎

一

我國の人口は增加して已まぬ、近年は年々七八十萬人も增加して居る、今や人口五千萬と稱して居るが、此勢で進んで行くと向ふ五六十年の間には一億に近き人口となるかも知れぬ、人口は殖えるが、土地は之に伴て增さぬ、そこで土地を土臺にして居る農業だけではトテモ總ての人に職を與へ總ての人を養て行けぬことになると覺悟しなければならぬ、さうなると、どうしても又工業を起し、それで、多くの人に職業を與へ多くの人を養て行かねばならぬ、工業立國論が起る所以

である。

農業立國論といひ工業立國論といひ、議論は出來ないではなからうが、工業立國論といふも我國では日本米に執着して居る間は英國の如く全然農業を拋棄する譯に行くまい、農業立國論といふも、米を作て全國民を養ひかねて居る以上は工業の振興を望まずに居られまい、何れにするも農工業は偏廢することと出來ぬ、只人口增加の勢を以てすれば將來農業よりも工業が重いものとなるに違ひない、工業立國の意義は其處にある。

工業は我國民經濟上最も重きを爲すに至る運命を持て居る、工業が盛になれば製品の賣れ行く路即ち經濟市場を見出さねばならぬ、經濟市場が十分に開けなければ偶〻生產するも利益を得るに由なく、工業は到底發達しない、工業の發達と經濟市場の開拓とは因となり果となり表となり裏となり互に條件となつて居る、果して然らば我國百年の經濟政策として經濟市場を開拓するに心懸けねばならぬ。

經濟市場の開拓は工業國に於て、最も大切のことであるが農業國だとて、大切でないといへぬ、農業國が工業品を需要して居る上は、その對價として農產物を賣て行かねばならぬ、農產物に對する經濟市場を開拓する要が起る、我國目下の狀況では農業國を脫して工業國に入つて居るとはいへぬ、米の輸出力は殆どないが、米以外の農產物は輸出出來ぬでもない、故に我國の經濟政策としては農產物に對する經濟市場の開拓をも計畫せねばならぬ。

要するに經濟市場の開拓は我國の現今將來に於ける重大なる經濟政策である。

二

經濟市場は廣きを必要とす、啻に內國に於て廣きのみならず、外國に向ても廣からねばならぬ、若し經濟市場が一地方に限られて居るときは、其地方が不景氣なれば其事業は根本的に打擊を被むる、之に反して經濟市場が全國に亘つて居るときは、一地方が不景氣であつても他地方の景氣がよければ、彼是相補て損失を招くこともなからう、併し一國内の景氣不景氣は一樣に

なるのが常であるから、内國のみを得意とする經濟事業は國内一般の不景氣に襲はれて非常に打撃を被ることがある、若し經濟市場が外國に亙り居るときは内國が不景氣であつても外國は景氣のよいことがあつて、内國に賣れなくても外國に賣れて儲けて行くことが出來る、此論理を推して行くと外國市場も、一國のみよりは多くの國に亙りて居るを必要とする、多くの國に亙て居れば居る程打撃を受けることと少なくなる、果して然らば經濟市場の廣きは其事業をして安定せしむるもので、丁度保險の性質を帶て來るものといはねばならぬ、保險は危險に曝露せられて居る人が一團をなして居つて其掛け金で事實危險に遭遇した人の損失を補塡して行くものである、而して其團體が廣くなれば、廣くなる程、保險業は安定的になる、もし火災保險が一地方のみに限りて保險契約をして置くと其地方に火災が起ると破產しなければならぬこととなるであらう、生命保險が一地方に被保險者を集めて置くと其邊に流行病が起ると、忽ち大打撃を被るであらう、故に保險業者は其經營策として被保險者を四方八方に散在せしめて置かなければならない、此經營方針は保險業者のみに限らぬ、他の經濟事業に於ても又同樣である、廣き經濟市場を持て居るものは其基礎が固く、狹き市場を有するのは其基礎が弱い、内國市場のみを持て居る事業と外國市場をも持て居る事業と比較すると直ぐ判る、夫の紡績業が我國に異常の發達を遂げて來たのは、種々の原因もあらうが、其市場を支那に有するといふ事が少くとも大なる原因であるに相違ない、精糖事業の發達も、内國市場の外に支那其他外國市場を持て居るのによるといはねばならぬ、燐寸業の强みも、東洋諸國に市場を持て居る點にある、眞田業の榮えて來たのも外國市場の存するが爲めである、織物業などは我國に於て重要なる工業に相違ないが内地向製造を主とするものが多い、故に我國内の不景氣に由て常に動搖を受け動もすると發達を阻害せらるゝやうである、獨り羽二重業は販路を外國に持て居る、是が其業の近[illegible]大に發達した所以である、さうして見ると其他の織物

業も內地向に止まらず、外國向のものをも製するといふ方針を定めねばならぬ、或は內地向と外國向とは製品に差があるから、一より他に轉じ得ないといふものがある、それは技術の問題である、それを轉じ得る樣にするが、技術の理想であらねばならぬ、目下直に出來ぬとも、出來る樣に努力せねばならぬ、加之今日に於ても機業によりては容易に內地向より外國向に、外國向より內地向に轉し得るものがある、それにもかゝはらず、內地の不景氣に遇ひ操業を中止して不平ばかりいふて居るものを見受けるのである、市場開拓の意思が根本的に欠けて居るものといふてよい。

以上論ずる所を以て見れば、市場が廣ければ經濟事業が安全であり且つ十分に發達して行けると斷ぜねばならぬ、故に經濟事業の安定を期し發達を促すといふ上よりも市場の開拓を計らねばならぬ。

三

經濟市場は前述ぶるが如く何れの觀點よりするも之を開拓せねばならぬ、然らば如何なる地に向て市場を開拓して行くべき乎、市場開拓の方針如何といふ問題が起る。

市場開拓方針は次の四に分つことが出來る。

一、市場は近隣より開拓し初め後に遠きに及ばねばならぬ、蓋し近隣へ賣るとすると運賃が安く、遠方より來る商品と競て勝ち易い、又近隣であるから、其地の需要の强弱變動を速に詳悉することを得て、臨機の商略をまわすことが出來る、斯樣の譯で近隣の市場は容易に開拓することが出來るが遠方の市場はさう行かぬ、市場開拓の方針は此勢を見ねばならぬ。

我國からいふと支那を初め東洋諸國の市場が最も近く南洋、亜米利加之に次ぎ歐洲亜弗利加等は最も遠い、然るに我國では歐米貿易を重んじ東洋南洋との貿易を輕するものがないではない、餘程間違つた考といはねばならぬ。

二、市場は交通の便なる所に向て之を開拓せねばならぬ、交通の便なる所は距離遠くとも其實近い、反之、交通の不便なる所は距離近くとも其實遠い事になる故

に交通の便なる所に市場を開拓するといふは、第一の原則の精神より自然に來るものと見ることが出來る、甚だ見易き理で殆ど疑を容る餘地がない、然るに近來日露貿易の進捗を期する爲に、西伯利亞の內地との貿易を策するものがある、勿論美擧たるを失はぬが、其設は交通の不便なる所に攻めて入ることに歸し、餘程六ヶ敷からう、それよりも船の行くに從て南し、南洋印度の市場を開拓する方が遙に成效の見込ありと思はれる。

三、經濟市場は人口多き國に向て先づ之を開拓せねばならぬ、人口多ければ貨物に對する需要從て大であり、商品の賣れ行く機會が多くなる、縱令其國は貧くても貧しきに相應した商品が人數に比例して多く賣れて行く、富んで居れば益〻多く賣れる、之に反して人口が少き所では、よし其國民が富んで居ても、多くの商品を賣ることも出來ぬ、貧ければ愈〻賣れる見込ない、貿易は數の上で儲けることを考へねばならぬ、數の上で儲けやうとすれば、どうしても人口多き國に向て行かねばならぬ。

此見地よりすると支那印度等は經濟市場として最も好望である、支那には四億の民衆が居る、印度には三億の人が居る、是等の人が日本品を用ゆるやうになると、少しづゝでも、全體では大したものになる、故に我國が經濟市場を開拓するとせば、先づ支那、印度に向はねばならぬ、西伯利亞は廣大無邊の地であるけれども、人口は極めて稀薄で僅に九百萬しか居ない、一哩平方に二人足らずである、西伯利亞內地との貿易の前途は聊か疑問である、それよりも露西亞本國との貿易が遙に望が多い、然るに露西亞本國と我國とは相距ると遠いから、戰爭が終了すると獨逸が第一の原則に從て露西亞に市場を恢復するであらうから、日露貿易の前途は決して洋々として春の如きものでない、勿論日露貿易を奬勵するに足らずと論ずるのではない、只それよりも他の市場の方が有望であることをいふのである。

四、工業品は農業國に向て販路を擴め原料品は工業國に向て市場を開拓せねばならぬ。元來商品は相手國

の需要する所のものでなくてはならぬ、然るに需要する品物は國によりて自ら異なる、農業國は工業品を需要するし、工業國は却て農産物其他の原料品を需要する、故に、農業國に對しては工業品の市場を開拓し工業國に對しては原料品の販路を確保せねばならぬ。

歐洲の先進國殊に英、佛、獨、墺、伊、並に北米合衆國は大體に於て工業が進で居る、之に我國の工業品を輸入しやうとするは六ヶ敷い、故に是等の國を市場とし得る商品は原料品が少くとも半製品でなくてはならぬ、之に反して支那、印度を初め東洋諸國並に南洋等は農業國である故に是等の諸國は我國の工業品の市場となすに最も適して居る。

我國の運命は既に論じた如く工業國となるに在る、工業國となれば生産品は次第に歐米の先進國の生産品に近寄つて行くことになる、從て歐米は我國の經濟市場として、左程重要でないものになつて來やう、之に反して我國が工業國となれば、なる程東洋南洋の諸國は我國の經濟市場として非常に重要なるものとなつて來る、我國將來の經濟市場の中心は東洋南洋にありといはねばならぬ。

以上四の原則より觀察すれば經濟市場は世界各地に之を開かねばならぬが、其中でも支那、印度其他の東洋諸國並に南洋の諸國は我國の經濟市場の中心點とならねばならぬ、經濟市場の開拓をなすは此地方に向て十二分の力を用ひねばならぬ。

四

我國經濟市場の中心點は東洋南洋にあること前に論ずる通りである、そこで、機會あれば何時でも、それに乘じて行かねばならぬ、機會があるに、それを空しく過ごさしむるは、現在自己の爲に計らぬ計りでなく將來子孫の爲に計らぬことゝなる、然らば、今は果して其機會であるかといふに、余輩はさうであると答へたい。

歐洲戰爭勃發してより既に八、九ヶ月となる、交戰諸國は互に數百萬の壯丁を戰場に送り、敵の兵力を減し、敵の商船を沈め、敵の食糧を絶ち、敵の經濟事業を打

破することに苦心して居る、そこで交戰諸國は安じて生産事業に從ふことゝ出來ぬ、よし生産したとて、それを運送する商船が十分にない、故に到底大々的に輸出業を營むこと出來ぬ、殊に東洋南洋の方に輸出をすること出來ぬ、東洋南洋に於ては現に歐洲の商品は品切となつて居る、今や道塗、媾和說を傳ふるものボッボッ出て來たけれど、戰爭は未だ仲々容易に終結すまい、又よし戰爭が終結するとしても、歐洲交戰國は其翌日より直に東洋南洋に大々的輸出を爲す譯に行くまい、蓋し戰爭の爲に人が死し、勞働者が死し、工場が壞はされ資本が打擊を受けて居るから、直ぐに大々的經營に取りかゝり得ぬであらうし、經營を初めたにしても先づ國內の需要を充たさねばならぬからである、さうして見ると戰爭が終結するとしても、東洋南洋に歐洲の商品が溢れて來ることは多少月日を要することゝいはねばならぬ。

由是觀之、現今並に近き將來は我國が東洋南洋に於て經濟市場を開拓するに最も好き機會であるといはねばならぬ、東洋南洋諸國に於ては歐洲品は品切れとなつて居る、近き將來も確かに品切れが續くに違ひない、我國の商品が入りて之に代るは少しも六ヶ敷くない、丁度之を譬ふれば東洋南洋は歐洲の方に向て鐵條網を張て居るやうなものである、歐洲品は入つて來ぬ、我國の品はドシ／＼這入つて行ける此鐵條網は我國の貿易を保護して居る、戰爭は東洋、南洋に對して自然的に保護貿易を爲さしめて居る、而して其利益を被るは我國である、全體保護貿易なるものは自國の幼稚なる產業を保護し之を發達せしめんが爲に、國境に鐵條網を張るものである、其鐵條網は外でもない輸入稅である、輸入稅で以て外國品を排斥せんとするのである、然るに今回東洋南洋の張つた鐵條網は輸入稅でなくて歐洲戰爭といふ事實である、歐洲戰爭は我國の東洋南洋貿易に對する天惠である、我國は此天惠を空しくしてはならぬ、平生保護貿易をしやうとすると、四苦八苦せねばならぬ、然るに今回は何の苦しむ所もなくて保護貿易以上の利益を收めることが出來る、是れ余の今の

時を以て千載一遇の好機であるといふ所以である。

我國は此好機會に乘じては東洋南洋に對して商品を高く賣ることが出來る、競爭品がないからである、我國の產業が幼稚であつても十分に割が合ひ、成り立つて行き、其間に發達を遂げることも出來やう、輸入稅を高くせないで輸出を爲しつゝも而も保護貿易の目的を達することを得るものといへる、併し戰爭が止み交戰諸國が經濟活動を恢復し來ると共鐵條網は撤せられる、歐洲製品が東洋南洋へも這入つて來る、是れは普通の保護貿易が其國の考へ一つで何時迄も其鐵條網を撤せないで居り得るのと違つて居る點である、故に我國の東洋南洋に於ける市場開拓策としては戰爭後に鐵條網が取り去られても尙其處を守り歐洲品を擊退し得る樣にせねばならぬ。

五

歐洲戰爭が濟んでから後歐洲の商品が土を捲て重て來るとき、之を東洋南洋の市場に於て擊退するには如何なる方法を採るべきか。

蓋し其方法は歐洲品に劣らない品質のよきもので歐洲品よりも高からぬ價で賣るといふことにある品質と價格とで戰ふのである、品質は價に相應してよいものでなくてはならぬが、同時に其東洋南洋の人の嗜好に適する樣に出來上つて居なければならぬ、そこで戰前より東洋南洋に輸出して居る品物に就ては益々其需要者の嗜好に投ずるやうに工夫し、値段も上げず、日本品に執着する樣、力めねばならぬ、戰爭に乘じて新に輸出し初めたる品物並に之より輸出せんとする品物に就ては、殊に歐洲品に劣らぬ樣な品質の物を製出せねばならぬ、それには初めは生產費嵩まりて、少々高く賣らねばならぬかも知れぬが戰爭の終結迄には安く賣りて損の行かぬやうに經營を進めて行かねばならぬ、さうでないと、戰後歐洲品の溢れ來るに際して又立ち退かねばならぬこととなるであらう、是れ市場の開拓でなくて市場の拋棄となるのである。

今の時は東洋南洋に於ける市場開拓の最好機である、今の時に於て市場開拓のあらゆる手段を講ぜねば

ならぬ、需要地の人の嗜好に適するやうに製造しやうと思へば、視察員技師等をも其地方へ派遣せねばなるまい、其派遣費は市場開拓費として必要の經費である、之を惜みては資本なくして商業を營まんとすると一般、到底大なる結果を得ること出來まい、若し個人企業者で能くし得なければ國家、商業會議所、營業組合團體等は進で之を助け又自ら之を計畫せねばならぬ。

次に其製造した品物を賣て行くには消費者の需要を刺激せなければならぬ、そこで廣告が大切になり又販賣の方法も宜を得なければならぬ、各地に展覽會類似のものを設くるも一策であらうし、販賣員を特派するも亦妙であらう、是等のことも或は個人企業者一人で出來ぬかも知れぬ、組合の力を借り商業會議所の力を借るの必要もあらう。

市場開拓は一の戰爭の樣なものである、商工業に相結て一致の態度をとらねばならぬ、目前の小利に迷ひ、小損に屈して以て未來永刧の大利を忘れてはならぬ。

六

以上は主として東洋南洋に市場を開拓することを論じたが、我國の經濟市場とする所は素より東洋南洋に限りて居ない、世界の諸國に亘りて市場を開くことを旨とせねばならぬ、只其市場としての重みが東洋南洋に於ける市場に及ばない許りだ。

最近の海外貿易の狀態よりいふと、歐米諸國との貿易は決して輕視すること出來ぬ、此貿易は勿論進步すべきである、併し其輸出を見れば主として原料品である、生糸の如き銅の如き皆それである、もし我國に工業が進で來ると原料品は我國に置きてモット精製して輸出せねばならぬ、生糸で出すよりは絹織物として出すことを力めねばならぬ、羽二重は生糸より一步を進て居る、併し其羽二重も亦歐米人の目より見れば原料品に過ぎない、同じ原料品としても加工の度の進んで居るものを輸出するに努めねばならぬ。

此見地よりして歐米の市場をも開拓して行かねばならぬが、其市場の開拓方法は矢張、品質のよくて、價の比軍的高からぬやうにして行くに存して居る。

歐洲は戰亂に在りても盛に羽二重銅等の需要を起して居るらしい、又米國は歐洲戰爭に於て非常に利益を得たらしい、米人の購買力は時を經るに從て、次第に高まつて來やうと思はれる、さうして見れば、歐米に於ける市場開拓も亦之を忽にしてはならぬ。

＊　＊　＊　＊

要するに我國は行く／＼商工業を以て國を立つることになる、從て機會ある毎に經濟市場を開拓して行かねばならぬ、今は其經濟市場を開拓するに千載一遇の好機である、國人よ、進で此千載一遇の好機を捕へよ、歐洲といはず、米國といはず、東洋といはず、南洋といはず、世界に亘りて經濟市場を開拓せよ、併し我國將來の經濟市場の中心點は東洋並に南洋にあることを忘れてはならぬ。

貴族院の態度如何

欄柯人

代議政體の妙用は國家各階級又は各方面の有力團體をして汎く國政に參與せしむるに在りて、我邦の如き古來世襲的階級を有する國柄に於ては貴族院の無かるべからざるや論を待たず、歐米政體論の一斑として從來一院制對兩院制の利害に關し學者間爭論時に囂々たるものあり、我邦に於ても曾て一院制を主張せる極端論なきに非ざりしも、近來に至りては歐米に於ても極端なる平等主義は漸く跡を絶たんとし、代議院に於てすら比例代表の主義を採らんとし、貴族階級の歷として存する國に在りては貴族院の存在を必要缺く可らざるものとせらる、近年英國の政界を沸騰せしめたる貴族院令改正の如き貴族階級が多年一般國民の上に加へ

し橫暴なる仕打に對する必然の制裁として、貴族院の權限を相當の程度に局限せんとするのみ、然れども貴族院の必要を認むるに於て今日の英國の輿論は決して五十年以前の輿論と比して熱心の度を減じたりと謂ふ可らず、佛國の如き幾度の政變の爲め貴族階級が多大の打破を蒙れる國に於ても元老院あり、又た米國の元老院が如何に國政の平衡を持する爲めに有力なるかは周ねく世人の知る所たり、

我邦に於ても貴族院は近年著るしく政界に重きを加へ來れるは見逃すべからざる事實なり、抑も貴族院が初めて其威力を振ひ其侮るべからざる反抗力を示したるは明治三十四年第三次伊藤内閣の時に在り、此時伊藤公は其新たに組織せる政友會の領袖を擧げて閣僚となしたりしが就中遞相星亨氏の從來政治上橫暴の振舞ありしと云ふこと痛く上院議員の感觸を害し且つ伊藤公が超然内閣主義を擲ちて政黨主義を採るに至りしことは閥族一味を驅りて其反對者たらしめし一大原因なり、如何となれば公は彼等に取り超然主義の本尊たりしだけ、此政綱を棄てし公は一種の謀反人と見ゆるを免れざりしを以てなり、故に彼等の反對は星亨氏の辭職を以て止まず、海軍擴張案は伊藤公の切なる哀願を以てするも容易に通過せず竟に貴族院議長近衛篤麿公に勅語を賜るを待ち僅かに成立するを得たるも、上院の反對は公が政黨内閣に主班たる間は容易に止むべくも覺えざりしなり、即ち公の時ならぬ辭職も内閣不統一を主因とせしなるべきも、貴族院に對する前途の悲觀亦その一因たりしは公を識るものゝ當時窃に揣摩せし處なり、從來貴族院は何人の内閣に對しても極めて柔順なり、前年の憲政黨内閣に對してさへ竟に反噬の牙を示さゞりしなり、當時大隈首相は自由黨の去りし後尚ほ最後まで貴族院が好意的態度に出づべきを信じたりき、即ち政府贊成は貴族院先天の傾向と思はたりしに、明治三十四年の議會に於て猛烈なる政府反對を試み以て天下の人心を愕然たらしめしなり、是より上下兩院は毎々反對の態度に出で、時の政府にして下院を味方とせんと欲せば上院の反噬に備へざるべからず

之に反して貴族院を味方とする場合には衆議院の操縦に窮するの狀ありて、憲政の運用に關し前途頗る悲觀せざるべからざるものありき、然るに桂西園寺妥協政治の結果兩院制の運用漸く圓滿ならんとし、政黨政治に對する貴族院の反感も年と共に薄らがんとするの傾向ありしが、桂公が政黨組織を發表せしより憲政擁護運動の開始となりて政界の風浪復た頗る險惡なりき、山本伯の出動は將に亂れんとする政界を鎭定するの功ありしも一方には不倶戴天の不平家を生じたりしが、昨春のジーメンス事件發生と共に竟に海軍攻擊の幕は開始せられ、山本伯を戴ける政友會內閣は下院に於て常に二百有餘の多數を以て支持せられしも上院に於て終に僅々四十の少數を以て破られ、大隈內閣と交代の止むを得ざるに至れり、此時に於ける貴族院の憤慨は眞に猛烈を極め村田保氏の山本伯に對する個人攻擊の如き素より氏一人の意に出でしに相違なきも上院の多數をして自ら共鳴なきを得ざらしめしことと疑ふべからず、即ち貴族院は前年の伊藤內閣に反噬せしより十三年後に於て再び稀有の態度に出でしものと謂はざる可らず而して世間一般よりは多大の歡迎を受け以て大に其人氣を博したりき。

昨年の本議會を以て本年の特別議會と比較するに、解散後の總選擧の結果に因り、一般の形勢には多大の變化ありしに關はらず、時の內閣が衆議院に於ては絕對多數に擁護せられつゝ一般には非難の焦點たる事に於て頗る相似たり、而して之に對する貴族院の態度如何、即ち果して衆議院に同して內閣を擁護支持すべきや將た內閣反對に出でんとするや、內閣の運命は一に繫りて貴族院の態度如何にあるの狀態又昨年と本年と頗る相似たるものあり、現內閣の批政として算へらるゝは日支外交、責任支出、選擧干涉の三件にして、未だ昨年の海軍瀆職事件の如く其事明瞭簡單ならずと雖も亦た以て識者の奮起を促すに足れり、該三件中責任支出及選擧干涉は事內政に屬して多少辨疏の道なきに非ざるが如きも支那外交の失敗は天下の視て以て慨歎する所、實に千載一遇の好機を誤り無能無謀の懺悔を招

きたる實に至りては到底之を避けんと欲して避くべからざるものあり、況んや歐洲大戰爭の終局亦た蓋し遠からず、我帝國は果して現在の無能當局を以て歐洲和議の局に當らしむべきや否やは一大疑問たるべきに於てをや。

今日の場合に臨み貴族院の黨派別を一瞥するまた興味なしとせず、現在我貴族院は議員三百七十三人中、皇族十二方を除きて外は、七團體に分派せらる、即ち研究會（百六名）、茶話會（六十一名）、無所屬（六十二名）、土曜會（三十一名）、交友倶樂部（三十四名）、甲寅倶樂部（十三名）、純無所屬（五十四人）、是なり、今此の七團體中純無所屬の如きは多數の會員ありと雖も多くは公侯爵議員にして議席に就くこと頗る稀なるが故に殆んど院内の一勢力と謂ふに足らず、交友倶樂部は政友系として旗幟鮮明なりと雖も少數にして未以て院議を左右するに足らず、伯爵團の甲寅倶樂部は現内閣系と稱すべきが如きも是亦た少數にして中心勢力たることを能はず、土曜會は曾我子の縁故より現内閣に接近しつゝありしが如きも子が去りて樞密院に入りし以來或は非政府系に近づくべき觀察なし難きに非ず、假りに其多數は現内閣に反對すべしとするも交友倶樂部と合計して僅々六十を出でずして非政府の中堅としては聊か心細き感なきを得じ、何は兎もあれ貴族院の中堅は研究會と幸倶樂部にあり、幸倶樂部は茶話會及無所屬の總稱にして、人員よりせば百二十三人を包有し研究會よりも大なり、且つ貴族院中の人材論客亦た多く此中にあり、即ち若槻藏相、高橋男、後藤男、澤柳政太郎氏、目賀田男、仲小路氏、田男あり更に平田子大浦子、小松原氏もあり、然れども其餘りに濟々多士の故にや稍々統一を欠くの嫌ありて黨議を以て全體を拘束し難きの憾なしとせず、統一的勢力に於ては貴族院中イヤにも研究會を押さゆるを得ず、研究會の中堅は三嶋子、吉川男、牧野忠篤子、山田春三氏等に在りて岡部長職子は元老として依然重きを爲す、諸氏は言論の雄に非ざるも全會を結束して能く貴族院最後の態度を決定するの手腕に至りては是れ諸氏の獨得なりとす、

斯くて貴族院の大問題は先づ幸倶樂部に於て發議せられ討論せられ、後に研究會の態度如何に由り決定するものと見るを妨げず、現に內閣の秕政問題の如きも幸倶樂部なる目賀田男、田男、後藤男、仲小路氏等に由り既に論戰の開始を見たる譯なるが、例に由り研究會は沈默を守り頗る自重の態あり、貴族院の最後の態度奈何は尙未だ當局大臣の說明もなき今日遽かに逆睹す可らずと雖も穩健中正を旨とする研究會が萬一政府問責に同意するとするも必ずや幾多の紆餘曲折を經るを要すべく、普通の順序を以て進むものとせば政府の失策秕政は一應認めつゝも輕き警告を加ふる位に止まり到底問責の決議を見るが如きには至らざるべきか、且つ研究會の去就を論ずるに先だち幸倶樂部多數の意向如何を考察するの必要あり、政府反對の目賀田男後藤男田男仲小路氏等の議論が果して幾許の勢力あるべきかを知らんとするには同倶樂部內には現內閣擁護派と云ふべき江木、一木、有地、諸氏ありて大浦子若槻氏の後援の下に熱心に奔走すべく、又は純山縣系たる平田子、小松原氏、武井氏安廣氏等老巧手ありて其味方を吸收するに努むべし、思ふに平田子一派は以て幸倶樂部內に於ける研究會とも云ふべく、比較的言論に乏しくして實行に富めりと云ふべきか、故に若しも此一派にして非內閣の態度に出づるに於ては問責論の勝利頗る有望なりと云ふべきも、山縣公の微旨を尊重すること最も厚き此一派が其去就を忽諸にせざるや察するに難からず、然れば交友倶樂部が問責案に同意するは疑なしとし、土曜會の多數亦た同一態度を取るとするも合計六十餘人に過ぎざるを以て、之に目賀田男後藤男一派三十名ありと假定するも百名に達せざるを知るべく、貴族院の多數を制せんまでには尙ほ多大の努力を要すべきや勿論なり、但し貴族院の院議は意外にも多く世間の議論により動搖せらる、素より議員間に醸發せる議論は勢力多し、然れども世間通俗の議論、新聞の論說等の爲めに左右せらるゝこと更に多きが如し、衆議院の方は餘り世間に近きが故に却て所謂輿論に驚かされず、貴族階級は世間の眞相に遠ざかれるが故に

寧ろ實價以上に世論を買ふの傾あるか、吾人は貴族院諸氏の能く大體を達觀し非常の機會に處し克く國政の料理に遺漏なきを期すべきを信じて疑はず、非常の機會に處して途を誤らば國家は爲めに非常の危急に陷らん、今や我邦は果して非常の危急に臨めるものに非ざるなきか、吾人は貴族院議員諸氏の賢明なる考慮に待期する處多からずんはあらず。

對支外交の儼正批判

吉野作造

▽日支交渉の成果

五月七日を以て提出したる最後通牒に對し、八日の夜、委しく云へば九日の朝、支那政府の致したる承諾の回答によつて、新たに我國の支那に於て獲たる利權の如何なるものなるかは、今日未だ精密に分らない。之を付度すべき唯一の公權的（オーセンチツク）材料は、五月七日外務省の發表にかゝる「對支交渉顛末」である。之とても一月十八日の第一提案、四月廿六日の第二提案については稍々詳細の説明があるけれども、最後通牒の中に列擧せられたる條項に關しては、詳細の説明を缺いて居る。勿論此材料によつて大體の事は分るけれども、併し稍々備つた觀念を得る爲めには、此材料の外更に諸新聞報ずる所の斷片的の材料にも依らなければならない。新聞の報道といふものは、概して甚しく事實を謬らないけれども、又精密に事實に吻合することも稀なるものなるが故に、此等の材料を基とした研究はどうせ極めて精確なるものと云ふ事は出來ない。只政府の

一切の交渉文書の公表を待つまでは、多少不完全な觀念を以て滿足するも亦致方が無い。

今度の交渉によつて我國の獲たる利權は、(第一)支那をして沿岸の港灣及び島嶼を他國に讓與又は租貸せざるべき旨の宣言をなさしめ、以て今後外國の勢力が更に支那の領土內に喰ひ入ることを妨ぐるを得るの消極的權利(正確に法律上權利とは云ひ得ないかも知れぬが)を得たるの外、(第二)山東省に關しては、先きに獨逸が條約又は其他の方法によつて得て居つた權利を他日講和談判の際に其儘承繼することを承認せしめ、山東省不割讓の約束をなさしめ、更に積極的に山東鐵道と渤海灣とを連結する鐵道の布設權を我に附與し、以て山東と滿洲と遙かに相呼應するを得しめ、猶其外多數の市場を開放して續々日本人の移住するに便ぜしむるを得た。若し夫れ(第三)南滿洲に至ては、旅順大連の租借期限の延長とか、南滿安奉兩鐵道の營業期間の延長とか、既存權利を一層有利に改訂し、尚吉長鐵道の事及び顧問教官の傭聘の事に關して新權利を設定し、鐵道敷設權、借欵優先權等を收め、更に日本臣民の來住及び營業に關しては、多少の制限はあるけれども、山東や次に述ぶる東部內蒙古に於けるが如く、開放市場に限つてのみ居住し得ると云ふのでなく、日本內地と同樣何處へでも來往居住し得るやうにした。斯くして今後日本人の發展は大いに刮目して視るべきものがあらう。(第四)東部內蒙古については、初め日本は之を南滿洲と同樣の關係に置かんと欲したけれども、支那政府の要求に讓歩し、鐵道及び租稅擔保の借欵についての優先權、日支兩國民の農業共同經營を認めしめ、更に日本人の來住の爲めに多數の開放地を增設せしむることを以て滿足した。(第五)漢冶萍會社については、支那政府をして日支合辦の主義を承認せしめ、且つ同會社を國有とするとか、其他會社現在の狀態を變更するとかの措置に出でぬことを約束せしめ、又日本以外より外資を仰がしめざるやう堅く取極めた。斯くして我國の製鐵事業に對する最大の鐵礦供給者たる大冶鐵山と日本との關係を、恒久的ならしむ

るの用意は始め完成したっ(第六)福建省に關しては、「對支交渉顛末」によれば、他日の協議に殘して今回は何等要求しなかつたやうにも見ゆるけれども、他の諸新聞の報道する所によれば、最後通牒に於て他の條項から引離して支那に要求しなかつたと云ふ所謂第五項の中につき、福建省に關する一箇條丈けは、特別に支那の同意を求めることにしたとある。して見れば福建省に關しては四月廿六日の修正提案示す所の要求が貫徹した譯であらう。之によれば、我國は支那政府をして、福建省には外國をして軍事的設備をなさしめず、又外國の資金により支那自ら同樣の設備をなさゞることを約束せしめたのであつて、嘗つて支那をして約せしめた一般不割讓の協定(明治三十八年四月)と共に、是れ亦一種の消極的權利である。一月十八日の原提案には、所謂第五項の中に、中央政府に顧問を雇へとか、警察に日本人を使へとかの政治的利權、布教權を許せとか寺院、學校、病院に土地所有權を許せとかの文化的利權、一定量の武器を買へとか、日支合辦の武器廠を設立せよとか、又は中部支那から南支那に連絡する鐵道敷設權を許せとかの經濟的利權の要求があつたけれども、此等は皆他日の要求に殘されたやうである。

抑今度の外交は之を成功と見るべきや將た失敗と見るべきか。世間は之に關して議論が甚だ區々である。

併しながら、外交上の事は決して成敗の數が一時に判然(ハツキリ)分るものではない。角力や撃劍の勝負のやうに、談判の終決と共に勝敗の數定まると云ふものではない。大いに讓歩して居つても、それを緣に他日又こつちの言分を通すことの出來るやうな事もあり、表には讓歩して居つても、陰で密約などで大いに利を獲て居るやうな場合もある。負けたもの必ずしも負けたものではないと云ふ事は、外交談判の上に決して稀ではない。又他日大いに伸びんが爲めに、今暫らく屈すると云ふ必要のある事もある。故に外交談判の成敗と云ふものは、假すに多くの年月を以てし、現在の成果が更に將來に如何なる發展をなすかと云ふ事をも見ねば、

よく分らない。されば今度の成績のみを以て、外交の成功失敗を談ずるのは穩やでないやうな感もする。予一個の考を云へば、支那に對する外交は、實は誰がやつても非常な困難がある。其譯は、當の相手の支那人は談判の相手として本來なか〱手數のかゝるものであるのに、對支外交は同時に又支那に利害關係を有する歐米各國を相手とするの外交であるからである。慾を云へば際限が無い。今度位の成績ならば、餘り甚だしい失敗とは云へぬやうな氣がする。要するに、予は目前にあらはれた成績其物によつて成敗を談ずることを欲しないが、併し交渉の初めから今日に至るまでの外交上の駈引については、幾多失敗と認むべきものが無いでもない。少くとも多くの批評の種となるべき點あるを認むるので、他日機會があれば、國民の一人として外務當局者の辯明を求めたいと思ふやうな箇所は實に少くない。此等の點について當局者の滿足なる答辯を得るまでは、我々は之を失態として責めるの權利があると思ふ。之と同じ意味にて、世間では隨分いろ〱の點で外務當局者の失態を數へて居るやうであるが、併し此中には、隨分亂暴な議論もあるやうで、必ずしも皆公平な論難とのみは言へないやうである。然らば如何なる點に於て今度の外交談判の手續か批判の種に上るか。

▽交渉提出の時機について

今度の交渉は、其源を日獨戰爭に發することは云ふ迄もない。此戰爭の結果として、新たに山東省に關していろ〱支那と交渉すべき問題が起つたのであるが、我國は之を好機會として、多年の懸案たる問題をも一擧に解決せんと欲したのである。此多年の懸案の解決の爲めに、日獨戰爭と云ふ機會を捉へたのは、予は頗る機宜に適した處置であると思ふ。此點に關して世間には二つの異論がある。一つは、懸案の解決を今日まで延ばして居つたのは政府の怠慢であると主張する議論で、も一つの説は、日獨の開戰が抑々我國の爲めに得策でなかつたと云ふ説である。世間では、日本

が故なくして獨逸と戰つたとか、或は獨逸の如き國運隆々たる國を敵とするのは誤であつたとか、論ずるものもあるやうだけれども、併し獨逸が東洋に蟠居して居るのが、果して日本の爲めに、將た東洋の平和の爲めに可なるや否や、又我國は日英同盟の條約上の義務として、又同盟關係に基く信義の上よりして、與國の要求あるに拘らず、戰爭參加を拒むことが出來るや否やを考ふるならば、日獨の開戰に對しては議論を挾む餘地はないと思ふ。而して斯くの如き重大事件の發生を俟たず、所謂日支間の多年の懸案が、政府さへ其志あれば何時でも解決が出來た筈であると思ふのは、之れ實に支那に臨むに武力を以てせよと云ふ議論に歸するので、極端なる軍國主義者にあらざる以上は、穩健なる政治家の決して與し得ざる議論である。

日獨戰爭が多年の懸案の解決に絕好の機會を與ふるものである事は、右述べた通りであるが、然らばいよいよ交渉を開始するは何時を以て最も得策とするやの問題が起る。戰爭最中に此問題を持出すべからざることは固より云ふを俟たない。戰爭の終結を待たねばならぬのであるが、併し青島に於ける日獨戰爭の事實上の終結は、今度の場合に於ては法律上の終結ではない。事實に於ては東洋に於ける日獨の戰爭は、十一月七日の青島陷落を以て結了した。けれども理屈の上では、此戰爭は現に歐洲に於て戰はれつゝある所の大戰爭の一部分である。故に歐洲戰爭が全然終りを告げなければ、日獨の關係も亦平和の狀態に復らない。そこで只戰爭後と云つても、事實上の戰爭後と、法律上の戰爭後と時期が非常に隔つて居る。從つて談判開始の時機についても、事實上の終了を以て適當とするか、法律上の終了を以て適當とするかと云ふ問題が分れる。此二つの提案に對して、幸にして法律上の終結を待つべしと云ふ論は實際上唱へられなかつた。これは歐洲戰爭の終るのは何時の事やら前途茫漠として分らず、而かも青島に於ける戰時狀態を、獨逸の勢力の全然驅逐せられ最早や獨逸に回復の見込絕滅せる今日、其儘引續き繼續せしめると云ふ必要がない、否却て不

便であるからである。蓋し歐洲方面に於て、假令獨逸が結局戰爭で勝つたとしても、靑島を日本から回復すると云ふ事は、最早や全然不可能である。故に東洋に於て丈けは、靑島陷落を以て戰爭は全然終つたものと見、其前提に基いて始末をすることが、どの方面から見ても便利であり且つ必要である。そこで答案は、事實上の戰爭終結と共に談判の開始に取り掛る方がよいと云ふ事になる。然るに此點についても亦議論が二つに分れる。一つは戰後直ちに――即ち軍隊も撤退せず萬事現實の交戰狀態にある際に、其勢に乘じて談判を開始する方がよかつたと云ふ說である。我國でも政界の隱者大石氏の如きは頻りに此說を唱へ、政府が靑島陷落後二ヶ月餘を經て初めて談判の開始をしたのは大いなる失態であると論じて居る。併し此說が正しいかどうかは予に取つては大いなる疑問である。そは獨り兵備を擁して威嚇的に支那に臨むの甚だ好ましからざるのみならず、又支那に對して多くの重大案件の交涉をなすには、內外に對して共に大いなる準備の時期が入用であるからである。予は元來支那人には威壓を以て臨むべしと云ふ俗論には反對だ。又今日支那に於ては、歐米各國は相當に根柢の深い利害關係を持つて居り、從つて支那に於ける現狀の多少の變動は、多くの場合に於て必らず各國の利害關係に波動することを忘れてはならぬ。從つて今度のやうな重大な事件を、支那との協定で解決を得ようとするには、豫め關係諸國と何等かの打合せをしなければ、他日意外の故障に際會するなきを保しない。此等の點を考ふれば、單に支那人に對する策としても、又關係諸外國に多少の渡りをつけると云ふ必要から見ても、戰後談判の開始まで相當の期間を隔つると云ふ事は、事實止むを得なかつたと思ふ。現に政府は靑島陷落後から已に此問題の硏究は怠つてゐなかつたらしい。加藤外相が日獨戰爭の終結を機として多年の懸案を解決するの案を立て、山縣公を初めとし其他の元老の意見を聽き廻つたと云ふ報道の新聞にあらはれたのは、靑島陷落に先だつこと四日許り前からである。其後事に托して日置公使を召

喚したのも、實は此事を打合はす爲めであつたと傳へられて居る。故に予は特に一月の十八日を選んで談判を開始したのは、何の必要に出でたかは知らないけれども、大石氏の如く戰爭後直ぐ談判を開始しなかつた事を以て、何等當局者に責むべき點ありとは思はない。

當局者が一月十八日を選んで日支交渉の第一日とした理由は、今之を明かにしないが、今日となつて當時を振返つて見ると、決して之は我國にとつて不得策ではなかつたのである。何となれば、當時我國と支那との間には、青島税關問題から引續いて、山東撤兵問題が矢釜しくなり、支那の誠意を缺く暴慢な態度によつて、日本の朝野は激昂し、歐米の論客も亦我國に向つて多大の同情を表して居つたからである。我國は先きに最後通牒を以て獨逸に對し、青島の引渡を求むるに當り、「特に支那に還附する目的を以て」と云ふ文字を附け加へた。然るに獨逸は之に應じなかつた。そこで我國では獨逸が大人しく還せばよし、然らずして不幸戰爭になつた以上は、最早や日本は支那に青島を還附しなくてもよいと云ふ議論をすることゝなつた。當局者に於ては、果して青島を追々は支那に還す積りであつたかどうか分らない。けれども歐米の操觚界の大體の論調は、無論青島は相當の條件の下に支那に還すものと觀て居つたやうである。而して其相當の條件とは、山東省殊に青島に於て、支那は日本の特殊の地位を認むると云ふことは論を俟たない。日本が此等の地方に特殊の地歩を占むると云ふには、青島の税關は是非とも日本人のみで組織せなければならない。又戰爭後暫らくの間は日本兵の駐屯を續けて各種施設の完備進捗を助けしむることも認めねばなるまい。斯くて歐米諸國は、税關や駐兵の事は文句の起るべき問題ではないと觀て居つた。然るに支那は先づ税關の問題について＝予の觀る所では多少日本にも無理はあつたけれども＝徒らに末節に拘泥して甚しく日本を侮蔑した言ひ懸りをした。のみならず之に引き續き再三交戰區域の撤廢、從つて日本守備軍の即時撤退を要求し、我國よ

り常に抗議と親切なる說明とを繰り返へしたに拘らず、一月の初めには、何等の豫告なしに突然交戰地域の撤廢を宣言し、我國に向つて駐兵の即時撤退を要求して來た。そこで我國でも物論が沸騰し、其結果一步を進めて、根本的の解決を日支兩國の關係の上に加ふる必要があると云ふ議論が起つて、扨こそ一月十八日の要求となつたのである。恰度此頃、西洋の新聞などでも、段々に議論が變つて來た形跡がある。米國や佛國の新聞の中には、現に「支那が山東に於て日本に認むるに特殊の地位を以てすると云ふ事であればこそ、日本は安心して靑島を還附する氣になれるのである。然るに今のやうに、支那が其力を量らずして漫りに日本に當り散らして、甚だ誠意を缺く態度に出でゝは、日本も默つては居れまい。事に依ると靑島を還さないと云ふ事になるかも知れない。」と云ふやうな議論をするものすらあつた。斯くて內外の論調が段々に、帝國政府から重大案件を持ち出すに適當な樣な形勢に進んで來た。但し斯の如き形勢は我國の外務大臣の豫め苦心慘憺して作つたものと觀るのは穩でない。加藤外相にしてビスマークのやうな奸智に長けた男なら格別、先づそんな細工をしたのではあるまい。只外相は多年英國に居つただけに、故意にこんな形勢を作る事はせなくとも、一旦機會が到達したならば、決して之を國家の幸福に利用することを忘れないといふ、英國流の敏慧な手腕を弄したらうとは想像さるゝのである。即ち外相は正に絕好の汐合なりと見て、一月十八日訓電を北京に發し、豫て諜し合せてある重大要求を提出せしめ、以て我の要求は即ち支那の態度に激せられて餘儀なく提出せるものであると云ふ外交上最も有利な地位を利用したのであらう。併し實際こんな考で一月の央を以て談判開始の好機と見たかどうかは予の保證する限りでない。

▽時機の宜しきを得たるに比し交涉頗る澁滯せるは如何

談判の開始は頗る時の宜しきを得たと思ふ。然らば

交渉の經過もドン〳〵捗るべき筈であるのに、事實は全く之に反して頗る行悩んだ事は、我々の甚だ意外に感じた所である。何故に斯く行悩んだのであらうか。此點についても隨分批評の餘地はあるだらう。現に世間でもいろ〳〵の人が此事についていろ〳〵批難を加へて居る。第一には交渉の任に當つた其人を得ないといふ批難がある。日置公使の人物技量については、予は何等知る所がない。世間では氏を無能の人なるかの如くに言ひふらし、支那側の委員等と並べて手腕聲望に於て缺くる所あるかに觀て居る。中には特派大使を送るべきであるとか、加藤外相自ら使した方よかつたとかの説もある。要するに日置氏をして交渉の任に當らしめたのは、一つの失敗であると主張するのである。外交談判に人を選ぶの必要なることは云ふを俟たない。假令それが本國の訓令によつて器械的に動くを不可なしとする場合でも、當方の使臣が向ふの委員に對して重きをなすとなさゞるとは、駈引の上に於て非常の損得がある。故に事情が許せば、伊集院氏の如き支那通の特派大使を派遣するなり、加藤外相自ら出馬するなり、聲望地位兼備する人才をして其衝に當らしむるのは無論よいのであるけれども、併し相手の支那の委員と云ふものは、決してそれ程エライ人物でないと云ふ事をも忘れてはならぬ。陸總長、曹次長にしても聰明なる一個の青年に過ぎない。袁　凱氏の人物をば我國では非常に買ひ被つて居るけれども、予の知れる範圍に於ては、それ程の大人物ではない。此等の人々に對して、我國第一流の人物を派遣するのは、稍々鷄肉を割くに牛刀を以てするの感がないでもない。予は出來る丈けエライ人を派遣する方が、それ丈け結構だとは思ふけれども、日置氏をして其任に當らしめた事を以て、直ちに失敗と見る程の不利益を、我國の外交が蒙つたかだうかを疑ふ。第二に要求條項の内容についても細目に渉つて細かに交渉をなしたのが失敗の一原因だと說く人がある。支那の外交は宜しく大綱を以て臨むべし。二十一箇條などゝ云ふ細かい條項を掲げては、内容を見ない中から支那人が吃驚すると説く

のである。併し此說も予は承服が出來ない。何となれば、今度の要求はあれは恐く大綱であつて、箇條の多いのは要求の範圍が廣いから致方がないのである。若しあれ以上に箇條を縮めて、大雜つぱな事のみを要求しては、却て何の實益もない。現に例へば吉長鐵道の借款契約に於ては、滿鐵よりする借款の條件として、日本人の技師長と會計長とを入れて居るのであるが、其權限に關する取極めが餘りに大ざつぱであつた爲めに、殆んど實權を與へられず、有名無實の特遇をされて居るではないか。故にどうせ相談をして取極めをすると云ふなら、相當の所までは、細かくやる必要がある。細かくやるのが煩さいと云ふならば、丸で交涉をしないで、默つて居つて實益を收めた方がよい。それが不便だといふので何か明白の取極めを必要とする以上は、我の必要とする丈けの事は何處までも細かく極めた方が、將來の爲めによい。之は箇人間の約束でも同樣である。現に予が袁世凱氏の傭聘を受けて天津に赴き、雇傭契約を締結するに方り、細目の事は紳士間の相互の好誼に一任すべきものとなし、文書には大綱を掲ぐるに止めたのであつたが、其爲め予はどれ丈け不便と不利益とを受けたか分らない。文書を作らなければよし。作る以上は出來る丈け細かくきめなければならぬと云ふ事は、其時熟く〳〵感じたのであつた。支那人は固より個條が多ければ餘計義務を負ふかの如くに考へて、之を歡迎しないと云ふ事は事實である。けれども大綱を掲ぐるに止めて後害を貽すよりは、初め面倒でも細かく條目を分つて詳かに說明し、何處までも十分に納得をさせると云ふ方法を取るのが、終局の利益である。西洋人なら細目を掲げてもよい、支那人なら大綱を掲ぐるに止むべしなどゝ、支那人にのみ特別の態度を以て接すべしとするのが抑々の誤りである。

予の考では交涉の行惱んだ一つの理由は、要求條項の支那にとつて極めて重大なものであつたと云ふ事に**あると思ふ**。今度の要求は、どの點を見ても、多少の苦痛を感ずることなしに、支那に於て快諾するを得ざ

る性質のものである。我國の新聞でこそ、帝國の正當なる要求を無理にも支那は拒絶したなど〻云ふけれども、彼此地を換へて見れば、決して御無理御尤と云つて一も二もなく承諾し得べき事柄ではない。今その好適例として青島に關する我國の議論を一つ引用して見るに、我國では多大の犧牲を拂つて東洋平和の禍根たりし獨逸の勢力をば、山東省から驅逐してやつたのであるから、支那は大いに我國に感謝すべきであるのに、或は撤兵の要求とか、或は無條件の還附請求などと、言語道斷の無禮を云ふなど〻新聞で論ずるのであるが、之も地を換へて見れば、山東に於ける日獨の開戰に對して、支那は眞實日本に感謝することが出來るだらうかどうか。戰爭の爲めに山東省の無辜の人民は、隨分迷惑を蒙つて居る。恰度見も知らぬ赤の他人が二人、玄關から我々の座敷へ飛び込んで喧嘩を初め、襖（からかみ）を毀はしたり電燈を毀はしたりして、其揚句、一方が家の主人に向つて俺に感謝せよと云ふやうなものである。支那は恐らく喧嘩をするなら外でやつて貰ひたいと考へたに相違ない。そんな譯で日本では正當な要求だとか、當然一も二もなく承諾すべき筈など〻云ふのだけれども、支那にとつては第一條から第二十一條に至るまで、一つとしてオイソレと承諾し得べきものはない。若し日支兩國の親善關係を增進し、東洋永遠の平和を保持せんが爲めに必要だと云ふならば、其譯をよく日本から說明をしてやり、成程兩國の親睦、東洋の平和の爲めに此位の犧牲は仕方がないと十分納得するに非ずんば、容易に承諾し得ざるものである。而して之を納得せしむると云ふ事は、決して容易の事業ではない。威壓を以て彼を屈すると云ふ事を避けんと欲する限り、交渉の永引いたのは怪むに足らぬのである。

けれども交渉をあれまで行惱ましめたについては他にまた一つ大いなる原因があるやうである。それは支那に提出した要求條件五項二十一箇條の中、其第五項の七箇條をば、殊更に外國には秘密にして示さなかつたと云ふ事である。我國では、少くとも英、米、露、佛

の四ヶ國には、對支要求の內容を適當の時機に內示したらしい。何時頃の事であるかは今の所明白に示されてない。而して此等の外國には、第一項より第四項に至るまでを示したけれども、第五項丈けは秘密にしたやうである。此事は二月十七日北京の新聞に於て暴露された。而して此事は帝國政府に於ても別に否認せざるのみならず、且つ「對支交涉顚末」には「其內容を嚴に秘密に付し置くべき約束あるを無視し、提案各條項を故意に誇大にし、又は誣曲捏造を加へて外間に流布し」云々とあるを以て見れば、恐らく本當であらう。何故に第五項を我國の政府は外國に秘密にしたかはよく分らないが、支那の側では、之をこう云ふ風に解釋したらしい。日本は要求全體を以て實は過大に失するを自ら認めて居るが、交涉の驅引上之を削ることを欲しない。而かも其全體を外國に示す時は、外國の同情を失ひ、又其干涉を蒙るの恐があるから、そこで之を秘密にしたのである。と斯う觀たのである。中には日本は實は初め對支要求の內容を外國に示さなかつた。然るに段々に其內容が外間に洩れて來て、支那に於ける輿論が沸騰し、在支那人の憤慨も昂まるに從ひ、外國政府の詰問に會ひ、こゝに初めて其の內容を列國に示した。其際自國の地位を外交界に孤立ならしめざらんが爲めに、外國の同情を繫ぎ得る程度に於て、要求の一部のみを示したのであると書いた新聞もある。斯くして支那人は、一方には日本の要求には懸値があると云ふ事を考へ、他の一方には日本の政府は外國の思惑を懸念して居ると云ふ事を信じ、やがて、若し此要求を多少誇大に外間に吹聽すれば、必ずや外國の干涉を期待し得べしと信ずるに至つた。斯くて支那の態度は頗る强硬になり、一方に外國の來援を待ちつゝ、日本の要求を極度まで値切らんとしたのであらう。

然らば何故に我國は第五項を秘密にしたか。此點は最も批評の餘地のあり且つ批難のある點で、失態といはゞ失態と云へる部分である。此事は二つの方面に於て批評の題目はある。一つは支那人の信ずる如く、日本は實際は外國に示した丈けの條項で滿足する積りで

あるのに、駈引の便宜上、支那には餘計に要求したと觀るべきものであるならば、其懸値をすると云ふ緣日商人的の態度が可けないと云ふ議論である。併し予の考では斯かる觀察は誤りであらう。予は支那に對する政府の要求に懸値があつたとは思はない。成程第一項から第四項までは、何れも帝國將來の運命に最も緊喫の關係があるもので、大體に於て日本將來の特殊利益範圍に關係のある問題である。獨り第五項のみは、支那全體に亘つて、比較的贅澤な要求をなすもの丶如く見ゆる。けれども、併しよく研究して見ると、是れ亦何れも皆日本の政治上經濟上の緊急なる必要から出て居るものであつて、何れを見ても決して贅澤な要求ではない。此事は近く公刊すべき拙著「日支交涉論」の中にも說いて置いた。故に懸値をしたと見る說は正當でなからう。次に他の一面に於て秘密にした第五項の內容が、直接又は間接に外國の利益範圍と相觸る丶と云ふ點に於て問題が起る。第一項の山東省や、第二項の南滿の如きは、日本在來の勢力範圍である。然るに第五項に至つては、中南支那の鐵道の如く新らしき勢力範圍の確定を目的とするものあり、又中には英國などの勢力と相接觸すると云ふ箇所もある。然らざるも顧問の問題にしても、兵器の問題にしても、少くとも間接には外國の利害關係に交涉のある事件である。然らば之を外國、少くとも與國——殊に最も支那に密接の關係のある與國——と一應の打合せをすると云ふ事は、國際信義の上で必らず缺いてはならぬ手續であつた。然るに此手續を取らず、支那の秘密暴露に逢つて、初めて英米諸國の物論の沸騰に狼狽すると云ふのは、是れ我當局者の失態に非ずして何ぞや、是れも當局者に辯解あらば何れ相當の時機に於て其間の消息を公けにすべき事であらうと思ふ。

併し予の考では、我外務當局者が、こんな手ぬかりがあつて重大な失敗を來たしたと云ふやうな事は、どうしても思へない。故に第五項を諸外國に內示しなかつたと云ふ事については、必ずや何か深い理由があつたに相違ない。從來新聞の傳ふる所によれば、此第五

項は之を希望條件と總稱し、他の項目とは特別の取扱をして居つたと云ふ事である。外務省公表「對支交涉顚末」の中にも「帝國政府は此等の條項は他の條項と區別し、別個の問題として支那政府に其實行を勸告せり……本項は專ら支那政府に於て國交の誼を重んずるが爲めに、其實行に同意せんことを求めたるもの也」と云つて居る。文字は婉曲であるけれども、之は要求ではない。兩國親交の誼に基いて實行を見んことを欲したとあるから、恐らくは諸外國に公表せず、日支間に密約の形で此等の點を協定するといふ積りであつたらうと思ふ。事柄の性質から見ても、之は爾かあるべきものである。之は權利として要求すべき性質のものではない、相談づくで始めて行はるべき性質のものである。例へば武器を購へと云ふ問題の如きにしても、日支兩國眞に極めて親善にして利害感情を一にする時に、初めて快よく行はるゝ問題であるまいか。若し兩者の感情が疎隔して居れば、斯んな要求を受けて一方は他方に對し屈辱を感ぜざるを得ないであらう。去れは之等の條項は表向き權利として要求すべき性質のものではない。東洋永遠の利害を考へて、眞に日支提携の實を擧ぐるに必要なりといふことを兩方篤と認めた上で、こゝに密約すべき性質のものである。斯く考ふるならば、帝國政府が之を外國に示さなかつたと云ふ理由は略ぼ明瞭である。不幸にして支那は我國の意を諒とせず、徒らに「不當の條件」なりと憤慨して秘密嚴守の約を破り、之を外部に暴露したのは、返へす〴〵も殘念である。予は實に此際に於ける當局者の苦衷を寧ろ諒とするものである。

併しながら、今の時に當つて、斯くの如き重大な事件を支那と密約の形で締結が出來る、少くとも支那をして此點に關し秘密を嚴守せしめ得ると思つたのは、之れ今日の支那を知らざるの甚しきものであつて、其無智輕忽の罪は大に之を責めなくてはならぬ。支那は古來以夷制夷を外交上唯一の主義として居る國である。日本にして手落ありと見れば、必らず情を外國に干いて其の猜忌心を挑發するに定まつて居る。然るを

尙支那をして秘密を守らしめ得べしと信じたのは迂濶も亦甚しい。且つ又我國政府が、支那が一旦其秘密を暴露した後、更に誣曲捏造の虚說を外國に流布して、或は列國の我に對する反感を挑發せんとし、或は帝國と與國との關係を離間せんと試みたのを、始めから終りまで之を制し得なかつたのは、抑々何たる失態であるか。此點に於て當局者は確かに重大なる責任があると云はざるを得ない。若し夫れ予の推測にして過らずんば、當局者は第五項を說明するに當つて、其眞意を說くに十分ならず、支那をして之は懸値であらうと云ふ風に思はしめた形跡がある。果して然らば政府は此點についても多少の粗漏ありと云はざるを得ない。要するに第五項を秘密にしたと云ふ一件は、今次の外交の成敗を論ずる最大の暗礁であらう。

▽行惱を切り拔ける爲めに執つた手段に就いて

之を失態と見るにしろ、或は見ざるにしろ、己に行惱んだ外交は、何とかして其疏通を計らなければならない。政府は此爲めにいろ〱の手段を取つた。少くとも民間では、政府が之が爲めに取つた手段はいろいろあると考へて居る。而して其箇々の手段について又**勝手な論評を試みて居るのである**。此等の手段の中で**第一に來るものは三月初旬の出兵である**。世間では此出兵は支那政府を威嚇するの目的に出でたものであると云ふ。此立場からして出兵の當否を論じ、而して之を批難する方面の說がなか〱多い。政府では、出兵ではない、六月の守備隊の交替期を繰り上げて、早く兵隊を送つたに過ぎないと云ふけれども、彼地にあつた駐屯軍には之と引き換えに歸還せよといふ命令は發しなかつたから、事實上駐屯守備隊を增加した結果になる。兎に角出兵の跡は歴然として之を掩ふことは出來ない。が、併し威嚇の爲めに出したのかどうかは、之も當局者の說明を聽かなければ分らない。又一部の人は總選擧を眼の前に控へて居るから、早く此交涉を形附けて選擧競爭に之を利用せんが爲めに、兵を送つ

て支那政府を脅かしたと觀るのであるが、併し出兵の結果、支那で多少動揺したといふ事はあるが、我國が之によりて積極的に支那を脅かしたと云ふ事實上の證據は更に擧つて居ないやうだ。又支那側でも、初めは頗る狼狽したやうであつたが、間もなく、日本に戰意あつて此事を斷行したるにあらざる事を納得して安心したらしい。斯く觀察するには相當の理由もあるのである。而して之は我國の政府から說明をした結果なのか、或は他の方面の情報に依つて然るものか。何れにしても予は夫の出兵は單純な威嚇ではなかつたと云ふ風に觀る者である。事によれば、萬一の變に備ふるには現在の兵力を以て不十分なりとなし、彼の團匪事件のやうな突發は支那に於て珍らしい事でないから、萬一の際に十分に在留同胞の生命財産を保護し得んが爲めに、兵備を增したのであるまいか。それにしては、も少し、聲を潜めて出動して貰ひたかつたとも思ふが、要するに、此點は當局の說明を聽かなければ輕々に是非得失の判斷は出來ない。只此事によつて多少支那政府の心を動かし以て談判の進捗を見た丈けの利益はある。けれども出兵によつて大騷ぎをした丈けの効力があつたかどうか。從つて出兵は相當の必要に基いたものかどうか。と云ふ事は、今輕々しく之を判斷することは出來ないと思ふ。

其後政府は隱忍說得に力を盡したやうだ。支那の方で我の要求の眞意は之を諒解しない譯はないのだけれども、何分輕々しく承諾しては國內の物論が矢釜しいので、所謂對內關係上、容易に話を纏め兼ねたのは致方がない。從來隨分外國からはイヂメられて居るので、外交問題となると支那は頗る神經過敏である。從つて民間の議論は外國の要求とさへ云へば一も二もなく之を斥けると云ふ風に傾いて居る。而して當局者が民間の議論を顧慮する必要がある以上、民間の俗論を排斥して、斥くべきは斥け、容るべきは容るゝと云ふ斷乎たる態度に出で難い場合が多い。殊に根據尙鞏固ならざる現袁政府に於て最も此必要が多いのであらう。斯く外國人に理のあることが分り切つて居る問題

でも、解決が捗取らないのを常とするのであるが、此外一つ我々の考へて置かねばならぬ事は、支那と外國と丸で正理の觀念を異にして居る結果、往々にして兩方が理があると信じて爭つて居る場合も少くない事である。一つの例を云へば、或役所で外國の商館に或る物を注文する。處が、其物は其役所の長官が更迭した後で到着したとする。すると後の長官は前の長官が外國商人となしたる契約に拘束されない。即ち荷物の引取を拒み、代金の支拂を拒むことが出來る。外國人はちやんと役所の印を捺して註文を受けたものだから、何處までも役所に支拂の義務を負はさうとする。我々の考から云へば外國の商人に理があるのだけれども、支那では、役所は長官の請負仕事だから、前の長官の債務は後の長官が之を負はないと云ふのが從來の法律觀念である。詰り役所が長官の請負である爲め、役所其物に法人格を認めないのである。前の長官の負うた債務は、新たに貸家に引越して來たものが、以前の借家人が米屋味噌屋の拂を殘したのと同じ樣なもので、拂ふ丈けが馬鹿げて居る。斯う云ふ法律の觀念であるから、外國商人の支拂請求の問題の如き、到底片の附きやうがない。兩方で相手の言ひ分が無理だと思つてゐる。之は一つの例に過ぎないが、斯う云ふやうな事は外にいくらもある。一體法律關係の中で、家族とか親族相續とかの規則は、各國各々特有の特色を有つて居るものであるけれども、債權債務の關係の如きは、大體に於て萬國共通なものである。故に我國の如き、開國日淺くして而かも歐羅巴流の民法商法を布き、非常な不便がなくスラ〳〵と行はれて居る。獨り支那が民事商事の法律關係に、丸で各國の慣行と違つた風習の行はれて居るのは、頗る奇とせねばならぬ。尤も此頃は歐洲人も澤山入り込んで居るから、段々に西洋流に變りつゝあり、又支那人中歐米流の制度慣行になれて來たものも段々あるであらうが、併し國が廣い丈けに、今日でも隨分昔の制度が其儘殘つて居り、又依然として昔風に考ふる人の多い所は少からずあらうと思ふ。而して支那人は、外國人などに對しては、表面は

なか〳〵愛嬌がよく、何か此方から理屈を云ふても、よく分つたやうな風をして聞いて呉れるけれども、實際は多くの場合に於て、自分の説はよく唱へるけれども人の説は餘りよく聽かない。なか〳〵他人の言ふことを理解し、相手方の腹になつて見やうと努めぬ國民である。是れ今日支那が獨り萬國流行の風習に反抗して長く舊慣を維持して來た所以であらう。今立憲政治を布くと云ふても、立憲の思想は唐虞三代の古にもあつたと云ふ風に、丸で新らしいものぢやないと云ふ風に云はなければ、なか〳〵國民の間に承認されないのである。予の知る範圍に於ては、外國流の理屈などを眞からよく諒解したものは、支那の勢力ある高官の中には之まで極めて少かつたと思ふ。只袁世凱氏のみは實に西洋人などの理屈を聞いてよく分る、殆んど唯一の人であつた。是れ彼が西洋人から信望があり、從つて西洋の勢力を後援として今日大總統の位に安居して居る事の出來る所以であらう。他の一般の官吏には、西洋流の理屈はよく分らない。分つても一知半解である。之からの若い留學出身の人は段々にさうでなくなるだらうけれども、中年以上の人々は、多くは皆支那流に物を考へる人で、斯う云ふ人を相手に外交談判をするのであれば、之を十分に納得させると云ふ事は非常な骨折である。而して支那の官吏は、相手の主張の理屈がよく分らず、國民は無論分らずして只對外硬を叫んで居る。うつかり外國の要請に聽くと外部の激しき反對を受けるから、先づ外交問題は相手から促かさるゝ迄は放擲して置く、催促に遇へば有耶無耶の曖昧な返事をして長びかして置く。之が舊式支那外交の奥の手である。清朝時代にも矢張り此流義であつた。外交當局者は何時までも外國の交渉を放任して置く譯にも行かず、さればと云つてうつかり解決も出來ず、まア仕方がないから、いゝ加減にお茶を濁して置いて、早く旨い所に轉任して此難關を誰か外の人に讓らうと云ふ事許り考ふるやうになる。流石の外交團も之には業を煮やして、公然外務省に改革を要求した事が度々あつた。北清事件の時には、外務省の改革と云ふ事が

後始末の條約の一ヶ條であつたと記臆する。けれども實際頭が變らない以上は一向外國の希望が滿されない。當時モリソンの如きは、各列强の折角の苦心にも拘らず、外務省の變つたのは只「應接間のテーブルの圍いのが四角になつた丈けに止る」と云つた程だ。今日の外務省は、無論當時に比べると餘程進步して居るには違ひないけれども、外務當局者を制肘する他の官吏及び民間の頭が、從來に比して大した進步がなければ、矢張り外交談判を不當に永びかすと云ふ傾向は確かにあると思ふ。斯う云ふ事を考へると、帝國の政府が一擧に威壓を加へて解決をすると云ふ手段に出でざる限り、諄々として事理を說くと云ふ事に全力を注いだのは、已むを得ざる當然の處置であると思ふ。斯くして隱忍說得に力を注いで、頗る緩漫ではあつたが、朝に一城を屠り、夕に一塞を陷ると云ふ風に、ヂリヂリと我要求の貫徹に步を進めた點は、以て我當局の勞を多とするに足ると思ふ。

けれども支那は我の要求の全部は容れない。而かも其眼目とすべき重要の點について堅く頑强に反對した。其反對の態度が如何なる次第か四月の央頃から一層著しくなつた。此事は當時の北京電報にも明かである。何故に此頃を期として支那の態度が俄然一層頑强になつたかと云ふ事は、今日一つの疑問である。之を解釋する第一の說は、此頃支那は外國の聲援を期待すべき理由があつたからだといふ。又第二の說は日本に於ける袁探の報告が支那をして本邦政界の一部の有力なるものゝ間に、現政府反對の暗流の外、支那に對して、もう少し讓步してもよいと云ふ考のあると云ふ事を信ぜしめたからであると云ふ。此第一の外國の聲援と云ふ事は、どう云ふ形であらはれたかと云ふに、考方が二つある。一つは、外國が直接に支那に向ひ、日本に强く當れと唆かしたと見ることが出來るし、他の一つは或强大國が日本の政府に向つて抗議とでも云ふべきものを持出した、それを支那が感知したとも見ることが出來る。予の判斷では、英國にしろ、米國にしろ、支那に向て直接の聲援は斷じて之を爲さなかつた

と思ふ。今日此等の二國が、支那の後立となつて日本を敵に廻はすと云ふ事が、一體出來る筈のものかどうか。之は少しく歐米現時の形勢に注目するものゝ到底判斷を誤り得ざる所である。且つ若し支那に直接に英米の聲援があつたとするならば、袁政府は最後まで此聲援を賴んで日本の要求を峻拒すべき筈である。何を苦んで最後通牒發送の通知に狼狽して、日本の要求を承諾するの決議をなしたるか。聞く所によれば、日本の最後通牒の內容が更に一段の讓歩をすると云ふ報告に接するまでは、支那政府では、一應全體の要求を承諾すると云ふ決心をなしたと云ふではないか。之れ支那の方に、直接に英米の聲援が行はれてゐなかつたと觀るべき明白な證據である。マサカ英米が初め聲援すると云つて、支那政府を煽てながら、最後に至つてイヤ聲援は困る、日本に盲從しろと云つた筈もあるまい。然らば英米側よりの故障が日本政府の方に來た、其事を誰か支那の政府に密告するものがあつて、得たり賢こしと支那が一寸强硬に出て見たと見る方が正當ではあるまいか。新聞などの情報によると、どう云ふ形式を以てしたかは分らないが、英國米國などから兎に角我外務省に向つて、多少嚴然たる態度を以て、說明を求めて來たらしい。此點は我當局者は之を秘密にし、米國からも、英國からも、格別の故障はなかつたと辯解して居る。又米、英本國の當局者も、稍々不徹底ではあるが、日本と別に文句を取換はした事がないと言つて居る。けれども斯う云ふやうな問題については、當局者の辯明は決してアテにはならぬ。前後の事情から考へ、又事件の性質から考へ、予は斷じて英米兩國と我國との間に、何等かの言ひ合があつたに違ひないと信ずる。而して之が何處からか洩れて支那の政府に傳つたのではあるまいか。是れ當時我國の新聞上に、袁探の說のあつた所以である。斯く考へなければ、四月十七八日頃、支那の態度の俄然として變つた理由が分らない。又最後通牒を發するの說を聞いて、俄然として讓歩の說に一決したと云ふ理由も分らない。要するに此頃世間では、只何となく日本から支那の政府

に日本政府の內情を通じたものがあるらしいと云ふ事丈けには氣が附いて居たやうだ。尤も世間の多數は、現政府が元老、官僚並びに政友會方面から非常に評判が惡るく、之等の連中は現內閣を評して、其基礎案外に薄弱なりとか、又は元老間に政府の對支要求を以て酷に失すると爲すものあり、陰かに現政府を壓してモット讓歩せしめんと企てつゝありなどゝ云ひ觸らすのを見て、屹度支那の方に日本の內紛を內通して居る者あるに違ないと云ふ風に解釋したやうであつた。併しながら此觀測はどうも眞相を得て居るものではあるまい。元老が何時頃から政府の對支要求の條項を苛酷なりとするの說を唱へ出したかと云ふ事も明白でないし、又現政府があれ程選擧に成功したのに、政友會が假りに官僚の一派と提携して內閣に反對の態度を取つたとて、それ程內閣の根柢が動搖するとも見られないから、之を支那に內通したとて、支那で急に態度を改めるといふ事も考へられない。そこで予は矢張り日本政府に對する外國方面の故障が、多少誇大に支那に內報されたと觀るのが、最も合理的の推測であると信ずる。如何にして之が外國に洩れたかと云ふ事については、當局者に多少の責任があり、誰が之を洩らしたと云ふ事も一種の賣國的行爲として之を責むるの必要があると思ふが、此邊の事は何れにあるにしても、兎も角四月の央過ぎから復た交涉が著しく行惱んだことは之を看逃してはならぬ。

此行惱を切り拔ける爲に、政府は四月二十六日に至り、更に支那に修正提案と云ふものを出した。扨て此修正提案の提出が果して適當のものであつたかどうか是亦一の問題である。廿六日の修正提案は其內容に於て大體原提案と變らない。多少字句を修正したり、又餘程穩かになつて居る所はある。殊に所謂第五項は多く之を他日の商議に讓つて、目下の所は只記錄に止めるといふ丈に讓歩して居る。警察の事は全く除いてある。其他の項目に付ても文字の上では餘程寬大になつて居るが、實質に於ては第一提案と大差はない。只支那の要求を容れ——支那の面目が立つやうに工夫し

た痕が歴々としてあらはれて居る。之によつて支那が承諾するか否かは別問題として、兎に角支那の要求を參酌して出來る丈け平和に其原要求を貫徹せんとした誠意は之を認めることは出來る。けれども廿六日の提案で最も肝要なのは、之に附隨して起つた青島還附の聲明である。此青島還附聲明についてはまた問題が非常に多いやうである。一部の人の間には之に對して頗る不服が多い。併しながら予の考では青島還附の聲明は機宜に適したものであると思ふ。予一個の想像を以ていへば、我國政府では初めから青島は還附する積りであつたらうと思ふ。之は去年の暮の青島稅關問題の時から斯く考へて居つた。青島稅關問題の如きも、青島を還附する積りでなければ、何も急いで取極める必要のなかつた問題である。從つて今度の交涉でも、所謂第五項は秘密の間に支那と協定を遂げ、其交換條件として青島を還附する積りであつたのではあるまいか。支那と日本との今度の交涉は、戰勝者の戰敗者に對する交涉ではない。從つて第五項の如き重大なる利權を獲得せんとするには、我よりも何等か重大の利益を彼に提供すると云ふ事が相當の禮であらう。不幸にして話が此所まで進行しない交涉の途中に、第五項の秘密が暴露された。從つて青島還附の話も之を言ひ出す遑なくして打ち切られて仕舞つたのであるが、今改めて原案を修正して全體の要求を新たにすると云ふ場合になつたから、そこで豫定の如く青島還附を聲明したものであらう。我國一部の論者の間には、必要のないのに還附を聲明すると云ふは餘計な事をしたものだと論ずるものもあるが、之は餘りに利己的な議論である。尤も青島を占領して置く事が、日本にとつて必要缺くべからざるものであるならば、問題は自ら異らざるを得ない。併し予の觀る所では、日本國民の山東省に於ける經濟的發展の爲めには、青島の占領は必ずしも絕對的に必要ではない。勿論有るは無きに優る事萬々である。けれども青島還附に附した四つの條件を認めしめ、同地に日本の專管居留地を設定し、獨逸側の財產を日本の自由處分に委し、加ふるに他の方面から

税關も鐵道も皆日本人の手に收めると云ふ事になれば、之にて日本人が青島を起點として、山東の奥の方にドン／＼經濟的に發展して行くに何等妨ぐる所はない。故に經濟上からは青島を占領して置かなければならぬと云ふ必要はないやうである。是に於て一部の人の間には、青島は帝國の軍人が血を流して取つた名譽の分捕物である。然るに之を再び他人の手に移すと云ふのは、忠勇なる軍人の魂に對して申譯がないではないか、又軍人が一生懸命に取つたものを外交家が勝手に之を處分すると云ふ事であつては、一つには軍人の士氣に關し、一つには軍人の名譽に關するといきまく者もある。併し此議論は詮じつむれば軍人と云ふ一部分の階級の利害名譽の爲めに、國家全體の利害を犧牲に供せよと云ふ暴論になる。軍人は國家全體の政策に服從せねばならぬ。軍人が血を流して取つたものであればとて、國家をして之を何時までも保存せしめねばならぬと云ふ事はない。要するに、青島還附の聲明は、折角の目的を達せず廿六日の修正提案を容れしむるに成功しなかつたのは遺憾であるけれども、交渉の行悩を切抜ける爲めに取つた手段として觀れば、强ち不當のものではなかつたと考へらるゝ。

然るに此青島還付といふ景物まで添へた修正提案に對して、支那は五月一日斷乎として拒否の答辯に及んだ。是も矢張り外國の壓迫が日本の上に來るべきことを期待して居つたが爲めであらう。日本は已むなく遂に最後の手段に訴へねばならなくなつた。是に於て五月三日最後通牒を發するの決心をなした。事玆に至れば最後通牒を發するの外に執るべき手段はないのである。此事に對しては別に問題は起らない。只いよ／＼五月七日を以て我が政府は帝國公使をして支那政府に最後通牒を提出せしめたのであるが、その最後通牒の要求事項中には所謂第五項なるものは全部之を削つたと云ふ事が公表された。之れが實に大いなる論難を惹き起す種となつた。此事は確かに多くの論客の說く通り我當局の一大失態であらう。どうしても從來の行懸上からは廿六日の修正提案を以て最後通牒の内容とせ

ねばならぬ。左もなくては帝國の面目が立たぬ。然るに修正提案より更に讓歩し、而かも最も眼目とすべき第五項を削つて最後通牒の內容としたのは、何たる不體裁の事であるか。若し政府の眞の要求する所、最後通牒に列擧する所にありとせば、廿六日の修正提案は即ちペテンに出でたものと觀ねばならず、又修正提案が政府の眞意であつたとすれば、最後通牒に至つて其內容を變じたのは、政府に確信斷行の勇なきを表明するもので、何れにしても堂々たる强國の態度ではない。我日本の威信を損ずること極めて大なるものありと云はざるを得ぬ。聞く所によれば、日置公使は最後通牒の電送を受くるまで、其內容が廿六日の提案と同一なるべきを信じ、支那代表者より屢々第五項中の二三の項目の承諾を條件として最後通牒の送附前に事件の圓滿解決を計らんと促れたるに拘らず、常に斷乎として之を排斥したのに、いよいよ到着した最後通牒を見ると、內容頗る薄弱であつたので、支那に對して非常に面目を失したとの事である。一生懸命主人の利益を計らんとして値段の談判を爭つて居る番頭を差し措いて、後ろから主人が突然やつて來て、お客が附けた値段よりも安く大負けに負けては、番頭は最早や客に合はす顏がない。如何に政府を辯護するものでも、此點丈けは何とも辯解の仕方はなからうと思ふ。

然らば政府は何の觀る所あつて斯くの如き拙劣極まる處置に出でたか、又何の必要ありて斯かる處置に出でざるを得なかつたか。之について坊間傳ふる所の說は、直接には元老の指金に出でたと云ふ事である。成程五月三日愈最後通牒を發するの閣議を決定したる際には、修正提案の條項を更に緩和するといふ說は全くなかつたのであるのに、四日の元老會議に於て俄かに故障が起り、終日會合して協議を凝らしても話が纏らず、五日再び元老大臣の間に意見の交換があり、六日の御前會議で初めて大いに讓歩した形で最後通牒を發すると云ふ事に決まつたのであるから、政府の當初の決心を飜して第五項を除かしめたものは元老の忠告であると觀て間違はなからう。然らば何故元老が斯く

の如き忠告をしたかと云へば、恐らく彼等はモウ少し外國の思惑を顧慮することが必要であると觀たからであらう。此事は新聞等の報道により略ぼ之を推測することが出來るのである。蓋し將來に於ける帝國の國際的地位の安全の爲めには、今日此際徒らに歐米の意に逆らうと云ふのは極めて不利益である。今度の事件について英米等は我に對して如何考へて居るかは、大に之を顧みねばならぬ。元老等は衷心斯く考へて、之を政府に說き、政府亦之を納得して、最後通牒案文の修正となつたのであらう。けれども之は其儘政府の措置を辯護する理由とはならぬ。其故は若しも外國の思惑を顧慮するの結果、要求の緩和を必要とするものならば、之は既に四月二十六日に讓歩すべきものであつた。最後通牒に於て讓歩すると云ふのは已に時機を失して居る。尤も四月廿六日の頃と五月五六日の頃とは周圍の形勢が違つて居つた、要求緩和の必要は五月に入つて突發したといふやうな事もあらう。併し愈々といふ間際になつて突然要求の緩和が帝國の爲めに絕對的に必要であると云ふ事に事情が變つたとしても、支那に對する要求丈は須らく四月二十六日の修正提案の儘に爲し置き、之より生ずる不便不都合の點は事後に於て解決すべきであつたと思ふ。所謂事情の變化とは蓋し英米等よりの故障であると思ふが、果して然りとすれば之等の外國とは同時又は事後に於て特別の交渉を開き、以て彼等をして滿足せしむる丈の處置を執ることは決して困難ではあるまい。よしや多少外交談判の駈引の上に面倒があつても、今日親善の關係にある英米に對し、此れ位の事で話の纏らぬ筈はない。英米も亦如何に我對支要求を不當と視ても、今最後通牒を出すといふ場合に支那に對して之を讓歩するの頗る不體裁なる所以を訴へたならば、マサカそれでも故障を言ふやうなことはなかつたらうと思ふ。故に假令外國の故障が極めて重大なものであつたとしても、其難局を切り拔ける爲めには外にいくらも方法があつたので、最後通牒に於て大々的の讓歩をすると云ふ事が決して唯一の手段ではなかつたと信ずる。然るに政府が此點に

つき極めて拙劣なる手段に出で、以て大に帝國の威信を失墜したのは、返す〲も殘念千萬な事であると云はざるを得ない。人或は此責任を元老に嫁せんとするものがあるが、それは甚だ間違つて居る。元老に物を相談すること夫れ自身が可いかわるいか。元老が差出口をするのがよいかわるいか。之は自ら別問題である。世間には元老會議無用論を唱ふるものが隨分ある。之には一應の理由はある。けれども元老は兎も角も陛下より國家の大事に當つては心血を開いて朕の諮詢に應ぜよと云ふ優詔を得て居る以上、政府から相談を受ければ十分腹臧のない意見を陳ぶると云ふのが當然の話だ。元老の干渉を非と思はゞ之に相談せぬがよい。相談しても其意見を是とせざれば從はぬがよい。態々元老を引つ張り出し、而かも其意見に從つた以上は、假令元老が其意見を押し付ける爲めに如何なる手段を執つたとしても、之に伴ふ全責任は固より政府自ら之を負はなければならぬ。今更之を他に嫁するのは卑怯である。又正當の論でもない。故に若し最後通牒發送の手續の上に何等失態がありとすれば、そは政府獨り全然之を負擔すべきものである。

但し此失態は予の考では必ずしも後で之を償ひ得ざる性質のものではない。成程第五項を削つたが爲めに帝國政府の威信は大いに失墜した。けれども他の一面に於ては、日本は實力を以て支那を强制し得べき地位にあるに拘らず、最後まで實力を用ひず、何處までも支那と親善の關係を毀損せず、平和の裡に事件を解決せんとして極めて熱心であつたと云ふ事を事實に於て示した。即ち最も異論のあつた問題は、暫らく之を他日に讓り、協議の纒つた點丈けを以て一先づ問題を切り上げようと云ふのは一面に於て帝國の雅量を示すものである。只此際必要なる第二の手段は、支那に示すに、我國が徒らに外國などの威壓に恐れて第五項を斷念したのではないと云ふ態度を以てすることである。即ち此點は將來何所までも平和の間に協議を進むる積りであると云ふ事に爲さなければ、我國の面目は立たない。又我國の實際の利益も斯の如くならざれば豫定

通り十分之を伸ばすことが出來ない、要求本來の精神も之を貫徹することが出來ないのである。されぱこそ我國政府では、第五項の條項は今日は問題にせぬけれども、遠からず又之を協議すると云ふ趣旨を、支那の最後通牒回答文書中に明記せしめんが爲めに頗る骨折つたと傳へられて居る。五月八日最後通牒の回答文を支那側が帝國公使館に持つて來た際には、此事は云つてなかつた。日置公使が再三之を要求して、辛つとの事で支那を納得さしたと新聞に傳へられて居る。果して然らば、帝國政府は今後大に巧妙なる外交手腕を揮ひ、引續き此問題をも解決して完全に實利を收め、以て今日の失態を償ふべきである。

然るに此點について一つ懸念になるのは、青島の還附を最後通牒にも聲明したかどうかと云ふ疑である。四月廿六日には、日本要求の全部承諾と云ふ條件の下に青島の還附を宣言したのである。而して五月一日支那の之が承諾を拒むに及んで、帝國公使は青島還附の聲明は一旦之を撤回すると言明した。然らば最後通牒に於ては、青島の還附は之を聲明せず、之を他日第五項の條件を協定する場合の交換條件として留保して置くのが得策である。第五項以外の要求は、青島の還附を條件としなくとも、支那に於ても承諾の外致方がないと諦めて居る。外國に於ても容喙の限りにあらずと認めて居つた部分である。然らば此れ丈けの承認に對して青島の還附を約束するの必要はなかつたのである。無論日本は屢々述べた通り青島を占領して置かなければならぬと云ふ必要はない。故に最後通牒に要求する所の條項が、我國の要求の全部であつて、之で以て多年の懸案が解決し終つたと云ふのなら、青島を還附しても差支はない。けれども、まだ問題が殘つて居る、而かも重大な問題が殘つて居ると云ふのであらば、別に急ぐ必要もない青島還附の聲明は、之を他日に殘した方が得策でなかつたらうか。尤も之等の點が他日密約で話の纏まるものであらば、今何といふ表面の理由なしに青島を還付するもいゝが、併し第五項の條項暴露して仕舞つた今日となつては、最早や密約の形で、

――諸外國には內密で――之を取り極めると云ふ譯には行くまい。去すれば今青島を返すといへば、第五項に關する將來の協議とは何等の關係なく只漫然返す事になると觀ねばならぬ。之は必要を超へた餘計の事ではあるまいか。予は將來の協議には、容易に支那を滿足せしむる爲めに我國よりも大いなる利益を提供するの必要があると思ふから、青島は其時の用に取つて置くべきであつたと思ふのである。今青島を還附して了へば、他日何の好餌を以て支那に第五項の協議を續くることが出來るか。吾人が支那の回答書に他日の協議云々の文字の記載を迫つたのは、第五項を全然打切つたのではないと云ふ空名を得んが爲めではなかつた。百尺竿頭一步を進め、近き將來に於て更に其實を收めんと欲する以上、青島の問題はあの儘にして置きたかつた。外務省公表する所の「對支交涉顚末」には、不幸にして此點を明白にしてゐない。萬一最後通牒に於ても青島還附を聲明して居るとすれば、之は稍々泥棒に追錢の譏を免れまいと思ふ。

▽支那の側より見ては如何

今度の外交は支那の立場より見て成功と云ふべきか如何。一部の人の間には、日本の外交當局は袁世凱氏に飜弄されたと云ふ。袁世凱氏は外交の駈引に於ては非常な手腕を有する人物であると云ふ風に觀て居る者甚だ少くない。此點に關しては予は世間の觀察に贊同することは出來ない。袁世凱氏が支那の官場に成功した人丈け、支那流には非常に聰明な、叉非常に策略に富む傑物であることには異議がない。けれども彼には外交家として最大の資格要件たる世界に關する智識といふものは極めて乏しい。彼は朝鮮に公使たりし時の外、足未だ一步も外國に出た事はない。恐らく支那內地と雖も、彼の足跡を印した地方は決して廣くはあるまい。加之彼は外國語が皆目讀めるでなく、支那の學問と雖も決して深くない。彼は軍人出身であつて、文學を以て身を立てた人物ではない。文學の素養の淺深を以て人物の上下を決めるのは間違つて居るけれど

も、支那では所謂學問がないものは人物の中には算へられない。よく普通談話の間にも日本人などが「彼は手腕ある人物なりや否や」と云ふ事を尋ねると、支那人は往々彼は「寫字很好」（字が上手だ）と答へることがある。袁世凱氏は支那の所謂學問がなかつたから、張之洞と相對して支那の二大大立物であつた時代でも、讀書人間の人望は張を仰いで神の如く尊敬するに對して、袁世凱氏をば寧ろ輕蔑の眼を以て見て居つた。斯く支那の學問ですら彼の素養は極めて淺いのである。況んや西洋の事物については彼に決して自ら之を研究する丈けの素養なきこと當然である。只彼は極めて聰明なる頭腦を有するが故に、よく人の云ふ事を聽いてそれを自分の智識にするといふ特技を有つて居る。けれども彼に世界的の知識を供給するものは誰かと云ふと、先づ日本や西洋などの留學から歸つて行つた、わるくいへば一知半解のハイカラと、それから外國の公使館に晝寢をして居る青年官吏連で、其報告は決して徹底したものではない。故に彼に桂公の聰明あり、大隈伯の包容力ありと雖も、もと／＼材料が拙いから、決して善良なる血肉となり樣がない。故に直ぐ隣りの日本の事情すらも、彼にはよく分つて居ない。是れ彼が日本の形勢の判斷に於て往々見誤りをする所以である。今日世界大亂の際に當つて、英米等の外國が我國に干渉するならんなど丶期待したと云ふ事を見ても彼の外交的智識の如何に淺薄であるかと云ふ事は明日である。只所謂支那の官場に育つて、陰險、譎詐、其他あらゆる惡德の間を切拔けて今日の成功を贏ち得た丈けに、よく色を見て其人の心を察し、權謀術數を縱横に弄して神出鬼沒の妙を極むると云ふ事には頗る長けて居る。此點に於て彼は先の朝鮮皇帝若くは先の土耳其皇帝によく似て居ると思ふ。さう云ふ怪手腕があつて且端倪すべからざる策略を弄するが故に、それ丈け之と折衝する人は骨が折れるのである。故に袁世凱氏を外交談判の相手としては、李大王殿下や、アブドル・ハミツト陛下を取扱ふに困つたと同じ意味に於て中々骨の折れるのである。故に一寸見ると、彼は大いに帝

國使臣を飜弄したやうに思はるる。けれども事の實際に於ては彼は決して外交に成功して居るのではない。少くとも袁世凱個人の外交としては成功したとしても、中華民國の外交としては決して成功してゐないと思ふ。何となれば、彼の奥の手として遣つた策は、今度も亦例つもの如く、信義に背き約束を無視し、秘密を暴露して日本に對する諸外國の反感を喚び起し、直接間接外國の力を籍りて日本を制せんとの有り來りの小策である。李鴻章以來、判に捺した樣に支那外交家の金科玉條となつて居つた所謂以レ夷制レ夷の舊套を踏襲したるに過ぎない。斯くして彼は幾らか日本を制し日本を苦めるには成功した。けれども彼は之と同時に、日支間の問題に更に外勢を招致し、徒らに事端を繁多ならしめた事に依つて、將來最も多く困却するものは支那自身である事を氣付いて居つたらうか。要するに彼の外交は決して自主獨立の外交ではない。自主獨主の見識を缺くは、元來袁世凱氏に限らず、支那の外交官一般に通有なる缺點である。今度の外交でも、支那が實力に於て到底日本に抵抗し得ざる境遇にありながら、第五項の要求を撤回せしめ得たる點は、一見甚だ彼の外交的成功と見るべきが如きも、之が爲めに日本より不信の譏を購ひ、又諸外國よりも自ら輕蔑の念を以て迎へられなければならぬのは、決して中華民國の名譽ではあるまい。目前の小成功の爲めに、永遠の損害の種を蒔いた責任は、之を打ち消すことは出來ないと云はなければならぬ。(五月十五日)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

高濱虚子著　中村不折畫

新刊

小說 柿二つ

子規

三千の俳句を閲し柿二つ

著者自序に曰く……此「柿二つ」は正しく子規居士を書かうと思つて書いたもので、少しも虚構を加へずに事實其儘を寫生したものであるが、其かと言うて、此一篇は子規居士を傳したと云ふ事は出來ぬ。居士の言行は如何なる些細な事でも事實に相違せぬやうにとつとめたものであるけれども、而も心理上の事は悉く私の想像になつたものである。……其點からいふと矢張小說であつて傳記といふ事は出來ぬ。……云々

此序以て本書の内容如何を知る可し

◉蘆花 德富健次郎著

小說 黒い眼と茶色の目

（定價壹圓廿錢　郵税拾貳錢）

第十七版

十九の夏から二十の冬まで著者青春の生活を如實に現出す。夢の如く起り而して著者の半生に大打撃を與へた初戀の挿話が大部分を占む。懺悔の一片また「新思出の記」の一部。さまぐの形を以て著者を愛しくれた四圍四周の生命に對しこれ迄の水臭い態度をよして更に露骨に而して深刻に愛を酬ひたい心から、著者は新しい企畫の手始めに先づ此れを書いた『著者白』

訂正縮刷 みゝずのたはこと

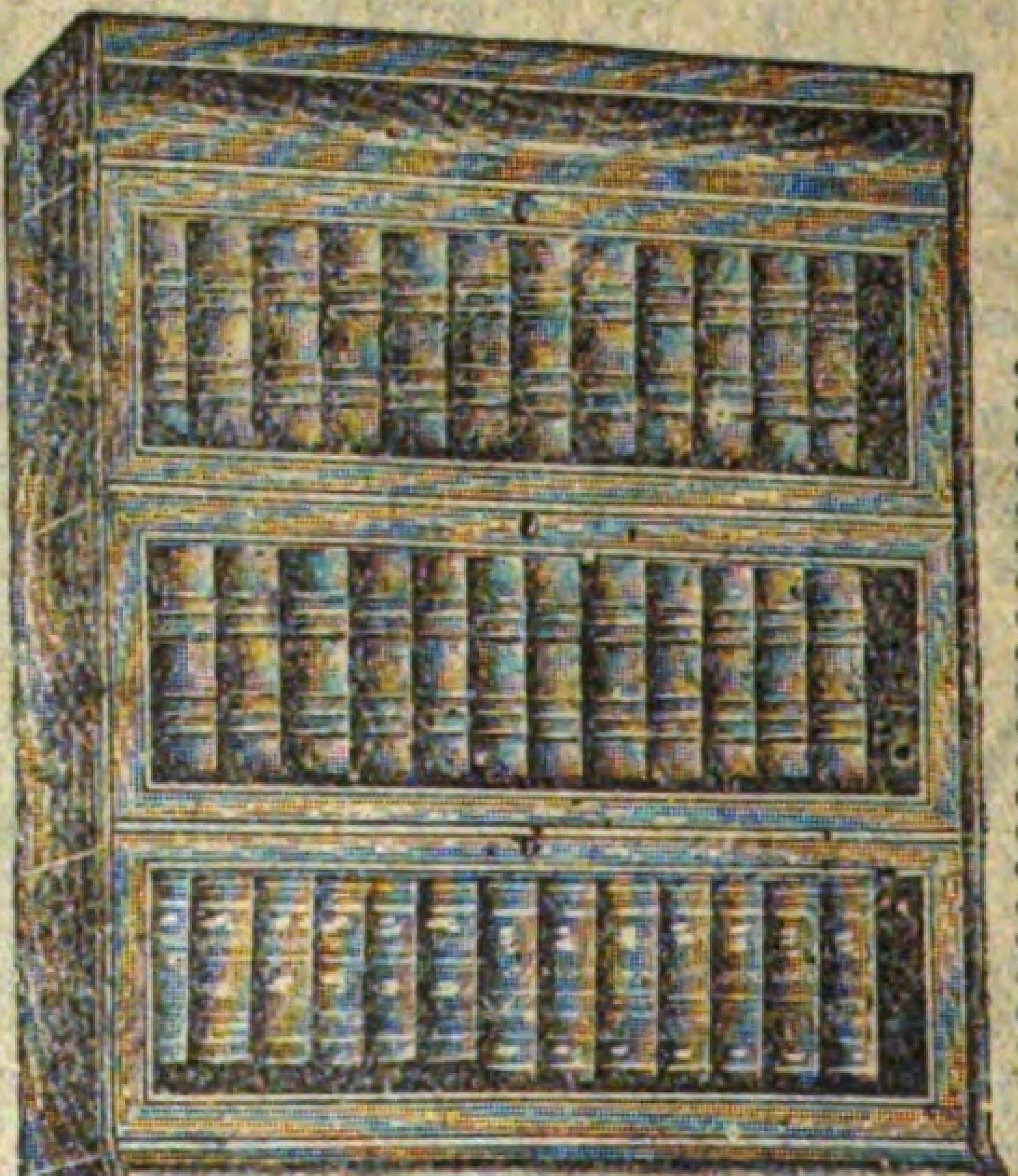
五十六版

武藏野の孤村に鍬をとれる著者が折に觸れ興に乘じて筆走らせし即興のスケッチ短篇小說、瞑想、書翰、紀行等を集む。

清新なる田園の小景、詩化せられたる教訓、涙を含む笑に充てる物語、有象より無象に通ふ神秘の暗示、平淡の中戰慄すべき恐しき說話卷中に充滿す。

無代進呈 圖書分類目錄

東京市内に於ける代表的出版業者代表的出版圖書分類目錄無代進呈す御希望の方は郵券弍錢封入御申越あれ



組合セ本箱

▲某宮家大隈伯爵家を始め其他の諸名家より御註文の榮を辱ふせる本箱!!

▲多數の優れたる特徴を有し現時歐米諸國に大流行を極め居れる本箱!!

▲構造並に其價格を示せる目錄……往復ハガキにて御申越次第進呈す

發賣元　新橋堂　東京市銀座通新橋際　電話新橋一九九一番（振替東京二〇〇番）

大賣捌所　東京堂　東京市神田區表神保町（振替東京二七〇番）

（中村一の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稲田大學總長

大隈伯爵講演

大隈伯演説集 高遠の理想

（新刊）

三六版天金 函入全一冊 七百五十頁 正價壹圓廿錢 郵税八錢

立憲的大宰相大隈伯爵が曠世の經綸を懷抱し天成の雄辯を奮つて其高遠の理想を宣傳し一世の指導に努力しつゝあるは萬目の俱に瞻る所なり。本書は最近數年間に試みられたる重要の大演説を悉く網羅せるもの、以て政治、外交、國防、經濟、教育、實業等有らゆる方面に對する世界的老偉人の識見を窺ふべき也。

好評三版

大隈伯演説集

菊版布製壹冊 五百五十餘頁 正價金壹圓 郵税十二錢

本集は「高遠の理想」の前編とも見るべきものにして明治二十九年より四十年に至る十二年間の重要なる演説を網羅したり「高遠の理想」を讀む者は溯りて本集を繙かざるを得ざるべし

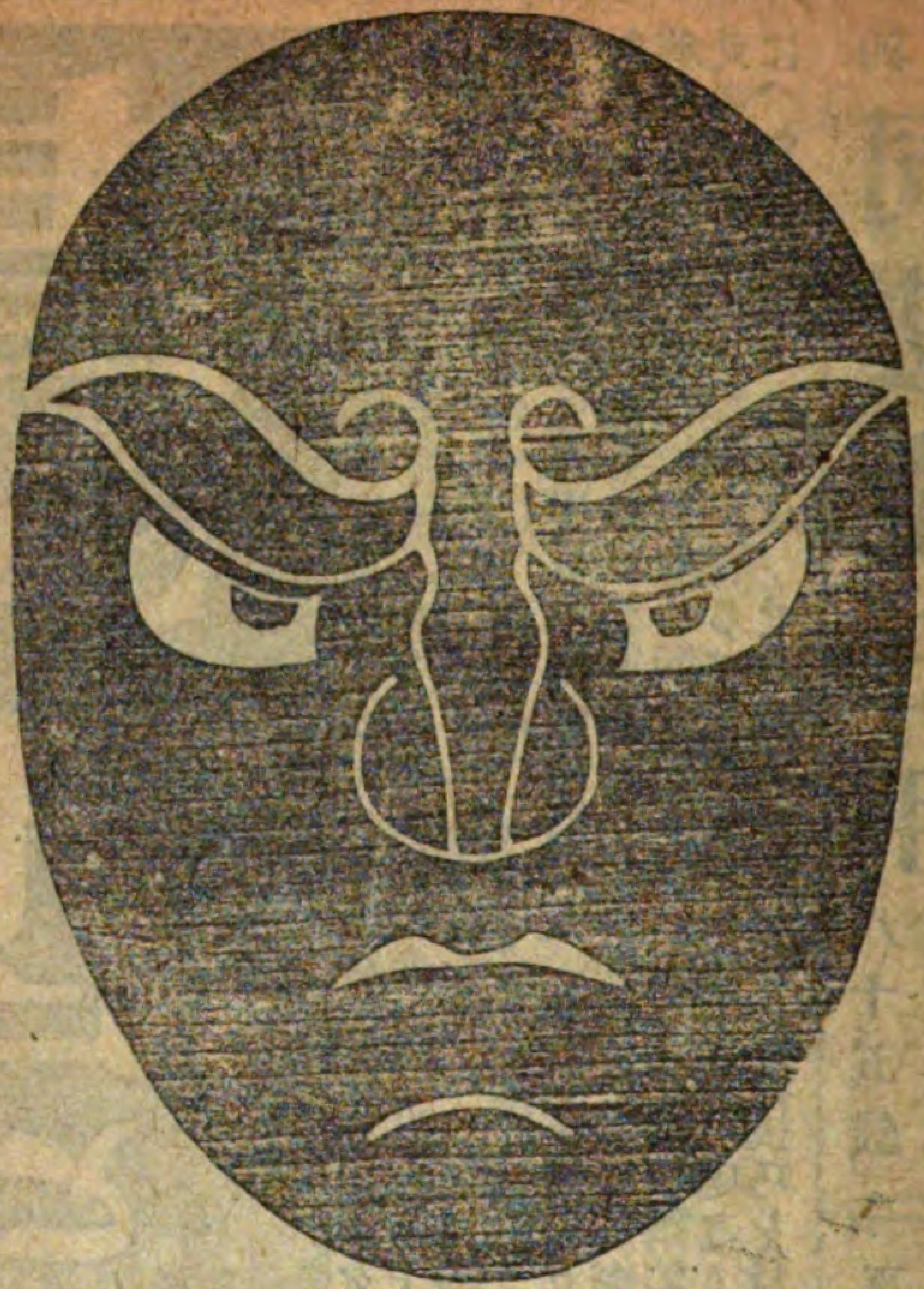
發兌 東京牛込早稲田 振替一一二三番 早稲田大學出版部

（賣捌）東京堂・至誠堂・北隆館・東海堂 （大坂）盛文館・（名古屋）星野（其他）

信用なき書舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

悪魔か人か

（小杉天外作 銀笛の一節） 婦人世界掲載



……あゝ神様、私は詰らない人間で御坐います、愚な人間で御坐います、あの阿嬢様の事ばかり念うてゐる人間で御坐います、神様が死をお指圖下されても、私はそれを怨とは思ひません……、けれども神様、若し私の様な罪深い者でも、神様へお願ひ事が出來ますなら、此の憫な私にも憐愍を垂れて下さいませ！神様、何卒私の戀を叶へさせて下さいませ！

右は小杉天外氏の傑作として『婦人世界』に連載して大喝采を博せる小説『銀笛』六月號の一節也、『婦人世界』定價一冊十五錢、郵税一錢五厘、全國いづれの書店にもあり

（中付一の三）

松崎天民氏新作

青い酒と赤い戀

三國久畫伯繪

三色版寫眞版凸版數葉挿入

四六判總クロース函入美裝

正價金九拾錢 送料金八錢

（新刊）

天民式觀察と天民式文章とを以て、文壇に獨得の地歩を領せる松崎天民氏が、伊豆修善寺の浴舍に在りて、新に執筆せるネオ、ローマンス物語なり、自家身上の感想と事件とを叙したる「醉ざめの悲哀」と「溫泉ローマンス」の二篇は、中年にして妻を失ひ、戀に惱める生活苦の告白を見るべく、文情惻々として讀者の實感を衝くべし。若し夫れ「女優メリー孃」「銀座の評判娘」「草津溫泉の夢」「肺病で死だ妓」「ロンドンの戀」「平野丸の甲板」「謎の伯爵夫人」「芝居茶屋の女」の八篇に至りては、漂泊の男と流轉の女とが、數奇なる運命に翻弄されつゝ苦しみ惱み悲しみ悶ゆる戀愛生活を描いて、小說以上の眞事實に讀者の感興を惹かん。現代の高級小說に苦しみ、當今の低級講談に飽きたる讀書界の渴望を醫すべき新著として此の書を大方に提供し得るは、本堂の欣快とする處なり。新進の洋畫家三國久氏の挿畫數葉は、三色版に、寫眞版に、凸版に、また才人の豐麗なる新技巧を見るに足らん。

四版 **同棲十三年** 八十五錢 送料八錢

三版 **東京の女** 價四十錢 郵税六錢

七版 **淪落の女** 價五十錢 郵税六錢

再版 **淪落の男** 池内萍綠著 價金五十錢 郵税金六錢

四版 **人生探訪** 價六十五錢 郵税金六錢

新刊 **女鳩桐の雨** 鈴木三重吉 價金九十錢 郵税金八錢

■發行所 東京日本橋鐵砲町六 振替東京壹五〇五六 磯部甲陽堂■

（中付一の四）

「歐洲動亂史論」の批評に答ふ

吉野作造

中央公論記者足下

貴誌六月號に拙稿「歐洲動亂史論」の續稿第六回を寄すべきの所聊思ふ仔細ありて「對支外交の儼正批判」を起稿し更に別封「歐洲動亂史論の批評に答ふ」るの一編を書き綴り候ため意外の時を費し最早此上御足勞を願ひて動亂史論續稿の筆記を乞ふの暇これなく候間今回だけ休揭致候事に仕度何卒此儀御承認被下度願上候

猶動亂史論は六ケ月連續の御約束を以て御揭載を願ひしものに候處漸く豫定のプランの半にも達せずして既に五ケ月を經たり。此上既定の計劃を續けて獨逸に對する英佛露の葛藤競爭の沿革等を論述するときは、今後更に半歲有餘の遠きに亙らざるを得ざるべく候。斯くては雜誌としては甚だ御迷惑なるべくと存候に付き、次號に土耳其を論ずるの一章を寄せて六ケ月連載の約を完うし、一ト先づ動亂史論を完結せしめ度希望に候。是亦御承認被下度願上候。

若し夫れ動亂史論の續篇とも觀るべき英獨競爭論や、獨佛露獨の反目論に至つては或は今秋を期して題を改めて御左右に呈せんかとも考居候匆々。

大正四年五月二十二日

吉野作造

一

自分の著作に對する批評は、褒めたのにしろ、貶したのにしろ、常に感謝を以て之に對すべきであるとは、予の平素の心掛けである。數ならぬ予の片々たる駄作固より大方の鑑賞を博し得べしとは夢にも思はねども、若し一言でも二言でも之に對して兎角の御言葉を賜つた方ありとすれば、予は此機會を利用してこゝに深く感謝の意を表するものである。

「歐洲動亂史論」に對する批評の中で、予の最も感謝の念を以て拜讀したものは、長瀨鳳輔先生が太陽に於て御連載になつて居る「巴爾幹の將來と歐洲戰亂」と題

する論文の中に、三月號より五月號に亘つて詳細に爲された夫れである。長瀬先生は、予が中學校を卒業したばかりの頃から、外交時報等に於て御發表になつた論文に於て、敎をうけて居つた未見の恩師である。二十年來東歐方面の研究に沒頭せられ、造詣極めて深き先生より、一兩年此方やつと學者の看板をかけたばかりの予の拙作が、而かも極めて詳細な御批評を賜るとは、身に餘る光榮として只々も感謝する所である。

先生が予の見解と違つた御說を立てられた諸々の點に就ては、予は尊敬すべき專門家の言として謹んで之を承つて置く。此上御示敎に基き更に研究を積み、我が蒙を啓くに努めやう。只何の材料何の根據に依つてそんな說を立てたかとの御詰問に對しては、予は學者として之を江湖に辯明するの責任を感ずる。敢て異說を固執せんとするのでは無い。

長瀬先生は前後三號に亘りて詳密に予の見解の速斷に過ぎ、輕卒迂遠に失する所以を說示された。論旨複雜傚細を極めて居るが、再三反復熟讀の上、漸く次の三點に於て予と見解を異にせらるゝものなることを發見した。(一)墺塞紛爭の本體に就て。(二)皇儲殿下暗殺の眞因に就て。(三)皇儲殿下の死とトリアリズムとの關係に就て。

二

墺塞紛爭の本體に就て、予は世の通說が之をスラヴ族とゼルマン族との爭、又は汎スラヴ主義と汎ゼルマン主義との衝突と視るの無意義なる旨を力說した。之に對して先生は速斷的の傾ありとせられて居るが、其理由とせらるゝ所甚だ明晰でない(太陽三月號一二五頁上段)。恐らく筆記者の誤であらう。墺塞間の紛爭を說明するに汎スラヴ主義だの、汎ゼルマン主義だのといふ名辭を用ふることの不適當なる所以は、予の既に中央公論二月號三五頁及三月號四六―四七頁に說いた所で一と通明白になつたと信ずる。其何れの部分に批難ありとせらるゝか。細目の御議論あれば格別、只漫然と雲を摑む樣な論難では、御答辯を致すに困却する。故に此問題に關する辯明としては、予は再び中央

公論既掲の文字を指示して引き下るの外はない。爭點を明にするは論難辯駁の第一義である。

三

墺國皇儲殿下暗殺の眞因に就て、予は世間の通説に同じて、大塞耳比亞主義の運動の結果なりと斷定した。長瀨先生は之を早計なりと難ぜられ、ラウンド・テーブル誌戰爭號所載「大公の暗殺」と題する一篇を援用して、其然る所を論證せられた。

長瀨先生の紹介せらるゝ所に依れば、ラウンド・テーブルの記者は、大公暗殺の陰謀の首魁は、塞耳比亞にあらずして寧ろ「維納及ブタペストに於ける多くの有力なる方面」に在りと爲すものゝ如くである。「常に大公を怖るゝ輩」、又は「大公には重大不治の痼疾あつたので、大公が若し帝位を繼かれたならば、王朝の不祥極めて大なるべしと信じた輩」が、謀つて大公を殺したのだといふものらしい（太陽三月號一二五—一二六頁）。斯う云ふ説もあるのに、大公の死は大塞耳比亞黨の仕業なりと斷定したのは、成程早計といへば早計であつた。

實のところ、予はラウンド・テーブルといふ雜誌が、學術上多少の參考に値するものであるといふことは知らなかつた。從つて此雜誌は圖書館などで屢眼に觸れたけれども、讀んで見る氣にはならなかつた。今以て是非讀まうといふ熱心も起らないが、兎に角、前記の如き名説の載つてあつたのを看逃したのは、返す〴〵も殘念である。

併し、予は、今度の大亂は、墺塞の葛藤に原因して起り、墺塞の葛藤は、大公殿下の暗殺が塞國內に於ける大塞耳比亞主義の陰謀の結果なりといふ事實（?）に直接の原因を置き、而かも此事は墺國始め各國の公文書之を認め、塞國自身亦或點まで之を承認して居るの事實に鑑みて、前記の如く斷定したのである。墺國皇儲殿下の暗殺が、大塞主義と直接の關係ありといふことは、未だ識者の否定する所とならず、塞國自身亦明白に之を否認し去らざるに依り、今日尚斯く斷定して誤あるまいと信じて居る。若し太公殿下の暗殺に關し、

塞國が全然無罪にして、寧ろ墺洪國首都の最高政客の間に在りと論ずる多少の根據だにあるものならば、何ぞ塞國が默つて居やう。何で世界が墺國の無稽の言ひ懸りで世界の大亂を醸すを默過して置かう。泥棒が自分の内に在り乍ら、嫌疑を無罪の隣家に吹き掛けて、町内の大騷動を持ち上げたとせば、墺國は實に大それたしれ者であると云はねばならぬ。

尤もラウンド・テーブル紙も、確信を以て斯んな奇説を唱へたか如何かは疑問である。長瀬先生も「全然信を措けぬかも知れぬ」(太陽三月號一二六頁)と斷はつて居らるゝが、又他の一面に於て、「フェルヂナント大公の暗殺は果して大塞爾比黨の手に依りて行はれたるものであるか、それとも國内に於ける反對黨の陰謀に成つたものであるかは、暫く疑問とするも」(太陽四月號八八頁下段)などゝ云はるゝのを以て見れば、不思議にも多少の價値を此説に置いて居らるゝやうにも拜察せらるゝ。然るに肝腎のラウンド・テーブルは、太公暗殺の眞因について、必ずしもこの奇説を固執して居らぬ。それは先生が太陽四月號に於て同誌所載論文の一節として紹介せられて居る所に依ると、「這般兇行の動因は……マジャールが暴政を敢てしたるも維納政府が之を默視し、益々跳梁を逞うせしめたるが故に外ならぬ」ので、畢竟「暴政の下にあるを快々として樂まなかつた」塞耳比人及クロアチア人等が爲した仕業である、といふ風の事が書いてある(太陽四月號九一頁下段)。之は先きの所謂奇説とは丸で別個の意見である。而かもすぐ其前に、大公を以て「匈牙利内に於けるクロアチア及其他の諸民族に對するマジャール人の政策に極力反對した唯一人の人」と視て居る(太陽四月號九一頁下段)。然らば彼は塞人ク人から喜ばれこそすれ、憎まるゝ理由はない筈ではあるまいか。要するにラウンド・テーブル所載の論文は、果して長瀬先生の紹介せらるゝが如きものであるとすれば、前後矛盾、支離滅裂、學問上殆んど何等の價値なきものと斷定せざるを得ない。

四

皇儲殿下の死とトリアリズムとの關係に就て、予はトリアリズムの運動が大塞耳比亞主義を激せしこと、皇儲殿下がトリアリズムに同情せしこと、否少くとも其同情者であるかの如く見られしことが、暗殺の遠因たるべきことを主張した。之に對し長瀬先生はトリアリズムの運動の存在を否認し、從つて此運動を以て大公の死を説くの無稽なるを諭された。

大公殿下暗殺の原因に就て、先生御自身が如何なる見解を執らるゝかは、更に明瞭でない。大塞耳比黨の毒手に罹つたのだといふ世の通説に對しては、明白に疑を置かれて居らるゝ。然れども、大公が塞國の怨府となつて居つたといふことだけは認めて居らるゝやうだ(太陽四月號八八頁下段)。此點は先生と予と幸にして見解を同うする所である。然らば何故に大公は塞國の怨を買つたかといふに、先生は其直接の原因として、大公が南方諸民族に自治權を與へ、以て巴爾幹戰爭後頓に勢を振ひ起し來れる大塞耳比主義の運動を極力阻止せんとした事を擧げて居らるゝ(太陽四月號八八頁及五月號八八頁)。是亦予の先生と其見る所を同うするを光榮とする所である。只大公が如何なる形式に於て南方諸民族に自治權を與へんとしたかの問題に至ると、予の見解は不幸にして先生の是認する所とならぬ。先生は南方諸民族を個々別々に自立せしめ、從來の二元主義を放棄し更に第三第四の幾多の獨立邦國を作らしむるの考であつたと説かれ(太陽四月號八八頁及九二頁上段)、予は南方民族の住して居る地方を一括し、單一の第三國を建て、之を墺國匈國と相對立せしむるといふのが大公の考であつたと主張するのである。南方諸民族といつても、拉丁族もあればスラヴ族もある。スラヴ族のうちにも、塞耳比亞族があればクロアシア族あり、スロヴェーネン族もある。而かも之等は概して犬牙錯綜して住して居るのであるが、之等の地方に對し民族的基礎の上に自治權を與ふるといふことは、丁度東京市の行政區劃を、生粹の江戸ッ兒、東北人、關西人、九州人といふ標準に從つて分けんとするが如きもので、到底行はるべき筈のものでないと信

ずる。故に多元的基礎の上に南方民族を自立せしむるの說は、初めから念頭に浮ばなかつた。又斯かる說は予の淺學なる未だ聞いたこともない。

予は今なほ、大公の意思は南方民族に單一の自治國を與ふるに在つたと信ずる――其中に總ての南方諸民族を包含するのか如何は姑く別問題として――而して之は恰度南方民族多數の希望に吻合するものなることを主張する。予はこの南方民族多數の希望に三國鼎立運動なる名稱を與へた。否與へたのではない、西洋の學者が之にトリアリズムなる名稱を與へてゐるのを、斯く譯したのである。而して長瀨先生は、第一に譯字の不適當を指摘せられ、第二に斯かる運動の具體的實在を否認された。

先生は洋語のトリアリズムを三國鼎立運動と意譯するは穩當でない、文字通りに三元主義とした方が宜からう、何となれば三國鼎立運動といへば、人をして斯かる具體的運動の實在するかに誤解せしむる恐あるからであると說かれて居る(太陽四月號八八頁上段)。予は三國鼎立運動と稱する具體的運動實在すと主張するものであるから、此前提に基つき、三元主義といふ曖昧なる直譯をすて、故らに三國鼎立運動といふ一見分り易い意譯を採つたのは、强ち不當でもないと自信する。三國鼎立運動の具體的存否の辨は、次に之を論ずる。予は只こゝには、西洋の新聞雜誌でも、トリアリズムの文字と共に、盛に Trialistische Bestrebungen なる熟字を使用して居ることを一言するに止る。

先生は、先生が取扱はれたる豐富なる材料のうちに、毫も予の說くやうな具體的な三國鼎立運動とやらの存在する事實を發見し得ぬと說かれて居る(太陽五月號八七―八八頁)。若し此運動の存在を證すべき西洋の材料が入用とあらば、差當り予は中央公論三月號に引用したルネ・ゴンナール(六九頁八一頁九五頁九六頁)、ハヴァッス(九一頁)、エリス・ベーカー(九三頁)、セートン・ワトソン(九四頁)諸先生の著作を引き合に出さう。此外去年七八月頃の西洋の新聞雜誌の中には、三國鼎立運動の存在を證明すべき所謂材料なるものはザラに

ある。

先生は、三國鼎立運動など謂ふものゝ存在し得べからざるの常識的理由として、(一)セルヴィア族とクロアチア族とが對峙獨立して發達せりと爲す說を排し、(二)クロアチア族の文化程度極めて低くして、到底有力なる國家を爲すに堪へざるを指摘し、且、(三)クロアシア族は寧ろ大塞耳比亞主義の謳歌者であつたことを主張せらるゝ。

セルヴィア族とクロアシア族との古い歷史は今尙不明に屬して居るといはるゝも(太陽五月號八九頁上段)、予が中央公論に說いた兩民族の紀元六七世紀頃よりの歷史(三月號五〇頁—六八頁)は、今日學界の通說にして、大抵の本には皆書いてある。予が此兩民族を全然異つた文明を有し、全然獨立の宗敎、言語、歷史を有するに至つたと爲した所以は、中央公論所載の一章(前揭五〇頁—六八頁)に略ぼ盡して居ると思ふ。最も獨立の言語と云つたのは、全く異つた言語といふ意味ではない。元と〱同一の言語だけれども、之を書き現はす文字が違ふのだといふことは、他の個所に明白に斷つてある(中央公論三月號五二頁下段)。故に言語の非常に相似たることは予も之を否認せぬが、只其相似たる理由を、專ら十六世紀に當り、セ人がクロアシアに移民したことゝ、十九世紀の後半セ語がク人に採用されたといふことゝに歸するアルフレッド・ステッドの愚論(太陽五月號八九頁)には、到底與みすることが出來ぬ。假りにステッドの說が正しく、十六世紀に於て始めて言語類似の端緒を開き、十九世紀の後半に至りて更に其趨勢を進めたものとするならば、是れ寧ろセ、ク兩民族が從來餘程永く孤立して生存し來れることを證明するものである。猶セ、ク兩族の對立關係に就ては、數ある材料の中、予は佛國の碩學セーニョボス先生の主宰の下に編輯せられ、一昨一九一三年巴里で出版せられたる Les Aspirations Autonomistes en Europe 中の一編、La Nationalité Serbo-Croate を呈示して謹んで引き退がらうと思ふ。

クロアチア民族の文化の程度の甚だ低きことは予も

亦之を認める。然れども之をバルカン諸邦中最も野蠻なる國民の一と目せらるゝ塞國人民よりも未開であると思ふならば誤である。事實兩者を比較して、孰れが優れて居るやは一の疑問たるを失はざれども、少くともク人自らはセ人よりも優等を以て居ることは、予の滯歐中の實驗に徵して予の今尙信ずる所である。庶莫ク人の文明の程度如何は三國鼎立運動の存否に關係はない。ク人に果して此理想を實現し、且完成するの能力ありやは、姑く別問題としていゝ。只此希望を以て現に運動して居るの事實あれば、予の議論の根據になるのである。尤も長瀨先生は、一方に於てク人の智識並に生活程度の低き、政治上の運動に參與するものは極めて少數の躍起派に限られて居ると說かれて居る(太陽五月號八八頁上段)が、又他方には、近年クロアチヤの人民中にも、巴爾幹半島に於ける國民的覺醒の風靡する所となりて、組織的の獨立運動が起つて來たと述べられて居る(同上四月號八八頁上段)。而して此クロアシアに於ける所謂組織的獨立運動が、クロアシア以外の塊匈國南部諸州に於て如何に迎へられて居るかは、予の中央公論に於て詳に說いた所である(三月號八一頁以下)。クロアシアに於ける獨立運動が、クロアシア以外の民族的運動と相連絡する時、玆に三國鼎立運動となるのである。既にクロアシアの組織的獨立運動を認めらるゝ先生の說は、詮じつむれば、予の說と甚しく距離の遠いものでもないやうだ。

クロアシア民族の多數は、寧ろ大塞主義の謳歌者であるといふ說(太陽五月號九〇—九一頁)に對しては、少しく詳に辯明するの必要を認める。クロアシア州內に大塞主義の謳歌者の在るべきことは、予も之を想像する。予が斯かる者の殆んど一人もないと云つたのは、成程言ひ過ぎであつたから、長瀨先生の御注意を感謝して之を取り消さう。クロアシア州內には、所謂クロアシア族の外に、今日は所謂セルヴィア族も多數在住することは統計上明白である。故に少くとも、之等の者の中には、大塞主義の贊成者が少からずあるだらうと想ふのである。けれども純粹のクロアシア族の中

には、大塞主義の贊成者殆んど一人も無かるべしとの信念に至ては、予の常識今尙之を變更するの必要を認めしめぬのである。尤も此點は、予も十が十まで確信を以て斷言するのではない。何となれば、此事は墺國自身の中に於てすら、學者の間に問題となつて居るからである。

時は一千九百十一年の夏、余の墺都維納府留學中のことである。多分ライヒス・ポスト紙であつたと記憶するが、數回續いて同新聞紙上に、トマス・マサリック教授とレオポルト・マンドル氏との間に論戰が開かれた。問題は、クロアシア州に於ける所謂大塞主義の實際の勢力如何といふに在つた。余は頗る興味を以て之を通讀したのであるが、爭點は要するに次の三點に在つた。

(一)塞國は、クロアシア州を以て大塞主義運動の策源地として居るや否や。

(二)大塞主義は、クロアシア族の間に如何なる勢力を有するや。

(三)大塞主義が、クロアシア州に於て大なる勢力ありと爲すの説は、匈國側が爲めにする所ありて故らに流布するものではあるまいか。

此際の論戰並に之に關連する世論を綜合して得たる余の印象は、(一)ク州に於ける大塞主義の勢力なるものは、其聲徒らに大にして其實案外一部少數の間にのみ限らるゝものなる事、(二)同州に於ける大塞主義の勢力を大袈裟に誇張するのは、匈國の爲めにする所の策略に出づ、何となれば、匈國は大塞主義の危險に籍口して、ク州に於ける獨立運動を公然壓迫するの口實を得るからと云ふ事であつた。兎に角予は、なほ多少の疑は存しつゝも、右の如き印象を腦中に藏めつゝ、維納を去つて獨逸に歸り、更に巴里に赴いたのであつた。

巴里滯在中、予は圖らず二人のクロアシア出身の學生と相知るを得た。此人々と相談ずることに依りて、予は、クロアシア人の大部分は塞國の文明を侮り大塞主義に同情なきこと、否大塞主義に同情なきに非ず、共同の目敵たる匈牙利を厭がらせるといふ意味に於て、塞國近時の發展勃興を喜ぶけれども、彼に合併せ

られ、其統制を受けんといふが如き以ての外の考は、毛頭懐いて居らぬ事、クロアシア人大多數の希望は、クロアシアと近隣諸州とを連繋し、獨立の一スラズ帝國の建設に在ること、此目的を有する會合は現に各地に設立せられ、漸次有力なる活働を爲しつゝある事を學び得た。是れ予が早くより三國鼎立運動の實在を信ずるに至りし所以である。

併し三國鼎立運動の實在説は、予が道途の説に聽いて輕々に信じた空論ではない。先きに擧げたゴンナール先生や、ハヴアッス先生やが裏書してあるのみならず、前に一寸引合に出した Les Aspirations Autonomistes en Europe 中の論文に於ては、著者はクロアシア人には獨立のトリアリズムの運動ある旨の動もすれば誤解せられんことを恐れて、「之等の民族間に汎セルヴ運動なるものありと云ふ者あらば、斷じて誤なり。只塞國人民の間には大セルヴの觀念あるのみ」(同書一七四頁)と注意して居る。實は斯んな事は、本來云はなくとも分つて居るのである。そは西洋人が塞國人の運動に汎塞主義なる名稱を與へず、故らに大塞主義の稱呼を附したのは、其運動の同族クロアシアには及ばざるの意を現さんが爲めである。之等の理由、之等の根據によりて、予はクロアシア人の大多數の者の間に勢力ある運動は、大塞主義に非ずしてトリアリズムであると論定したのである。此信念は後圖らず一九一一年出版に係る前記マンドル氏の著書「墺匈國と塞耳比亞」(Österreich Ungarn und Serbien)を手に入るに及んで、一層確められたのである。甚だ貧弱で御耻しいが、予の立論の根據は前述の如き次第のものである。

終りに附け加へて猶一言辯明したきは、予がクロ、セ兩族の對立の一つの原因を宗教の差に歸した點である。長瀨先生は之を迂遠の觀察と難ぜられた(太陽五月號八九頁)。先生は、今日バルカン半島に於ける人種紛爭の原因としては、宗教は最早何等の重きを爲さぬと説かれて居る。けれども天主教會が今日なほ Alleinseligmachende Kirche を主張して他宗門を排斥し、爲めに到る處物議を釀しつゝあるは、少しく西洋の宗

教事情に通ずる者の知る所にして、之に對し正教派亦決して相下らず、殊に塞國正教會は最も頑迷にしてEin Volk, eine Kirche, ein Reich を主張して熄まざることは、予も既に之を例示し（中央公論三月號六七—六八頁）、マンドル氏亦其著「墺匈國と塞耳比亞」に於て之を說いて居る（同書二四頁注）。而してことに東南歐方面に於て、宗教の差が如何に政治上の煩累となつて居るかは、予は具さにボスニアの人種關係にかりて說いた所であつた（中央公論三月號八五頁—八六頁）。之が十分に先生の理解に入らなかつたのは、予の甚遺憾とする所である。

元來人種的反感の根本源因に關して、予は從來斯う云ふ說を立てゝ居る。異つた人種といふものは、只人種が異るといふのみにては、今日は反感の種にはならない。未開野蠻の人種は、自分以外の者を直に仇敵視するけれども、少しく開けた者は、多少毛嫌するとか、意思の疏通せざるとかの事はありとするも、只異人種なりといふ丈けで反目はしない。之と同時に、人種關係が近いからとて、特に相親むといふ情も薄くなつた。是れ予が、今日の國家は、イザといふ時は、同文同種などいふ空名に動かず、實利に依りて動くことと多しといへる所以である。現に露西亞が塞國を援くるの名の下に墺と開戰したのも、利害關係が主で、同族の爲めといふは第二第三だと思ふのである（太陽三月號一二五頁上段）。但し予は人種の異同といふことは、人種を離合せしむるに全然無力であるといふのではない。只之は今日では比較的輕微な要素となつたといふのみである。然らば今日何が最も甲人種と乙人種とを反目せしむる要因なりやといふに、予は之を次の三つに歸する。一、從來の歷史。二、宗教の差。三、經濟的利害の衝突。今日バルカンを始め、世界何れの處の人種鬪爭を見ても、其裏面には必ず利害の衝突か、宗教の爭か、又は昔し一方が他方を征服して壓制をやつたといふ來歷がある。而して此壓制も、宗教が異る時に最も甚しい。今日歐米の政治を解するに、宗教を無視するは大なる誤である。若し過去の歷史より宗教の

爭を取り去らん乎、歐洲今日の人種問題は大半穩かに治つて居るだらう。宗教の異同が異人種間の障壁を高からしむることは、今日尙依然として昔の如くである。異人種の爭は宗教の差を伴ふときに殊に甚しく、宗教の同じき時は、寧ろ人種の別を忘れしむることも少くない。我國の識者が、往々にして歐米に於ける宗教の政治的並に社會的意義を輕視するの弊は、予の平常深く慨嘆する所であつた。終りに改めて言ふ。バルカンに於ける紛亂の如きも、其眞因を探れば、第一次に於て宗教上の爭である。第二次に於て歷史的壓迫の回憶より生ずる人種的反感である。第三次に於て利害の衝突である。單に人種が違ふといふ丈の考は、比較的輕微の作用を爲して居るに過ぎぬ。

五

以上予は、長瀨先生と不幸にして見解を異にする三つの點に就て、予の立場を辯明し了つた。最後に予は、先生の所謂「提言」に對し、一言の答辯を呈して、本稿を終ることにする。先生はクロアシアと匈牙利との極めて密接なる關係に在るを指摘せられ、「一層重大なる匈牙利との關係に就ては、一向徹底したる議論を述べて居」らぬのは、予の大なる手脫りであると難せられた。併しクロアシアと匈牙利との關係に就きては、實は古い歷史から最近の出來事に至るまで、予はくどい程詳しく述べて置いたのである（中央公論三月號六四—六六頁及七〇—七七頁）。此の六號交りの十一頁に亘る說明が、更に徹底してゐないと叱責せらるれば夫れ迄の事だけれども、自分丈けでは、今次戰亂の緣因を解するに必要な丈けのク、匈兩地の眞關係は、一と通り說明し得たと信ずる。予の議論の徹底してゐないか否かは姑く江湖の判斷に一任し、只此重大なる方面の硏究を等閑に附したるの誤解を免れんが爲め、一言此事を辯ずる次第である。

終りに臨み、取るに足らざる予の一小述作に目を留められ、玆に更に數言を費して、一層明白に予の立場を明にするの機會を與へられたるの厚意に對し、深く長瀨先生に感謝の意を表する。

逍遥坪内博士新名著二冊

墮天女 其他四種　坪内逍遥著

●装釘優美●定價金五十錢　郵税金六錢

本著は我新舞踊劇に於ける眞面目の試作一篇と新舞踊劇の創作四曲別に諷刺喜劇一幕之に加ふるに歌劇及舞踊劇に關する論評百數十頁を収めたるものにして我興味深き樂劇問題を開く一黄金鍵たるを失はざるべし其作は殆ど皆實演を經たる清新の曲其論は總て反覆研鑽の餘説なり

坪内逍遥著　霊験

●美装製本●定價金四十錢　郵税金四錢

過般無名會演劇として帝劇及有樂座に於て前後二回上演し滿都の公衆を狂喜せしめたる珍脚本原書は愛蘭近代の一天才の傑作を坪内博士が其老練の筆を以て巧妙自在に飜案せられたるものなり

東京本町　**金港堂**　振替東京八一五

東京高等商業學校教授
マスターオブアーツ
山口鐵太先生著

〔忽ち三版發行〕

好評如湧

英語會話作文講義

●本書の眞價は是を公正なる世評に聽け●内容見本往復「はかき」で申込めば進呈す

「東京朝日」英語獨修の手引となる著述は今日迄其數幾多ありて長短各特色あるべしと雖も本書の如く會話と作文とを主として其語と句との使用法及類似語の區別等を仔細に說明し實用的方面より親切に了解せしめんと企てたる者は少し凡そ日常生活に必要なる有ゆる項目を設け其項目の下に肝要なる語句を出し例證を加へ初學者をして明瞭に其意義を攝取せしめたるは幾多類書中尤も卓絕せるものなり」と

菊判クロース上製
箱入一千頁
定價金參圓
特價金貳圓五拾錢
送料金拾六錢

新刊發賣

元木貞雄先生著

獨修英吉利語研究

ポケツト形クロース製
定價六拾錢　送料六錢

世界的の活躍は英語に通ずるに依つて得らる

駸々乎として止む事なき世界文明の新曙光に浴せんと欲せば一日も語學の研究を怠るべからず本書は著者多年の經驗に基き獨特の新方法を應用して如何なる初學者にも自在に英語を獨修し得らるゝ樣原語に假名を附し發音法より文法讀話に至る迄懇切忠實に編著せられしものなれば何人も本書一冊を手にせば容易に其要訣を極め是を實用に供せん事自由自在なり

（中付二の二）

發行所　東京神田南神保町　振替東京一九二三三番　日進堂

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

著者自選 **現代代表作叢書** 六号縮刷

十編 上司小劍傑作選集 お光壯吉

■裝幀美術の極を盡せる會心の本 ◎定價壹圓拾錢 郵税八錢

最近文壇の權威——物凄き迄に人生の奧秘を汲み盡したりと云はるゝ小劍氏の名篇中よりその最も光彩ある代表作を一卷となせり。輕妙と纖細と深刻と徹底と諷示とユーモアーと、例へ難き渾然たる著者の鬼才は有ゆる物、有ゆる人を携へ來りて、我等の眼前にその假裝を脫き去らしむ、最長篇『木像』の如きは著者の處女作にして然も文壇に喧噪の聲を集めたる名篇その鄕土色は更に特異の境地に人々を彷徨せしむ。

内容
■お光壯吉 ■太政官 ■木像

十一編 德田秋江傑作選集 閨怨

■津田靑楓氏裝幀 ■極美本 ■定價壹圓 郵税八錢

内容
■執着 ■青年 ■疑惑 ■流れ ■黑髮 ■仇なさけ ■津の國屋 ■うつろゑ ■別れたる妻に送る手紙

最近文壇の異色—我等が秋江氏の作品を透して聞くものは人心の奧底に潜める眞實の聲、我等の語らんとして語り得ざる眞實の聲なり、美くしき戀と人生の愛とに裏切りするものは、疑惑か、悔恨か、忘却か『別れたる妻に與ふる』外數篇の長篇悉く著者獨占の凄艷なる描寫に依つて示されたる冷明透徹の告白にして又直ちに、我等自身の物語りならざるなし。小劍氏の傑作集と共に文壇の双璧たるを失はず。

	著者	書名	版	定價	税
(1)	森田草平著	煤煙	(十一版)	九十錢	八錢
(2)	鈴木三重吉著	珊瑚珠	(五版)	九十五錢	八錢
(3)	谷崎潤一郎著	麒麟	(四版)	一圓廿錢	八錢
(4)	田山花袋著	小春傘	(三版)	一圓	八錢
(5)	正宗白鳥著	まぼろし	(三版)	一圓	八錢
(6)	長田幹彦著	舞姫	(再版)	九十五錢	八錢
(7)	田村俊子著	あきらめ	(再版)	九十五錢	八錢
(8)	小山内薰著	一里塚	(新刊)	一圓	八錢
(9)	泉鏡花著	菖蒲貝	(新刊)	一圓廿錢	八錢

發行所 神田佐久間町四ノ廿三（振替東京一二九五三 電話下谷三四一九）植竹書院

(中付二の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

A辯護士の取扱ひたる 犯罪ロマンス（二）

松崎天民

人間一人を殺害する迄には、大抵の加害者が、樣々の道筋を辿つて居る。苦しい事や、悲しい事や、憤らしい事や、種々の人知れぬ悶えを通つて、初めて一場の犯罪悲劇が具體化される。然も冷たい「法廷の記錄」は、事件の「骨」ばかりを拾つて、その「骨」を包む「肉」や、その「骨」の周圍に流れて居る「血汐」と云ふものを、兎もすれば閑却するのが例である。法曹界有爲の少壯辯護士A君は、常に犯罪の裏面に潜む「人生の姿」を讀みながら、冷たい法廷に熱い涙を揮ふ一人である。その八年間に取扱つた事件の中には、赤裸々な人間の叫喚を聽く樣な「犯罪ロマンス」が、六七件ほどあつた。私は今、その一つ〳〵に就いて、犯罪の底に流れる「實人生」と「實世相」とを眺めやうとする熱心な一傍觀者である。——

妾を殺すまで

一、未決囚から手紙

辯護士A君と私とは、五月十三日の夕暮、尾張町のカフエー・ライオンで落合つて、先づ冷たいコーヒーを飲んだ。そして、往來の忙しい銀座通りを新橋に出て、横濱行の汽車に乘つた。妾殺しの犯罪が有つた大森へ行つて、現場附近を散歩しやうとするのである。

青葉の大森を八景坂上に出た時、初夏の日はトツプリ暮れて、何所かで蓄音機

の呂昇が、「今頃は半七さん」を語つて居るのが聞えた。一時降つた雨は何時しか歇んで、何となく物淋しい夜である。背の高い洋服の一紳士が、大股に歩いて行くので、久しく逢はない杉村楚人冠ではないか、と急いで近寄つて見たら、似ても似つかぬ腭髯の色の黒い人であつた。

妾が殺されたと云ふ家は、Ａ辯護士も朧に記憶して居る筈であつたが、何うしても見當らなかつた。家賃が安くて十二三圓、高くても十五六圓を出ない平家建であつたと云ふから、今頃はもう他人が住み古して、當年の面影を偲ぶ手蔓もあるまい。――二人は停車場の傍から電車に乗つて、海に近い清香園の客になつた。階下の六疊の室に通つて、ホンの二三品に麥酒を傾けながら、「妾を殺すまで」の徑路を、語つたり聽いたりした。妾にでもなつて、一生涯を日陰に終りさうな女中が二人、交る〳〵出ては酌をした。――

明治四十二年の春と云へば、私が東京で辯護士を開業してから、まだ間も無い時の事で、今の様に「事件」が有ると云ふでは無く、極めて閑散な月日を送つて居た頃でした。從つて見ず知らずの人々から、手紙を寄越されたり、事件の鑑定や辯護を依頼される様な事も先づ絶無と云つた譯で、當分の間は遊んで食ふより他には、仕方が無いと斷念めて居ました。

ところが或る日の午後、私にとつては極めて珍しい一通の手紙が、未見の或る男から舞込みました。差出人の住所は、「×十市××町××番地佐藤權太郎」とあるのみですが、その封筒と云ひ、檢印を押捺してある工合と云ひ、一目見て私は「××監獄未決監」の一囚人から、差出した手紙である事を看破しました。そして、先づ不思議に思つたのは、私の様な名も無い新參の青年辯護士を、佐藤と云ふ囚人が何うして知つて居るか、と云ふ事でしたが、それは手紙の內容を一讀するに及んで、忽ち「成る程」と合點されました。

拜啓陳者、未だ御面會の榮を得し事無之候へども、御尊名は當看守殿を通じて典獄殿より拜承仕り候、

小生は××市××町の佐藤權太郎と申す者に有之、此度自分儀に關係ある女を殺害いたし、直に自首し出で候ため、當監獄未決檻に入獄の身の上と相成りし者に御座候、就ては當地辯護士殿には、二三の知合有之候へども、特に先生に御依賴申上度き儀有之候間、御多忙中誠に恐縮の至りに御座候へども、至急當監獄まで御出張被成下間敷く候や、親しく御面會の上、小生意中殘らず開陳いたし、特に御同情を蒙りたく、此段伏て御願申上候

××監獄の典獄は、多少知合の間柄ですから、それで此の囚人のために、私を紹介してくれたのでせう。「法律の前には一點も爭ふ餘地の無い殺人事件でも、其の裏面に深く立入つて研究したならば、或は意外の新事實を發見し得るかも知れない」と云ふのが、私の其の頃からの興味でしたから、此の手紙を披見するや否、私は取るものも取敢ず××監獄に出張しました。東京から汽車で一時間、海に近い賑かな××市と云へば、大概お判りになりませうが、仔細あつて此には××市とのみ云つて置きませう。勿論、佐藤權太郎と云ふ囚人の名も、實名に似寄つた假の名でして、其の本名を云ふことだけは、當人の名譽のために、今四五年の間遠慮して置きませう。

辯護士と未決囚とが面會する場所は、何れの監獄も大概同じ構へで、二三尺離れた白木造りの板圍の上に、胸から上を現した囚人の窶れた姿を見るのは、決して氣持の好いものではありません。囚人の近親緣者が面會する時と同じ樣に、傍には看守が一人腰掛けて、談話の要領を聽取つて居ますが、辯護士と未決囚との面會には、時間に制限が無いだけが特點でせう。私が面會所に入つた時、既に佐藤權太郎は、看守に引かれて立つて居ましたが、私は一目見て、「こんな男が、女殺しの大罪を犯したのか」と、不審に思ひました。

佐藤は私の顏を見ると、叮寧に頭を下げましたが、未だ一語も發しないのに、兩眼に淚を浮べて居ました。背が高くて、肥滿して居て、色が黑くて、眼が大きくて、耳が際立つて大きくて、何ちらかと云へば、餘り

上品の人柄ではありませんが、然し女を殺す樣な兇妄な人相にも見へませんでした。

「事件の經過を詳細に話してくれ、其の上で私の意見も云はふし、引受けて宜いものならば、進んで辯護をしても宜いから……」

と私が云ひますと、佐藤權太郎は心持窶れた額の汗を片手で拭きながら、自分の犯した罪の徑路を、私の前に詳しく語りました。

二、日露戰爭の悲劇

「A先生、自分は××市の呉服商で、店には十五六人の番頭手代を使ひ、財産も二三萬圓あつて、大和屋と云へば、相應に知られた老舗の主人で御座います。それが何うした天魔に魅入られましたか、豫て大森八景坂上に圍つて居ました娼妓上りの妾を殺して、直ぐ共足で自首し出ました爲め、此の未決檻に入る樣な、飛でも無い身の上になつたので御座います。

もう斯うなつては、人間もどん底に落ちました譯で、自分は決して死刑を免れようの、成るべく輕い處刑を受けたいのと云ふ樣な、さもしい量見を持つて居るのでは御座いません。妾を出刃庖丁で一突きに殺したと云ふ、單純至極の事件ですから、死刑か、無期徒刑か、何れにしても此の娑婆の身體で無いことだけは、神妙に覺悟して居るので御座います。けれども、自分が斯うした大罪を犯す樣になりました迄には、それは〳〵人知れぬ云ふに云はれぬ種々の原因があるので御座います。自分はそれを先生にお話して、若し多少でも御同情を蒙ることが出來ましたら、それを自分に代つて法廷で述べて頂きたいと思つて、それで態々御出張を願ひ出ました樣な次第なので御座います。

A先生、自分は一呉服店の主人で、學問も何も無い身分では御座いましたが、それでも國の法律を犯した者には、當然法律上の制裁がある位のことは、百も二百も承知して居る積で御座います。從つて先生に辯護を依賴しましたのも、自分は法律上で兎や角と爭つて頂いたり、罪の輕減を主張して頂いたりするのは、自

分が先生に辯護を御依頼する本意では御座いません。自分の様な妾殺しの犯罪にも、これを遠い原因に遡つて調べて見ると、國家とか社會とか云ふ大きな問題にも、多少は關係かあると云ふ事を、法廷で述べて頂きさへすれば宜いので御座います。そして自分と同じ様な苦しみと悶えから、自分と同じ様な罪を犯した人達のためにも、多少でも其の心持を知つて頂くことが出來れば、自分の大罪も少しは役に立つかと思ふので御座います。自分が先生に辯護を依頼します本意は、表面に現はれました事件を、法律上から論じて頂くのでは無く、裏面に隠れた犯罪者の心持を、心理學的なり、生理學的なり、哲學的なりに、大に述べて頂きたいので御座います。

妾を殺しました前後は、自分でも殆ど狂氣の沙汰と思ふ程で、一時は茫然自失するばかりで御座いましたが、斯うして靜な未決監の月日を送つて居ますと、妾を殺すまでに立至つた自分の心情が、さながら他人の身の上の様に、明瞭と判り初めました。自分の犯した大罪に、至極く尤もらしい理窟を附けて、世間の同情を求めやうなどゝ云ふ、そんな大それた量見は毫頭御座いませんが、然し此の切ない心持だけは、是非とも知つて頂かねばならぬと決心したので御座います。その切ない心持を一言で申しますと、自分は一人しかない息子を日露戰爭に召されて、旅順の役に失つてしまひましたのみならず、其の息子の戰死が原因になりまして、長年連れ添うて居た女房にも、先立れてしまつたので御座います。自分は何事も國家のためと思つて、斷念め様とは致しましたが、諦められないのは骨肉の離愁と云ふ事で御座います。國家のために美しい雄々しい犠牲になつた、と云ふ立派な名譽らしい名の蔭に隠れて、人知れず泣かねばならぬと云ふのは、男としても堪え難い苦痛では御座いませんか。自分は此の切ない苦しい悲しい心持から、果は自暴自棄になりまして、遂には此度の様な大罪を犯す様になりました仔細を、先生から述べて頂きたいと存じまして、それで御願しました様な譯で御座います。先生、どうか自分一人のた

めばかりで無く、自分に似た人々のためにも、進んで此の辯護を引受て下さいませんか」

佐藤權太郎は、その人柄に似合はず、哲學的とか心理的とか、國家とか社會とか言ふ言葉を挿み、前後六時間に渉つて、自分の心持やら事件の經過やらを述べました。そして、法律上には謹で服罪するが、たゞ罪を犯すに至つた經路を、法廷で述べ立てくれと云ふ依賴が、何よりも私の氣に入りました。

「お前の心持は宜く判つた、必ず滿足するだけの事を、公判廷で申立てあげやう」

と答へますと、佐藤權太郎は初めて安心した樣に莞爾として、涙をポロ／＼零しました。

佐藤は四十六歲の分別盛でして、妻たけとの間には、唯一人の福太郎と云ふ息子があつたのみでした。二十三四歲にもなつて居ましたから、然るべき良緣を求めて、早く初孫の顏を見たいと思つて居たのは、何處も變らぬ親心と云ふものでせう。ところが世は日露戰爭の舞臺となつて、三十七年の秋九月には、豫備步兵の福太郎も召集されて、一先づ麻布第三聯隊に入り、日ならず出征することになりました。如何に御國のためとは云ひながら、たつた一人の息子を戰爭に召されては、子煩惱の親達が、人知れず悲しみ嘆いたと云ふのも、强ち無理だとのみは云へますまい。

三、自暴自棄の遊興

一人息子の福太郎が出征してから後、母親たけは悲嘆の餘り病氣に罹り、淋しい病床に起臥する身の上になりました。戰爭に行つても、戰死するばかりが名譽ではない、出來ることなら一日も早く凱旋して、無事な顏を見せてくれと、母親は神や佛に祈つて居ましたが、戰局は容易に納らず、三十七年も血腥い噂ばかりの間に暮れてしまひました。

三十八年になつて、福太郎は旅順の大戰に參加しましたが、其の三日目には戰死したとの報が、佐藤の一家を驚かしました。折柄、病の床に在つて、一子の安否をのみ氣遣つて居た母親へは、病氣に差障りがあつ

てはと心配して、何事も秘密に附し、權太郎も素知らぬ顔をして過して居ました。けれども三十八年の末から、諸隊が續々凱旋し初めても、福太郎からは歸ると云ふ通知がなく、三十九年に入つて、諸部隊悉くが凱旋しても、福太郎のみは歸つて來ませんので、母親も遂にそれと察して、嘆き悲しみました。國家を思ふことを知らずして、たゞ息子の上をのみ思ひ煩つて居た母親おたけは、悲嘆の餘、俄に病が重つて、終に福太郎の後を追つて、黄泉の人になつてしまひました。

日露戰爭のために、一人しか無い愛子を失ひ、續いて病妻を失つた權太郎は、「國家のため」の一語に安心して、「名譽である」と思ふことが、何うしても出來ませんでした。餘り酒も嗜まねば、女道樂もしなかつた權太郎が、俄に身持を崩して遊び初めたのも、一概に嘲笑ふことは出來ますまい。世は戰捷祝賀の酒に醉つて、陽氣に浮かれて居る中に、權太郎も亦面白さうに、酒ばかり飲で歩きましたが、心の底には常に一脈悲痛の哀感を湛へて居たのです。そして一人息子を奪つた「戰爭の慘禍」を呪つたり、愛妻を奪つた「國家のため」を憤りながら、表面だけは人々の間に伍して、平氣な顏をしながら、酒と女の間に出沒して居たのです。やがて戰後の株式暴騰時代は、海に近い××市にも來て、人々は他愛もなく、酒池肉林の間に耽溺して、其の日〳〵を送ると云ふ有樣でした。

店の方は番頭や手代に放任して、權太郎は毎日毎夜、紅燈の巷に出入しては、盛に豪遊を極めて居ました。最初の間は斷じて女色を近づけず、美しい若い半玉を十人十五人と招で、踊つたり唄つたりすると云ふ遊び風でしたが、それも半年ほど經つ間には、次第に面白く無くなりました。妻や子を失つた心の悶えを慰藉しやうとして、強て遊蕩三昧の月日を送つて居たのですが、幼い半玉の無邪氣な姿を見て居ると、反つて思ひの種を増すばかりでした。息子に對する愛著の心と、妻を失つた淋しい心とを慰めるには、一人の女を思ひ詰めるに限ると思つて、權太郎は樣々に物色した後、關外藝妓の梅千代を得て、樂しむ身の上になりました。

けれども此の梅千代と云ふ妓は、權太郎自身が「飾り海老」と呼で居た程で、美しい女ではあつたのですが、五十に近い權太郎の慾望を滿足させるだけの、豐な肉體と快感とを飲いだ女でありました。

　女の肉を求めて休まない佐藤權太郎の遊興は、勢ひ娼妓の群に强い刺戟を求める樣になりました。××遊廓へ日夜の樣に入浸つて、枝から枝を飛ぶ小鳥の樣に、女色を漁つて歩く間に、權太郎は大月樓の左近と云ふ越後生れの二十六歲になる娼妓と馴染みを重ねました。此の左近と云ふ娼妓は、本名を中林はなと云ひ、越後新發田に生れて、妙齡になりましたが、十七八歲の頃には男を知つて、一時、長野の權堂で藝妓を勤めて居た事があります。その頃、日本橋の受負師石川傳衞に落籍されて、妾となつて居たのですが、石川の本妻の藝妓上りと喧嘩して、石川の宅を飛び出してしまひました。そして、大月樓に六年六百圓で身賣した時、その金は銀行へ預けて、利殖を計つて居たと云ふ程の女ですもの、權太郎一人を手玉に取るのは、何でも無い朝飯前の仕事でした。權太郎は又、久しく求めて居た女を、初めて左近に得た嬉しさに、いよ〳〵店の方へは顏出しもせず、毎日毎夜、大月樓に登つては、左近の色香を樂んで居ました。四十年から四十一年の秋までに、左近のために費つた金が、二千圓内外に達したと云ふに見ても、その熱度の激しかつた事が知られませう。

　左近は二十六歲の年增になるまで、お職女郎として腕を揮つた女ですもの、權太郎に對しても、あらゆる秘術を盡して、其の歡心を買ひました。妻子を失つた淋しき遣る瀨なさに、悶え心地で居た權太郎が、左近一人に迷ひ込んだのも、別に不思議な事ではありますまい。果は女の方から、自由な身體にして下さいと迫ると、權太郎も亦、左近を自分一人の手活の花として眺めやうと決心して、四十一年の秋には、源氏名の左近を捨て、本名の中林はなにして遣りました。そして亡妻や亡兒の靈に對しても、又店の者に對しても、××市の家に入れるのは面目ないとて、權太郎は大森八景

坂上に、十四五圓の家を借りて、其所に左近のおはなを住はせ、自分は大森から横濱の店へ、毎日通勤することに極めました。

四、八景坂上の妾宅

大森八景坂の妾宅に、左近を手活の花として眺める様になつてから、權太郎は初めて遊蕩三昧から脱けました。妾宅には女中と飯炊き婆二人に、型の様な猫を飼つて、樂しい月日が續きさうに見えましたが、世間の事はなか〳〵さう誂へ向には行きませんでした。

何うせ長い間、娼妓を勤めて居た程の女ですもの、左近の貞操に就いては、權太郎も餘り信用しては居ませんでした。從つて自分一人の手活の花に圍つて、明け暮れ眺めて居ながらも、心の底には一種の不安があつて、何か知ら嫉妬がましい氣持で、左近の一擧一動を眺めて居ました。横濱の羽衣座に出て居た壯士俳優で、秋月勳と云ふ若い男が、以前から左近と深い馴染の間柄で、果は左近の情夫の様な關係になつて居たことが、何時も激しい嫉妬の種になつて居ました。けれども、自分が手活の花にした後までも、秋月と密會を重ねて居らうなどゝは、夢にも思つたことがなく、權太郎は毎朝、大森から××市の店に通つて、久しい間、番頭や手代に委ねて居た店の用務を處理して、日暮れ頃に大森の妾宅へ歸るのを、何よりの樂しみに暮して居ました。

國家の爲めに一人息子には先立れ、それが原因となつて、女房までも死なした權太郎にとつては、左近のおはなが唯一つの慰藉でありました。足掛四年の間と云ふものは、前後の思慮も無い二十歳代の若さに返つて、隨分いろ〳〵と馬鹿な眞似をしましたが、もう自分もこゝらで堅くならなければ、反つて世間の嘲笑を受けやうと考へました。そして、左近のおはなの色香には、心も身も溶ける程に迷い込で居ながら、おはなを後妻にして、大和屋の世繼を得たいと云ふ様な考へは、少しも起りませんでした。自分の一代だけ何うにか遣つて行けば、後は何うなつても宜いと云ふ様な、

捨鉢な氣持だけは何うしても失せませんでした。娼妓上りの女を妾にして、それを一生涯の道連れとして世を送るのが、自分の定つた運命だなと思ふ時、權太郎の心には、遣る瀨ない淋しさが湧くのが例でしたが、强て自分の氣持を引立せる樣に努めて居ました。何事も考へまい思ふまいとして、晩酌の一二合に陶然と醉ますと、世界は何時も權太郎と左近の二人ぎりになつて、八景坂上の妾宅の夜には、折々、痴話や口說が嵩じて、聲高に罵り合ふ樣な事もありました。

××市の店で商ふ織物の事に就いて、權太郎が京都の取引先に行かねばならぬ事になり、二三泊の豫定で大森の妾宅を出ましたのは、四十二年の櫻花の頃でありました。先づ××市に下車して、店へ立寄つて見ますと、京都の取引先から既に着荷して居て、わざわざ此方から出掛ける必要は無くなつて居ました。けれども折角、旅支度をして出掛けたものですから、此のまゝ、大森へ引返すのも可笑しいと思ひ、幸ひ沼津の取引先と談合せねばならぬ筋合がありましたので、權太郎は沼津まで行かうと思つて、其の日の午後四時頃、横濱の停車場まで馳せ付けました。恰も直江津行の下り列車が着いた時で、プラットホームは乘客と下車客との往來で、何となく騷然として居ました。權太郎は何の氣もなく二等室に入らうと思つて、車内を見渡しましたが、其の時ふと閃電の樣に、權太郎の眼に映じましたのは、若い女と男との二人連が、如何にも睦しさうに腰掛けて居る姿でありました。

ホンの一瞬間でしたけれど、權太郎の眼には、其の女の橫顏や背恰好が、左近のおはなに相違ないと見受けられました。それにしても連の若い男は、左近と何んな關係のある男であらうと思ふと、權太郎は殆ど昏倒せんばかりに逆上して、プラットホームに立ち竦しました。自分が二三泊の豫定で京都へ行くと云つたので、その不在中を幸ひに、昔馴染の男と逢引して居るに違ひないと思ひながらも、若しや他人の空似ではあるまいかと云ふ樣な、果敢い事を賴みにしたりしました。權太郎は、沼津へ行かねばならぬ用向などは忘れ

てしまつて、空しく滊車の出て行くのを見送りながら、半は物狂はし氣持になつて、大森の妾宅へ引返しました。横濱驛で見た女は左近ではなく、左近はチヤンと大森の宅に居て、今頃は風呂上りの化粧して、夕餐の膳に對つて居るであらう、何うか左樣であつて欲しいと心に念じながら、大森の宅に歸りました。

けれども家には、女中と飯炊き婆が居るばかりで、左近は午後に出たぎり、まだ歸らないと云ふことが判りました。さては横濱驛で見た男連れの女が、左近のおはなに相違なかつたかと思ふと、權太郎の心は嫉妬の炎に燃えて、起つても居てもジツとして、居られなくなりました。女中や飯炊きは、口を揃へて、

「横濱のお知合の許へ行つて來ると仰いましたから、明日はお歸りになりませう」

と慰めましたが、權太郎には左近の樣子のたゞならぬ事が、一々手に取る樣に判る氣持がしまして、其の夜は一睡もすることが出來ずに明けました。

五、不義者を探ねて

嫉妬に眼の眩んだ權太郎は、翌朝フラ〳〵と大森の宅を出て、左近の行く方を探ね出さうとしました。自分を捨てゝ逃げる積であるか、又は一時の浮氣心であるか、何れにせよ探ね出して、其の本心を聽いた上で、別れるものなら別れてしまはうと決心しました。

娼妓を勤めて居た横濱は勿論、女と男とが逢ふ瀬の夢を樂しむに適い場所は、一ケ所も殘らず探ねて見ようと覺悟して、權太郎は血眼になつて歩きました。金澤から逗子、葉山を經て、鎌倉、江の島の方面も探しましたし、また小田原から湯ケ原、伊豆山、熱海より、箱根の方まで探し歩きましたが、何處にもそれらしい二人の姿は見えませんでした。大森を出てから三日目の午後二時頃には、權太郎も失望と落膽とで喪心した樣になつて、疲勞し切つた身體を國府津舘の二階に横へました。此の上は警察へ捜索願でも出すか、或は女の方から歸つて來るのを待つか、二つに一つしか途は

無いと覺悟しながらも、權太郎は何うしても思ひ切ることが出來ませんでした。

もう駄目だとは諦めて居ても、念のためだと思つて、お給仕に出た女中に向つて、二人に似た男女の事を訊ねて見ました。女中は權太郎の熱心な話を詳しく聞いて居ましたが、何か思ひ當りがあると見え、

「若しやお人違ひかも知れませんが、お話の人柄で齡も恰度同じ位のお二人連が、この五時の滊車で、横濱の方へ歸ると云つて居られます。何ならば停車場で、それとなく御覧遊ばしましては何うですか、箱根か熱海かのお歸途らしく、手前どもでも唯の御夫婦とはお見受け申しませんですよ」

と話しました。權太郎は女中の話を聽くと、三日の間、落着いて飯を食ふ暇もなく、諸所方々を探ね歩いた甲斐があつたことを、心から喜びました。そして、女が左近であつたならば、此の怨恨と憤怒とを何うして晴して遣らうかと、それのみを種々と思案しました。

五時少し前に國府津驛へ行つて、わざと三等待合室の薄暗い一隅に腰掛けて、男女二人が出て來るのを待受けて居ました。女中の話に違はず、國府津館からは男女二人連の客が出て、上りの二等切符を二枚買ましたが、それが左近であるかないか、權太郎には何うしても判りませんでした。一圖に思ひ詰めて逆上して居た眼には、當の本人を五六間離れて見受けて居ながら、更に見當が付かなかつたのでせう。男女二人は二等に乘り、權太郎はわざと二等室に近い三等に乘つて、滊車の進行中も、絶えず二人の樣子を窺ひましたが、女は左近の樣に見へたり、左近ではない樣に思はれたりして、何うしても判斷が付きませんでした。

滊車が横濱に着いた時、二人は一所に下車しましたので、權太郎も續いて下車して、二人の後を尾行しました。男は停車場の出口で女に別れ、人力車に乘つて何れへか立去りましたが、女は品川行の電車に乘つて、東京方面へ歸る樣子が見へました。左近の行く方を探すために、人心地を失ふまでに逆上して居た權太郎も、電車が神奈川を出る頃に、初めて女が左近であつた事

を確めました。自分が京都へ行つたと思つて、その不在中を幸にして、三日三夜を情夫と共に遊び戯れて居た左近の姿を見た時、權太郎の心は嫉妬の炎に燃えて、初めて恐しい殺意を起すに至りました。一年餘の月日を、左近の樣な浮氣女のために過したかと思ふと、權太郎は殘念で〱堪らなくなりました。心も身も左近に打込んで、左近一人に依つて後半生を生き樣と覺悟して居た權太郎が、斯うして左近に裏切られたことを悟つた時には、もう普通の分別も常識も無くなつて居ました。

　左近は大森で下車して、八景坂上の宅へ入りましたが、見へ隱れに權太郎が尾行して居るとは、少しも氣付かない樣子でした。權太郎は左近に氣取られぬように、續いて妾宅の臺所に入つて、先づ鋭利な出刃庖丁を懷中して、奥の室の椽の下に潛り込みました。

――今こゝで左近を殺すと云ふことは、「國家のため」に死んだ息子福太郎に對しても、亦それが原因で病死した愛妻に對しも、眞に面目次第もない事である。然し大和屋の暖簾も、佐藤の一家も、相續人の無い今となつては、自分の一代限りで滅亡すべき運命に陷つて居る。死だ妻子を現世に呼び還し得ない以上は、自分の死と共に佐藤の一家は亡びてしまうのが當然であり、またそれが幸ひであるかも知れない。「國家のため」に妻子を奪はれた自分は、自分を捨て他の男に許した不貞の左近を殺して、自分も亦死んでしまうのが、自分の行くべき最後の途であらう。――

　出刃庖丁を懷中した權太郎は、椽の下に潛みながら、一時間餘も樣々の思に惱みました。たとへ娼妓上りの女でも、自分の生涯を任せた女に、裏切されたり背かれたりしては、嫉妬の炎に心が狂つて、遂には最後の手段に出るより他には、何うする事も出來なくなつてしもうものだと見へます。

六、裸體を見た刹那

　權太郎は椽の下に潛んで、左近を一思ひに殺す機會を待つて居ましたが、樣々の感慨が泉の樣に湧いて、

容易に手を下すことが出來ませんでした。女を殺してしまへは、自分も世に亡い者になると云ふ恐怖心よりも、權太郎の心を強く波立せましたのは、死だ妻子や家門に對して申譯が無いと云ふ一事でした。

左近に逢つて、其心を確め樣かとも思ひましたが、豐な肉體を持つて居るより他には、人間として大切なもの何一つも有つて居ない女に、何を云つても駄目な事だと諦めてしまひました。そして自分は、何うしても此の女を殺すより他には、行くべき道が無いと云ふことを、自分には相當の理由ある道理として考へました。八疊の室へ寢そべつて居る處へ躍り込で、一突きの下に殺してしまはうか、又は椽側へ立出た處を倒して、滅多斬にしてやらうかと、果は殺害の時が來るのを、何か樂しい事でも、嬉しい事でも待つ樣な夢心地になつて、一心に待受けて居ました。

昔馴染の情人と共に、樂しい三日の夢を見て歸つた左近は、自分の旦那が自分の室の椽の下で、自分を殺さうと待受けて居らうなどとは夢にも知らず、女中を相手に留守中の事を何かと尋ねて居ました。そして旦那の樣子が變であつたと聞いた時、左近は娼妓らしい卑しい捨鉢な口調になつて、

「私は旦那に捨られても、困る女ぢやないよ」

と云ひながら、便所に入つて用を達した後、

「ねえ、旦那の嫉妬にも困つてしまうよ」

と笑つたりしました。恐しい運命の手は、板一枚の椽の下まで押寄せて居るのに、それを知らずにのん氣らしく笑つて居た左近の顏には、男を男と思はぬ横着な樣子が漲つて居ました。

左近はやがて風呂に入ると云つて、赤裸々になつて浴室の方へ行きました。今まで椽の下に潜んで、殺害の機會を待つて居た權太郎は、左近の豐滿な裸體の姿を見た刹那、何とも名狀し難い氣持になりました。そして前後の分別も何もなく、殆ど狂亂の體になつて躍り出で、物をも云はず左近の胸を目がけて、出刄庖丁を突き刺した時、權太郎は初めて我に復りました。妻子の位牌を懷中して、その足で直ぐ、呼吸急き駐在所

へ馳け付けて、妾殺しの大罪を自首しましたのは、兇行があつてから、僅に一時間も經たない後の事でありました。

本人は、左近の裸體姿を見た時に、たゞムラ〳〵として、一氣に殺す心になつたと云ひましたが、私はこゝが頗る面白い事だと思ひます。女を殺すと云ふことは、既に決意して居ても、種々の未練や思ひ出があつては、容易に手を下し得るものではありません。果は殺害の時を失つたり、殺害の意志を飜したりして、無事で濟んだ様な例も、世間には澤山有る事でせう。けれども權太郎は、左近が裸體になつて、風呂場へ入らうとした刹那に、その豐滿な肉體を見て、先づ感じたのは、女の肉體に依つて受けた快感の思ひ出と、それに伴ふ强烈な嫉妬であつたに相違ありません。殊に容貌の美しい女よりも、肉體の豐な女を漁り歩いて、漸く左近を我が者にした權太郎にとつては、人一倍女の肉體に對する愛着心もあれば、また其の肉體から受けた快感の思ひ出も、人一倍激しかつたに相違ありません。

私は佐藤權太郎の物語を聞いて、左近を殺した無智狂妄の行爲には、少しも同情を表しませんが、日露戰爭のために妻子を失つて、それが動機となつて酒色に溺れ初めた衷心の苦悶に對しては、淺からぬ同情を表しました。そして、妻子を失つた五十に近い男が、女の「肉」のみに依つては生きる事が出來ず、更に其の「心」に依つて、本能の欲求を滿足させやうとする傾向を見て、種々の事を考へました。若い男を情夫として隱れて樂むだ左近の所業を、不貞と罵つて嫉妬した權太郎は、餘り左近の歴史と云ふものを度外視して居ました。女郎上りの左近に向つて、自分一人を守れと迫つても、若い女の左近にとつては、又人知れぬ物足りなさがあつたでせう。要するに佐藤權太郎の妾殺しの犯罪は、何でもない市井普通の出來事に過ぎませんが、たゞ「妾を殺すまで」に辿つた權太郎の徑路が、ロオマンスの色彩に富で居ると思ひます。

私は辯護を快諾して、××地方裁判所の法廷に立ち

ましたが、法律上では大に爭ふ餘地が有りませんでした。私はたゞ殺害前後の事情を述べて、思慮分別を缺いで居た間の殺人行爲であるから、宜しく故殺を以て論ずべきものだと主張して、犯罪を釀すに至つた遠因から動機までを、詳細に申立ました。けれども裁判所の見るところでは、權太郎が左近の所在を搜し歩いた三日前から、犯罪の決意があつたものとして、謀殺罪に問はれました。たゞ自首し出た爲めに、死刑から一等を減ぜられて、無期徒刑の言渡を告げ、權太郎は間もなく北海道の釧路監獄に收監されましたが、明治天皇崩御の際、減刑の恩典に浴して、有期徒刑になりました。監獄では善行賞も頂いて居るさうですから、此の後三四年も經ましたら、或は假出獄の恩命に浴して再び娑婆へ出られる樣になるかも知れますまい。

七、出獄後の運命は

大和屋の店は、權太郎の入獄と共に閉店する事により、私は其の跡始末にも關係しましたが、主人が餘り遊び過ぎたので、番頭手代も宜い氣になつて店の金を費消し、一家の財政は大亂脈に陷つた居ました。

番頭手代の費消高や、店の損失と負債とを合算しますと、何萬と云ふ金でしたが、それでも小一萬圓の財產は殘つて居ました。債權者は大概放棄してしまつて、中には證文を返した者もありますが、權太郎は出獄した上で、必ず負債だけは償却したいと云つて居ます。私は店の殘物や若干の財產を保管して、權太郎が出獄の日を待つて居ますが、本人からは折々消息があつて、神妙に苦役して居るさうです。

・こゝに最も不思議に思ひますのは、殺された左近が持て居る筈の金が、何うなつたか少しも判らない一事です。大月樓に身賣した六百圓と、落籍される時、權太郎から貰つた四五百圓と、少く見積つても千圓位の金は、持て居る筈でしたが、銀行に預金したのか、又は情夫に取られたのか、更に何の手がゝりも有りませんでした。越後生れの女だけあつて、肉體を資本(もとで)にして稼いだ金は、人知れず何處かに貯へて、老後の計を

立て居たのかも知れません。

釧路監獄で苦役して居る佐藤權太郎は、前にも言つた樣に、二三年後には假出獄を許されるかも知れませんが、私は權太郞が出獄後の運命に就いて、今から種々と思ひ煩つて居ます。刑餘の人でも、心から悔悟した者には、幸福の多い新生涯を送らせたいものですが、權太郞は再び世に出て、老後を何う云ふ風に送るでせうか。單り佐藤權太郞のみでなく、多くの出獄人の運命に就いては、社會それ自身も考へて遣らねばなりますまい。それが社會自體の幸福でもあれば、また人類一般の幸福を增進する所以の道かとも信じます。

殊に日露戰爭の生んだ悲劇に出發して、斯うした大罪を犯すに至つた佐藤權太郞の樣な男のためには、罪を憎んでも人を憎まず、その後半生を眞面目に送らせたいと思ひます。たゞ其の性格が、餘りに囚人化してしまつた者は、それを濟度するにも種々の困難を覺えますが、我が佐藤權太郞だけは、依然として當年の大和屋の旦那の樣な顏をして、再びこの世間に見參することが出來ませう。

A辯護士と私とは、二三本の麥酒に陶然としながら、以上の長物語を語つたり聽いたりした。

お酌をして居た年增の女中は、二人の談が終るのを待つて、ニコ〳〵笑ひながら、

「その左近さんと云ふ女は、私も一二度見掛けたことが御座いますよ。色の白い中肉中背の女で、恐しく色ッぽい、何うしても女郞上りと云ふ風つきでしたわ。新派の馬の脚ばかしでなく、いろんな情夫がありました樣で、旦那の留守には每日の樣に、方々へ出掛けて居たさうで御座います」

と語つた。A辯護士と私の問には、主として「殺した男」が問題になつたが、女中は「殺された女」の方を問題にした。そして「何うして殺したのでせう」とは問はずに、「何うして殺されたのでせう」と云つては、

「女は、あなた弱い者ですわねえ」

などゝ、ひどく考へ込んだりして居た。

容易に手を下すことが出來ませんでした。女を殺してしまへは、自分も世に亡い者になると云ふ恐怖心よりも、權太郎の心を強く波立せましたのは、死だ妻子や家門に對して申譯が無いと云ふ一事でした。

左近に逢つて、其心を確め樣かとも思ひましたが、豐な肉體を持つて居るより他には、人間として大切なもの何一つも有つて居ない女に、何を云つても駄目な事だと諦めてしまひました。そして自分は、何うしても此の女を殺すより他には、行くべき道が無いと云ふことを、自分には相當の理由ある道理として考へました。八疊の室(ま)へ寢そべつて居る處へ躍り込で、一突きの下に殺してしまはうか、又は椽側へ立出た處を倒して、滅多斬にしてやらうかと、果は殺害の時が來るのを、何か樂しい事でも、嬉しい事でも待つ樣な夢心地になつて、一心に待受けて居ました。

昔馴染の情人と共に、樂しい三日の夢を見て歸つた左近は、自分の旦那が自分の室の椽の下で、自分を殺さうと待受けて居らうなどとは夢にも知らず、女中を相手に留守中の事を何かと尋ねて居ました。そして旦那の樣子が變であつたと聞いた時、左近は娼妓らしい卑しい捨鉢な口調になつて、

「私は旦那に捨られても、困る女ぢやないよ」

と云ひながら、便所に入つて用を達した後、

「ねえ、旦那の嫉妬(やきもち)にも困つてしまうよ」

と笑つたりしました。恐しい運命の手は、板一枚の椽の下まで押寄せて居るのに、それを知らずにのん氣らしく笑つて居た左近の顏には、男を男と思はぬ横着な樣子が漲つて居ました。

左近はやがて風呂に入ると云つて、赤裸々(まつぱだか)になつて浴室の方へ行きました。今まで椽の下に潛んで、殺害の機會を待つて居た權太郎は、左近の豐滿な裸體の姿を見た刹那、何とも名狀し難い氣持になりました。そして前後の分別も何もなく、殆ど狂亂の體になつて躍り出で、物をも云はず左近の胸を目がけて、出刃庖丁を突き刺した時、權太郎は初めて我に復りました。妻子の位牌を懷中して、その足で直ぐ、呼吸急き駐在所

へ馳け付けて、妾殺しの大罪を自首しましたのは、兇行があつてから、僅に一時間も經たない後の事でありました。

本人は、左近の裸體姿を見た時に、たゞムラ〳〵として、一氣に殺す心になつたと云ひましたが、私はこゝが頗る面白い事だと思ひます。女を殺すと云ふことは、既に決意して居ても、種々の未練や思ひ出があつては、容易に手を下し得るものではありません。果は殺害の時を失つたり、殺害の意志を翻したりして、無事で濟んだ樣な例も、世間には澤山有る事でせう。けれども權太郎は、左近が裸體になつて、風呂場へ入らうとした刹那に、その豐滿な肉體を見て、先づ感じたのは、女の肉體に依つて受けた快感の思ひ出と、それに伴ふ强烈な嫉妬であつたに相違ありません。殊に容貌の美しい女よりも、肉體の豐な女を漁り歩いて、漸く左近を我が者にした權太郎にとつては、人一倍女の肉體に對する愛着心もあれば、また其の肉體から受けた快感の思ひ出も、人一倍激しかつたに相違ありません。

私は佐藤權太郎の物語を聞いて、左近を殺した無智狂妄の行爲には、少しも同情を表しませんが、日露戰爭のために妻子を失つて、それが動機となつて酒色に溺れ初めた衷心の苦悶に對しては、淺からぬ同情を表しました。そして、妻子を失つた五十に近い男が、女の「肉」のみに依つては生きる事が出來ず、更に其の「心」に依つて、本能の欲求を滿足させやうとする傾向を見て、種々の事を考へました。若い男を情夫として隱れて樂むだ左近の所業を、不貞と罵つて嫉妬した權太郎は、餘り左近の歷史と云ふものを度外視して居ました。女郎上りの左近に向つて、自分一人を守れと迫つても、若い女の左近にとつては、又人知れぬ物足りなさがあつたでせう。要するに佐藤權太郎の妾殺しの犯罪は、何でもない市井普通の出來事に過ぎませんが、たゞ「妾を殺すまで」に辿つた權太郎の徑路が、ロンスの色彩に富で居ると思ひます。

私は辯護を快諾して、××地方裁判所の法廷に

ましたが、法律上では大に爭ふ餘地が有りませんでした。私はたゞ殺害前後の事情を述べて、思慮分別を缺いで居た間の殺人行爲であるから、宜しく故殺を以て論ずべきものだと主張して、犯罪を醸すに至つた遠因から動機までを、詳細に申立ました。けれども裁判所の見るところでは、權太郎が左近の所在を搜し歩いた三日前から、犯罪の決意があつたものとして、謀殺罪に問はれました。たゞ自首し出た爲めに、死刑から一等を減ぜられて、無期徒刑の言渡を告げ、權太郎は間もなく北海道の釧路監獄に收監されましたが、明治天皇崩御の際、減刑の恩典に浴して、有期徒刑になりました。監獄では善行賞も頂いて居るさうですから、此の後三四年も經ましたら、或は假出獄の恩命に浴して再び娑婆へ出られる樣になるかも知れますまい。

七、出獄後の運命は

大和屋の店は、權太郎の入獄と共に閉店する事により、私は其の跡始末にも關係しましたが、主人が餘り遊び過ぎたので、番頭手代も宜い氣になつて店の金を費消し、一家の財政は大亂脈に陷つた居ました。

番頭手代の費消高や、店の損失と負債とを合算しますと、何萬と云ふ金でしたが、それでも小一萬圓の財產は殘つて居ました。債權者は大概放棄してしまつて、中には證文を返した者もありますが、權太郎は出獄した上で、必ず負債だけは償却したいと云つて居ます。私は店の殘物や若干の財產を保管して、權太郎が出獄の日を待つて居ますが、本人からは折々消息があつて、神妙に苦役して居るさうです。

・こゝに最も不思議に思ひますのは、殺された左近が持て居る筈の金が、何うなつたか少しも判らない一事です。大月樓に身賣した六百圓と、落籍される時、權太郎から貰つた四五百圓と、少く見積つても千圓位の金は、持て居る筈でしたが、銀行に預金したのか、又は情夫に取られたのか、更に何の手がゝりも有りませんでした。越後生れの女だけあつて、肉體(もとで)を資本にして稼いだ金は、人知れず何處かに貯へて、老後の計を

立て居たのかも知れません。

釧路監獄で苦役して居る佐藤權太郎は、前にも言つた様に、二三年後には假出獄を許されるかも知れませんが、私は權太郎が出獄後の運命に就いて、今から種々と思ひ煩つて居ます。刑餘の人でも、心から悔悟した者には、幸福の多い新生涯を送らせたいものですが、權太郎は再び世に出て、老後を何う云ふ風に送るでせうか。單り佐藤權太郎のみでなく、多くの出獄人の運命に就いては、社會それ自身も考へて遣らねばなりますまい。それが社會自體の幸福でもあれば、また人類一般の幸福を増進する所以の道かとも信じます。

殊に日露戰爭の生んだ悲劇に出發して、斯うした大罪を犯すに至つた佐藤權太郎の様な男のためには、罪を憎んでも人を憎まず、その後半生を眞面目に送らせたいと思ひます。たゞ其の性格が、餘りに囚人化してしまつた者は、それを濟度するにも種々の困難を覺えますが、我が佐藤權太郎だけは、依然として當年の大和屋の旦那の様な顔をして、再びこの世間に見參することが出來ませう。

Ａ辯護士と私とは、二三本の麥酒に陶然としながら、以上の長物語を語つたり聽いたりした。

お酌をして居た年増の女中は、二人の談が終るのを待つて、ニコ〳〵笑ひながら、

「その左近さんと云ふ女は、私も一二度見掛けたことが御座いますよ。色の白い中肉中背の女で、恐しく色ッぽい、何うしても女郎上りと云ふ風つきでしたわ。新派の馬の脚ばかしでなく、いろんな情夫がありました様で、旦那の留守には毎日の様に、方々へ出掛けて居たさうで御座います」

と語つた。Ａ辯護士と私の間には、主として「殺した男」が問題になつたが、女中は「殺された女」の方を問題にした。そして「何うして殺したのでせう」とは問はずに、「何うして殺されたのでせう」と云つては、

「女は、あなた弱い者ですわねえ」

などゝ、ひどく考へ込んだりして居た。

若干のお會計を濟まして、二人連立つて淸香園を出た時、大森の夜は十時を過ぎて居た。初夏と云つても海邊の夜は未だ冷たくて、薄い外套が恰度好い着心地であつた。七八年前に妾殺しのあつた八景坂上の方は陰森として、左近の魂魄が迷うて出るには、眞に誂へ向の景色に見へた。

長い汽車が、たつた今、通つたところである。

（五月十五日）

次は、某縣某町にありし毒殺事件を背景として、地方的色彩に富める素封家の秘密事件を描く。題は都合ありて暫く

△△△△△

とのみするに止む。尚、旅團長邸内の小間使殺し、遺傳的犯罪の哀話、その他二三の戰慄すべき好材料あり。號を追うて讀者の淸覽を乞はんとす。

時局の人、裏面の人

鐵拳禪

▼大隈内閣は總選擧の結果、絶對多數黨與の上に、其基礎が漸く安定した様な者の、時々元老に搦手から攻め立てられるので、却々安心が出來ないさうだ。と云ふのは、大隈伯の現内閣を組織するに至つたのは、非政友の輿論に推されたに相違ないが、夫れを奏薦したのは元老——井上侯が主唱し、山縣公が同意した——であるから、彼れは議會などで、元老何かあらんと、張つても、始終元老に色氣を見せなければならぬのださうだ。

▼政治上の閲歴から云へば、大隈伯は、山縣公や井上侯や大山公の先輩と見ても可いが、先づ同輩と見るのが無難であらう。彼等が西郷、木戸、大久保の下風に立つて居る時、大隈伯は若輩ながら參議の椅子を占めて居た。松方侯などは、伯の下僚で働いて居たから、無論井上侯などよりも遙か後輩である。夫れが今日元老で口八釜しく云ふのだから、大隈伯

も尠からず癪に障るのだが、棺桶に片足踏み込んだ積りで我慢して居るだらうとの事だ。

▼大隈伯は參議以來、政治上に得意の地歩を占めて居れば、最う疾に元老の仲間に這入つてる人だ。佐賀の出身なる悲しさには、薩長の勢力に驅逐され、壓迫され、數次政治上に失脚して、退隠同然の有様となつて居たのだ。で、彼れの政敵は、昔は西郷、下つては山縣等の軍閥であるから、在野當時は口を極めて薩長を罵り、元老政治を非難したものだ。然るに現内閣の首相になつてからと云ふもの、從來の惡感情を拾て、年來の主張を一擲したかの様に、元老の意を迎へて居る。是れでは輿論政治でなくて、元老政治だと非難されても、何等辯解の辭が無からう。

▼今次の對支外交は更に甚しいもので、國民外交を口にした加藤外相までが、元老の意見を叩いて、事を運んで居た。如何に大隈伯は『高遠の理想』を吹き立てゝも、輿論政治が元老政治となり、國民外交が元老外交となり、憲政の逆轉が事實の軌條(レール)に乘つて來るから妙では無いか。夫れを知りつゝ無責任の元老を引張(ひっぱ)り出して會議を開き、内閣自身の責任で解決せぬのは、軍閥に呪咀されるのが怖(こわ)いからださうだ。

▼日支交渉が愈よ行詰つて、最後通牒を發しなければならぬ羽目となつた。固より之が豫定の方針であるから、閣議では何の異存のあらう筈はない。直ちに五月四日元老會議を開き、翌日御前會議を開いて、國家の大事を決行する豫定であつたが、元老間に異議が起つて、閣議と疎隔を來したので、五日は大浦内相が元老を拜み倒す爲めに費し、六日元老會議の議を纏め、引續き御前會議を開くを得た始末で、外交上に非常な手順の狂ひを生じた。

▼元老會議の出席者は、山縣公、大山公、松方侯の三人で、井上侯は書面で以て其の意見を山縣公まで通じて置いた。山縣公にせよ、井上侯にせよ、日支交渉開始以前に加藤外相の相談を受け、對支要求草案に就て意見も述べ、贊成をしてゐるのだから、今更反對する譯に行かない。大山公はあの通りの人物だから、格別可否を言はない。　り盛んに現内閣に食つて掛つたのは、松方侯であつたさうだ。

▼松方侯は薩派の元老で、山本權兵衞伯が苟合内閣組織當時、特に政友會と接近したが、今以て聲息を通じて居る。薩派では山本伯の横死後如何にもして長閥に復讎しようとの執念があり、政友會は又如何にもして現内閣を破壞しようとの陰謀を捨てず、機を見て決行すべく待ち構へて居るのだから、一問題の起る毎に意外の波瀾を生ずるのだ。老いたりと雖も松方侯は、最う一度内閣を引受ける野心があるので、政友會の策士連に煽てられては、現内閣を突撃する。今回の事なども、憂國の至誠から、其の手に乘つたらうとの事だ。

▼駐支公使の人選を得ないことを井上侯は非難して居たが、松方侯も亦不滿に感じて居た。而して其の非難の主點は、對支外交の時機、手續、人物等に遺憾あると、戰後に影響する列國との關係、財政狀態に關する善後策等で、可成戰爭を避けようとするにあつた。で、『加藤が自ら北京に乘り込んで、最う一談判試みたら何(ど)うだ』と云ふやうな說も出た。

此の時ばかりは、流石の加藤男も其の金口を思ひ切り噛んで、頭を横に振つたさうだ。

▼元老會議と閣議とが斯う意見の扞格を來しては、『何れ能く熟考しませう』と云つて、元老と袂を別つより外仕方がなかつた。そこで、四日の夜に徹宵閣議を凝し、何うせ讓歩序だから元老にも讓歩しようとの事に一決し、黑雲の間に一點の星光を見出でた樣な氣分で、翌日は大浦内相は元老を歷訪し、例の第五項讓歩を條件として妥協を求めた。其の結果骨拔通牒を發する事となつたが、若し之が内閣側で讓歩せず、元老も亦自說を固執して和せず、互に陛下に伏奏する事となれば、内閣總辭職は免れぬ數であつたらう。

▼第五項の讓歩は袁政府の思ふ壺に嵌つたので、砲火を開く迄もなく、九日の午前には早くも要求承認の回答が日本公使館に交附された。東洋平和の爲めに袁總統も喜べば、大隈首相や加藤外相も祝杯を擧げた。が、喜ばないのは、兩國の國民で、支那人は屈辱だと憤慨すれば、邦人は失敗だと非難する。成敗の觀察は其人に依つて異なるのが當然だが、現内閣の外交の支那以上の失敗なる事は、何人と雖も認めざるを得ない。殊に人騷がせに陸海軍を動かしたり、元老に制肘されて當初の方針を變更したに就ては、外交の拙劣無能を表白するものである。

▼然るに政爭は妙なもので、民間には公平な見地から遠つて、現内閣の成功を謳歌して居る一派がある。夫れは國民義會の人々で、非政友を標榜し、對支外交の成功を說き、政友會を襤褸糞に攻擊して居る。即ち其の人々は、大竹貫一、藏原惟昶、黑岩周六、小島高踏、石川半山、中島氣崢、的野半介、松平康國等、同志會乃至隈伯後援派の諸君である。滿更政府筋の意を承けて騷いでるでも無さ相だが、世間からは現内閣の提灯持と見られてゐる。

▼處が、其の向うを張つて大言壯語し、今日にも内閣を轉覆するやうな、燒打的氣焰を揚げてる一派がある。夫れは國民外交同盟會の人々で、外交の失敗を痛擊してゐる。其の顏觸を見ると、佐々木照山、伊東知也、内田良平、田邊安之助、福田和五郎、小久保喜七、小川平吉、田中舍身と云ふ樣な、支那浪人又は政友會、國民黨の諸君である。彼れにも政變毎に變色した人間がゐるが、是れにも亦芳ばしい人物ばかりは居ない。支那浪人を看板にして、徒らに大聲疾呼してるやうな傾きがある。何れにせよ、も少し眞摯な態度で、政府を鞭韃するなり、國民を啓發するなりしなければ駄目だ。

▼仲小路廉君は對支外交の失敗に憤慨して議會前から現内閣を破壞せずんば已まざるが如き口吻を洩して居たが、元老が毒を盛らない限り輙く斃れさうでない。一體今の黨人は、内閣を破壞し、内閣を乘取るのを、唯一の事業としてゐる。新内閣が出來た翌日から、直ぐ破壞の方略を講ずると云つた風である。が、新内閣が出來れば、其の政策を實行させ、其の政策が可けなくて、民心が離反した時に、斃せば可いではないか。仲小路君は黨外の人だから、破壞の爲めに破壞する樣な偏見を抱いてるのでは無からうが、何うせ行るなら貴族院で堂々と現内閣の責任を問うて

貰ひたいものだ。

▼陸海軍の反目で、可笑しな風になつて居た臺灣總督は安東貞美男が新任され、佐久間左馬太伯は愈よ圓滿辭職をした。佐久間伯は五年計畫の理蕃事業を兎も角完成したので、骸骨を乞うて居た。處で、陸海軍の均勢上、其の後任には海軍の將官を推さうと云ふ事になり、略人選を終つたのであつたが、田中義一が山縣元帥に呼いだ結果、陸軍側の猛烈な反對運動が起つて、中止するの餘儀なきに至つた。夫れならば寧ろ文明的に（無論總督制を改善して）文官を任用すれば可いのだが、陸軍側では矢張大將で、有爵者で、長閥系統の人物でなければ承知せぬので、種々人選の結果安東男を推擧するに至つたさうだ。

▼安東男は明治三十一年に、混成旅團長として臺灣に赴いた事あるだけで、さう大した臺灣通でない。蕃民統治には適任であらうが、夫れ以上に良民統治や、産業振興や、富源開拓に向つて、如何程の手腕を揮ひ得るかは疑はしい。今や總督府は内臓まで病菌に冒されて、危殆に瀕してゐるのであるから、斷乎たる血精療法を施して、新しい生命の火を點ずるのが刻下の急務である。長閥の情實から生れた安東男が、果して諸種の情實を裁斷して、臺灣統治の成果を收め得るだらうか。

▼安東男と云へば、彼れには安東武雄と呼ぶ弟がある。案外正直者だが、底意地の惡い、ひねくれた人間のやうに思はれてゐる數學家だ。宮城師範の教諭や、地方幼年學校の教授を勸めて居たが、今は少し下落の氣味で遠鄕の中學に教鞭を執つてるさうだ。此の男仙臺に居る際、櫻ケ岡公園の源吾茶屋の長女に熱愛され、井戸に陷つて死ぬの生きるのと云ふ騷ぎをした揚句、終に夫れを娶る事になつたが、夫れ以來貞美君の覺えが芽出たくないさうだ。

▼上院の豫算委員長で、そして論客を以て鳴つた曾我祐準子は、樞密顧問官に祭込まれた。土曜會では多少の打擊を蒙つたが、樞府に活氣を注入する事となつたのは、注目すべき現象である。樞府は明治二十一年に設けられ、當初十二名の定員が、二十五名となり、二十八名に增加した。一昨年六月山本內閣の行政整理で、二十四名に減員し、周布公平男の辭職、船越衛男、青木周藏子、香川敬三子の薨去あるも、其儘補缺せずに居たが、四月末松平正直男の永眠するに至つて玆に曾我子の選任を見たのである。

▼曾我子は往年宮中顧問官に就任したが、日鐵內訌の後を承けて其の社長となつた爲めに辭職し、爾來上院議員となつて奮鬪を續けて來た。で、曾我、谷の兩將軍は政論壇の花形を以て目され、政府の一敵國の觀があつたものだ。谷將軍の歿後は、彼れ獨り硬論を唱へて、上院の清涼劑となつて居たが、歳と共に漸く元氣が衰へ、頭腦も古くなつて、當年の面影が薄らいだやうだ。其の言論は稍奇嶠に失するが、其の意見は穩健であるから、樞府に入つても長閥の遲碌連の間に介在して、依然嚴正中立の態度を持するのであらう。

▼子爵議員の補缺選擧で、農學士の米津政賢君が推薦された。彼れは帝大の出身で、當年三十三歳、女ならば厄年と云ふ所だ。耳が少し遠いせ

ゐか、至つて偏屈な、陰嶮な男の樣に見えるが、夫れ程に不愉快な性でも無さ相だ。舊上總大綱の殿樣の家督で、月寒種畜場の技師は勿體ないと敬遠されて居たが、新に上院に額を出す事になれば、青年雄胄政治家とやらに伍して、體面だけは保つて行けやうと云ふものだ。

▼餘事ではあるが、米津子には二人の姉妹がある。姉は鐵子、妹は容子と云つて、雜草の裡にあつても、芙蓉ぐらゐな豪艷を保つてゐる。姉は松平直敬子に嫁したが、故あつて離緣され、妹は先年分家して、放浪の身となつた。此頃某商店の帳場に、其の姿を現したが、久方振に邂逅つた乳母は、『まあ、お姫樣が――』と、驚きの眼を睜つて居た。

勝負

黒頭巾

其一

●今日、五月十五日、綠陰水の如し。一高對早大の爭覇戰ある可き日なり。富士神社の銀杏樹と樅木との森を潛つて、鳥居の前の富士前小學の同窓會に到る。

●此の日、此の學校卒業生の父兄、南洋より歸來せるものありて、アルコール漬になせる虎ノ胎兒を齎らせり。未だ初毛も伸びざるを見れば、出生前、尙ほ多少の日子を有せし者なるべし。

●我が國に、古來、「虎の子」の如くに大切にするの俚あるは、輸入俚言なるべし。我が國には虎無ければなり。然れども「虎子」の意味、胎兒を意味するやは分明ならず。普通には、胎兒を意味せざりしなるべし。支那の古英雄のいへる、「虎穴に入らずんば虎子を得ず」の說は、虎の虎兒を言ふに非ず、胎兒を意味するやも知れず。虎の胎兒を得るは極めて冒險的なればなり。

●歐米の社會、虎の胎兒を珍重すること、ビリッケンを愛重するが如く、一種の福神と爲すといふ。蓋し、虎の威力あると、胎兒を得るの幸運的、奇勝的なるに由らずんばあらず。

●硝子罎中の虎子に對すれば、灰白にして毛極めて薄く、一見虎らしきを見ず。一束に束ねられたるように蹲まり、臍の緒も一寸五六分許あり。然れども、唯だ口邊、凜然たる意氣を發し、雄風、山谷に磅礴するの慨、眼前、象徴し得て、此の小罎の中に在り。

●吾輩、此の罎中の虎子に對して、始めて「虎穴を探つて虎子を獲る」の壯圖を想像す。一擲乾坤の勝負を爭はん者は、宜しく此の虎子を以て、虎符となして、奇勝を祈る可きなり。

●此の日、國技館、夏場所の初日なる可かりしに、太刀山等の議案提出の爲に紛擾を起し、土俵上の勝負は、一變して土俵外の葛藤となり、龍驤虎嘯の活劇を見るを得ず。此の時に於て、虎子を見るを得たるは、せめてもの慰安と爲すに足らずんばあらず。

其　二

●此の半年は、種々の方面に於ける大勝負を見るを得たるは、最近十年間に於ける快心の現象とせずんばあらず。而して、今年に於ける大勝負に於ては、概ね、全盛の失墜を示す。祇園精舍の鐘の聲、沙羅雙樹の花の色、今年を記する文人の筆に上るべし。

●今年の失墜せる全盛者は、概ね十年の榮華を經過し來れるものなり。政友會、慶應の野球軍、東大の庭球軍渾べて皆然らざるは無し。十年全盛の太刀山の衰運も、或は、今年の中に來らん。而して十年雌伏したる一高の野球軍は突如として勢焔を揚げ來る。

●今の時世に於て、十年の全盛を確保するは、容易の業に非ず。必らずや其の根柢を培養するに、それ以上の準備の歳月を要せずんばあらず。根柢の淺きものは、全盛も亦た短し。

●德川氏の覇業、二百六十餘年、其の養ふところの深きを見る。長閥の盛時も亦た約五十年、其の由來するところ亦た遠し。政友會は十年、淵源、遠からざればなり。

●各種、運動の競技に至つては、一人生理上の全盛力、甚だ短きが故に、十年の全盛を見るは、政治上、五十年の覇權を得るよりも難し。而して今日の一年は、其の內容より見れば、鎖國時代の五年にも、十年にも匹敵す可きものあるを以て、今日以後に於て、德川氏の二百五十年、長閥の五十年の如き、長期の覇者を現出せしめん事は極めて期し易からず。

●今年に於て、各方面に於ける全盛者の失敗は、長期覇權の存續難を表現すると共に、一面に於て、時世の

推移を示す。今年の大勝負の、感興に富める所以ならずんばあらず。

其　三

●天地間、すべて優勝劣敗、適者生存の理法を以て支配せらるゝ以上は、其の戰鬪たると、競爭たるとを問はず。存在者の間に勝負あらざること無し。萬生靈の間、つねに勝負を爲しつゝあり、而して萬生靈に優勝しつゝあるものは、則ち人間ならずんばあらず。

●通般の意味より見たる「三界萬靈」の供養塔は頗る興味あるものたらずんばあらず。佛者は、昔、優勝劣敗の理法を、如何に觀ぜしや。人は、人の爲に冥福を弔ふと共に、萬生靈の爲に、冥福を弔ふの責務を有す。

●草木の間の勝負は、詩趣、畫趣に富めり。彼等が互に表現しつゝある鬪爭の意思は、彼等の自覺せざるものにして、自然の理法の演習が草木に依つて象徵せらるゝものといふ可く、鬪爭の種類より見れば、勿論、一の暗鬪なり。

●萬生靈は、互に相搏つのみならず、同時に、天象と鬪ひつゝあり。人間が萬物に靈たる所以の一は、天象を制せんとする、大膽不敵の魂に在りといふべし。

●人間が天象を利用するは、即ち稍、天象を制しつゝあるなり。然れども人間が、全く天象を制し畢るは、未來永劫、何の時に在るやを知らず。唯だ年時を逐ひて、天象を恐れざるに至るは事實なり。地震、雷、火事、親爺といふは、人間の、尤も恐ろしきものゝように言ひしも、今日の人は、甚だ親爺を恐れず、地震の外、雷、火事を恐れず。地震と雖も、或る程度まで、其の災害を豫防せんとするに至る。

●萬生靈は、皆死す。人間も亦た死す。死ある者、到底、死せざる天則には勝つこと無し。吾等は、如何に、科學的理想的の養生法、長壽法を確守し得るとも、彌勒菩薩の出現に接せん事難し。人間が不死の術を發見せざる間は、人間、未だ天象に勝てりといふ可らず。

其　四

●人を迷はすの花も人に折らる。迷はすは勝ちたるに似たれども、折らるゝは負けたるなり。

●人は毒草を喰ひ得れども、毒草に中てらる。喰ふは勝つに似たるも、中てらるゝは負けたるなり。神農氏は萬草を嘗めたりといへば、彼は、萬草の大敵にして、此の間の鬪爭に於て、萬草を撫斬したる者ならずんばあらず。

●蜜蜂は、つねに花を制しつゝあるものなり。然れども蠅取草は、蠅を捕獲するを得れば、草花、必ずしも昆蟲に制せらるゝものと限らず。

●『潮來出島の眞孤の中で、あやめ咲くとは、しほらしや』の俗謠は三味線に合すれば、頗る詩興あり。然れども此の俗謠は、眞孤とあやめとの勝負を歌ふものに非ずや。眞孤は戰鬪の力に富み、これに接續する水草を制壓しつゝあり。唯だあやめのみ風姿優婉にして、蠻勇の眞孤の中に介在して、艶花を放ちつゝあるは、草木の戰場に於ける一異采たらずんばあらず。

●詩は、渾べて戰鬪の間に傑作を生ず。唯だ人間相互の戰場に、詩の湧くのみならず。人は、草木の戰鬪に對して感興を漲らしむ。彼等の間には勝負なり、而して人より見れば詩趣なり。

●戰鬪、則ち勝負は畫趣を爲す。英姿颯爽來二酣戰一の句は萬古に膾炙す。翻レ身向レ天仰射レ雲、一箭正墜二雙飛翼一の詩は、人が雁を射るの畫趣を詠ず。

●戰鬪の詩と畫と、人の興味を煥發せしむ。人馬踴躍して、戰場に、雄姿を示すの時、馬も亦た人の勝負に參加するなり。梅花を箙に挿んで健鬪する時、花も亦人の勝負の畫趣を爲す。

其五

●客觀は詩を爲す。「鳥羽殿に、五六騎急ぐ、野分哉」の句は客觀美に非ずや。戰鬪、勝負が畫趣を爲す所以は、客觀なればなり。

●當事者に於て、悲劇なる所以のものも、客觀に於て詩を爲す。悲劇、或は變じて喜劇を爲す。勝負の喜劇なる所以のもの、時に、悲劇を爲す事あり。

●吾輩、日露戰爭の時、奉天戰に參加せる一將校の繪葉書を藏す。此の繪葉書は、勝負の客觀美を自覺せるものなり。其の文にいはく、敵軍を追撃して、睡らずして長驅すること六晝夜、自から謂ふ、健鬪の極なるものなり。自から思ふに、一身の苦勞と、蕪雜と、また極まる。英姿颯爽といふは客觀の語に非ずやと。

●古來、「横槊の詩」といふ事あり。戰鬪は詩を生ずるのみならず。當者事亦た戰鬪を爲し、詩を爲しつゝある事もあり。知るべし、戰鬪も亦た自から詩なり。

其六

●戰鬪は自然に行はれ、又た故爲に行はる。積極的の勝負あり、消極的の勝負あり。戰鬪とも、競爭とも見えずして、其の間、勝負あらざる事なし。觀じ來れば、宇宙間、萬有すべて、勝負の萬有たらずんばあらず。

◉人は天と壽を爭ひつゝあり。不老長壽の法といふは、壽の勝負に於て、必勝を求めつゝある者なり。天は人の壽を奪はんとするものの如くなり。油斷して短命せば、是れ、人が天に負けたるものといふべし。

◉人間は、同年同月同日に生れたる者多くして、多くは識らず。知友、親族の間にも、同刻の出生は珍らし。然れども同刻の出生者は、事實に於ても少からず。是等の出生者は、見ず、識らずの間に、互に、長壽の競爭を爲しつゝあり。

◉同時に稲を蒔き、麥を蒔く。同時に刈らるゝものは、彼等の間に於て長壽者たるを失はず。刈らるゝに至らざるに、早く既に夭折する者少からざるなり。

◉屋久島の屋久杉は、日本に於ては最も長壽なるものなり。彼等の年輪の、最も多きは三千に至る。則ち我が神代に生れて今日に至る。彼等はあらゆる長壽の勝負に勝てり。然れども彼等は、彼等よりも遙に短命なる人間の爲に、卒然として斬り倒さるゝなり。

◉桑田變じて滄海となるのみならず、巖は土となり、石は眞砂となる。點滴は石を穿ち、井桁は釣瓶繩を斷つべし。人間、草木のみならず、三界萬靈は、水石、つねに勝負を爲しつゝあり。

◉水勢の洶湧するものは圭角を奪ひて、石を圓くす。石の圭角あるは、風水に對して、鋭鋒を示しつゝあるなり。風の急なるは樹梢を靡かす。濱の松の陸地に向つて伏せつゝあるを見よ。

◉漁舟一葉江呑」天の句は、水の盛なるを示す。然れども水は遂に天に包まれずんば已まず。狂瀾怒濤の勢を以てすと雖、水は、萬古、遂に逆流せず。木葉は浮び、石は沈む。石を千仭の絶壁に轉ばすべく、林檎も亦た樹上より落つ。三界萬靈の間、つねに勝負ありと雖、三界萬靈を擧げて、引力に勝たず。引力は天則なり。天は、すべてのものに勝つ。

其七

◉人間の一生は、すべて勝負なり。天は、勝負の象徴（シンボル）として、人間を作りたるらし。人間の目的、努力、遊戯すべて勝負に非るはなし。

◉君子と小人との區別は、爭の有無には非ず。「君子の爭」といふ語あれば、君子にも爭はあるなり。爭あれば則ち勝負無きを得ず。

◉人生、すべての事、勝負無きは無く、勝負の鮮明なるものほど人心を吸引するに足る。勝負の鮮明ならざるものは人心を引かず。戰爭と賭博とは勝負の最も鮮

明なるものなり。萬國平和會議設立の後ちに、歐洲の大戰亂あり。日本に於ける平和會の支會長、伯大隈、内閣首班に列するの時、青島に戰ひ、支那に最後通牒を送れるに非ずや。

◉賭博は下等社會に流行するものゝように思ふ者あれども、其の實、賭博の盛なるは歐米の外交社會、紳士社會に在り。唯だ熊公、八公は、下肢を露はして丁半を爭ひ、大使、公使はフロックコートを著けて、カードを弄すると相違あるのみなり。

◉戰爭は賭博の大規模なるもの、賭博は戰爭の小規模なるものならずんばあらず。故に、戰爭に賭博の氣分あり。賭博には戰爭の態度あり。此の二者は、天地間に磅礴しつゝある勝負の理法を、尤も具體的に表現するものなり。

◉赤兒と雖も勝つことを好む。老人も亦た勝負を爭ふ。如何に絶世の美人なりといふとも爭心の落々たる者無きに非ず。

◉爭はざるの人あることなし。小さく爭ふ者あり。大きく爭ふ者あり。大きく勝たん事ゝ志す者は、これを大志ありといふ。小さく勝たんとする者は志の小なるなり。此の身、再來の我無し。人壽百年といふとも一瞬の間のみ。勝負の世界に生れたる「我」を發揮するは、須らく大きく勝たざる可らず。

其　八

◉特性は、飽くまで之を發展せしむるを要すると共に、一面に、之を調節せしめずんばある可らず。人間の勝負魂弱き者は、所謂意氣地無き者とせらる。然れども勝負魂の激しき者は、人世を混亂せしむ。

◉勝負性を牽制し、調節せしむるの必要あること、聖人の、色を戒むるが如きもの無くんばあらず。勝負慾は性慾の如し。勝負性の衝動は、則ち本能の衝動なり。近來の所謂「黨弊」といふものも、畢竟、政友會の勝負性に本づく。一黨、つねに他黨に勝たんと求めて已まざるもの、勝負慾の衝動に外ならず。

◉黨弊を絶叫しつゝある伯大隈は、生平、「後ろ疵」無きを誇稱しつゝあり。彼は勝負魂の激しきものなり。彼は、大西郷の如くに、大きく勝つことを志す者に比すれば、其の志は小なり。然れども「後ろ疵」無きといふは、生平、激しく勝負魂を發揮しつゝあることを意味す。

◉負けじ魂といふは負け嫌ひなり。世間の男女、概ね負け嫌ひならざるは無し。大志、大度の人物は負け嫌

ひならざるやに見ゆ。是等の人物は、胸中、直ちに大勝負を爭ひつゝあり。小さき勝負を、眼中に措かざる事、譬へば萬金を爭ふ者が、眼中、錙銖の利無きが如くならずんばあらず。

●孔子も亦た勝負慾の天性なるを認む。博奕すといふとも、無爲、時を費すには勝れりといへり。彼は無爲を惡むこと博奕よりも甚だし。無爲といへば勝負無き事をいふ。有爲といへば必ず勝負あり。

●敎育なるものは、勝負性の調節を敎ふるものと見るを得べし。人間、謙抑の道は、則ち自他の勝負性を調節するに外ならず。

其九

●勝負の簡單なるは、未開にして、雜多なるは文明なり。勝たんが爲めには手段を要す。負ける爲めには手段を要せず。手段の中に人智あり、氣力あり、體力あり。手段に富める文明人は未開人に對して常勝なり。文明世界の出現するに隨ひ、未開人は絶滅せざるを得ず。

●活人劍、殺人劍といへども、要するに刀劍は、斬る可き器械なり。然れども劍を以て劍を斬るべし。劍の間にも勝負あり。奈良の嫩草山の麓の三條小鍛冶と稱する者は、見本の劍を以て、見本の劍を斬つて以て、客を呼びつゝあり。

●米國の加州に於ける排日運動と云ふは、文明人が變的形式を以て、勝負慾を發揮しつゝある運動なり。支那に於ける排日運動も之に同じ。支那は文明國なりや。未開國なりや。米國は、兎も角、文明國なりとせば、文明人は宜しく文明的形式を以て、勝負魂を發揚せしむべし。是れ文明人の責任なり。

●ペルリの齎らし來れる大統領の國書には、捕鯨船の爲に、薪水供給の良港開放を求むるの事を載す。則ち彼が日本に開國を要請するの動機の一は捕鯨の爲なりし。

●抑も米國人は捕鯨は、太平洋に鯨鯢を驅逐し、鯨鯢を追ふて東海に來れり。則ち米國人と鯨鯢との勝負は、日本の開國を促がせるなり。

●トランスヴァール戰爭といふものも、神の眼より見れば、英國人とダイヤモンドとの勝負が誘致せるものなるべし。人は人と戰ふのみならず、つねに草木金石と勝負を試みつゝあり。

●文明の進歩といふは、人が容易に、三界萬靈に打ち勝つの手段を確保するに至るといふ。太古には、激烈なる鬪爭無く勝負無かりき。桃源の仙洞、人と草木と

共に長壽なるは、勝負の少きを意味す。此の時、草木禽獸、生々、繁榮して、人間未だ少數黨の域に在り。

●ダイナマイト發明さるゝに及び、地軸も亦た人間の前に顔色を失ふ。阿房宮賦に蜀山兀、阿房出といふは、秦始皇が人民に對する暴君たりしのみならず、實に、天然界に對しても暴君たりし事を示す。

●拔山倒海の語は昔より有り。人が天然物に勝つは、太古よりの理想なり。今に於ては、隧道を開き、地軸を碎き、海を埋め、草木を操縱するの自由なること、これを十九世紀以前に比すれば、別世界の觀を爲す。二十世紀の文明は、人間、既に、世界の多數黨の位地を占有し、横暴を逞しくするの時代ならずんばあらず。

其十

●勝負は趣味の大部分を占む。勝負の中に硬軟あり。鬪犬、鬪牛、鬪鷄、鬪魚といふ如きは硬勝負に屬す。硬勝負は鬪人に至つて極まる。撃劍、柔道、角力ボキシング、レスリングといふは鬪人なり。

●オリンピック大會は、鬪人の壯大なるものなり。競技會は、すべて鬪人なり。唯だ其の中、自から硬軟の差別あるのみ。

●鶯會、蟲會は、勝負の會といへども、頗る軟趣味あり。軟趣味の勝負は優美なり。鶯と蟲とは、優美なりとはいへども、飼主の熱狂は、必ずしも優美ならざる事あり。

●源氏物語の時代は、繪卷物の世界のように思はるれども、繪卷物の中に、勝負魂の磅礴するあり。双六を鬪はし、歌合を爲す。すべて勝負魂の發揮に非るは無し。唯だ、此の時、人物弱きこと繪の如し。隨つて其の勝負の弱々しきのみ。

●勝負は人の皮膚の如くに、人生、社會の全面を纒へり。喜怒哀樂みな勝負あり。床柱を後にし、美人を前にして盃を手にすと雖も、勝負は喜見城の中に滿つ。藤八拳は有形の勝負にあらずや。美人にふられたとか、ふられぬとかいふは無形の勝負に非ずや。

其十一

●勝負の興味より見れば、歐米が、文明の先進國なりしといふは勝負の種類の、東洋よりも、遙かに豐富にして、且つ、其の複雜なる競技に富めりといふに歸せずんばあらず。

●文明の進歩は、必ずしも人世の理法を改竄せず。これを修練し、醇化し、美化せしむるのみ。勝負も、未開より文明に移るに隨ひ、美化せられつゝあり。

●ダムダム彈の使用を禁止したるは文明の精神なり。然れども歐洲大戰亂に於ける獨逸の態度を見れば、ダムダム彈も有毒瓦斯も何も厭はざるを見るべし。獨逸は學術の府を以て自から許しつゝあるに、猶ほ此の如し。戰爭は、文明を破壞す。大なる勝負は、勝負に進み行く世界を破壞するものなり。

●日本は、永く鎖國せし丈けに、鎖國的の勝負に冨めり。大試合といふは稀にして、オリムピックも無かりし。碁と將棋と、歌留多と花合が、勝負の趣味の中心たりし事は、全日本を勝負の上に表現するものならずんばあらず。

●ボールとテニスとが、趣味の勝員の標準となりつゝあるは、日本の進歩、變遷を語る。國技館の角力に、女の客の增加しつゝある事も、這般の意味に於て、日本人の趣味の變遷を語るものなり。

●勝負の趣味は、須らく開放せる大氣の中に發揮せらるべし。鎖國的なる可らず。すべての戰鬪、勝負に於ける陰險といふは眼界の狹小なるより起る。陰險は鎖國的勝負の精神の遺物ならずんばあらず。

其十二

●勝負の活潑に行はるゝは活世界なり。活世界に立つを現役とし、活世界を退くを隱居とす。勝負の實力、精神旺盛なる者は、活世界に現役たるを期し、隱居たるを願はざるは、人情の自然なり。現役の精神逞しき國民に非れば、國家は進步繁榮せず。鎖國の日本は、隱居の日本なりし也。

●維新前の人は、四十、五十にして隱居の資格あり。江戸には若隱居といひて、壯年にして活世界を退く者すら有りし。今の人は、維新前に比すれば現役の精神旺盛なり。日本が鎖國の時、國際的勝負無し。世界の日本となるの今日、國際的勝負は、現役精神を涵養しつゝあるなり。

●伯大隈の七十八歳にして首相たる、兎も角も、日本人の現役精神の發達を象徵するに足らずんばあらず。今、白頭、禿頭、すべて社會の要部に立ちつゝあり。年を取つて、浮氣の已まざるのみならず、勝負の精神の逞しきを見る。

●人壽は、生存を以て計る可らず。現役を以て計るべし。現役年時の長くなるに至れるは、人壽の伸びたるなり。人壽は勝負の中に在り。

其十三

●楊貴妃は傾城傾國を以て稱せられき。傾城傾國とい

ふは、城にも國にも勝ちたるなり。彼女は千軍萬馬の强味を有す。然れども其の末路、馬嵬、一片の露と消えたるを見れば、一兵卒よりも弱し。千軍萬馬よりも强き者が、一兵卒に勝たずといふは、勝負の興味ならずんばあらず。

●橫綱、大關は、必ずしも關脇、前頭に勝つと定まらず。橫綱、關脇に負け、關脇、前頭に負け、前頭、幕下に負け、幕下、三段目に負け、此の如くして、推算する時は、序の口、橫綱よりも强かる可き事あり。

●長ひものに捲かれ、强ひ者に負けといふ事あれども、短き者、長き者を捲き、弱き者、强き者に勝ち、少數軍、多數軍を包圍する事もあり。少數黨にして、內閣を組織する事もあり。

●勝負は豫見す可らざるところに興味あり。勝負、若し必らず豫見す可くんば、角力を觀る者は無かるべし。國技舘の繁榮は、人氣力士の勝つ可くして勝つを見るの興味と、勝負の豫見す可らざるの興味との上に立つ。

●此の春、小錦に負けたる大蛇潟は、兩國と大錦とに勝ち、栃木山は玉の川に敗られたり。角力は取つて見ざれば分らず。

●綜合的實力の强者が、つねに或る弱者に敗らるゝ事、殆んど强弱、地を換ゆるが如きものある時、其の强者に對して弱者を苦手といふ。苦手といふは、箇人的關係なり。此の場合に於て、苦手の弱者は、强者の弱點に乘ずるものなり。

●實在の人間には絕對の强者無し。戰に强き人も女に弱き事あり。酒に强きも、餅には弱き事あり。强點の顯著なるを强者といへども、其の顯著ならざる弱點に乘ずる者は、則ち苦手の弱者なり。

●强點と弱點と經緯して人間を爲す。投も押も强き力士は少し。潜ぐるに利あれば、突張るに便ならず。神は、强點と弱點とを集めて、人間を造り玉へるなり。是れ神意の微妙なる所以なり。則ち人間の社會は、勝負の錯綜して、强弱幷存するを得るの世界ならずんばあらず。

●文中子は、英雄を解釋して、自ら知る者は英、自から勝つ者は雄なりとせり。知るといふは弱處を知るなり。勝つといふは弱處に勝つなり。

●絕體の强者無く、絕體の弱者無し。弱者の强處を以て、强者の弱處を衝くを要す。玉椿が名力士たる所以は此に存す。

●巳の戟を以て戰へ。勝負魂の逞しく、實力、これに

伴ふとも、己の截を以て戰はずんば危ふし。己の截は己の強處なり。此の見地に於て、士族の商法、河童の陸稼の無意味なるを見る。

其十四

◉玉突を試むれば、勝負の神といふものあるらしく見ゆ。勝神の宿るものは必勝にして、負神の宿るものは必敗なり。福神、危神といふもの、勝負の場に臨んで、勝神、負神となるにやあらん。

◉勝神の宿るときは、氣充ち、キユー冴え、球順、我を迎へて來り、ミッスも悉くフロックと化せざるは無し。負神に纏はるゝ時は、石橋を叩いて渡る如き安全の球も外れ、悉くフロックに見離さるゝことあり。フロックは勝神を象徴するものならずんばあらず。トントン拍子の語は荀諾さず。宜しく改めて「フロック拍子」と爲すべし。

◉勝負の分岐點、眞に微妙の一點に在り。機、實に言ふ可らず。唯だ一のフロックといへども、勝負の大勢を一變せしむるを得る。一箇のフロック、恐るべし。

◉李廣は名將軍といはれしも、屢、敗れたり。彼は、自から委曲あり、言ひ難しといへり。委曲といふは、勝負の機の微妙なるものを指す。

◉ナポレオン一世は、最後に至つて勝神に見離されたり。漢高祖が百戰百敗して、最後の一戰に、天下を取れると好對照を爲す。人生の愉快は最後の勝利に在り。然れどもナポレオンの如くなれば、最後の一敗も亦た妨げず。

其十五

◉「親が死んだトサ」と言ひつゝ、碁を打つといふ話あれば、人は勝負に醉ふ。醉趣の、酒味よりも遙かに濃やかなるを見る。碁打の家に碁好きの泥棒來り、拔足、指足して室に入り、知らず識らず碁盤に近づき、計らず碁件に入る。主客は識らず、烏鷺の外に主客無し。

◉最近の、一高と早大との野球爭覇戰は、勝負の興味淺からず。兩者の應援軍が勝負に醉ひつゝあるは、當事者の競技よりも面白し。

◉一高の應援歌「勝つた善い、勝つた善い、勝つた方が善い」は、露骨に、勝負の精神を歌ふ。勝者は燦爛たり。敗者は蕭條たり。一高が三高に勝ちし刹那は、白旗、澎湃として潮の湧くが如くなりし。早大に敗れし時は、旗影、寂寞として、夕日影を帶びて寒かりし。

◉一高の野球軍が、由來、勝負強きを以て稱せらるゝは、其の勝負魂の逞しきをいふ。早大に敗れたりとい

へども、第八回のインニングに、强襲を試みて、一擧、四點を强奪したるは、早大軍にミッスありしに依るとはいへ、兎も角も一高式を發揮せるものなり。彼等の鐵骨といふは、其の勝負魂をいふ。

此の晩春、吾輩、山口に在り。始めて投扇興を學びたり。投扇興は室内遊戯の一、江戸趣味の遺物なり。風雨の夜、一室の中、また以て、滿腔の勝負魂を傾倒するに足らずんばあらず。吾輩の初心なる力を籠めて扇を投ずるに、僅に咫尺の中、扇は的に中らず、的を超えて、飜へつて、飛行機の如くに、フワリと浮び行く。飛行機、飛行機、燕返しなど、囃やしつゝ、一坐、手を拍つて笑ふ。勝負の趣味、今、言ひ盡さず、暫らく此に擱筆するに臨み、最近、吾輩に投扇興を敎へて、勝負の一趣味を加へしめたる諸君に、此の一篇を捧ぐ。

黒頭巾　再記。

日記から

生方敏郎

○

女と云ふものが三度見れば三度、四度見れば四度とも違つて見えるやうに、女の寫眞も見る度毎に變つてゐる。

○

來られて迷惑を感じるやうな時が、却つて人が來て嬉しいものだ。病氣の時とか、夜遲くなつてからとか、貧乏してゐる時とか……

○

手紙を逹者に書く娘を有つた親達は油斷してはなりませぬ。

○

容易く思ふやうにならない女は益々男から慕はれる。冷淡が女を美しくするのではない、男が莫迦だからだ。併し容易く思ふやうになる女は遂に男を自分のものとする。軟かい女が悧巧なのではない。男がやく

ざだからだ。

○

賢明なる批評家は思つた通りのことを云ふ。忠實なる批評家は思つたよりも惡く云ふ。愚昧なる批評家は作者の提灯を持つ。臆病な批評家は思つたことの一部分だけを、思はぬことの大部分と混ぜて云ふ。

○

友達から退けものにされるのは强敵に圍まれたよりも辛い。後者は苦しいのだが前者は悲しいのだ。後者は外から受ける痛みであるが、前者は内に發した惱みであるからだ。

○

大男に案外臆病者が多い。恰度小男に似げない不器用者が多いやうに。

○

賞め方に困るのは人の寫眞を見せられた時である。譏り方に困るのは自分を酷い目に逢はせた女に就いて語る時である。

○

女の貞操とは夫に對する親切を指して云ふのではない。夫以外の男を拒絶するのが貞操である。つまり他人の愛情を蹂躙するのが女の道徳である。女でなければ行へぬ道徳である。

○

金持はよく泣事を云ふ。惚けを聞かせるのは拙い男に多い。皆自衞から來るのだ。

○

男には萬葉集を讀ませたい。女には源氏物語を讀んで置いて貰ひたい。

○

今の文壇のやうに犬の糞の敵討ばかりやつてゐる中は、何時になつても本當の批評は出て來ない。

○

非常に驚く可き大事を聞かされた時、人は却つて落着くものだ。

○

空想に於いて惡事をたくらむ面白さは、善事を實行した後の快感よりも强い。惡事は此那に强い魅力を有つ。だから若し犯した後の恐怖さへ伴はなければ、人は誰でも惡事を犯す。

○

家財道具のやうな奥さんがある。お妾のやうな奥さんがある。看守人のやうな奥さんがある。

○

高いやうで安く、安いやうで高いものは文士の原稿料だと或る人は云つた。新聞記者様病院裁判所等の小使等に與へる鼻藥、さては(御用商人が)お役所の官員様に奉る袖の下も其れに似たるものなり。

○

洟糞を丸めるのは樂みなものだ。其れと同じやうな樂みが人生には寧ろ甚だ多い。

○

唯一篇の戀愛史をも有たぬ女の生涯ほど氣の毒なものはない。

○

音の世界は神祕だ。戸が一枚動く音を聞いてさへ戰慄することが屢ある。

○

瓦斯の明りは漠として夢のやうだ。電氣の明りは落着きがあるが、天井から釣つてあるのが不安でならない。勉强する時、私は置洋燈の明りを最も好む。笠の色は靑く深いのを今は用ひてゐる。

○

人に逢つて先づ莞爾とする女は、必ず自分を養ふ人を失はない。

○

殊に戀をする時に於いて、仕方がありませんもの、と云ふ考へが女にあつて欲しいやうに、男には、糞でも喰らへと云ふ了簡が無くてはならぬ。

○

怒らず喜ばざるは德行也。喜怒色に現はさゞるは、德行にあらずして策略也。戰國時代に適應せられたる

戰術教育の一也。

○

今日道德として敎へられるもの丶多くは、敎へる者の爲めの策略か若しくは敎へられるもの丶爲めの策略である。

○

何事も想像と事實とは違つてゐる場合が多いが、其中にも人ほど其差の甚だしいものはない。此事實だけに依つても人間を宇宙と比較することが出來る。

○

聲を聞いた時、大抵の女は戀する價値がある。手に觸れた時、大抵の女はお座が覺める。

○

「好い兒」と云つて頭を撫でれば子供が嬉しがる樣に、總ての女はお土産に依つて買收される。

○

口先だけの働きで親切者だと思はせる樣になれば、老猾も一人前である。

○

言論の自由を禁めるのは、子供の泣くのを禁じるのと同斷だ。強いて行へば窒息して終ふ。

○

人々は道德を世界の市場に輸出しやうとしてゐる。けれど其等の人々の中に志士は一人も無い。

○

不幸は何れ程寡くても、有り餘る。幸福は幾ら澤山あつても、まだ足らない。

○

最後の一錢を以つて快樂の爲めに費すものでなければ享樂派の人とは云はれない。

○

機智の有る人がある。機智を好む人がある。感激する人がある。感激を好む人がある。

○

金を粗末にするなと敎へる。時を粗末にするなと敎へる。けれども人を粗末にするなと敎へたのを聞かな

い。

○

懐が暖かい時に呑氣にもならず、内所が苦しいとて慌てもしないまでの覺悟を得るのは容易のことではない。併し又其様な覺悟を得るのは幸福か不幸か其れも疑問だ。

○

經驗に敎へられた爲めに心が冷かになつた人を見るほど傷ましいことは滅多にない。

○

暢氣は水晶のやうな結晶體である。潰しても粉にしても暢氣は矢張暢氣である。貧乏しても病氣しても死ぬ時までも暢氣である。

○

死物狂ひも大膽も同じく強い。唯死物狂ひには餘裕が無いが大膽には餘裕がある。

○

夢の面白さは子供の描いた繪の様にとりとめの無いところにある。我々の人生も此様にあり度い。

○

五分の隙間もないやうな人は面白くないものだ。一つの愚は總ての智慧に點睛する。

○

基督教が人を牽きつけるのは、如何なる國へ行つても其國賊的臭味を發揮するところにある。馴らされたる基督教は氣の抜けた酒のやうなものだ。

○

罰と云ふものは人をして懲りさせるよりは寧ろ其膽力を作るものだ。何事も一度酷い目に逢ふと前よりは誘惑力を増してくる。

○

一度失戀して再び人を戀しないと云ふ人は、實は一度も失戀したことのない人だ。初戀に生きてゐるのだ。一度失戀した位なら止め度なく失戀する。

○

穴は削るほど大きくなる。苦痛は思案するほど強く

なる。

○

今山の手にゐて私は銀座のカッフェの一杯の珈琲に憧れてゐる。憧れゝば、其香が遠く傳つて來るやうに思はれる。たゞ一杯の珈琲にでも、憧憬は人を幸福にする。

○

自己を發揮しさへすれば男も女も案外立派に見えるものだ。すれつからしの者が人に買かぶられるのは其點から來る。

○

女が頭痛とか虫歯とか云ふ位な手輕な病氣をしてゐるのを見ると、いぢらしくて可愛くなるものだ。

お國氣質

日本本土六十餘州

早川鐵冶

一、緒論(日本民族の研究)

日本六十餘州といふのは、御維新までに日本の王土が六十餘州あつたといふのだが、然しこれは建國以來六十餘州あつた譯ではない。地文學の方面から色々研究を下して見ると、其昔我が日本は大陸續きであつたやうに思はれる。それが何時かの時に地震か何かで對島海峽の所が陷落して一つの離れ島になつたやうに思はれる。その證據には、對島、五島、九州の北部、山陰山陽の邊は地質上又地文上の關係から見ても大陸と地續きであつたやうだ。對島の岩石、鑛物等が特に朝鮮のそれと同じ物が多いのは土臺が續いて居つた證據である。何時の頃かは知らぬが、その昔日本民族の中

心は南韓の三道即全羅慶尙忠淸と日本海對島方面及び出雲、長門、石見、筑前、筑後、豐前、豐後の方面であつたらしい。別にゑらい研究もせぬが自分の感想では何うもさう思はれる。神代時分の歷史に依ると、素盞雄命が屢々南韓地方に往復せられたやうだ。これが先づ日本民族の土臺を爲して居る。だから私は朝鮮人にも話したことだが、日韓合併も要するに明治天皇が王政復古せられたと同じことで、約り日本が歷史以前の舊に立ち戾つたまでのことである。今更ら日韓合併などいふ角が立つた言葉を用ゐずに、日本の昔の王土に復歸したのだと言ふてよいと。

實に我が日本民族はこの土臺の上に成つたのであるが、それならばこの小さな島國に今云つた民族のみが居つたのであるかといふに決してさうではない。黑潮とか、貿易風とか、モンスーンとかいふものに因つて南洋や大陸方面から我が海岸に吹きつけて、早くから違つた方面に違つた人種が居つた。英人バチエラーの說に依ると、大和民族は此の早川の唱ふる如く對島方面を中心として居つたことは明かである。が、然し今若し日本の中州と九州の半ば及び沖繩を調べると、沖繩邊の地名にアイヌの言葉が澤山殘つて居る。坪井正五郞博士がアイヌ以前にコロボツクル族が居つたやうに言ふて居るが、バアチエラーは之を笑つて否定して居る。坪井博士はアイヌの言葉を知らぬからそんなことを言ふて居るのであるが、コロボツクルとはアイヌの穴居して居ると云ふ意味である。であるからアイヌの以前にコロボツクルといふ特殊の種族が居つた譯ではない。と言つて其以前の石器時代には何んな人が居つたか、それは解らぬが、或程度の文明を維持した先住者はアイヌである。斯くて北は北海道樺太、又特に此人種の最も旺盛で跋扈した時代には琉球にまで蔓つて居つたやうである。然し神武天皇が日向の方面から內地に遠征をした時分にはアイヌは東海道以北に居つたので、畿內山陰山陽及び四國には居なかつた。そこで神武天皇の日向から遠征して來た時には已に穴太、吉備、或は大和邊に神武と同じやうな大和民族が居つた

やうに思はれる。で、神武天皇は日向を出て長州の穴太に長く居られ、それから暫く經つて吉備の中ッ國に居り、それから大和に來て可美眞手命を奉じ長髓彦と戰ひ、一度は敗けたが紀州方面を舞ひ戻つて來て到頭勝つて橿原に宮居を定めた。これが今の日本の皇祖である。扨て其時分にはまだ日本六十餘州に神武の御稜威は及ばなかつた。膽吹山以西、不破の關以北には及ばなかつた。越後から若狹へかけては越の族といふ一つの人種が居つたし、東海道方面にはアイヌ族が居つたらしい。それより猶餘程下つて日本武尊が征伐をした時にも惡い奴が駿河の燒津に居つたとかいふことである。これは如何なる人種だかはつきりしないが矢張りアイヌらしく思はれる。が、アイヌ以外の人間も居なかつた譯ではない。今の茨城縣の土浦地方に居つた鹿島香取族といふのは何うも大和民族らしい。東海道からすた〳〵やつて來たのか、或は風の方位で此處へ眞直に吹きつけれて土着したものか解らぬが、兎に角さう言つたやうな人種が居つたのは確かである。それから越の國に居つたのは夷と言つても色の白い、髯の少ない、穩かな人種で、謀叛や戰などをした事がなかつた。阿倍比羅夫が越の大將になつて後志の羊蹄山の下までも遠征を試みたといふことがあるやうだが之もどうもハッキリしない。然し後志と言ふから今の北海道の南から行けば夏は波も穩かであるし、風の吹き方によつては行つて行けぬこともなからう。此阿倍比羅夫の征伐に對しても、此越の族は大してゑらい戰ひをしたやうでもない。前にも云つたやうに此族は性質が溫順で、耐忍力が強く、皮膚の奇麗な、目と鼻の離れた、商賈氣質の人種で、初めから謀叛をしたり、大きな戰をしたといふやうなことはないやうだ。今の新潟美人の如きはテッキリ其いゝ標本では無いか。又鹿島香取族も謀叛したと云ふやうな形跡がなく王化の及ぶに從つて歸服したやうである。之は多分もと〳〵大和族と同一のものであるが爲めであらう。ところがアイヌといふ奴は大和民族とは全く性行が違つて居る。鹿島香取族、高千穗族及び大和民族はツングス人種の

一種であるが、アイヌは實に一種不思議な人種である。東亞細亞にはツングス人種のみが居るのだが、アイヌは又はこれと全く違つて東亞細亞には居らぬ。ヒマラヤの平原より出て西の方へ行つたアリアン人種の一種であらう。言葉を見ても解るし、又今日でも色こそ黒くなつて居るが、骨相から見て露西亞の百姓にそつくりである。

それから越の夷は支那族でツングス人とは違ふ。只ツングス人と同じやうな亞細亞人種で、モンゴリア人種と總稱せらるゝものゝ一部族である。だからこれは大和民族に降參することが容易であつた。が、言語も何も全然違つた居る所のアイヌを征服するのは王朝時代にも最も苦心したところである。已に日本武尊の東征があつてもなか〳〵歸順した譯ではなく、「東夷叛す」と云ふ事が古代の日本歷史に屢々出て來るが極り文句である。最後に坂上苅田丸、坂上田村麿親子の征伐に次いで、遂に文屋綿麻呂に至りてひどく叩かれた。坂上苅田丸時代には二度までもアイヌが蜂起して白河以南までも進擊したことがある。

それから日本が三韓にまで手を出して居つた時分に、其關係上から三韓地方から歸化する人が多かつた。支那よりも多少歸化したが其大移住は例へば百濟の亡びた時に百濟の王族が大勢を率ゐて我が國に歸化した。其分布は畿内が重であつたが、其時分關東はまだ開けなかつたから其連中は又大多數關東の平原へも移つて行つた。其證據には未だに大磯に高麗山あり又武藏にも高麗郡といふのがあり又甲斐にも巨摩郡がある。又武藏にも熊谷、秩父方面には大分其證據がある。

それから極く少數ではあるが、我等の記憶する所によると三河方面に印度族が來たことがある。それは何でも敦賀、遠江、三河に置いたところが謀叛をして、日本人の村落を燒いたりなどして遂に相模邊へ追ひ遣られたといふやうなこともある。これは印度の所謂セミチック人種などが多い。アイヌは奈良朝時代にはまたなか〳〵征服しきれなかつたけれど、平安朝の始めになつて漸く征服することが出來た。それでも戰爭を

する勇氣がなくなつただけで、數に至つてはまだなかなかに多かつた。アイヌと日本人の最も烈しい戰ひをしたのは平安朝の初めに於ける宮城縣の大崎原野である。田村麿將軍が土蜘蛛を征伐したのは一の關の先なる達谷窟といふ處である。改進黨の代議士に達谷窟信敬といふ人が居つたが、これは此祭つてある側に住んで居つた人であらう。然しながらこの大多數のアイヌは遂になくなつたのかといふにさうではなくて、それ等の大多數は大和民族と雜婚して純粹のアイヌでないやうになつたまでゞある。秋田などにも澤山居つたもので、同地には今でも皮膚の奇麗な、鬚の多い、アイヌそくつりの人が多い。秋田美人は蒙古人種とアイヌ人との混血兒であるから奇麗な筈である。日本の王朝はずるいもので坂上田村麿の如きもアイヌを征伐するに關東地方に居つた朝鮮人の歸化人を手下に使つたものである。然しアイヌがアッシを着て居る今のやうな風俗を何時まで維持したかは疑問である。九戸正實を征伐した時なども、九戸の賊軍がハブといふ毒草の液を矢につけて毒矢として戰つたことは氏實軍記に殘つて居る。さうするとアイヌといふものは徳川家の始め豊臣家の末迄青森縣下に居つたに相違ない。それだから漸く六十餘州に王化が及んだのは徳川家の始め頃だらうと思ふ。北海道は四百五六十年程前足利の末に若狹の武田が出掛けて行つて其南端を占領した渡黨といふのがそれで、何故に渡黨といふかといふに藤原氏が賴朝に征服された時に逃げて津輕海峽を越して渡島の南端に住んで居つた。武田の行つた時は下國柿崎などいふ者が居つた。こゝに城を築いたのは即ち松前家の先祖である。徳川家時分に努めて北海道の內地に日本人を遣らぬ方策を採つた。北海道の內地には日本の王化がまだ及んでは居なかつた。僅に其沿岸地方に漁業者が會所を設けて居つた。それは北見の端にまでも及んで居つた。而して其沿岸に居つたものは多くは北國筋のもので、若狹、加賀、越前若くは近江、大阪、大和、紀州近邊の者であつたが、其沿岸は占領したけれど、內部は取れなかつた。即ち政治は內部に行き屆か

なかつた。文化文政の頃から幕府が注意して松前氏を通じて幕府の直轄にして近藤重藏、間宮林藏、松浦武四郎等内地を探檢して歩いたがまだ日本の領土の實を擧ぐる確かな根底は出來て居らなかつた。之は明治二年に開拓使を置かれて北海道十一州は始めて日本の王土になつたと言つてもよからうと思ふ。琉球の如きも慶長年間島津家久が征伐したが、十二年硫球王を廢して沖繩縣になるまでは嚴密には日本の領土とはいふことが出來なかつた。其後日本も段々廣くなり日清戰爭では臺灣を得、日露戰爭役後には朝鮮を併合し遼東半島に手を出し、近くは青島を取り滿洲にまで我が政權を及ばさんとして居る。が、實に明治維新、明治天皇御登極までは未だ完全な六十餘州といふことが出來なかつた。恐らくは三百年以來のことではなからうかと思ふ。斯くの如き觀察は少くとも歐米の歷史哲學を究めた頭に依つてゞなければ論斷の出來ない事で、單なる普通の歷史家に依つては考察さるゝことが出來なからうと思ふ。

扨此六十餘州、北は津輕から南は鹿兒島まで、今日では先づ三日で行けるが、昔はなか／＼容易なことではなく、今日世界一周をするよりか時が掛つたことであらう。特に全國封建制度の下に二百有餘の大名があつた。今日の獨逸聯邦の樣かといふとそれよりも猶一層酷い。二百有餘の大名は上に　天皇併びに將軍を戴きながら其國々では各自獨立の大名に依つて獨立の政治を行ひ、亦各自獨立の紙幣を發行し、國境を越えて國外に出づるには今日の旅行權、支那でいふ護照が必要であつた。分けても女子供の旅は容易に出來なかつたもので、現に函嶺などは女を通さぬ位であつた。故に三百年以前には交通は不便だつたし、各二百餘の獨立國が割然として居つて往復が自由でなかつた上に、各藩共に多少の異つた政府を戴き、其藩の主意に依つて或は朱子學を奉じたり或は陽明學を奬勵したり、從つて其國々の氣風は違つて來ざるを得なかつた。或は各藩自衛の目的から、故らに華美な風を奬勵したり柔弱の風を養成したりさへしたので、他國と結婚をするな

どいふことは無論容易なことではなかつた。已に話した通り科學的見地から見て復雜な人種であつた上に三百年間互に國境に蟄居して他國と交通を絶つて居つた人爲的障礙の結果として自然國內の氣風とか國風とかいふものが出來た。歐州人は日本の歷史を知らないから、こんな少さな島國にそれ〳〵異つた氣風がある筈がないやうに言ふが、そうではない。只交通が便利で一番多く人とも交り外から侵略を受ける心配もなく、日本六十餘州中一番大きな將軍家の膝下に居つた江戶の者は一番人氣がよかつた。所謂五月の鯉の吹き流しで腸がないと言はれるが、僻み根性や繼子根性がない。例へば我が國の穢多、歐洲での猶太人の如きは冷遇され虐待されて其性質がよくない。シャイロックの芝居を御覽になつても解るぢやないか。ところが江戶の奴は將軍のお膝下にゐつて怖いもの者なしであつた。又各國から人が集つて來、又將軍の政策として富が集つて來たものだから、衣食足つて禮節を知るで僻み根性といふものがない。これが自ら今日の所謂五月の鯉の吹流しの淡白な江戶つ子氣質といふものを作つたのである。御覽なさい、榎本武揚とか林董とかいふ江戶つ子の大臣は單純なさつぱりした者であつた。今でも江原素六といふやうな人も居る。之は一見して分る、如何にもさつぱりした、言葉の輕い、文武共に藝のある、少しも陰險な所のない江戶氣質といふものを表はして居る。今日の所謂二代目の東京ッ子は種々な人種の雜種であつて純な江戶ッ子と大に違つて居る。そこでずつと見渡した所で一種の確然たる獨立した性格を具へて居るのは大藩に限るやうである。小藩に至つては國も少さし、亦政見ある政府といふやうなものもなかつたから確然たる一つの性格を作るに足らなかつた。江戶は今言つた通りだが、先づ話を南の方から進めて大藩をやゝ詳しく、小藩をザット片附けて了はうと思ふ。

二、薩長土肥と其他の九州諸國

南の端の鹿兒島は交通至つて不便な處で、彼所の人間は鎌倉時代の賴朝の子孫たる島津家を奉じてそれを

誇りとして居つた。成るべく各國の人を入れぬ方策を取つて居つた。秀吉の征伐した時にも彼處には入れず、門徒坊主を使つて、辛つとの事で入つた。其爲めに島津家は門徒坊主を嫌ひだといはれた。關ヶ原の戰ひにも、毛利家と島津家とを比すれば、毛利家の方は大いに情狀酌量すべきものがあつたに拘らず、二百二十二萬石を三十萬石に減ぜられて僅かに長防二州をアテガハレた丈けであつたが、島津の方は前と同じく矢張り七十二萬石で、依然として薩日隅の三州を與へられて居つたのは、それは、薩摩は非常に交通が不便な爲めに若し島津に不平を起されたら、之を征伐するに困難を感ずるし、且つ天下の人心已に兵に厭いたからであつた。鹿兒島はそれ程交通の不便な處だから從つて鎖國主義の氣風が起つたものと思はれる。よく世間の惡口に「薩摩か國家か」と言ふ。それは薩摩人が薩摩即ち島津家を第一にするか、國家を第一にするかといふ意味であるが、今の政治家にも矢張りさういふ氣風があつて、薩摩人は何うも自分達の閥を作ることにはなか〳〵エライ、が、自分達以外の者を同化させることは出來ない。薩の盛んの時には其適否に拘らず、盛に當路の要所に薩人を當てたものだ。薩長の政府といふが、長は他藩の人をも歸化させて所謂準長州人として居る。大浦は薩摩人であつて長州化された人、平田東助は山形から出て長州化した所である。薩摩にはそんな人は一人もない。又薩の海軍長の陸軍といふが、長州の陸軍と言つても福島安正の如きは信州より出た長人で、大島次官は岐阜縣から歸化した長人である。海軍でも今では學校出身者を採用するやうになつた爲めに止むを得ず薩摩以外の者をも用ゐるやうになつたが、其以前は嚴重に薩摩の繩張り以外の者を採ることはなかつた。其證據には其頃の提督以上の者は悉く薩人であつたと言つてよい。單に海軍がかりではない。實業界でも、薩摩の盛んな時には凡て薩摩の人が用ゐられて居た。奈良原繁は日本鐵道、森岡正純は郵船會社、吉原重敏は日本銀行のそれ〳〵社長とか總裁とかを務めて、容赦なく勝手放題の眞似をして居つたものだ。晋

生に就いて見ても解る。薩摩人同士の團結力は强いが、其代り他郷の者と同化することは出來ない。近くは薩摩の快男兒長谷場純孝が政友會に籠つたとなれば、其後輩は悉く擧げて政友會に走つたではないか。今日大隈内閣が選擧干渉をしたとか或は國民が政友會の横暴に厭いたとかで二百何十名かの會員が百數名に減つたといふけれども薩摩の政友會は依然として團結して居るではないか。若し松方が天下を取つて同志會を率ゐると假定すれば薩摩の政黨は悉く同志會員となるであらう。斯くの如く薩摩人の特長は其團結力にあるのである。彼の王政維新の薩長聯合の動機なども薩と長とでは非常の相違があらうと思ふ。少しく穿ち過ぎた話ではあるが薩摩人の頭には直ちに政權を天皇に奉還する積りではなく、或は島津侯を一度將軍の椅子に座らせ度ひと思つて居つたのではなからうか。長州は歷代の歷史毛利右馬守輝元が後陽成帝に献金したのを初めとして初めから勤王論であつた。薩摩は蛤御門の時などは會津と結んで、皇軍方に敵對した事さへもあつた。今日我輩のやうな議論を唱へる者はないが、私は長州の勤王論と同じ心持ちで薩摩がこれを唱へたものとは思はない。彼の維新後になつて島津久光公の不平となり、西郷の退官となり、引續いて十年の役となつたのもこの不平が期せずして起つたものではあるまいかと思ふ。私は木戸孝允が或人に遣つた手紙を見たが、薩摩が跋扈していかぬといふ意味のことが書いてあつたが、これは薩長の軋轢ばかりでなく、國家の爲めに憂ひて書かれたものであらうと思ふ。それから薩摩人は陽にぼんやりして居るやうだが、陰になか〳〵利殖の道に富んで居る。これを薩長と比較すると長州人は吝なことを言つたり汚いことをしたりするが存外金は出來て居ない。元老などでも松方侯や大山公はなかなかお金が出來て居る。長でも井上侯はなか〳〵澤山あるやうだが、山縣公に至つては彼の目白の莊園を二代とは維持することが出來ないかも知れぬ。薩摩人は人種の上からいふとマレー、カナカ人種の混血兒だからマレーの特長として武勇には富んで居り、軍人にな

るのには適當して居るが、緻密なことを考へるとか、數理とかには適せぬやうである。だから薩摩人は多く軍人に成功して實業家には成功しない。從來閥族の力で以て各大會社に總裁とか社長とかの名前で薩摩人を振向けたが成功したのは少なかつた。現に今日でも實業界に成功して居る者は少ない。東京の馬車鐵道の如きは閥族のお陰で軍馬を貸して貰つて谷本道之、種田誠一といふ薩摩人が遣つたのであるが、結果は面白くなくて倒れかゝつたのを、漸く大隈系の牟田口元學、中野武營等の經營に依つて復活することが出來た。日鐵も奈良原さんでは振はず郵船會社も實權は岩崎家の人に取られた。日鐵も今では薩摩人は後を絶つて了つた。理事に吉井といふ人が居る位のもので、それから一時若い人で久保勇といふ人が鑛山並に船舶運送等を遣つたが忽ち失敗して見る形も無くなつて了つた。松方の息子等が幸に各地に振附けられて、父の威光に依つて遣つて居る位のものかと思ふ。薩摩人は商賣人や學者等には適しない。只軍人としては大山、伊東、東郷、山本等元帥大將提督それはもう多士濟々といふ有様である。政治家としては團結力が強いし床次君の如き稍々頭角を表はして居るから相當の所までは行けるだらうが、軍人として程の成功は覺束ない。

お隣りの熊本は何うかといふに、これは足利の一族、足利吉季の子孫であつて今日華族中での名家である。然しこの中興の人ともいふべき細川藤高といふ人は足利の末に足利義明を助けて淺倉だの六角だの、諸大名に泣き附き細川の再興を計つた。後織田家の力に因つて細川は再興されたが、此人は非常な苦勞をした人で悧口な人でもあつたから、旗幟を鮮明にするとはいかぬといふ考を有つて居つた。旗幟鮮明は何うしても一方に偏らなければならない。それが爲めには遂に自分の國を亡すといふので、何でも權力者順境者に附くといふ考から頻りに苦勞をした。故に先づ足利家が重代の主君であつたにも拘らず足利義明が敗けて中國に流浪した時にはお伴をせず、何時の間にか織田家に喰つ付いて居つた。光秀の謀叛した時には細川家とは

親類であつた爲めに餘程迷惑したらしいが、それでも何時の間にか秀吉に喰つ付いて居つた。秀吉が死ぬと今度は又德川家にくつ付いた。それが今の細川家六十萬石の土豪を作つたのである。

斯ういふ風であるから此國の國風は始終はつきりせず、巧に勢利に向ふのが熊本人の特性である。然し細川家は始め小名であつたのが段々大きくなつて熊本に移つたのであるが、熊本には土豪が多い。小西行長も、又其前には佐々成政も熊本を貰つたが、謀叛が起つて統御が出來ず成政は到頭詰腹を切らせられた。小西も宇土の城に引き籠つて加藤などの援けがあつたに拘らず非常の惡戰をした。土豪は熊襲族以來の奴で馬來、臺灣邊の土蕃と同じ人種だ。安達謙藏を今少し色を黑くして、それに紅い着物でも着せたら、あの眼のキヨロ／＼した所などは臺灣の山の中から出て來る土人そつくりだ。が、熊本人は一般になか／＼陰險で世渡りが上手だ。御維新の時でも勤王家としては轟武平、山田信道等有つたが然し横井小楠先生に至つては少しくはつきりしないやうだ。熊本の人は一體に世渡りが巧い。氣が利いて居る。内田康哉、清浦奎吾など、皆圓轉滑脱の才人で旨いものだ。先の東京府知事宗像政は顏は臺灣人と間違はれさうだが、あれでなか／＼世渡りが巧みなもので、憲政黨内閣の倒れた時に政黨出身者は相率ゐて野に下つたが、彼は一人壇の浦まで漕ぎ付けると言つて居つたが、とう／＼十七年間其壇の浦に喰付いて居つたではないか。そこらの上手なことなどは實に巧いものだ。其特色が矢張り熊本氣質を代表して居る。

それから佐賀は舊家であつて太宰の少貳より出でた。少貳大伴と言つて少貳は何時でもぐら／＼する奴だ。然しながら佐賀人といふ者は昔から辯の能い人間で而して實行することは何うも下手なやうである。維新の時なども薩長土肥といふが武勳の方は薩長程に行かぬ。又土佐程にも行かぬ。維新後大隈重信、江藤新平等いふ人が出たが、皆論客だ。論客だから今日の立憲政體とか何とかには適して居るやうだ。佐賀と土佐と

は稍々似て居るが、土佐は長曾我部以來、山内のまだ移らぬ以前の土豪があつた。これはマレー人で、黨派心の強い、辯のよい殘忍酷薄の奴である。佐賀は殘忍酷薄の點は土佐に及ばない。土佐は斷行する。佐賀は斷の方が足らぬ。だから革命等には土佐人の方がエラい。野中兼山など云ふ救世主のやうな人を皮の剝いた。後藤象次郎などが武市半平太を打ち切つた。猜疑心黨派心が土佐人をして大きく爲さしめない所以である。板垣と榎本とは人相は同じである。骨相學上人相は同じであるが、板垣には猜疑心があつて反對黨を容れない。即ち土佐人の特長を有つて居る。吾輩は薩摩と長州とを比較したやうに土佐と肥前とを比較して見ると、一方は猜疑心があり一方は斷行力がある。これが土佐と肥前との違ひでないかと思ふ。これは長崎邊には支那人が多いからそこで自ら人間が穩かなのだと思ふ。長崎に至ると最も甚だしい。長崎は初めから大きな大名が居られず外國殊に支那と最も交通して居たから長崎の人は自ら他の九州人より優しく穩かではあるが勇氣は足らない。今も猶この邊には支那人の性を名乘る者が多い。我々の知るところでは江川春平、盧高朗、鄭永寧、呉碩、何禮之等澤山にある。又某子爵の政治家の如きは悧口で頭がよくつて辯舌も巧みで、二百萬程の財産を有つて居つて、仕事をしようと思へば何でも出來る身分でありながら、惜しいことには勇氣が足らない。日露戰爭の時、日々新聞で元老を攻擊したが其攻擊が理由あつたにも拘らず、松方井上の連名の絕交狀を突付けられて忽ち降參して了つた。總理大臣にならうと思へば何時でもなれるし、元老とも戰つて仕事をする事も出來るのだが、悧口で金が惜しさによう爲ない。ここらが南京人の證據であらう。

それから日向と大分は何うかいふと、これは小大名が居つた處である。小大名の居つた處には確然たる性格がない。然し小大名でも妙なもので譜代大名と新參の大名とでは性格が違ふ。例へば御覧なさい。日向の延岡、内藤の家來には立派な者がないが、財部、佐渡原邊の武士には自ら相違がある。佐渡原の方は薩摩の

氣風をもつて居り、內藤の方は三河より移住した故に人間が柔弱である。大分も大大名がないから强い氣風がない。商賣上手な人間が多い。先づ明治維新の會社長は大分の莊田平五郎、朝吹英二、和田豐治、山本達雄等其他枚擧に遑がない程だ。實業を鼓吹せられた拜金宗の福澤先生も此處に御誕生なされた。先生は實業奬勵には功勞あるが、一方から見ると日本の武士氣質を損ずるやうなこともないでもない。獨逸は武士氣質を土臺にして商工業を奬勵して居る。であるから商工業に從事する者も一度劍を執つては强い。ところが日本の實業家は猶太族氣質か、然らずんばアメリカ人氣質で金さへあればよいとなつて居る。福澤先生の趣意はさうではなかつただらうが、今の日本の商賣氣質は商人國たる英國にも及ばず、どうしてもアメリカ人か猶太人位のところである。金持は澤山出來るかも知れぬが、國を憂ふる者は無くなる。福澤先生の先祖の奧平は三河武士で九州武士とは氣質が違ふ。

それから福岡縣は黑田といふ大藩に中藩久留米（有馬）、柳川（立花）の二つがある。黑田家は中國から行つたが、五十萬石に推されたが、人が足らなかつたから土豪を有つてこれに當てた。九州氣質と中國氣質とではすつかり氣質が違ふ。例へば中國氣質は才子で氣が利いて居るが、然し勇氣の點は足らぬ。又土豪は勇氣はあるが、才氣學識に缺けて居る。前者は栗野愼一郎、金子堅太郎、鶴原定吉の如き何うしても氣が利いて優しい。頭山滿、平岡浩太郎の如き確然と性質が違つて居る。土豪に至つては野田卯太郎、貝島多助等皆九州人丸出しの性質である。それから有馬家の方は秀吉取り立の人で、立花の方とは違ふ。有馬の方は幾分か優しい。曾我將軍の如きは柳川の家來である。倉富勇三郎の如きは久留米である。自らそこに異つた氣風が出來て居る。（以下續出）

實業之世界主筆 青柳有美著▲五月一日新刊發賣!!

美と女と

定價金一圓二十錢
郵送料金十二錢
四六判上製美本
七百頁三拾萬字

東京麹町區有樂町
實業之世界社
振替東京三四三三

美術と文藝と女とに關する獨歩の識見!!

(下の内容を見よ)

⊙新吉原改良論⊙女優排斥論⊙雪國美人論⊙結髪美論⊙美術眼養成法⊙本邦繪畫史論⊙曼荼羅圖波斯繪論⊙葛飾北齋の畫⊙人生五分五分哲學⊙ホーマー論⊙木村長門守重成⊙予の觀たる門之助閣下⊙佛國々劇組織⊙原始的言語の新研究⊙女に關する文字と言葉との新研究⊙ラ行父音L音論⊙名古屋私論⊙尾洲徳川家の什寶⊙洋畫の怪傾向を評す⊙美學偏見一瞥⊙『美』は比律なり⊙東大寺戒壇院の多聞天廣目天を論ず⊙彫刻の音樂化⊙聯體彫刻論⊙偶像崇拜奬勵論⊙淫穢陰險の廣告文學⊙裸體哲學⊙貞操生理學⊙肺病と性慾との關係⊙女優さんは色情狂ですか⊙海水注射新療法⊙貧乏者の子澤山なる原理⊙末路には女が跋扈する⊙那翁新論⊙高天原人種レーク・ドウェラース論⊙新しい美人⊙天の羽衣論⊙義太夫論⊙拜殿不可論⊙背景改惡論⊙怒り易き人に告ぐ⊙八郎湖神話の研究⊙與治郎狐の科學的研究⊙必須食物は安價ならざるべからず⊙探偵小說小史⊙『俳諧』を釋く⊙源氏節再興の偉人出でよ⊙褪れる綠の光を論ず⊙趣味とは何ぞ⊙食味と食器及び食堂との裝飾⊙風致破壞を歎く勿れ⊙氣分を論ず⊙文藝功勞賞牌の圖案を論ず⊙個性發揮文學⊙文藝と科學との接近⊙文藝にも本地垂跡⊙繪畫の價値は大さに非ず⊙新しい文士の文體⊙能樂と歌劇⊙早稻田の學者⊙藏書を誇る愚學者⊙支那人に審美眼を與へよ⊙本邦の洋畫家⊙洋畫の短所⊙洋人の日本美術觀⊙フェノロサの美術史⊙ヂロン氏の北齋論⊙華山の畫⊙瀧山寺の建築⊙法廷建築を論ず⊙文展の鑑査審査⊙美術品の相場⊙踊奬勵論⊙新聞紙の本務⊙現代劇と新聞紙⊙二十世紀の暴君⊙門之助閣下に就ての最後⊙山田美妙齋に贈位の御沙汰あれ⊙市川旭梅新之助と婚す⊙先代三遊亭圓遊⊙市川九女八⊙松旭齋天一逝けり⊙藤間勘右衛門⊙女優としての下山京子⊙吉右衛門の突出病⊙高田實閣下に呈する書⊙與[illegible]越[illegible]三郎書⊙宇治龍子に與ふ⊙隱言現語⊙小說『狂ひ節』⊙脚本『白拍子祇王』

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京帝國大學法科大學教授 法學士 吉野作造先生著

日支交渉論

最新刊 定價六拾錢 郵稅金六錢

日支交渉の經過如何。之によりて帝國の新に獲たるもの果して何。……

これ日本國民の何人も知らんと欲し又知らざるべからざるところ。乃ち弊社は、爰に刻下緊急の渴望に應ぜんと志し、著者吉野教授に請うて、本書一篇を江湖に提供す。此書、章を分つこと三、日支交渉の「經過」と「內容」と更に對支政策の「根本」とを論ず。就中第二章對支要求の內容に至つては說述最も詳細を極む。未だ往復文書の公表せられざる今日、最も正確にして最も精密なる見解を本問題に就て得んと欲する士は速かに本書に來つて研究せよ。著者が此重要問題をあまねく國民に知らしめんとの用意を以て、今次の對支要求の條項と。帝國將來の政治的、經濟的發展との關係を極めて通俗的に解說せるの一點は弊社の特に大方の注意を促さんとする所なり。

日米問題

シドニー・ギューリック博士著
栗原基文學士譯
寫眞數十葉挿入

上製八十五錢
並製七十錢
郵稅各八錢

版元 東京京橋 尾張町 警醒社書店 振替東京五五三番

信用なき店舗及ひ卑猥なる實品の廣告掲載は謝絶す

(中付三の二)

文學博士 谷本富先生著

大學講義全集 第貳輯（教育史の研究改題）

歐洲教育の進化

附錄 明治教化の起原

菊判 六〇〇頁
定價 壹圓八拾錢
郵稅 拾貳錢

歐羅巴は今現に大戰亂の最中たり而して其の由る所は畢竟獨逸と英佛聯合軍側と氣質精神を異にするに在つて存す谷本博士烱眼炬の如し海外留學已に二回博識の素養と相待つて歐洲教育の沿革を詳論し各國國運隆替の因緣を明にし幷に我國人文の發達と對照して終に別に明治教化史論を附說するに至る眞個學術的好著にして又同時に經世的名什たり苟くも時勢の變動に注意する者は一讀を吝む勿れ

第壹輯 道德革新論

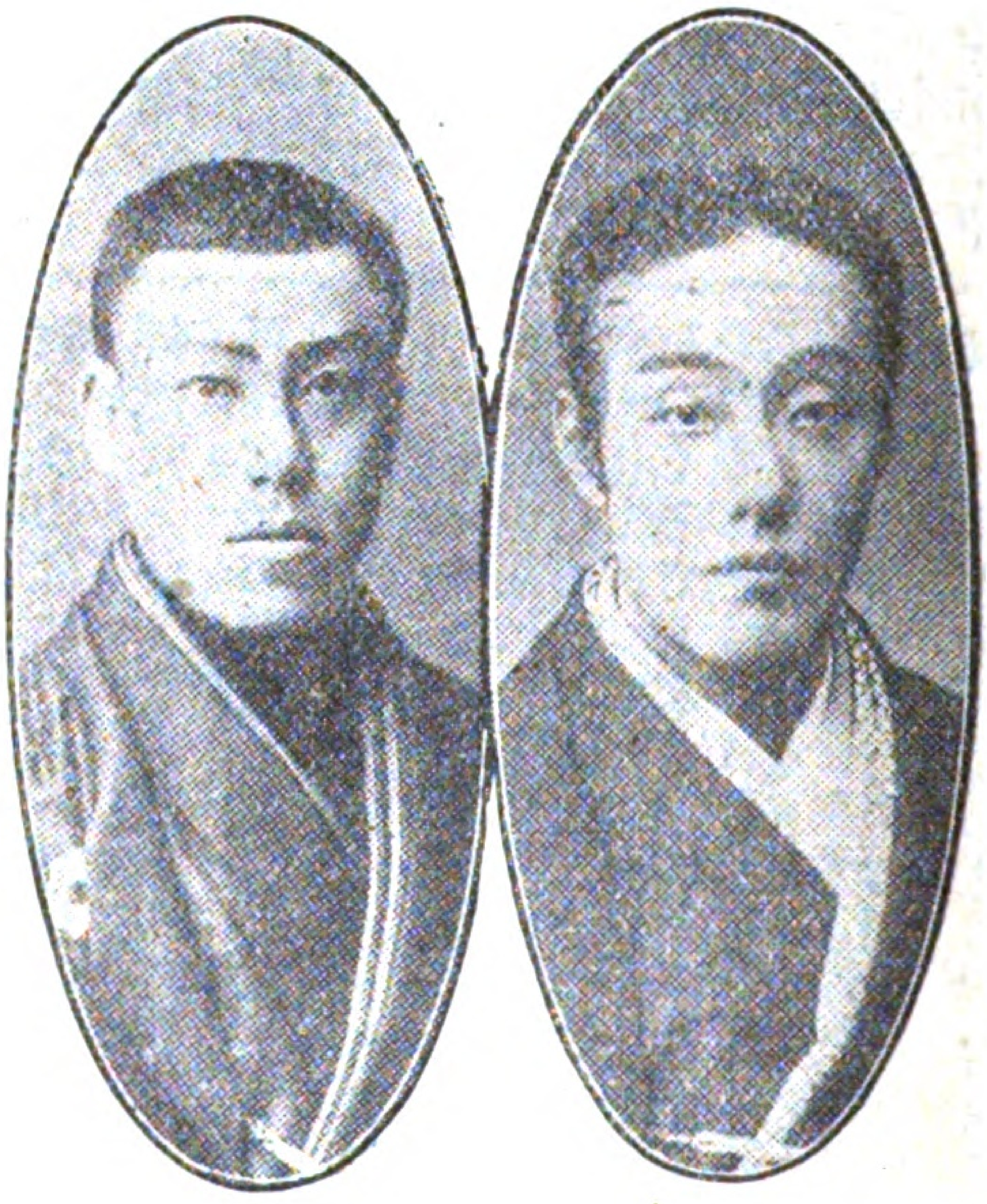
菊判 四七六頁
定價 壹圓五拾錢
郵稅 拾二錢

東京・銀座
大日本圖書株式會社
郵便振替・東京二一九

（中付三の三）

人物評論（十六）

鴈治郎と延二郎



△自分に接觸した點だけの二人

松居駿河町人

□二人の藝の方面――舞臺の上の二人――については、いづれゑらい先生方のゑ

らひお議論が澤山に出る事でございませう。衆愚の旗持見たやうな私風情の出る幕ではございますまい。

□と、云つて私は二人の舞臺外の生活をも知つて居るものでは無い。止むなくば自分に接觸した點だけの材料をもつて、兩人の人物を考へて見たい。

□肌觸りのよい！といふ點からいふと、どちらも同じだ。延二郎の方は長く話した事は無いが、雁次郎に至つては、所謂下へも置かぬといふ御上手さが談笑の間に輝いて居る。が、雁次郎に對してはどうも佛國の愛嬌澤山の美人に逢つて居るやうな氣がする。彼のいふ語の裏を見て居ないと險呑な様な氣がする。延二郎も「口で殺す」といふ方では、雁次郎第二世の評がある。が、私は此方は稍親しみ易い様に感ずる。餘りヒヨコ／＼はしないが、それでも打解けて話して見たい様な人を魅する力がある。英國の女優たちと逢つて居る様な氣がする。彼が帝劇へ出ると、女優たちは樂屋で一番此人を騒ぐさうだ。それは彼が女に對して一種の凄い腕をもつて居るためばかりでは無い。人をして自分の懐ろに飛込ませるだけのオープン、ハアテツトなところがあるためであらう。

□雁次郎のお上手と來たら誰でも知つて居る。それでも彼の風采が如何にも優雅で、容子が如何にも眞面目なので、誰でもころりとやられる。而して誰でも彼を嘘つきの様にいふ。併しそれを以て雁次郎を冷酷だ、輕薄だといふならば氣の毒だ。雁次郎は俳優としては可成常識の發達した、どちらかといへば理智の勝つた、打算的な人であるが、さりとて矢張藝術家的のエクセントリックなところが無いわけには行かない。彼は人と話をして居る間は、いつでも其氣になるらしい。嘘をつくのでもなく、お上手をいふのでもなく、心底から信じて人に話をする。が、時が經ち、熱がさめるともうその事を決行する勇氣は無い。極端な場合には約束した事も忘れてしまふ。約束に對する義務の觀念が薄れてしまふ。

□私は雁次郎が喟然として、新らしい芝居をやつて見たいと長太息したのを聞いた事がある。彼はその時か

ういふことを云つた。「新らしい芝居をやつた歌舞伎役者は、恐らく私が一番初めでせう。末廣鐵腸先生の御作の『雪中梅』といふ政治小説の狂言に、武田猛といふ壯士になつて、地頭の髮を伸してそれへ竹の油をつけてちゞれさせ、群衆の中へはいつてじつとうつむいて居たのが、俄かに立つて長い演説をやると見物はどつと喝采しましたよ」。當時を追懷して彼は曾て陣勝呉廣となつた新演劇の大成を自己の手へおさめたいとまで痛歎した。

□が、彼には今の名聲を維持しなければならぬ責任がある。生活上の煩悶もある。野心のために今の生活を賭するには、もう年齡をとり過ぎた。ある事に觸れ、ある人に逢ふと、野心の炎がむら〳〵と焚え立つて、その思つたところを口へ出さずに居られないが、その言を行ひでもつて裏書する程の根氣は無い。また根氣があつても今の位置なり生活なりがそれを許さない。

□延二郎はそこへ行くと、口も達者だが、同時に行ひに敏なる男であるといふ。何さま、先年東京へ來ても、久しく東京座に據つて、東京の狂言を平氣で片つ端からやつた。上方へ歸ると、團十郎物もやれば菊五郎物もやる。私は京都で九藏の與三に蝙蝠安をやつてるのさへ見た事がある。

□雁次郎が仕勝手の好い樣でなければ決してせず、縱令仕勝手の好い樣でも、成るべく自分中心に引つける事を忘れない程、用心ぶかい性格のに、延二郎は何へでも手を出す。これは双方の年の相違、位置の相違にも由る事であらうが、矢張其性格の相違にも由るのであらう。その爲めに鴈次郎のレパアトリーは次第に狹くなるのみであらうが、併し其狹い範圍內のものは、皆光りかゞやく玉としないでは置かない。延二郎は今の處種々の事情からでもあらうが、餘りに廣く〳〵と手を延して居る結果、玉石同架と云つた姿になつて居る。よいものは非常によいが、時には可成惡いものも交つて居る。

□雁次郎は外から內へと攻めて行く役者である。其藝は外から〳〵と磨きがかゝつて光りは次第に增すが、

其役數はだん〳〵細つて來る。□延二郎になるとまだハツキリ現はれては居ないが、内から外へと延びる人らしい。史劇などになると、往々史劇に慣れた東京の俳優を後へに瞠若たらしむる事がある。この人には世間で認める器用といふ事の外に何ものかゞあるやうに思はれる。

□いつか、歌舞伎座の『助六』の初日前に、私は延二郎と或處で逢つた事がある。其時延二郎は、一座の人々が丸で稽古をしないといふ事を憤慨して居た。此時私は此人が向上心に薄くないことを觀取して心ひそかに頼もしく思つた。此心だにあらば此人の將來は洋々たるものと思ふ。

□要するに雁次郎といふ人は、努力の人である。修養の人である。發達したる常識を以て自己の藝術を琢き上げた人である。而して天は飽まで此人に幸ひを下して、當代比ひなき美貌を與へた。此人の顔を見たゞけで、情趣が忽ち湧いて來る。單に外面的の力ではあるが、それでも外の俳優にはない強い力が此人に特有されて居る樣に思はれる事がある。

□延二郎はまだ〳〵將來の人にして置きたい。此人の容貌は雁次郎に比する迄もなく、他の儕輩に比しても甚だ劣つて居る。それにも拘らず、其舞臺に現はれた容貌は可成すぐれたものに見える。彼も矢張惠まれた一人であるのみならず、内面から滲み出す力によつて、外面に光りを添え得る人である。

□思ふに雁次郎は琢がれたる玉である。もつと琢くべき餘地のある人かも知れぬが、左樣しなくとも玉の本質は遺憾なく發露された人である。延二郎に至つては半ば光りを出しかけた璞（あらたま）である。まだ前者の樣にうるはしい色は出て居ない。が、底の光りはもう陸離として放たれかけて居る。どうか遺憾なき色に彫琢してもらひたい。

△雁は銀、延は鐵

中村吉藏

雁次郎は暫らく見てゐませんから、最近、何うなつてゐるか確乎たる自信を以ては云へませんが、目下、大阪へ旅行中の小生の身に取つては、この二人の大阪俳優に對する興味が自然平常よりも多く出て來てゐますから一言申しませう。

大阪に於ける雁次郎の後繼者は延二郎であるといふのが、大阪の演劇界の定論であります。イヤ、もつと廣く云つて、大阪自身の名優雁次郎、仁左衞門の後を辱めない資格のあるものは、唯、延二郎一人であるといふのが、今の處、劇壇の動かす可らざる公評だと云つても大過はないと思ひます。

乍併、云ふまでもなく雁次郎と延次郎との色調は異つてゐます。例へば雁次郎の特味は銀です。音色から云つても銀の針金で造つた樂器から出る響のやうな感じがします。(聲調から云ふのではないが) 技巧から云つてもコマカイ銀細工を見るやうな氣がします。然るに延次郎の持味は鐵です。延べて細かい針金、——隨分、懷中時計のゼンマイにもなりかねないだらうし、鍛えたら鋭い切味の業物も作れさうに思はれます。その代り、時折、屑や滓も出るでせう。銀にも柔さしい光があり、鐵にも彈く力がある。二人の藝風はそのタイプを異にしてゐます。共通點は上方式の藝の體からにじんで出る油の匂ひです。

具體的に云へば、雁次郎には近松の世話物の優さしい男主人公——戀には熱し、義理にはもろい性格に扮する時にのみ、眞に天下一品の妙技を發揮します。眞の意味で、世界一品と誇稱するに足るものと思ひます。乍併、世話物以外の立役は、決して彼の長所でなく、寧ろ短所であります。本來藝の範圍の狹い人が強いて廣さを求めやうとするのは、誤りです。銀には銀の用途が限られてゐます。銀を以て劍を作ろうとするやうな、無謀な事は止めて欲しいと思ひます。之に反して延次郎には、雁次郎の特色たる優さしい男主人公には成り切れない。近松の世話物で云へば、「油地獄」の與兵衞には扮する事が出來る。男性的のデカタンには適してゐる。而も女性的のデカタンには融化し難い處が

ありますo その代りに、雁次郎の不向な藝の範圍に切り入つて、それ／＼相當に演じてのける丈けの融通自在な素質と技倆とが備はつてゐます。これが爲めに一時は「惡達者」に陷らんとする傾向も見えたが、この頃では、「新らしい方面」への發展の萌芽を有するものと認められて來たやうであります。鐵は鍛え樣一つで、貴重品ともなり、クズ物ともなる。彼は已に堅い地歩を占めてゐるやうではあるが、これから先が大切だと思はれます。

要するに、雁次郎は今が全盛期と云ふよりか、少しは峠を越へた形、延二郎は今後の努力一つで、多望な未來の謎を解いてくれる責任があると思ひます。同時に大阪出身の俳優のために、大に氣を吐く義務の重荷を擔つてゐるものと信じます。（大阪から、五月十五日）

△雁治郎と延二郎

竹の屋主人

太刀山と鳳とどつちが强いといふ事なら解決は容易でまた雙方土俵で勝負を爭ふものだから素人にもハッキリと團扇を上げられますが俳優は左樣はいきません、雙方に同じ役をさせて見たところで、見物の心と、贔負の思ひ／＼で、甲が前へのめつたところが妙だ、乙が後へ倒れたのが巽だと其爭ひは乾上りません、もつとも雁と延といふ題でも其の甲乙をいふものではないでせうが並べて見ると變なものです、雁は既に玉成したもの、延はまだ巢放れの新鷹といふものでせう、延は未來の有るもので、新しいにも古いにも取て掛つて其の奮闘振はすさまじく、大に頼もしいところが有りますが、藝術は奮闘突進したばかりで妙處に到るといふものでなく、又突進するといふ事が正道坦路ばかりでなく、得てしては邪路に踏み込みたがるもの、邪路に踏み込んでも顧みてまた本道へ復れば能いが、ヱ、儘よ是を突破したら存外本道の捷路に出るかも知れないでます／＼蛙の音の横道へ外れて、徒らに猛烈劇の嘲りとなり終るのもあるのです、延二郎の奮闘努力に對

を撰べば先ぢ市川左團次ですな、左團次ははじめ歌舞伎劇には進歩の道なしと自ら見極めたか洋行までしましたが、新しいばかりが藝術でないと悟り直したか、歸朝後は古いところへも研究の手を伸し、新舊兩道に向つて歩を進めて居ます、と云て片足は東京に進み片足は京都へ向いて歩むといふ譯でなく、新しい劇の能いところ、古い芝居の能いところ、雙方の長所を取込まうといふ利口のやり方で、どつちにも力を惜まず奮闘して居ます、勇猛無雙に舞臺に活躍するところ、若くて末に頼みあるところ、此の兩優は能い取組であらうと思はれます、延は洋行をまだしない夫れだけが弱味だと思召すかも知れないが、延は暗處に向つてしばしば洋行を試み、それが或向には後光ともかゞやくと、聞きました、獅子奮迅は勇ましいが、其の勢ひで邪路に踏み込んでは取て返しが付きません、左團次は感心にも海外洋行だけで暗中の洋行なく、しかも新しい方は小山内薫氏の指導を得、古い方は岡鬼太郎氏の補導を得たること、恰も外事決せずんば周瑜に問へ、内事決せずんば張紹に問へと遺訓せられた呉の孫權のごとくにてやがて江東に覇を稱して君主の位に登りませう、延に左樣の參謀の有ることを聞かぬは殘念です、併し英雄獨立して事を成し遂げたる例も少なくない事ですから、延二郎も心を師として地歩を固め、邪路を避けて坦々たる正道に向つて勇往邁進せん事を望みます、心を師とするも邪心を去つて、何にしても目ざましい奮闘振を見て頼もしく思ひます。

△同型に似て同型にあらず

中内蝶二

雁治郎と延二郎とは、一寸見たところでは同型の俳優のやうでもあるが、仔細に觀察すると、その天分に大分異つた點がある。その技能にも大に異つた點がある。その進んで行く道も無論一とつではない。

延二郎は、雁治郎の演じた役を何でも立派に演じて

見せる。雁治郎にはその融通がきかぬ。延二郎の演じたものなら何でも演じて見せると云ふ譯にゆかぬ。これが同型の俳優でない一とつの證據である。

體に柔か味があつて、眼に色氣があるのは上方俳優の特色である。雁治郎と延二郎とにのみ限つた譯ではない。單にこれだけの特徴を以て、この兩人を同型の俳優であると斷定することは出來ない。

表情の巧みなこと、形を作ることの巧みなこと、即ち形式の上にあらはれた技巧は兩優ともに能く似てゐる。けれど、その內容を形式に伴はしめる點に於て、その精神を外部に發露せしめる點に於て、兩優はおのづから異なつた所がある。

雁治郎の技藝は、形を作ることに巧みである代りに、時とすると內容が乏しくなることがある。これだけの內容があるぞと云ふ意味を形式にあらはす技巧は十分に認められるけれど、その內容に存する精神が強く看客の頭に響かない。

延二郎の技藝も、形を作ることに巧みである。それと同時に內容も或程度までは形式に伴ふてあらはれてゐる。雁治郎よりも寧ろ其精神が强く看客の頭に響く場合が多い。

雁治郎の技藝は形が主になつて心が客になると云ふ傾きがある。延二郎の技藝は、殆んど凡ての場合に於て、心が主になつて形が客になつてゐる。雁治郎の技藝に熱が乏しく、延二郎の技藝に熱があるのは之が爲である。

雁治郎の技藝は、役柄によつて出來不出來がある。二つ折物の治兵衛や、忠兵衛や、伊左衛門などを演ずる時には、まことに天下一品の稱があるけれど、武道物になると時々失敗する。形式に囚はれて之が主になるため、見た目は奇麗でも其腹の底から響く音の弱い場合が多い。形ばかりが前へ進んで、心が後へ殘つてゐる場合が多い。

併し、さうなると玆に一つの疑問が生じて來る。――形式に囚はれるのが雁治郎の缺點だとすれば、それ

が武道物にのみ限つて出來不出來のある筈はない。二つ折物を演ずる場合にも、矢張りその缺點が附いてまはらねばならぬ筈である——と云ふ疑問に逢着する。

ところが不思議である。雁治郎が二つ折物を演じてゐる場合には、矢張り形の技巧に囚はれてゐるにも拘はらず、内容が之に伴うてその役の精神が自から外に流露してゐる。

それは何故であらう。私が雁治郎の天分と云ふのは即ち其點である。鴈治郎の持つて生れた本質その物が自から遊蕩兒の役柄に同化し得るやうに出來てゐる。彼が女に惚れたと見せると、心から惚れたやうに見えるのである。彼がすねて怒つたと見せると、眞箇にすねてゐるやうに見えるのである。色町の空氣にあこがれて來る遊蕩兒の心をあらはすべく、彼は最も適まつた體を以つて生れて來たのである。武道物を演ずる時と同様の苦心を以つて舞臺にあらはれても、その効果は二倍も三倍も、時としては五倍も增してあらはれるのである。

雁治郎は徳な俳優である。同時にまた損な俳優である。二つ折物を演ずるに最も適した天分を有つて生れたのは幸福であるが、その代りに其他の人物に扮する場合に融通がきかない。彼は和事の外に實事も出來る。女形にもなれる。けれど、その場合には出來不出來がある。さうして、其他の役柄に對しては、殘念ながら融通のきかぬ役者である。

雁治郎の役柄の範圍の極めて狹いのに反して、延二郎はまた廣過ぎるほど融通のきく俳優である。間口の廣いものは、得て奥行の狹いものであるが、延二郎の技藝は、廣くてさうして又相應に奥行があるから不思議である。

延二郎は忠兵衛も出來る。治兵衛も出來る。伊左衛も出來る。恁うした二つ折物を演じて、平素のあの體つきに似合はぬ色氣を潤澤ならしめることが出來る。實事に於ても雁治郎の演ずるものは何でも出來る。彼の「碁盤太平記」の由良之助の如きは、雁治郎のより

も評判が好かつたほどである。さうして、雁治郎に出來ない役柄でも、何でも立派に仕なして見せるだけの熱と力と技能を有してゐるのである。

延二郎は、和事、實事の外に、敵役も出來る。道化役も出來る。女形にもなれる。老役にもなれる。殆んど出來ない役はないと云ふくらゐに融通のきく俳優である。全く不思議な俳優である。

私が玆に述べたゞけの事實から推して行くと、延二郎は雁治郎よりも一段俳優が上で、雁治郎は延二郎の下風に立たねばならぬと云ふ結論に達するやうだが、併し、現在に於ける兩優の位置はさうでない。

何でも出來るものが名優で、一方に片寄つたものは名優でないと云ふ定義があるならば、延二郎は確かに名優と稱すべく、雁治郎はそれよりも一段低い位置に在らねばならないけれど、藝術家を品隲する場合には、そんな數量的の標準にのみ重きを置く譯には行かない。

今日の雁治郎と延二郎とを比較すると、無郎雁治郎を第一流の俳優とし、延二郎郎を第二流の俳優としなければならぬ。兩優の舞臺に立つた處を見ると、雁治郎には何時でも一人で舞臺を背負つて立つてゐられるだけの光りがあるけれど、延二郎にはまだそれだけの光りがない。さうして、その光りの強いと弱いとの差を生ずる原動力は、即ち技巧の洗練と云ふことに歸する。

雁治郎の技巧は、十分に洗練された技巧であるが、延二郎の技巧はまだ十分に洗練されてゐない。まだまだ磨きをかくべき曇りは澤山に存してゐる。

雁治郎の將來？——これは疑問である。彼の技藝は今日以上になほ發達する餘地ありや否には、遽かに斷定することが出來ない。疑問は矢張り疑問として存して置くより外はない。

さらば延二郎の將來は——無論發達すべき希望は十分に存してゐる。彼は熱心な藝術家である。熱心な研究家である。舞臺に立つて努力を惜しまない。彼は如

何なる役を引受けた場合でも、汗みづくになつて舞臺に奮闘してゐる。而かも其奮闘振りが、或一部の奮闘役者のやうに、舞臺に刎ね廻はつて空騷ぎをするのではない。自分の扮せる人物の精神を如何にあらはすべきかに就いて、内部の苦心奮闘に夢中になつてゐる容子がありくと外にあらはれ來るのである。

或は延二郎の舞臺を見て、まだ餘裕がないと非難するものがあるかも知れない。併し研究的態度を執つて奮闘努力する時、まだ餘裕が出ないと云はれてもそれを敢て氣にするには及ばない。私は延二郎が今日の研究的態度を、何時までも續けて止まなかつたならば、正に雁次郎以上の名優と稱せられる時代が來るであらうと信じて疑はない。

△雁治郎と延二郎

池田大伍

△松竹會社が新富座を經營するやうになつてから頻々と雁治郎や延二郎の下阪を見るやうになり都人士の口にその名が盛んに上るやうになつてからもう久しいことだ。雁治郎ももう一通りの技藝を見せ盡して今度は忠臣藏といふこと、尤も本人の望みはそれになかつたのたが助六で儲けた松竹が出し物で固くなつたのだとの内端話、まことに有そうなことながら雁次郎には氣の毒、まさかに由良之助は獨得といふことにも行かず、新聞評もまづ同情五分といふ所、一通り誰れもすることに本人の位丈けといふ所がまづ本當らしい。矢張この人の本領は和事、それもふつくりしたといふよりすべてに氣が利き過ぎて、紙治にも忠兵衛にもひよいと態とらしい所があつて半分茶化したような所があつて生一本の味に乏しいので往々性格論なぞを楯にとられていぢめられるが、これはその人にないことなので、本人に同情していへば云ふ方が少し無理。併し情熱も中々あるし感所になるともうそういふ事は忘れさせて充分紙治になり忠兵衛になり同感させる手腕は充分ある。それに雁治郎からあの愛嬌を取つたら今よりぐつ

と淋しい俳優になつて見巧者には賞められるか知れないが今の出世も人氣も得られなかつたであらう。伊左衛門が左程世評にのらなかつたも大家の若旦那といふ品をもつて地を殺してゐたからのこと。僕なぞの見る所では仁左衛門のなぞよりぐつと良かつたが一般世評はあまり榮えなかつた。要するに雁治郎が故人宗十郎の遺鉢を次いで更らに一生面を擴いたのはこの地合の愛嬌であつた。難しい詮義をしたら雁治郎の紙治も忠兵衛も南方十次兵衛も欠點はいくらもあるが理窟を捨てゝみてゐたらこの位心地よく見られる役者は少ない、雁治郎充分に一旗幟を樹づるに足るべしである。

鴈治郎の後繼者と認められてゐるのは延二郎、これはまた何でもやで立役ござれ、和事ござれ、立廻りも先づ上手とぐつと鴈治郎よりは藝範は廣いがちと惡拗いのが過ぎて先年東京へきたときは散々の不評でかへつたが松竹の手でくるようになつてからぐつと役者を上げてする事の器用さは雁治郎も劣らぬ所が出來てきたが持前の下作な所と押出しの惡いのが邪魔をして割に人氣が出ないようだ。雁治郎も隨分出つ尻で恰好の惡い役者であるが眼付に到つてはたゞ少し色氣があり過ぎるが厭味だが故人菊五郎の外に匹敵するものもない利器である。延二郎は器質的には全く零であるがそれを補ふに餘りある才氣がある。座敷の取持の上手なことは無類で一度座敷へ呼んだ客は忘れかねる妙がある相である。舞臺の上も同斷で才氣ありあまつて面白いことはしてみせながら氣を負ふて無愛嬌で傍若無人で時には神經の鋭い見物には惡感を催させることは曾我の家五郎と同脈である。だが延二郎の將來を作るものもこの才氣で、宗十郎が過去に雁治郎が現在に時宜に適してゐるようにやがて將來に大阪劇壇の覇を稱する日は遠からぬことであらう。だが却す〲もその才の向けよう一つである。

△銀のナイフと安全剃刀

上司小劍

標準さへ低くすれば、總べての藝術家は天才の伍伴に入ることが出來る。我が鴈治郎と延二郎とを比較する時、(中央公論の目的は兩人の比較のみにあるのではなからうが)いづれにも其の小天才に膠着した、グニャ〳〵と煮え切らぬ技藝を見ることが出來る。兩人には一見甚だ共通の點があるやうに思はれてゐるやうであるが、これは東京人が見る大阪俳優全體の共通點であつて、稍細かに見るならば、兩人には多くの相背反した點が多いやうに思はれる。

鴈治郎は決して才人ではない、寧ろ鈍根の大成したものである。彼れの技藝に於て爛熟を見ることは出來るが、潑剌たる箇所をば一つも見出すことは出來ぬ。彼れの鈍には重が伴はない。彼れは鉞ではなくて、小刀の切れないやつに丹念な磨きをかけたものである。稍上品に形容すれば、銀製のナイフとでも言はうか。故團十郎は鈍重なること鉞の如く、併も相當に刃も付いてゐたらしい、妻楊枝を削つても削られぬことはなかつたらしい。たゞ彼れの無敎育と無智と、さうして形式生活から脱することの出來なかつた束縛とは、彼れをして馬鹿々々しい有職趣味に沒頭せしめて、多く活人畫の範圍を出ない小天地に天禀の技藝を埋めて了つたらしいが、併し鴈次郎のやうな底光りのしないものではなかつたであらう。

私はこゝに敢へて故團十郎と雁治郎とを比較しやうとするのではない。また團十郎をばそんなに名優であつたと思ふものでもない。たゞ雁治郎の、柄の中に入つた部分にまでも綺麗な磨きをかけた小刀(餘り切れない)のやうな技藝を、ところ〴〵赤錆のついた大鉞のやうな團十郎の技藝に比べるのが、最も其の實質を明瞭にすることが出來ると思ふからである。

伊左衛門とか治兵衛とか忠兵衛とかいふもので舞臺に於て、東京人は無暗に雁治郎に感心して、柔かいとか、情緒がふつくらしてゐるとかいふけれど、新町の扇屋の息子に生れて、瓢雀の弟子になつた雁治郎、大阪の若旦那出身の雁治郎に取つては、何等の技巧を加へずとも、殆んど木地其のまゝで、伊左衛門たり治兵衛た

り忠兵衛たるを得るのである。それにあゝいふ風の演伎は演伎としても、實際は甚だ樂なもので、宛ら今の松助の演伎が難かしい苦心を要することなくして、成功を收め易いのに似てゐる。見馴れぬもの、聽き馴れぬものには、物珍らしさをそゝられる爲めに、技藝の正體を胡魔化し得るといふ利益がある。私は雁治郎の伊左衛門や治兵衛や忠兵衛に對して、彼の花井お梅が自ら花井お梅に扮したといふほどの價値(?)しか認めない。それよりは昨年新富座での春藤治郎左衛門とか、或は二十年前私が母に連れられて初めて鴈治郎なるものを觀た時の櫻丸などに於いて、雁治郎の眞價を評したい。さうして、美しく磨き上げられたる銀の小刀と言ひたい。

延二郎に至つては、雁治郎と違つて、如何にも才人であるらしい。延若といふ俳優の子に生れ、幼にして父に別れてから隨分苦勞もしたらしいが、彼れの才氣は遂に彼れをして今日の位地にまで達せしめた。彼れは雁治郎なぞと同じく如何にも歌舞伎役者らしい顏を有つてゐる。さうして雁治郎よりも筋肉が引き締つてゐる。羽左衛門や左團次のやうな非歌舞伎俳優的の顏ではなくて、適當に引き締つてゐる。彼れが若し其の才氣よりする八百屋的間口の廣い、薄ッぺらな技藝——能く切れて、しかも無難な、さうして深か味のない安全剃刀的技藝——をば、更に深く突ッ込んで、膠着しかけた小天才の淺瀬から、大海原に漕ぎ出でた時私は左團次なぞと共に最も未來に富んだ俳優として、彼れを見ることが出來るであらう。

老年の鴈治郎に對してはもとより多くを望むことは出來ぬが、延二郎に向つては、歌舞伎劇の返へり咲きといふ一時の現象に安心することなく、大阪の郷土藝術といふ地理的有利に依賴し過ぎることなく、大なる修練と苦心とを以つて解放されたる新藝術家の地位に進むべき心になつて貰ひたい。

△鴈治郎と延二郎

伊原青々園

△雁治郎を今のやうな役者に仕立てたは故人の宗十郎と延若とであつた。最初は延若に引立てられて其の藝風を學んで居たのが、後に宗十郎の知る所となつてより、宗十郎崇拜となつたのである。

△先年僕の宅へ雁治郎が來た時、宗十郎と延若との相違は何うかと聞いたら、彼れは下のやうに答へた。「末廣屋(宗十郎)さんは毎日々々、小言を言つて、彼處がまづい、此處が行けない、と言はれるからハラ〳〵して、何うして宜いかマゴついてばかり居ましたが、河内屋(延若)さんは一興行の濟むまで何とも言ひません、其れで毎日する事を見てゐて、其の芝居が濟んだ後で、彼處はあゝしては成らぬ、此處は斯うしなくては行けないと言はれるから、末廣屋さんに付いて居るより餘程修行になりました。」

△雁治郎の此の談を見ても、延若の方が宗十郎よりも彼れを薫陶するに力のあつた事が分かる。そうして其の延若の悴が今の延二郎である。だから雁治郎と延二郎とは同門の人であるといふ事が出來る。同門のうちで鴈の方が、先輩だが、延の方は寧ろ雁よりも眼上に當る勘定である。

△實際、二人の舞臺を見ても能く似通つた所がある。雁治郎が「紙治」を得意とすれば延二郎も矢張「紙治」を得意として居る。雁が「梅忠」をすれば延も矢張「梅忠」をする。斯ういふ上方狂言の和事の役は二人共にオハコとする所である。

△だが、藝の廣い點に於ては雁治郎より延二郎に團扇が上がる。今ごろ新富座で雁が由良之助と若狭之助と勘平との三役を勤めて居るが、其のほか師直や平右衛門はしようとしても柄にない。處が延二郎は此の五役ともを立派にやつて退ける。雁は和事や實事や武道やは出來ても、敵役は出來ないが、延は其れも出來る。

△もうひとつ、延が出來て雁の出來ない事は新派物の狂言である。四月の歌舞伎座で喜劇「アラビヤ夜話」

を演じて延二郎は立派に散切物の伎倆を見せた。其の前、東京座では「魔風戀風」を演じた事がある。又卯三郎とゴリキイの「夜の宿」を飜案したやうな「世間師」で成功した例もある。而し　雁には其ういふ藝當は出來ない。此れは一つは年齡の若いと老けたとが其ういふ相違を來したに違ひないが、要するに延の方が遣ひ道は廣い。

△しかし、雁の長所は間口の狹い代りに奥行の深い所にある。遣ひ道は廣くないが、するものに對しては細心な工夫や彫琢をする。だから雁の藝には屑がない。之に反して、延の方は放膽である。何でも來いと無暗に働く。其のうちには好いものもあるが惡いものもある。

△無論、先輩の鴈と若輩の延とを並べて比較する事は無理だが、二人の相違を數へて見ると右の通りである。雁の藝は最早熟し切つて居る。此の上に新生面を拓くといふやうな事はむつかしからう。其處へ行くと延にはまだ／＼未來がある。此の上に藝を研いて且つ脚本の選擇に充分の注意をしたら幾らも新らしい版圖が擴げられるであらう。其の點では羽左衛門よりも望みがあるかと思はれる。だが、其れには傍から助言してくれる指南番を見付ける必要がある。菊五郎が江戸狂言で努力して爲るやうに、延二郎が上方狂言で努力したらスバラしいものになるであらう。

△鴈と延

正宗白鳥

この頃は芝居に對して殆んど興味を持たなくなりました。殊に大阪風の芝居を好みません。取別け雁治郎式の藝風は嫌ひです。紙治とか忠兵衛とかも近松で讀む時はいや味がありませんが、雁治郎などによつて演ぜられたのを見ると不愉快です。昨年大阪で同人の「長三郎」とかいふ上方式色男に扮して藝者にジャラつくのを見て氣持が惡くなりましたが、今年延二郎が傳兵衛に扮して四條河原でお俊にジャラつくのを見て同じ

やうに氣持を惡くしました。これに比べると「助六」などは阿呆らしくてもいやらしくないだけどれほど氣持がいゝか知れません。私は鴈よりも仁左の方がまだしも好きであります。以上

△鴈治郎と延二郎

鐵笛

專賣特許を笠に冠ぶつたり、よく商標にお目止められてお買上を乞ふたりするのは、まだ贋造の出來る餘地を有して居る尋常一樣の品物たるに過ぎない。ところがこれより一歩を出でた巧妙なる作品は僞造し得られないものでなくてはならぬ。實に我が雁治郎丈の紙治とか忠兵衞とかいふ和事式の技藝は他人の企て及ばざる天成の逸品で、今更に品隲するのがおかしい位のものである。要するに彼は脚本の版權問題や興行權問題を超越して居る高踏的な手腕を持つて居る人である。

延二郎丈の技術は雁治郎丈の如く一方面の技巧に卓絕したるものはまだ見へぬが、その多方面であるのは將來の發展を期待せずには居られない。

雁治郎丈が現今關西の劇壇に於て覇たる如く延二郎丈は近き將來に於て、關西劇壇の大將たる事は、誰れでも芝居好の人の豫想でもあり、又それが事實でもあると信ずる。吾人もこの兩優が巧妙なる技術を讃美する事は、敢て世の好劇家の人後に落ちない積りである。

△幕内から觀た兩優

伊坂梅雪

鴈次郎は役者としての資格からいつて、東西の俳優中これ程の資格を具へた者はない。技藝の巧拙といふことは別にして、所謂藝人といふものに適した性質を有つて居る。平常の交際から言つても極めて人附合が良い。八方美人式だとも言へる。

凡そ役者には新しい物を研究的に遣りこなす人と、

古い型を摸倣的に遣る人との二つがある。仁左衞門、左團次等は何方かと言へば新らしい物を仕活す側の人で、從來としても新しい物で成功をして來たやうである。そこへ來ると鴈次郎は最近大阪で土屋主税とか錢屋五平とかいふやうな新しい物でも當りを取つたやうであるが、これには大阪朝日といふ大新聞の勢力もあつたらうし、渡邊霞亭君が雁治郎に篏めて書いたといふことにも因るので、何方かと言へば矢張鴈治郎は二枚目の辛棒立役を得意として居る。

始め二十何年か前に鴈次郎が東京へ遣つて來た時に團十郎の由良之助で淸水一角、雁紙の玉章、重次郎を出したことがあるが、その時私の見たところでは左程でもなかつた。ところが二度目に來て佐々木盛綱と川庄とを出したが、これが眞の大阪藝其物を發輝して東京人の非常なる稱贊を博した。が、前言つたやうに此の八方美人が却つて禍をなして遣り損ふやうなこともある。

明治三十八年か、私が時事新報に居た頃、長田秋濤君と雁次郎との間で話が纒つて其頃大阪時事に連載されて居た『戀か情か』といふのを大阪中座で演じることになつた。一體それは誰れに斷つて遣つたのか、版權も著作權も從つて興業權も時事新報にある筈であるから私は時事を代表して抗議を申込んだ。が、結局上場を許すことになつて、座主の川村にも會ふといふので、面會して上場の運びにまでなつたのであるが、雁次郎は京都に約束があるといふので此方をすつぽらかして了つた。それでとう〳〵延二郎一座で遣つたことがある。又雁次郎が十一月に歌舞伎座へ來る約束で社長の大河内からそのことを確める爲めに賴まれて大阪へ行つたことがある。すると十一月一日から十一日まで京都に約束があつて、東京で二十五日間打つて居ると結局其方へ間に合はぬことになる。そこで兎も角も白井松次郎に會つて呉れと雁治郎の妻女が言ふものだから京都で白井に會ふと、朝日の脚本を京都の顔見世で遣るといふことになつて居たので歌舞伎座の大河内に會つて此方を延ばさせることにして私は手を退いて

了つた。斯ういふことは惡意ではなからうけれど餘りに八方美人式でそれが爲めに雁治郎に禍するやうなことがないでもない。雁治郎の性格の一般はそれでいくらか解つたであらうと思ふ。次に

延二郎は顔から言つては雁次郎と較べものにならない。技藝の點から言つてもまだ〳〵比較にはならぬ。露骨に言へば二三枚方劣つて居はしないか。然しながら技藝の劣る劣らないといふことは役柄にも依ることであるから、延二郎も柄に箝つた役でさへあるならば雁治郎にも優ることがあらう。丁度生花の先生が花を生けることを敎へるに天地人とか眞行草とかいふ格式に箝めて敎へるけれど、若し先生よりも良い枝を有ちさへすれば弟子でも先生以上に花を生かすことも出來る。役者の技藝もこれと同じて、雁治郎と延二郎とでは、位置の上から言つても年功の上から云つても其他色々の點から言つても延二郎はまだ〳〵雁治郎の敵ではない。顔はあのやうにしやくれて居るし、それにこの節益々肥滿して來たから、雁次郎を眞似ても尙及ばざることと遠しであらうけれど、兎も角延二郎は極めて器用人で、親にも早く離れてあれまでに仕上げたのも凡てあの人の力である。東京に永い間來て東京座に出て居た時分に東京の藝風を學び出演物(だしもの)とも覺え、團十郎、菊五郎、左團次物を巧に眞似て大阪へ歸へつては雁次郎に刃向ひながら雁次郎の畠の物をも遣つた。何でも彼でも若いに任せて遣こなすのが此人の力强いところである。本來此人の畑は雁次郎に比して廣く又それだけ融通もきく。少くとも使つて調法な役者であるに相違ない。然しながら、大阪ではさうでもないが東京では今のところまだ延二郎だけで客を呼ぶことは出來ない。人氣はあるが人氣だけの客がつかないのは何ういふ譯であらうか。昔からずつと考へて見るに役者の中に人氣のある人と、芝居を面白く見せる人との二種類がある。團十郎とか菊五郎とかは人氣もあり又芝居も面白く見せた人である。其當時の福助今の歌右衛門とか權十郎とか左團次とかは人氣のある人であつて、松助とか先代片市とか死んだ團藏とか今の八百藏とか

は芝居を面白く見せる手腕はあるが人氣は少ない。延二郎も何方かと言へば此人氣の方の役者になりはしないかと私は思ふ。延二郎の大阪の人氣が何れ程あるかといふに其一例は何時か時事新報で俳優の投票を行つた時に北新地での有力な茶屋の主婦の佐藤といふのが言ふのに、實際今大阪での人氣役者といふのは誰れであらうかと言つて私が尋ねると、『私の家では福助（當時政次郎）に縁故があるから福助に投票しなければならないが、人氣といふことから言へば延二郎の右に出ずる者はあるまい。私に一萬票の投票を下さるなら一つ延二郎に火をつけて見ましやう』と言つたから、只は遣れない、茲に百圓をお茶代として置くから君の好きな人に入れたらよからうと話したことがある。

又延二郎が明治座に出て居た時に明治座の人が私の處へ遣つて來て『河内屋は誠に感心な人で芝居がはねてから一晩に二三軒は遊びに廻る』と言つて話したから即座に私は『馬鹿だね』と言ふと、其人は怪訝な顔をして居たが、一晩に三軒遊び廻るとしたら少くとも一軒に茶代の十圓は遣らねばならず、女中に五圓、其土地の姐さん株を二三人、若いところで五六人、少くとも七八人の藝者を呼ばねばならないから、祝義からお茶代席料まで拂つて百圓の金はかゝる。それに打ち出してから三軒廻るとしたら早くとも二時や三時にはなる。それで役者に來て貰つて茶屋が儲かるかと言へばちつとも儲からない。連中が作らねばならぬし芝居茶屋への遣物もしなければならぬし茶屋の女中や男衆にまで御祝義を呉れねばならないし、おまけに商賣は休まねばならないと來るから有難いどころの騒ぎではない。延二郎がこの位にまで運動を盛に遣つて居るのは感心だが、それがみんな見物の頭にかゝつて迷惑になつて居るのを知らない。

要するに雁治郎と延二郎とでは今のところ較べものにはならないが、一方はもう下り坂だし片方は登り坂、一方は何でも屋で一方は型のある藝を保存して行かうといふ行き方、たゞ使ひ道の廣いといふ點では新舊共に相當にこなして行く延二郎の方に團扇があがる、雁

次郎は一口に言つて古物保存の意味に於て尊い役者であるといふことが出來る。

△雁治郎と延二郎

小宮豊隆

私は此頃あんまり芝居を見ない。雁次郎の芝居も延二郎の芝居も、今年になつてからは、まだ一度も見てゐません。然し一年や二年見ずにゐたつて、夫程變化のありさうな二人でもないんですから、私が今二人のことを書いた處で、別に大して間違つた批評にもなるまいかと考へます。――

一體大阪の役者は東京の役者に比べて、ざつと四つの特徴を持つてゐると思ひます。第一は非常に「動き」が多いと云ふことです、第二は一切の「動き」が何方かと云へば他人に見せると云ふ心持から重に出發して來てゐるらしい點であります、第三は世話の味が勝つてゐると云ふこと、第四は同じ世話物にしても特殊なものへ行くと際立つた現實味が出ると云ふことです。

大阪の役者は、一切の「心持」は一切の「動き」によつてのみ第三者に傳へられべきものだと考へてゞもゐるのでせう。大阪の役者は殆んど「腹藝」と云ふことを頭の中に置いてゐない。尤も「腹藝」と云ふことは特殊な人格を背景にすべきもので、何んにも持つてゐない者が「腹藝」と稱して何んにもせずにぬうつとしてゐるのは隨分滑稽なものであるにはきまつてゐますが、大坂の役者は「腹藝」と云ふ事を問題にしない許りでなく、「心持」のない處にまでも「動き」を濫用して、盛んに小手先きの器用を見せる癖を持つてゐます。是は「心持」が吃るから、其空虚を補ふために「動き」を借りて來るためかも知れない。舞臺に開く穴を氣にする役者の神經質か、見物の神經質が役者に反射して夫に反應する役者の動作がかうなるのか、そんな理由を落ついて考へて見たら、色々面白い結果も得られるでせうが、一つは大阪の芝居には人形芝居が恐ろしく力強い影響を及ぼしてゐるせゐでもあらうと思はれま

す。換言すれば、大阪の芝居は東京の芝居よりも、余計に傳統的であり從つて余計に(其方面で)頽癈的であるせゐでもあらうと云ふことなんです。

然し人形芝居の型と云ふものは、生きた人間の動作を寫實的と云ふよりは象徴的に——然かも人形の構造上餘儀なくせられて直線のみから成立つ幾何模樣的に——描寫しやうとしたものですから、生きた人間の動作なら手を一度曲線的に動かせば濟む處を、人形では三度にも四度にも割つて直線で現はすやうな始末になります。大坂の役者の芝居を見てゐると、今度は生きた人間が、如何に精細に死んだ人形の動作を眞似ることが出來るかと云ふことを、特に苦心して他人に見せやうとしてゐるやうに思はれます。普通の生きた人間の動作とは考へられない、然かも歌舞伎芝居の世界の中の人間の動作としても考へられない、從つて無批評的な若しくは射讃的な動作とよりしか考へられない「動き」が、頻繁に出て來るやうに思はれます。東京の役者の「動き」には隨分批評が加はつてゐる、内から外への「動き」として工夫されてゐるものが多い、從つて唯見せると云ふ藝當丈けよりも一つの心持を第三者に感じさせやうとする藝術への努力に專中されてゐる傾きがあります。——大阪の役者の「動き」は惡い意味で浪漫的なんです。

處が不思議なことには、今の大阪役者の大部分は、其「動き」が恐ろしく浪漫的な感じを持つてゐるにも拘はらず、其藝の肌合ひは世話の味の勝つてゐるものが多い。大坂の役者は大抵時代物趣味の役者であるよりも世話物趣味の役者です。大坂の役者には、時代物に特有な物々しい重々しい氣分と節奏とを持つた役者が、殆んど一人もゐません。感情や情緒は多量に賦與せられてはゐます、然し夫等のものは何方かと云へば寧ろ輕い全時に現世的の感じの深いものです。堰ぜきの水を切つて落したやうな、壓倒的な潰絶的な感情や情緒ではありません。

然かも大阪の役者の其寧ろ輕い同時に現世的な感じの深い特徴が、世話物の芝居に——特に男と女との戀

愛關係をエロティックな氣分で取卷いて取扱つた芝居――に於いて、情味の濃やかな、東京の役者に比べて遙かに現實的な、印象を與へる所以の一つを形づくつてゐると思ひます。一體大阪の土地其ものが戀愛關係に於いては、東京よりももつと濃やかなもつと痴戯的な趣味を持つてゐるのでせう。さう云ふ地方色が、役者の人格なり藝格なりに現はれて來るのでせう。大坂の役者はエロティックな世界では、東京の役者の及びもつかない、柔らかな複雜な巧緻な全時に又活々した藝を持つてゐます。

――雁次郎と延二郎とのことを云ふ筈のが、大坂の役者一般のことで、長くなつて仕舞ひました。豫定の制限があるから、此方の方は止むを得ず端折らなければなりません。

然し私が大阪の役者一般に就いて云つたことは、雁次郎にも延二郎にも當箝ることで、唯二人の違ふ處は此の特徴の量の組み合せ方が違つてゐる點にあるのだと、云へば云へないこともありません。――世話の味が勝つてゐると云ふことも、其世話の味がエロティックな世界を背景にするとき特に色ろんな活々した印象を人に與えると云ふことも「動き」が多くて「腹藝」などやらうとするとやる當人の方が擽つたいやうなむづ痒いやうな顔をしてゐると云ふことも、其「動き」が他人に見せると云ふ心持から出立してやゝともすると小手先の器用とか臭さ味とかに墮落しさうな危ない傾向を持つてゐると云ふことも、二人に共通する特徴です。

雁次郎と延二郎との違ふ處は、延二郎には奔放な不羈な従つて自由な従つて一種粗野(ヴルガー)な感じがあるが、雁次郎には不羈も奔放も殆んどない其代りに、精錬(ファインイント)がある、と云ふ點にあるだらうと思はれます。夫だから雁次郎に紙屋治兵衛は出來ても河内屋與兵衛は出來ない、延二郎に河内屋與兵衛は出來ても紙屋治兵衛は出來ない、と云ふことにもなると思ひます。延二郎の藝の持つてゐる不羈奔放な感じは、一面に於いてぴりゝとする鋭さを持つてゐるんですが、不羈奔放のない雁次

郎の藝には皮肉な心持が些しも見當らない、何處まで行つても柔らか味がありふくらみがある。夫故仝じ色男でも『乳貰ひ』の狩野四郎次郎と云ふやうな役は、徹頭徹尾柔らか味とふくらみとで出來上がつてゐる雁次郎には、迚も出來る役ではないのであります。

雁次郎は何うしても大坂役者の典型です。大坂の地方色を最も多量に又最も遺憾なく具備してゐる役者です。然し延二郎には「純粹」と云ふ心持が少ない、何方かと云へば「雜種」です、善い意味にも惡い意味にも延二郎の血には外の土地の血が混つてゐます。例へば延二郎の藝格には「猖獗」がある、雁次郎のには夫がない。「猖獗」は純粹な大坂役者の舞臺にはあるべきものではないでせう、寧ろ夫は純粹な東京役者の舞臺にあるべきものでせう。其點から云へば延二郎には東京役者の血が混つてゐるのだとも云へます。

純粹と雜種と――其處から雁二郎延二郎との分野が區劃されて行きさうな氣がします。私は雁次郎を時代物の役者だとは思はない、然かも延二郎は今少し何うにかしたら時代物の相應に出來る役者になれはしないかと思つてゐます。雁二郎が時代物をやるときには、何日でも「形」だけが先きに纒つてゐて、後で「心」を牽强する感じがつき纒つて仕方がないのですが、延二郎の方では縦合ひ今出來上がつてゐるものは夫程のものではないにしても、雁二郎程に「心」を牽强する必要のない程度に、時代物に特殊な「心」の性質を持つてゐます。

――然し今の處私は雁二郎をも延二郎をも世話物役者として、さうして特に舞臺の上の Erotiker の二つの型として、尊敬してゐるのであります。

（五月二十一日午）

△藝の人鴈治郎と才の人延二郎

楠山正雄

私は上方の劇壇の樣子は少しも知らないがこちらの劇壇が歌右衛門羽左衛門中心から菊五郎吉右衛門中心の時代に推移してゐるやうにあちらの劇壇も雁治郎から延二郎へと中心が移動してゐるやうにも思はれる。さういふ意味では、今日に於いて雁治郎と延二郎を比較するよりも延二郎と菊五郎乃至左團次吉右衛門を對立させるはうが意味があるやうだ。

殊に延二郎對菊五郎の對比に一番多くの興味がある。年輩位地からいへば延二郎に對すべきものは羽左衛門でなくてはならないが、今日の羽左衛門は早老の氣味があつて甚だしく精彩を損じてゐる。氣力に於て延二郎の敵ではない。

延、菊の類似は、肉體的條件の豐富なこと。藝の融通の自在なこと。頭のいいこと。小手の利くこと。神經質なこと。（ただし延二郎は菊五郎のやうに神經質を神經質らしく露骨にあらはさず、大阪流の鈍角式の言語表情の中にたゝみ込んでゐるところは年功といふべきか）眼の底に一寸人にきらはれる卑しい光のあること。その他――

とにかく丸本物、實錄物、活歴物と歌舞伎の狂言一通りは行けて、時に新派の役者と合同し、自由劇場の諸君と飜譯劇をやり、治兵衛型忠兵衛型の二枚目役に雁治郎をあやまらせようとする延二郎である。何でもやりこなす大膽は菊五郎のどこか神經質に臆病なところのあるのと違つて一層徹底的である。

實をいふと延二郎にはよくいふ意味の「惡達者」でないまでも藝のどこかに卑しい部分があつて全體としてあまり好感を與へないことが多い。ありあまる才氣でそれを巧みにかくしてはゐるがそれが見え透くだけいやである。

さすがさういつた厭味のないのは雁治郎である。私の見るところでは、ほんたうの天分からいつて流行言葉の、「本質的」にいつて雁治郎は當今の希人である。藝の品等からいつても藝の骨法からいつても。

私の歌舞伎劇に對する興味は今のところ大部分官能的のそれである。雁治郎は當今の歌舞伎役者中官能式を代表する第一人である。雁治郎の一擧手一投足がみな藝である。「藝」もあすこまで徹底すればいひしれぬ韻致を生ずる。

役者の「魂」といふことを論ずる人がある。その人達は私が例へば雁治郎の「藝」の細部に魂がこもつてゐるといふと大變可笑しいといつて笑ふ。「魂」に二つはない筈であるが私のいふ「魂」が贋物であるやうなことをいつて笑ふのである。さういふ人達の「魂」とはどんな「魂」をいふのであるかよく分からないが、私の思ふところでは一切の優れた「藝」はそのまゝに「魂」であると信ずる。藝の「魂」とは舞臺的表現の上のセンチメンタリズムの別名ではない、慷慨悲憤の別名ではない、概念の粗末な表現ではない。優れた「藝」そのものの「技巧」

そのものが直ちに藝の「魂」である。「藝」の表現樣式には種々樣々の姿態が有り得る。多く悟らずして効果の多い「藝」もある、多く語つて効果を生ずる藝もある。團十郎の所謂沈默の「腹藝」が藝であつて雁治郎のや先代菊五郎の多辯な小手先の「藝」が藝でないといふ理由はない。前者にのみ藝の魂があつて後者に藝の魂がないといふのは分からない。凡ての優れた藝は必らず「藝の魂」を捉んだものでなければならぬ。

今日、「藝の魂」を論ずる評論家はある種の概念の割合に直截に平明に表現せられた技藝を觀てここに魂の深刻なる表現があるといつて隨喜してゐるやうに見える。彼等の「藝」に對する鑑賞眼があまりに幼稚、あまりに安値、あまりに贅澤氣のなさすぎるのを嗤ふ外はない。

雁治郎の和事役が魂の劇評家諸君をおこらせる主な理由は、あのあり餘るユウモアの味である。時として大阪仁和加流の駄洒落に墮して最も厳粛なるべき瞬間の氣分を損ふことである。しかし私達は今日「梅忠」や「紙治」の芝居を肩肱張らして見る氣にはなれない。雁治郎の駄洒落も可なり厄介なこともあるがまだしもそれがあるので辛抱して見てゐられるのである。

雁治郎に色氣が餘りあつて實事の味ひがないのが惜しいといふ人がある。これは物の分かつた人達の口から屢聞く批難であつて私などもこれには同感である。雁治郎の藝が表面を滑つてばかりゐるやうに誤解されるのも弛めて締める實事の味ひが乏しいからであらう。雁治郎の技藝に力強い現實味の乏しいのはその有り餘る天分に煩はされた結果である。

雁治郎は生れながらに多分の藝骨を得てゐる人である。延二郎はより多く後天的の修養に依つて豊富な藝才を使役してゐる人である。藝の品等の上から二人を比較することはできない。ただ二人が歌舞伎劇壇に占めてゐるまた占めんとしつつある社會的地位を對照するときに興味を生ずる。

思ふに延二郎の時代は菊五郎の時代と共に今後益榮えるであらう。

二人は定まつた樣式を持たない今の中間の渾沌時代に宛かも切つてはめたやうな才人である。

匆々叙述、體をなさず、ほんの責ふさぎで申譯がない。(二十二日朝)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

警抜健全なる現代社會の頂門の一針

文學博士 澤柳政太郎先生新著

隨感隨想

最新刊

四六判美装 三百九十頁 定價金壹圓貳拾錢 郵税金八錢

現代の社會に對する——犀利なる觀察——奇抜なる議論——大膽なる攻撃——而して健全なる意見是れ本書なり。

著者の序文に、讀者は本書に於て他の感想に接すると云ふよりも自家の感想と思ひ浮ぶべしとあり。

洵に現代を解せんとする者は本書を讀んで我が意を得たり我の言はんと欲する所を言へるものなりと叫ぶを禁ずる能はざる可し尚ほ本書は先生か全く新たに物せられたる快著にして一旦發表されたるものを集めたるものにあらざるなり

東京神田 富山房 振替一〇五

賣捌全國各地書林

(中付四の一)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

多方面の趣味雲の如く湧き來る

文學博士 芳賀矢一先生著



(最新刊)

抽珍全一冊 紙數四百五十頁 定價金壹圓 郵稅內地八錢

芳賀博士が年來の雜文を集めたるもの紀行文もあり、議論文もあり、講演もあり、談話もあり、學術、常識、過去、現代、眞面目、滑稽、多方面の題材の上に、多方面の趣味が雲の如く湧いて來る博士の面目一巻の内に躍如として、一度之を繙けば、何人も決して巻を釋くことの出來ない快著である。

文部省通俗教育認定書

芳賀博士著

文學地理 東海道五十三次

第五版

四六版全一冊 紙數六百餘頁 定價金六拾錢 郵稅金六錢

芳賀博士著

國民性十論

十二版

四六判全一冊 二百六十餘頁 定價金七十錢 郵稅金六錢

發兌元 東京神田 (振替五一〇) 冨山房 賣捌全國各地書林

(中付四の三)

信用なき古書店及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絕す

評論

現代の世界觀

中澤臨川

廣い世界觀または宇宙觀があつて、それに包容されない人生觀は、時に望んで頽れ易く、多くは盲目的で危險性を帶ぶることが多い。人間の多くの行動は本能の衝動によつて働き、感情に支配されがちであるが、それでもその本能乃至は感情が平常から確かな宇宙觀の上に立脚した自意識の訓練を受けてゐればゐるほど、その働きはより堅實でより合理的に行はれなければならない筈である。我等の人生觀は本能の分子に富んでゐるが、我等の世界觀は合理的なることを求めてゐる。兩者の關係は宛うどベルグソンの知識論に於ける直觀と理性とのそれに似てゐる。されば昔から本能を重んずる思想家が人生觀を說くに傾き、理智を重んずる哲學者が世界觀を過重したのは理由のあることである。

　タゴールの說いてゐるやうに、歐洲の文明は希臘の都城の中から發生し、總て煉瓦とモルタルの搖籃で育て上げられた。彼等は自然から離隔し、そして外界を敵視した。征服と權力とが彼等の矜りである。彼等は『區分しそして支配する』主義を樹てた。彼等は自我の障壁を能ふだけ高く築き上げて、凡てそれから外に在る物に對し敵愾心と猜疑心を持つた。で、區分と征服のかやうな要求がやがて歐洲特有の理智文明を產み出したことは玆に詳說するまでもない。

　一方には、古代から中世紀にかけての歐洲ほど小邦分立して互に相爭つた歷史は他に見られない事蹟であ

る。かやうに不斷の壓迫を眼前に控へた國民が永くアポロ神の絢爛たる歡樂文明に醉ひうるわけはない。彼等は生活の鬪爭に堪えかねて何よりも先づ安寧と秩序とを欲した。それが生命の爲めに消極的の制扼であると否とは彼等の問ふ處でない。羅馬が積極的歡樂主義の異教文明の代りに自制的禁欲主義の基督教文明を取り入れた理由は正に此處にある。同じ理由で制限と秩序とを重んずる理智文明が矢張歐洲文化の根帯を造るやうになつたと謂はれよう。されば中世紀以後の歐洲文明は、人生觀的には基督教文明であり、世界觀的には理智文明であつたのである。

一方には都城生活の因習として區分と征服を重んじ、他方には戰亂國の產物として安寧と秩序とに憧れた民族が、此の二つの異つた原因からして理智の力を偏重するに至つたのは理の當然である。それが希臘に於ては第一に幾何學の發見となつて、先天的(アープリオリ)理性の勝利が、久しく異教文明の頹廢に飽いた國民を醉はせ、第二にソクラテスの出現となつて、遂に歐洲的理智文明の基礎を築き上げたのである。

西洋の理智文明(一名科學文明)はソクラテスから始まつたと謂つてよい。この文明の特性は論理的に宇宙の事物を判斷しようとする精神的傾向である。即ち範疇を設け、或は分析を行ひ區分を施し、外面的關係的に事物を取扱ふのが科學思想の特色である。その根本的態度は敵視的征服的である。換言すれば、この思想は都城文明の當然の產物である。で、ソクラテスが出で、それまでの美と陶醉との希臘文明(ヘレニズム)に代ゆるにかやうな科學文明を以てした。彼の性向は飽くまでも理性的であつた。彼は美と藝術とを賤しみ、たかゞ「イソップ物語」を嘆美するぐらゐに止まつてゐた。或人が彼を評した詞がある。曰く、ソクラテスといふ人物は餘程理智が發達してゐた、普通人ならば成るべくその理性を誤まぬやうに本能を制して行くのが常であるが、彼にあつては反對に本能が彼の論理の誤を戒めたと。かうしてソクラテスは性來から理智文明の絕好の宣傳者であつた。

我等の理智の一特性は宇宙顯象の生命を殺して、物を靜止的に視ることとである。因果の法則を律して自制的の秩序を立てることとである。それが戰亂に飽きて安寧と秩序とを欲してゐる國民に喜ばれるのは當然であらう。そこでかやうな思想が人間の道德性の方面に向けられた場合は勢ひ「倫理的」となるのが常である。此處に倫理的とは、自制的人爲的行爲律の規定を意味する。ソクラテスは一面に於て倫理哲學の創設者であつた。それまでの異教思想や詭辯學派(ソフィスト)の哲學が幸福を目的として人間を研究したに反し、ソクラテスは道德を目的として人間を研究した。彼は幸福といふことに全く關係なく、いかにして道德的なるべきか、正直なるべきかといふことを考へた。彼の說に由れば、凡ての事物は道德を眼がけ、道德に寄與し、終局目的なる道德の爲めに存在するのであつた。要するに、秩序と安寧とを重んずる消極的自制的のかやうな教義が戰亂に飽いた國民、特に中世紀の羅馬人に多大の信仰を博して、ソクラテスの哲學が歐洲文明の一方の基礎を固めたといふことには充分の理由がある。

以上述べた次第でソクラテスに始まりずつと近世のカントに到るまで續いた歐洲の理智文明には二方面の特色がある。第一は、城壁生活の結果として起つた純理性主義で、自然を敵視し外界を征服しようとする欲望から分拆と區分とを重んじ範疇を立て因果律を萬能視する傾向を生じたのであるその第二は道德的理性主義即ち倫理主義で、カントの所謂「至上命令(カテゴリカル・インペラチブ)」の如き生命上の先天的規約を推し立て、凡て精神活動の世界をも一種の範疇裡に推し込めようとする思想である。後者が秩序と安寧を求欲した古代歐洲人の遺產であることは言ふまでもない。

然らば斯様な歐洲特有の理智文明がいかなる世界觀を產んだかといふに、それにも矢張二様の別がある。第一は純理性主義の育んだ機械觀で、第二は道德的範疇主義から出た目的觀である。然かしこの兩思想は、ベルグソンが『創造的進化』の中で說いてゐるやうに、結局見方を異にした同一様の宿命論に過ぎないので、

後者は道徳的機械觀とも名くべき前者の變形であるのだ。共にこの宇宙を宿命的乃至は數學的因果律の下において、其未來を一定不變の目的または結果の發展に過ぎないと見るのが兩思想の特色である。

近代に入つてから、ライプニッツやカントに到り極端まで推しつめられた斯様な理性主義に反對する聲は隨所に起つたが、然かしその世界觀に到つては矢張まだ古來の機械觀や目的觀に囚はれてゐる者が多かつた。例へば彼のショーペンハウエルの宇宙意志說の如きがそれである。彼に從へば、この宇宙には攝理もなく神も住まない、たゞ不可撓な盲目の意志がありとある時處を通じて支配してゐるばかりだ。この點から見れば彼の世界觀は基督教的宿命說やカントの「至上命令」を脱却してゐるのであるが、而もその意志――彼の稱する理性の敵たる意志――も自ら創造する力のない、因果の法律に打克てない意志たるに到つては、昔の宿命觀と何の擇ぶ處がないのである。彼の所謂意志は、「この意志は自分で自分を屠つて生きてゐる、なぜならそれ自身のほかには何も存在せず、またそれは餓鬼の意志であるから」と言はれる自繩自縛の意志であるのだ。また彼に次いで出で、あれだけ理性主義の反對者であつたニーチェに於ても、その世界觀は全く機械的であつた。彼の一生の血を沸かした「輪廻說」を玆に叙述するまでもない。その說の一端をだに知らるゝ讀者は直ちに私の所論に向て首肯されるであらう。

右に說いた如く、世界觀だけが近代の反理性主義の哲學の一般進歩と歩調を合せ得なかつた理由は、科學と世界觀との間に存する密接な關係に起因する。何れだけ宗教家が世界の光明的未來を說かうとも、果た哲學者が宇宙進化の無限を說かうとも、それが科學の範圍で科學が立證する事實と矛盾するならば、是等の世界觀は到底安全でありえない。昨日まで我等の科學は一個の生命現象たりとも機械的因果律の外に除くとを許さなんだ。また物理學は一方、宇宙の凡てのエネルギイが漸々熱エネルギイに頽廢して早晩この地球上に利用すべき力の消滅すべきことを敎え、他方にはやが

て來るべき太陽及地球の冷却と共に地上の生物の上に當然來るべき運命を悲觀して聞かした。かやうに有力な科學的運命觀を無視して、誰がその外に超然たるを得ようぞ。現代の哲學や科學は尠くともその步調を或る程度まで科學と合せて行く必要がある。そこが彼等の世界觀の純人生觀と違ふ點である。ゲーテやニーチェが最も苦んでそして、消極的あきらめを得たのは斯樣な點である。實際之等の二人者に限らず、今迄の哲學者の世界觀的人生觀は凡てが消極的なものであつたと言ひうる。讀者はメフィストフェレスがファウストの書齋で彼の耳に囁いた恐ろしい「創造」の歷史を記憶されるであらう。彼の詞によれば、混沌たる雲霧の昔から斯の世界には何の目的もない。一小星上の人間といふ生物がさかしげに考へてゐる頃を圖り、神は微笑しながら他の星を空間に送つて彼等の太陽と衝突せしめる、そして再び舊の雲霧に復えすといふ意味が言つてある。流石のゲーテもこの說を破るだけの積極的光明觀を得ずして死んだのである。

理性主義から出發した機械觀や目的觀は科學上の宇宙觀と握手して、近世の消極的世界觀を構成した。カント以後に到り理性主義に對する猛烈な反動は起つたが、なほ科學の進步が之に伴はなかつた爲め、世界觀だけは依然として機械的であり悲觀的であることを免れなんだ。然るに十九世紀の後半から生命に關する科學の發達につれて、我等の悟性に一つの新しい天地が拓かれた。それは、生物の顯象が從來信ぜられてゐた唯一の基礎科學としての數理科學を以て律することの能きないといふこと、人間には理智以外別にかやうな活生命を經驗する能力のあるといふことを教えた。『生長といふ事實は根本的に非論理的である』とは或る有名な生物學者の述懷である。要するに理性の律する機械的因果の法則以外に超然たる世界の在ることを教えたのが最近科學の一大進步と謂はなければならない。彼等の世界はジェームスの冷語した如く一個の "Block universe" ではないことがわかつた。進化論から發達したかやうな思想は實に昔の理智主義に對する最大打

擊であつた。そこへベルグソンの如き哲學者が出て直觀主義を宣傳し、創造的進化の新説を樹立するに到り、古來の哲學は併せてその世界觀と共に改變せらるゝの運命に逢遇したのである。

進化主義の新哲学に由れば、この宇宙は綿々として斷えざる持續である。生命の持續は創造を意味する。で、我等の世界は刹那毎に增成し、勝利し、斷えず新しい何物かを加えつゝ次第に光明の方へ――精神の勝利の方へ進化するのである。無限創造の活世界が即ちこの宇宙である。機械的因果律は物質界をば支配するが、決して廣い生命界をば支配しない。否な生命は常に物質に打克ちつゝ其領域を增加するのであるから、生命の最後の勝利は即ちこの宇宙から全然因果的拘束を除き去つて、「自由」その物に到達するのである。能く引かれるベルグソンの詞に次のやうな一節がある。曰く、『凡ての生物は相に相結び、凡てが同一の偉大な衝動に從ふ。動物は植物の上にその足場を置き、人間は動物を蹈まへて立つ。かくて全人類は、あらゆる時處に於て、相に前後左右に連り、如何に恐るべき抵抗――死すとも突破して進む一大軍隊である』と。

いかにこの世界觀の光明的なるかを看よ。其處には最早固定的な因果律の一鎖だもない。また消極的な世界觀的人生觀の片影もない。凡てが積極的である、凡てが光明的である。ベルグソン哲學の偉大なる勝利の頂點は正に此處である。我等の世界觀はベルグソンに到つて初めて解放されたと謂つてよい。猶古來のいろ〱な世界觀に對する彼の批評は『創造的進化』の第一章に於て窺はれる。

然かしベルグソンが何れほど生命の無限創造の福音を説かうとも、前言つたやうに物理學が太陽と地球との未來を疑ひ、エネルギイの前途を悲觀する限り、我等の之に對する信念はゆるまざるを得ない。なぜなら、因果律の正しく行はれる物質界の範圍で科學が證明するものを、生命の哲學たりとも之を拒否する權利はないからである。然るに不思議にも最近十五六年間に於ける物理學界の驚異的發見は、進化哲學と步調を

併せて最も光明的な宇宙觀を開拓したのである。眞空放電に於ける電子の研究は、ラジウム、ウラニウムの如き放射可能體の發見と伴つて、自然界に於ける一大神秘の幕を開いた。その結果として我等は原子の變壞から起る驚くべきエネルギィの新源を見出したのみならず、我等の地球も太陽も、尠くとも今日と同樣の熱を保つて殆んど無限代に持續しうることが證據立てられた。是等の事實が我等の世界觀に何れだけ光明を與へるかといふことは殆んど想像以上であらう。

前にも述べた通り、西洋の理智主義は自然と人間との敵恃といふことを重視する處から產れ出た。その結果は精神と物質とを餘りに裁然と區別附けたばかりでなく、飽くまでも相反的の二元論を固守して、物質の力を偏忌偏重する傾きに墮ちた。然るに最近の傾向を見るに、物理學は所謂「物質」(重量のある)の根本存在を疑ふやうな道に進んでゐるし、進化の哲學では生命と反對の下降運動を取りつゝあるもの即ち物質といふ風に解して、後者の絕對存在を拒まうとしてゐる。所謂精神的一元論が今日の學界の傾向である。これまた現代の世界觀に於て見逃すべからざる顯象とせなければならない。

然かしベルグソンでもが斷乎として一元論に突進すべくはなほ逡巡的であつた。彼の哲學は今迄の處では何方かと言へば物心二元論の方に近いと謂へる。そこに在來の西洋思想の餘臭がある。然るに近ごろ東洋文明の復活を以て目されてゐるタゴールの思想は、この點に於て餘程ベルグソンに似てゐながら、更に一歩深く突き込んでゐる所があるやうに思はれる。彼は假相二元論者で究極一元論者である。彼は飽くまでも精神の優越を認めてゐる。『人間の知るべき第一のそして最後の問題は、なぜにそして如何に遙かに人間が一の機械よりも一の精神であるかを認識することである』と彼は言つてゐる。彼は『愛の分離』といふことを說いた。物心兩界の分離は畢竟神の愛によるのであつて、やがて一つになる爲めの手段にすぎないのであると。善に對して惡は假相、心に對して物は假相、梵(ブラーマ)に對し

て個我は假相、生に對して死は假相――かういふ風にタゴールは觀てゐる。彼の世界觀はベルグソンよりもより光明的、樂天的である。

哲學は死に對する冥想であるとプラトーンが言つた。我等の世界觀と人生觀との凡ては最後に死の問題に溶ける。で、現代の世界觀がこの問題に對し何ういふ見解を有してゐるかといふことを考察するのは必要である。ベルグソンもタゴールも、彼等の思想の當然の歸納としてこの點に關し從來になき樂天的態度を持してゐることは茲に述べるまでもない。生命の偉大な軍隊はあらゆる障害――死すとも突破して前進するといふ前者の冥想、死を單なる假相とし、無限の生命に歸する門戸として讃美する後者の憧憬は、共に光明的である。唯だベルグソンは個性の發達慾と繁殖慾との間の矛盾を充分に解釋しえないに反し、タゴールは一足飛びに『我等をして不死の死に入らしめよ』と歌つてゐる。この兩者の是非は私の此處に論じようとする處ではない。唯だ私は東西兩洋の最新思想の對立といふ點に興味を覺えるのである。



荷風傑作鈔

（荷風傑作鈔要目）○身賣○冬空○翌日○奇遇○歌劇○あけがた○逍遙○墓詣○休茶屋○裸美人○夜半の舞踏○戀人○美味○蟲の音○正月の或夜○夜の三味線○隅田川○秋○新橋夜話○下谷の家○樂器○海洋の旅○○見果ぬ夢○春のおとづれ○浮世繪の鑑賞○浮世繪○煙○三柏葉頭夜嵐○靈廟○（略）

●忽ち再版

□四六判天金七百餘頁

□定價金壹圓八十錢

森鷗外著 雁（がん）。

■扉、蘆雁圖■横山大觀筆■

四六判
總絹襦子
美裝天金緣
定價金壹圓

「雁」は深く人情の機微に觸れ、知らずして僞り多き男性の心と、知らずして罪深き女性の心とを捕へ來りて明鏡の裡にその眞體を照し出だす。蓋し先生が世情を穿ちてその靈筆を揮はれたる一大傑作たり。

河東碧梧桐著 新傾向句の研究

碧梧桐氏の唱へ出だしたる新傾向句の主張は、俳句界に一大革命を招來し、全國に亘りて忽ち新傾向派の大運動となり、殆んど全俳壇を風靡し了せり、即ち今や新傾向にあらざれば眞の俳句にあらずと云ふの有樣なり。

そもそも俳句の新傾向とは何ぞや、是れ本書の主題にして碧氏はその全幅の主張を本書に傾注し、汎く天下にその所信を喧傳せんとす。

■菊半截判總布裝
■紙數三百七拾頁　定價金六拾錢

（中付五の一）

東京市丸の内三菱廿一號館 □□ 籾山書店 □□ 振替東京二四一七 電話本局二一三二

英國ウオルターペイター氏原著
文學博士田部重治先生譯

文藝復興

（新刊大好評）

全一冊
菊判三百餘頁
總布天金
泰西名書挿入
定價金壹圓五十錢
送料十二錢

世界の文壇に一時期を劃しオスカーワイルド、シモンズを生みたる名著は遂に譯出されたり!!!

本書は生の問題を中心として見たる文藝復興に關する批評藝術にして創造を說き靈肉とギリシャ主義とに及び不斷の緊張を要すべき人生が絕へず不定の死刑の宣告の下にあることを說いて作者自身の魂は忘我の境に飛ぶものあり、英國最近思潮の先驅を爲したるは實に此書なりとす、

文學士 栗原古城先生著

文藝小說

西洋武士道譚

全一冊
定價三十五錢
送料不要

日本の國民藝術から勇壯な武人の說話を除けば殘す所は幾何もないやうに泰西の文學藝術には武士道譚の影響が多大である。此東西の武士道に如何なる相違と特質とがあるか、又西洋武士道は歐洲の文化に如何なる交涉があり、現代思潮に如何なる差違を與へてゐるかを知る最も適當なる良書である。

東京市神田區錦町三ノ一七
北星堂書店
振替東京一六〇二四

（中付五の二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

五十七版より

増補改版 岡田式靜坐法

舊版賣行迅速、重版また重版遂に紙型全く磨滅す。即ち本社は多大の犠牲を拂ひ内容を改訂し新に増補し廉價發賣す

岡田先生──修養の由來及經路、靜座の原理及方法詳説明細！

廿餘名士──の靜座實驗苦心談を之に添ふ。一讀何人も實用容易

岡田式靜座法が萬病を根治し、痩せたるを肥らし肥りたる肉を締まらし、精神を爽快に沈着充實せる活精力を養はしむること已に世人の等しく認むる所なり

▼三六版上製ポイント組四百五十餘頁

▼定價六十錢 郵税六錢

廿二版より

改訂増補 優等學生勉強法

當代學界の成功者、十學士、九博士、四教授の實驗苦心談！

一の空理空論なく悉く切々心血の結晶、印象深刻、得る所至大！

學校に在る人、獨學する人、各種試驗を受けんとする人、大器晩成を想ふ人、本書の一頁一行は必ず卿等に敎ふるところ偉大なるべし

或は獨學苦學せる博士あり、或は坦々たる道を進んでよく時を利用し頭腦を煉磨せる人あり、或は數種の試驗を一時に受けし人あり、學界立志傳中の立志傳たらざるはなし

▲袖珍 三百數十頁

▲定價四十錢 郵税四錢

發兌 東京京橋 實業之日本社出版部 振替東京三二六番

(中付五の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

類譯中の最高權威

ラビンドラナアト タゴール著

詩集はこの詩聖が心靈の呼吸そのものにしてタアゴルの中心思想の光明に參ずる秘鑰也!!!

幼兒詩集

新月

函入裝幀壯嚴
定價金壹圓
送料八錢

野口米次郎氏序
灰野庄平氏序
増野三良譯
印度現代名畫八葉挿入

此の一卷は母と嬰兒との片言交りの對話の如くお伽噺の如く、子守唄の如く、牧歌の如く虚心に歌はれてある幽玄微妙な默示であつて、タゴールの光明的な神祕樂天主義の進化哲學の至上欲求則神人瞑合の歸命(ナモナマ)が純叙情詩として最高潮に達したものである。譯者は本邦隨一の印度研究者にして原著に對し何の理解もなき近時頻出の粗製濫造の譯書と類を異にするものである。

全譯

ギタンジャリ

初版賣切
再版出來

イエーツ推讃の序
増野三良譯

四六判三百頁美本
定價金九十錢
送費八錢

近刊豫告

詩集 園丁(全譯)

目下印刷中

タアゴル原著
増野三良譯

(中付五の四)

發行所 ◎ 東京市日本橋區檜物町九番地 東雲堂書店 振替東京五六一四 電話本局一五七一

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



戯曲

法成寺物語（四幕）

（禁無斷興行）

谷崎潤一郎

人物

藤原道長　前の攝政關白

院源律師　叡山の僧侶

四の御方　故大政大臣爲光の女、宮廷の貴婦人

良圓　院源の門弟、若く美しき法師

藤原隆家　前の太宰大貳

坂田金時　源頼光の郎黨

渡邊綱　同

詫摩爲成（たくまのためなり）　佛畫師

定朝（じやうてう）　當時第一流の佛工

定雲（じやううん）　定朝の弟子

外に定朝の弟子二人
道長の邸に召使はるゝ女房數人
匠工人夫等多勢

時――後一條天皇の寛仁四年の春、法成寺の建築未だ完く成らざる頃

所――洛北法成寺境內

第一幕

場面――舞臺の奥、向つて右の隅から左方へかけて、規模雄大なる堂宇の一部が、純藤原式の莊嚴優美な姿態を作つて正面を向いて聳えて居る。堂の屋根は檜皮葺、床は板敷、簀子には勾欄を繞らし、今や外部の建築が殆んど出來上つたところである。此處に見えて居る部分は丁度建物の左半分である爲め、堂の正面中央に設けられた階段が、舞臺の右端に方つて現はれて居る。階の左方に蓮池があつて前面へ擴がつて居る。堂の左側面から渡殿が舞臺の左端へ續く。

天氣の好い、うらゝかに晴れた日の午後。多勢の佛師、工匠、人夫等堂上堂下に集つて頻りと工事に奔走して居る。堂は正面と左方と、兩側の扉格子を悉く開け放ち、既に取り付けを終つた內陣の須彌壇、天蓋、虹梁など、一代の豪華を極めた裝飾が燦爛と輝いて見える。堂の本尊たる九體の丈六金色の阿彌陀佛のうち、二體だけは胴から下が既に出來上つて、內陣の左端より順々に安置せられ、其の傍に佛工定朝が蹲踞りながら頻りに本尊の首を彫つて居る。なか〳〵理想通りの容貌を作り出す事が出來ないで、苦心慘憺たる樣子である。彼と並んで、弟子の定雲が本尊の脇侍たるべき觀世音菩薩の像を刻んで居る。輪廓の頗る醜い、表情の陰欝な、二十歲前後の青年であるが、彼の瞳には天才の閃きがあり、彼の鑿には自信の籠つた響きがある。師匠の定朝が屢々瞑目し沈吟して居る間に、彼は八九分通り自分の仕事を成就して、折々手を休めながら、自分で作つた菩薩の妙相を恍惚と眺め入つて居る。外の二人の弟子のうち、甲は一番目の阿彌陀佛に金泊を塗つて居る。乙は二番目の阿彌陀佛の蓮瓣を植ゑて居る。正面の階に近い扉には、畫工爲成が九品蓮臺の繪彩色の佛畫を描いて居る。庇の間には二三人の狩衣姿の男達、木賊椋葉などを手毎に持つて、板敷を鏡のやうにつや〳〵と拭き込んで居る。五六人の人夫が池の汀の土を掘つて草木を植ゑて居る。時々、恐ろしい巨材を車に載せて、四五人がゝりで綱を曳きつゝ、掛け聲勇ましく上手より下手へ通り過ぎる一隊がある。其の他工匠の壁を塗る者、金具を打つ者、場內雜然たるにも拘らず、各々熱心な敬虔な態度で、比較的靜肅に立ち働く。

（庭園の作業に從事する人夫の一）ほんとに今日は好い天氣だなう。かう云ふ日には體が鳥のやうに輕う

なつて、餘計仕事が捗りさうだ。
（人夫の二）此の二三日めつきりと春らしい陽氣になつたなう。己の故郷の月が瀬では今頃梅が咲いて居るだらう。
（人夫の一）御同樣に國を出てから隨分久しうなつたものだ。己は睦月の晦日に大江山の麓の里から召されて來たが、もう今日で一と月ばかりになる。國を出て來る時分には、己の故郷にはまだ雪が降つて居た。
（年老いたる人夫）あはゝゝゝ、お前たちはそろそろ女房の顏が見たくなつたんだらう。……いづれ來月の二十日ごろには御堂の供養があると云ふから、もうあと一と月の辛抱ぢや。
（人夫の三）おいおい爺さん、それはお前何かの聞き違ひではあるまいか。此れだけの立派な御普請が、そんなに早く出來上る筈はない。
（人夫の四）いやいやどうだか解らない。何しろ國々の莊園から、一日に五六百人も人夫が這入つて來るのだから、普請の出來上るのは瞬くうちだ。
（人夫の一）昨日は播磨の國の司から、人足を二百人奉つたと云ふ噂だ。
（人夫の二）今朝も紀井の國から七百本の材木が屆いたさうだ。
（人夫の四）それに第一、近頃のやうに天氣の續くのは珍しいことだ。己達が仕事にかゝつてからめつたに雨が降らないぢやないか。
（年老いたる人夫）大方此處の大殿の御威勢には、天道樣も怖ぢ恐れて居らつしやるのぢや。
（人夫の三）何しろまあ、いよいよ此のお寺が出來上つた日には、嘸かし有り難い靈場になるだらうなう。
（年老いたる人夫）さやうさ、先づ塔堂の廣さと云ひ、御佛體の數々と云ひ、日本は愚か唐天竺を尋ねてもこんな有難いお寺は二つとありはしないのぢや。わしは若い時分から大概の靈場に參詣したが、聖武天皇の建立なされた東大寺を始めとして、鎌足大臣の多武峰、不比等大臣の山階寺、其經大臣の極樂寺、どれも此れも今度のお寺の立派さとは比べ物になりはしな

い。全く此の世の中に西方淨土が出來上つたも同然ぢや。

(人夫の三) そんなら定めて御利益がある事だらうな。

(年老いたる人夫) それは云ふ迄もない話、此の御普請に雇はれた人間は、たとへ一本の樹を植ゑても、みんな御佛の御利益で、死んだら必ず極樂淨土へ生れる事は請け合ひぢや。わしも長生きをしたばつかりにこんなめでたい折に出遇うたから、此の上はいつ死んだとて浮世に未練は殘るまいよ。ほんたうに有り難い事ぢや。

(人夫の四) さうして見ると、己達は仕合はせな人間だ。はる〲と遠國から召し出されて來た効があると云ふものだ。

(人夫の一) さう云ふ譯なら、國に殘した妻子の者にも、此のあらたかなお寺の樣子を一と目なりとも拜ませてやりたい。己一人が極樂へ生れたところで、可愛い奴等が地獄へ墮ちたら、こんな情ない事はあるまい。

(年老いたる人夫) なあにお前さへ正直に働いたら妻子眷屬もキッと御利益に與るわい。

(人夫の一) 爺さん、ほんたうに大丈夫だらうか。

(年老いたる人夫) あはゝゝゝ、お前は年が若いにも似合はず、感心に後生を氣にする男ぢやなう。ほんたうに大丈夫ぢや。わしが請け合ふから、心配しないで仕事に精を出すがいゝ。

(人夫の二) 精を出して働いたお蔭で、今日の仕事もあらかた片附いてしまつたやうだ。どうだいみんな一と休みして、お堂の樣子を拜見するとしようではないか。

(人夫の三) さうだ、さうだ。隙な時分にとつくり拜んで置かなければ、國へ歸つても話になるまい。

人夫等作業を終へて立ち上り、鍬鋤を肩に擔ぎながら、階の下に集つて恭しく内陣の彼方此方を仰ぎ視る。

(人夫の四) 成る程大したものだなう。あの格天井の飾を見ろ。まるで眼が醒めるやうだぜ。

(人夫の一) 床板が鏡のやうに光つて居る、

(人夫の二) おい、おい、それからちよいと此處を見ろ。(扉に繪を畫いて居る爲成の方を指す。)何だか恐ろしく綺麗な繪が出來上るらしいぜ。爺さん、あれは何の繪だらう。

(年老いたる人夫) あれは此の世で信心をした人たちが、死んでから十方世界の御佛に導かれて、極樂へ生れるところをお畫きなすつたものであらう。彼處に雲の上から後光を放つて居らつしやるのが阿彌陀如來ぢや。その傍に蓮の臺を捧げて居らしやるのが、觀世音に勢至菩薩。向うの扉に畫いてある蓮池の水が八功德水。……成るほど見事によく出來て居る。生意氣なことを云ふやうぢやが、わしは此の年になつても此れ程立派な極樂の繪を見た事がない。かうやつていつ迄も眺めて居ると、何だか涙がこぼれて來る。

(人夫の三) それから爺さん、長押の上の彫物は、あれは一體何だらう。彼處にも多勢の天人が雲に乘つて飛んで居るぢやないか。

(年老いたる人夫) それよりか、あの御本尊を見るがいゝ。惜しい事にまだお顔が出來上つて居ないけれど、肩から下を拜んだだけでも、何と云ふ尊いお姿であらう。今に此の阿彌陀樣が、都合九つお堂の中へお列びになるのだから、其の立派さが想ひやられるわい。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

堂上の人々は、人夫の言葉など耳に入らざるものゝ如く、默々として仕事に熱中して居る。定雲は漸く觀世音の像を作り上げて、一番目の阿彌陀佛の傍へ据えつける。

(人夫の四) あすこに出來上つたのは觀音樣かな。

(人夫の一) 阿彌陀樣も有り難いが、あの觀音樣のお顔は、又一段と氣高いやうだな。

(年老いたる人夫) ほんたうに此れは恐ろしいほど見事な出來ぢや。不思議にあらたかなお姿ぢや。あの嚴な口元と云ひ、お慈悲深い眼つきと云ひ、何となく有り難さが身に沁みて、自然と頭が下るやうぢや。

(人夫の二) 勿體ない話だが、木で作つた物とは思はれないな。まるで生きて居らつしやるやうだ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

人夫一同。觀世音の前に禮拜する。

（人夫の三）　さあ、此れから一つ外のお堂を見物に廻らう。

（年老いたる人夫）　あゝ有り難いことぢや。勿體ないことぢや。

人夫一同右手へ退場。此れ迄の間に堂上の工匠も仕事を終へて、一人づゝ次第次第に堂の後に消え、佛工と畫工ばかりが居殘る。舞臺暫く無言。やゝありて、腕拱いて俯向いて居た定朝が、重い嘆息を洩らしながら快々として立ち上り、徐かに爲成の方へ歩み寄る。さうして、ぢッと佇んだまゝ、いつ迄も扉の畫面を眺めて居る。

（爲成、繪をかきながら振り返つて定朝を見る。）定朝どの、いかゞなされた。何と思されてそのやうに、此の繪を御覽じなさるのぢや。

（定朝）　憚りながらあまりめでたい出來榮えに、御遮げになるとも知らず、暫く見惚れ申してござる。某はつくづく其許を羨しう存じ申す。斯ほどにいみじき御扉繪をお作りなされた其許の、御よろこびは嘸かしでござらう。

（爲成）　さればまことに神佛の加護のお蔭でござらうか、此の御扉に向うてから、身に覺えなき不思議の力に導かれて、たゞたゞ夢を見るやうに自然と描き上げました。某繪筆に親しんでより、かやうに心の張り詰めた事は嘗てござらぬ。

（定朝）　いや、いや、神佛の加護もさる事ながら、やはり其許の筆の力ぢや。世にも稀なる技巧の業ぢや。唐の呉道玄、我が朝の巨勢金岡が蘇生つて參らうともよもこれほどには描かれまい。まことに此の繪は稀代の逸品、此の御寺のあらん限り、佛法王法の榮ゆる限り、其許の御名は此の繪と共に千載までも傳はるでござらう。かさねがさね羨しう存じ申す。

（爲成）　當代に双びなき佛師と云はるゝ其許から、さほどのお褒めに與れば此の上もない面目でござるわい。……したが定朝殿、其許はなぜ其のやうに他人の業を美しいと仰せあるのぢや。某の繪が末代までも傳はるものなら、忝くも此の大御堂の本尊と仰がれて、千百年の後までも、普く世人の歸依せらるゝ貴い如來の佛像は、抑も誰がお拵へなさるのぢや。

（定朝）　其れは勿論、此の定朝に負はされた役目で

ござる。‥‥

（爲成）さうして見れば、某こそはなか〳〵其許を羨しいと存じ申す。其許のお作りなさるゝ阿彌陀佛の御前に立てば、一天萬乘の帝でさへも御頭を垂れさせて、合掌なさるゝでござらうがな。某の此の扉の繪も此の嚴かな内陣の調度も、此の廣大な伽藍の甍も、淸しい庭の蓮池も、凡べて其許の阿彌陀佛を安置し奉る便宜の爲めに、云はゞ序に設へた飾りに過ぎぬと申すもの。此の有り難い御代に生れて日本一の佛師と讃へらるゝ御自分こそは、誰にも優る果報者よと思し召さるゝが當然でござらうに。

（定朝）うむ、若しや某が仰せの如き日本一の佛師であつたら、いかさま果報者でござらうも知れぬ。さりながら、其許の御扉繪の見事さと云ひ、御堂の普請の立派さと云ひ、世に珍しい靈場の出來上る樣を見るにつけても、なまじひに本尊の御佛體を刻み出す可き役目の重さが、恐ろしうござるわい。覺束ない某の鑿の力で、此の靈場に適しい彌陀の尊像を、どうして作り出されようかと、それのみ頻りに案ぜられて、今日此の頃の某は夜もおち〳〵眠り申さぬ。

（爲成）はてさてさうなうてはかなはぬこと、さ程の御用意があればこそ、一道に秀づる腕をも研き申す。某の如き鈍根の輩にさへ、神佛の加護はござつたものを鑿を取つては鬼神を凌ぐ其許の此の頃の御苦心に、などて御佛の加護がなからう。やがては名工の名に恥しからぬ傑作を成就なされて、世上を驚かすことでござらう。必ず必ず御心配は御無用になされい。

（定朝）‥‥爲成どの、其許は眞實さやうに思さるゝか。此の定朝を日本一の名工と、まことに思し召さゝるか。

（爲成）云ふまでもない事、ゆめゆめ僞りは申さぬつもりぢや。たとへいかやうに謙遜なされたとて、當時其許を差し置いては、此の大御堂の盧舍那佛を刻み出すべき佛師はござらぬ。其許に優る名工の現はれて參らぬ限り、日本一と褒め讃へるに、何の憚りがござらうぞ。

(定朝) 此の身に優る名工の出て來ぬ限り、成る程某は日本一ぢや。……したが爲成殿、此の定朝に上越す者が、若しも此の世にあるとしたらいかゞ召さるゝ。

(爲成) さやうな事があらう筈はない。さやうな事は信ぜられませぬ。

(定朝) あはゝゝゝゝ、それは其許の迷信と云ふものぢや。世評に心を晦まされて、妄りに某を信じ過ぎると申すものぢや。……爲成どの、お聞きなされい。此の定朝は日本一の佛師ではござらぬ。某に上越す者が、いみじき佛師の名工が、もはや此の世に現れて參つた。

(爲成) なに、何と仰せらるゝ? 其許の腕前を凌ぐやうな、いみじき佛師が現れたとな?

(定朝) いかにも。

(爲成) さうして其れは、一體何處の何者でござらう。

(定朝) お疑り召さるゝなら、唯今其の男にお引き合はせ申すでござらう。……其の男は彼處に居る、某の弟子の定雲でござる。

兩人定雲の方を顧る。定雲は二人の言葉を耳にもかけず働いて居る。觀世音の立像を安置して了つて、今度は勢至菩薩の粗彫の像に刀を揮つて居る。本尊の佛體に金箔を貼つて居た弟子の一人が、いつしか觀音の像に糊粉を塗り始めて、額から肩のあたりへ一と通り塗り終つたところである。

(定朝) あれを御覽ぜられい。彼處に出來上つた菩薩の像を御覽ぜられい。(兩人、定雲の傍へ歩み行く。)此れこそ此奴の仕事でござる。定雲の鑿の力は恐ろしうござる。

(爲成 菩薩の前に愕然として彳立する。) ふむ、何と云ふ素晴らしい出來榮えぢや。何と云ふ莊嚴なお姿ぢや。

(定朝) さうして又、あの生き生きとした御顏のあたりを御覽ぜられい。

(爲成) まことにあの御頬には人間の暖い血が通うて居るやうぢや。あの柔い眼瞼の脹らみと云ひ、あのゆつたりした頤の趣と云ひ、あの軟かな唇の匂と云ひ、勿體なくも物凄いやうな出來榮えぢや。世にも有り難

い御顔ぢや。あゝ、何と云ふ珍らかなことでござらう南無觀世音菩薩……（跪いて禮拜する。）

（定朝）爲成殿、某はもう日本一の佛師ではござらぬ。此の觀世音を拜むにつけても、某の苦衷をお察し下されい。

（爲成）はて、其れは又何故でござらう。かばかり腕前の優れた人を弟子に持たるゝ其許は、あつぱれ師の君の譽れに背かぬ、天下の巨匠でおはさうがな。

（定朝）いや／＼及びもない事ぢや。師匠と云ふは唯名ばかり、辛くも長年の修業の功で、業を磨いた某と、生れながらに天禀の才を具へた定雲とは、比べ物になり申さぬ。

（爲成）たとへ其許の仰せのやうに、定雲とやらが何程優れて居ようとも、己に勝る弟子を持たれた其許は、よき後繼を得られた道理ぢや。まことに師弟の情として、お喜びなさるが當り前ぢや。

（定朝）いかさま其れも一應は聞えた話、某とても斯程の若者を弟子に儲けて、喜ばしうは存じ申す。なれども一藝一能の途を競ふに、師匠もなければ弟子もござらぬ。師弟の情は私事ぢや。千載に譽れを遺す公けの晴れの仕事に、などて上下の禮儀がござらう。某は此の定雲に蹴落さるゝが口惜しうござるわい。

（爲成）蹴落さるゝと定まつた運命でもござるまいそれこそ其許の迷信と申すものぢや。

（定朝）あはゝゝ、迷信でござるかなう。此の觀世音や勢至菩薩に耻かしからぬ、弟子の仕事におさおさ劣らぬ本尊の御佛を作り出さうと、某はどれ程苦心いたしたでござらう。朝な夕な幻を胸に浮べて、幾度か如來の相を描いては消し、消しては描き、氣も心も狂はしうなるまでに熟慮を重ね思を凝らしても、一向工夫がつき申さぬ。此の定雲が力强い鑿の響に怯やかされて、焦ら立てば焦ら立つほど、たゞ徒らに頭の中が搔き亂さるゝばかりでござる。やがて御普請の出來上るのも程なう迫つて參つたに、見らるゝ通り某はいまだに、彌陀の尊容を一つも作り終せませぬわ。己れの技倆を顧みもせでうか／＼と此の大任を身に引き受け

た、某の苦哀を御推量下されい。

（爲成）いかに定雲とやら、先刻からの定朝殿の繰り言を、其方は定めて聞いたであらう。（定雲手を休めて額の汗を拭ひながら、蹲踞つたまゝ兩人を見上げる無愛憎な表情、簡朴な言葉づかひ。）私は夢中で仕事をして居りました。よくも承りませぬ。

（爲成）其方は今年幾歳になる？

（定雲）今年十九でござります。

（爲成）ほう、まだうら若うは思はれたが、二十前とは存じぬ寄らぬ。さうして其方の生れは何處ぢや。親御は何者ぢや。

（定雲）津の國の、難波江に近い濱邊で生れました。親は漁師でござります。

（爲成）漁師の子供がいかなる譯で、佛師にならうとは思つたのぢや。

（定雲）私は漁ることが嫌ひでござりました。幼い折から渚の砂を掻き集めて、人間の形を作るのが何より樂しうござりました。

（定朝）それは某がよう覺えて居る。丁度今から五年の昔、所用があつて津の國へ下向致した砌でござつた。折ふし秋のゆふぐれに難波江の浦曲をさまようて圖らずも此の定雲の砂徒らが眼に止まり、十四五の童の業とは思はれぬ程の巧みさに、そゞろに興を催して都へ伴れて參つたのぢや。

（爲成）さても淺からぬ師弟の緣でござるなう。若しも其許に廻り會はずば、かほどに勝れた名工も、世に埋れて朽ち果つるのが定であらうに、緣と云ふは不思議なものぢや。

（定朝）いや／＼某にめぐり會はずとも、見す／＼天賦の才ある男が、いつまで隱れて居り申さう。春が來れば自然と花の開くやうに、導かずとも世に咲き出づるは知れた道理ぢや。

（爲成）定雲、其方はなぜそのやうに愛敬のない顏つきをして居るのぢや。あのやうに褒められても、嬉しいとは思はぬかな。

（定雲）私の胸にはたゞ美しい菩薩の幻が充ち溢れ

て、現身の、世の聲などは聊か耳にも這入りませぬ。

（定朝）よう申した。立派な言葉ぢや。其方の鑿には悶えの痕がない。其方の仕事には疑ひの蔭がない。其方は迷はずに進める男ぢや。其方の言葉はいみじき大德の敎へのやうぢや。恥かしながら其方の師匠の定朝には、まだそれ程の一念が起らぬわい。

（爲成）成る程なう、どのやうな業に携はつても、悟りの道はたゞ一つぢや。達人の域に這入れば、佛師も聖となり申さう。それにつけても定雲は、そも何處からそのやうな、堅固な信心を得て參つた。菩薩の來迎を眼前に見る、有り難い功德をいつの間に積んだのぢや。

（定雲）それは到底私の口から申されませぬ。菩薩の示現の貴さは、己れ自ら幻に見る事は出來ても、人に傳へる便りもござりませぬ。

（定朝）其方はまことに仕合はせ者ぢや。其方は日本一の佛師ぢや。其方が居るのに、此の定朝が手を働かす用はないのぢや。私はどうかして、私の仕事を其方に讓つてしまひたい。上のお許しがありさへすれば、私の役目を其方に引き取らせてしまひたい。

女房二人、渡殿傳ひに歩いて來る。左側の勾欄のほとりに立ち止まつて聲をかける。

（女房の一）定朝どの、爲成どの、唯今此れへ大殿がお出でなさります。

（定朝）なに、大殿のお出でとな。

（女房の二）さやうでござります。大殿には日に一度づゝ、御普請の模樣を御檢分遊ばさねば、どうやら御心が落ち着かぬとの仰せでござります。

（女房の一）爲成殿、御扉の繪はもはやお出來になりましたか。

（爲成）さればでござる。唯今も定朝殿と語り合うて居りましたが、某一生の思ひ出に、念力を籠め丹精を盡したる効あつて、もろ／＼の御佛も擁護を垂れさせ給ひてか、例になく筆の運びが捗り申した。今日すでに正面の御扉を八九分通り描き上げたところでござる。

(女房の二) それは何より祝着に存じまする。大殿樣が御覽じ遊ばしたら、嘸まあお喜びなさることでござりませう。

(女房の一) さうして定朝殿、阿彌陀佛のお顏はいかゞなされました。

(定朝) 御覽の通りぢや。いまだ一つも出來申さぬ

(女房の二) 先つ頃から尋常ならぬ御苦心のお噂を妾も聞いて居りましたが、それではいまだによい御思案も浮びませぬか。

(定朝) 此の定朝は神にも佛にも捨てられたのでござらうよ。

(女房の一) はてまあ、そのやうな咒はしい事は仰つしやりますな。一日も早う御工夫がつきますやうに妾共も只管祈つて居りまする。

(女房の二) 大殿樣も其方の事を聞し召されて、此間から頻りに胸をお痛めなされてゞござりまする。其方を措いては、此のやうな重い役目を果たせる者は居りませぬ。早う美しい御佛のお姿を、妾共にも拜ませて下さりませ。

(定朝) そのお言葉は恭いと存し申すが、某などを賴りにされても詮ないことぢや。工夫の浮ぶは何時のことやら、一年かゝるか、二年かゝるか、さてさて心細い限りぢや。次第に依つたら、大殿のお見えになるのを幸ひに、分に過ぎたる某の役を免じて賜はるやう、お願ひ申して見たう存ずる。

(女房の一) 何と仰つしやいます。そのやうなことを、眞實思し立たれたのでござりますか。

(定朝) 眞實でなうて何といたさう。――お許たちにも先づ先づ此方へ入らせられて、大殿のお出でを待たれた上、とも〴〵にお口添へをお賴み申す。

(女房の二) そのやうなお口添へが出來ますものかよう考へて下さりませ。なう爲成どの、其方は何と思されまする?

(爲成) お許の仰せも尤もぢやが、定朝殿の覺悟めされた心の程も、推し量られて傷はしうござる。筆と鑿との相違こそあれ、畢竟ずるに繪師も佛師も一つ

生業、同じく美しい佛陀の諸相を作り出すが命でござるに、定朝殿の胸の悶えを承れば、なか〳〵餘所事とは思はれませぬ。某とてもそれによう似た苦しみに、出遇ふ場合もあるでござらう。

（定朝）いしくも仰せ下された。さほど迄に思し召し下さるなら其許からも宜しきやうに、大殿へお取りなしをお頼み申す。

（爲成）其れは思ひも寄らぬこと、役目を逃れ身を安穩に處するがよいか、苦しみに堪へて工夫の浮ぶを待たるゝがよいか、神佛ならでは解らぬことぢや。先づ某は御遠慮申して、此の場を罷り退ると致さう。何卒御免下されい。

爲成、堂の右方へ歩み去る。

（定朝　二人の弟子に向ひ、）これ、大殿のお出でぢや。其方たちも下へ退つて休むがよからう。

（弟子二人）はあ、畏まりました。

弟子等同しく右方へ退場。左方の渡殿に道長の姿が現れる。年齢五十四五歲、ゆつたりと太つた、健康らしい赭顔の男、當時は入道して法衣を纏うて居る。

（定雲、定朝の前に兩手を衝いて恐る恐る云ふ）私はいかゞ致しませう。御遠慮申して居りませうか。

（道長）いや〳〵遠慮するには及ばぬ。其處に控へて居るがよい。

道長犀をかけながら堂上へ歩み來る。女房二人も其の後に從つて內陣の阿彌陀の前に禮拜して蹲踞まる。漸く西へ傾いた夕日が、舞臺の右側から殿堂の內部へあかあかと射し込む。入相の鐘の音が遠方から響いて來る。

（女房の一）おゝ、夕日が紫磨金の如來の肌へ、あれあのやうに照り輝いて居りまする。

（女房の二）御佛ばかりではござんせぬ。天井でも長押でも、金銀の細工が眩しいやうに一度に光つて居りまする。……まあ何と云ふ莊嚴な景色でござりませう。

（道長）定朝、其方はいかゞ致した。今日も鬱いで居るやうぢやが、いまだに思案が浮ばぬかなう。

（定朝）殘念ながら一向に捗りませぬ。就いては聊か存じ寄りもござりまするが、先づ其の前に、此の觀世音を御覽下さりませ。

（道長）ほう、噂に高い定雲が作つたのぢやな。定雲と云ふのは此處に侍る若者の事か。

（定朝）さやうでござりまする。

（道長）卑しい生れの者と聞いたが、はてさて色の黑い、顏の醜い、むくつけき男ぢやなう。此のやうな男の手から、なまめかしい菩薩の姿が作られるとは、不思議な事もあるものぢや。あはゝゝゝ。

（定朝）此奴の顏の醜いのは、生れつきばかりでもござりませぬ。去年の春頃世に蔓つた疱瘡と申す流行病に祟られて、さらでも強い目鼻立ちが、このやうに淺ましう成り果てました。

（女房の二）ほんにまあ、可哀さうでござんすわいな。

（定朝）哀れと申せば申すものゝ、此奴の爲めには其の不仕合せが、勵みの種となつたのでござりまする。己れの顏の醜うなつたを怨むあまりに、美しい菩薩の御姿を生み出す業が、身に備つたのでござりまする。

（女房の一）なう定雲とやら、たとへ顏立ちは醜うても、立派な腕前の佛師になれたら、怨めしいとは思ふまい。なか／＼其方は仕合せな男ぢやなう。

（定雲）私はさうは存じませぬ。美しい御佛を作るよりも、己れが御佛のやうな美男であつたら、どのやうに仕合せでござりませう。醜い男に生れたことは、何處までも私の不仕合せでござります。それを考へると、私は悲しう存じまする。

（道長）あはゝゝゝ、面白いことを申す奴ぢや。したが生得淺ましい顏形を、徒らに怨んだところで効はあるまい、及ばぬ事を願はうより、其方はやつぱり妙なる菩薩の御相を刻み出すが第一の勤ぢや。悲しうても怨めしうても、御佛を作るのが其方の運命と思ふがよい。

（定雲）私もさう斷念めて居りまする。せめては己れの魂なりとも、此のやうに卑しい體から救ひ出して自ら刻んだ菩薩の尊像へ打ち込んで了ひたう存じまする。

(女房の二) 其方の姿は醜う見えても、其方の魂の籠つて居る、此の觀世音の有難さには、歡喜の涙がこぼれるぞい。――ほんにさうではござんせぬか。

(女房の一) 仰つしやる通りでござりまする。何としたらば此れ程までに麗しい、圓滿なお姿が刻めたものか。かうして拜めば拜むなど、怪しう胸が時めいて、淨土の快樂が身に泌み渡るやうに覺えまする。

(女房の二) あのふつくらした襟筋や、なよ〳〵とした兩の腕の肉づきなど、さながら生ある者のやうでどうやら物凄うござります。夜更けてから内陣の暗まぎれに、あの御像がひとりでに動き出しはしないかと何だかそゞろに恐ろしうござりまする。

(女房の一) あれを御覽なさりませ。あの軟かな羅衣の下に、双びが岡の山肌のやうに持ち上つて居る乳房を御覽なさりませ。暖い息がわれ〳〵の額にまでも降りかゝつて來るやうな。

(道長) 菩薩と云へば人間の容貌より麗はしいのは當り前ぢやが、麿はまだこのやうな美女に出遇うた事がない。麿の戀ひした女たちは、此の觀世音の半分も美しうはなかつたわい。お許たちは此の菩薩を、羨しいとは思はぬかな。

(女房の二) 思はぬ段ではござりませぬ。あの夕つゞの光のやうな、御眸の潤ひなりとも、せめては持ちたうござりまする。

(女房の一) 三笠山の若草のやうな、蘭たけた御頬の色艶なりとも、妾は欲しうござりまする。

(道長) さうであらう、さうであらう。此の御佛を拜んだ者は、誰しも後世の安樂を念ずる心が起るであらう。かゝる奇特に會ひ奉るも、みな定雲の働きぢや麿は此上なう滿足に存ずるわい。

(女房の二) 申すも畏き事ながら、唯何事も大殿樣の御威勢ゆゑでござりまする。めでたい御代に生れ合せたばつかりで、下に繋がる妾どもまで、結縁の喜びに出會ふことが出來まする。

(女房の一) ほんに、ほんに、このあらたかな菩薩のお姿を拜んで居れば、生きながら來迎の御手にすが

るも同じこと、妾たちは必ず極樂往生が遂げられるでござんせう。....

(女房の二) 南無觀世音菩薩、南無觀世音菩薩....

女房等再び慇懃に菩薩を禮拜する。丁度その時前の大宰大貳藤原隆家が、一人の女房に手を曳かれて渡殿を徐かに步いて來る。長途の旅に疲れたらしく、日に燒けて窶れては居るが、しかしなかなか剛情らしい太い眉根の、唇の引きしまつた、軀幹の偉大な中年の男である。手を曳かれて居るのは、彼が其の頃煩つて居る眼疾が、未だ全く治癒しない爲めである。

(女房の三、左側面の扉のとろで道長に會釋する。)申し上げまする。

(道長) おう何事ぢや。

(女房の三) 太宰の大貳隆家さまが、はるばると筑紫の國から御上洛遊ばして、唯今此れへ御出でなされました。

(道長) なに、隆家が見えたとな。さてさて思ひがけない客人ぢや。早や早や此方へ連れて參れ。

(女房の三) 隆家さま、あの御聲が大殿樣でござりまする。此方へお越しなさりませ。

(隆家) 忝う存じ申す。

隆家女房に導かれて、道長の少し下手に据わる。女房の三退場。定雲はいつしか又仕事に取り掛って、先刻他の弟子が塗りかけた觀世音の彩色を施して居る。定朝は本尊の蔭に蹲踞りながら、相變らず腕拱いて、定雲の擧動を視詰めて居る。

(隆家) 御堂殿には其處にお出でゞござりますか。

(道長) おう、麿は此處に居るのぢや。....筑紫へ去んだは久しい前ぢやが、其方の眼はまだ直らぬと見える。

(隆家) 御覽の通りでござりまする。なれども去年の冬の頃から朧ろげながら物の形の瞳へ映るられしさに、春の立つのを待ちかねて、都を慕うて參つたのでござる。

(道長) 近々に上洛の噂は聞いて居つたが、今日しも其方に對面せうとは夢にも思ひ設けぬところ、數へて見れば別れてからもう幾年になるかなう。

(隆家) 筑紫へ下向いたしたのは今から既に七年前長和三年のことでござりまする。さるにても、多くの人々の變り果てたる都の中に、獨り變らぬ御堂殿の御

運の强さ。返す返すも祝着至極に存じまする。

（道長）したが隆家、見受けるところ其方も昔に變らぬ元氣ぢや。去年の二月筑紫の海へ押し寄せた、刀伊の賊徒を追ひ退けたは偏に其方の功績ぢやが、其れと云ふのも未だに血氣の衰へぬ證據と、麿は蔭ながら頼もしう存じて居つた。其方が太宰府に居たればこそ、我が日本は首尾よう夷の侮りを防いで、君の稜威を海の外まで輝かすことが出來たのぢや。其方はまことに國家を泰山の安きに置いた、天下無双の功臣となり居つたなう。

（女房の一）隆家さま、どうぞ其の折の勇ましい船軍の有様を、妾どもにもお話しなされて下さりませ。

（隆家）いやいや無風流な戰ひの話など、今更お許たちに聞かせたうもござらぬわい。それよりは此の頃の都の春の物語こそ、先づ某が聞きたうござる。七年が間筑紫潟の潮風に打たれて、某はとんと田舍者になり申した。みやびの道をも忘れ果てゝ、今は早や、歌よむ術だに覺束なう存じ申す。

（女房の二）噂に聞くさへ恐ろしい夷の船の押し寄せる、筑紫と云ふのはどのやうなところでござります。鄙も都と同じやうに、三月の空にはやつぱり花が開くでござんせう。

（隆家）海邊と云へば須磨明石より西をば知らぬ都の人に、邊土の春のうら悲しさはなか〳〵思ひやられぬこと、さすが剛情の某も、つく〴〵都が戀ひしう覺えて、物怪なんどの憑いたやうに急いで上洛いたしたが、もう暖い南の國では、某の旅立つ頃に花の盛りは過ぎ申した。

（女房の一）長い旅路にお顔の色も日に燒けて、御窶れなされた御様子に見えまする。さうして途中の陸路にも海路にも、さしたる難儀はござんせなんだか。貫之の日記に見えるやうな、海賊ばらは居りませなんだか。

（隆家）などてさやうな障りがござらう。此の度び都に御堂建立の趣が、津々浦々の果までも聞え渡つて地子官物はおそなはるとも御堂の夫役を怠るなかれ

と、國々の司等の下知に從ひ、毎日のやうに材木土石を京へ運ぶ船や車が、遠きは四國九州の彼方より、海にも陸にも引きも切らず。海賊などの隙をうかゞふ折とてもござらぬわい。

（道長）いかさまさうであらうも知れぬ。都の加茂川も、材木を組んでは流す筏の爲めに、水の流が堰かるゝほどぢや。

（隆家）某なども道すがら世の取り沙汰を承り、やがて程なう行はるゝ御堂の供養に間に遇ふやう、千載一遇の機を外さじと只管願うて參つたれど、いよ〳〵都へ着いて見れば聞きしに勝る普請のありさま、まことに稀代の盛事でござる。

（道長）ほう、其方は眞實そのやうに思うてくれるか。

（隆家）はて異なこと仰せらるゝ。たとへ御堂殿のおん前でも、媚び諂ひは嫌ひな某、決して僞り申しませぬ。

（道長）其方の口から讃へられゝば、千萬人に褒められるより麿はなか〳〵心强い。此の道長の立身を咒咀する人の多い世なれば、御堂建立の企なども定めて驕慢の沙汰のやうに、蔭では云ひ觸らす事であらうと實はひそかに思うて居るのぢや。

（女房の一）大殿樣とした事が、誰方に御遠慮遊ばして、そのやうなお氣遣ひをなされまする。世間の人は此の度びの儀を誹議するどころか、古今に例ない聖代のしるしよと、みな喜んで居りまする。一切衆生に佛法の惠みの雨を施し給ふ、大殿樣の御威德を異口同音に讃へ奉つて居りまする。

（隆家）潛上驕慢も事にこそよれ、伽藍を建てゝ御佛を供養し奉るに、何の遠慮が用り申さう。御堂殿にも此の頃はお年を召されたのでござらうか、心弱い事を仰せられるわい。

（道長）あはゝゝゝ。まだ長壽はする積りぢやが寄る年波は爭はれぬもの、去年の三月に煩うてから、麿もめつきり弱うなつたわ。――なう隆家、麿は其の折の煩ひから、急に一念が發起して、菩提のために無量

壽院を建立する氣になつたのぢや。盲目の其方には見えぬであらうが、麿は其れから入道して、名も行觀と改めて居るのぢや。

(隆家) 實によい所へお心がおつきなされた。三師五戒を受くる人すら、三十六部の善神を始め、恒河沙眷屬の守護を授かると承る。まいて天下の淨財を集めいみじき堂宇を建立なされば、功德の程も限り知られず。彌陀の利益に與るものは、御堂殿の御一族ばかりではござるまい。此れこそまことに庶民を惠む政の道に適うと申すもの、夷の船を退けた某などの功績よりも、遙かに功ある御企でござるわい。

(女房の一) ほんにさやうでござりまする。天王寺の聖德太子の御日記には、「王城より東に佛の道を弘めんを我と知れ」と、書き記されてあるとやら。さうして見れば大殿樣は、厩戸皇子の再來で居らせられうも圖られませぬ。

(道長) さてさてお許はよい事を敎へてくれた。まことに麿は聖德太子の生れ變りであらうも知れぬ。現世の榮華、後世の安樂、願うて協はぬものもなく、麿の身の上は曇りなき滿月のやうぢや。もはや此の上世の中に望ましい事は何もないわい。

夕陽の光が衰へて、舞臺は次第次第に薄暗くなる。塒へ急ぐ夕告鳥の音が遙かに聞えて、再び入相の鐘が鳴る。左の奧、渡殿の後ろの庭から、勞役を濟ませた人夫等が、或は鋤鍬を携へ、或は空車を曳いて出で來り、三々伍々堂の右方へ歩み去る。

(女房の一) 春の一と日の長閑さに、時の移るも忘れ果てゝ居りましたが、いつの間にやら日が暮れて參つたさうな。

(隆家) 見えざる眼にも御佛を拜みたうて參つたれど、暗うなつては不自由な某、また重ねて拜見に參ると致さう。御堂殿、さらばお暇申しまする。

(道長) おゝ、誰か隆家を案内して取らせい。

(女房兩人) 畏まりました。

女房等左右より隆家を擁して立つ。道長も後から立ち上つて行かうとする。突然、本堂の蔭から定朝が現れて、道長の傍に畏まる。

(定朝) 大殿、不躾ながらお願ひがござります。暫くお待ち下されい。

(道長) 誰ぢや。其方は定朝ではないか。

(定朝) さやうでござります。

(道長) 願と云ふのは何事ぢや。

道長が立ち止まつて居る間に隨從と女房達は渡殿の彼方へ消える舞臺の暗さがだんだんに濃くなる。忽ち内陣の闇に一箇の燈影があかあかと揺ぎ出す。見ると定雲が灯を點じて、菩薩の面を照らしながら、猶も一心不亂に製作を續けて居るのである。

(定朝) 外の事でもござりませぬ。何卒某の役を免じて、如來の像を刻むことを、あの定雲にお任せ下されい。お願ひでござりまする。

(道長) ふうむ……なぜ其のやうなことを申す?

(定朝) あの定雲の菩薩に勝る本尊を、某の手では彫り出すことが出來ませぬ。大殿はじめ世の人々の望みに背いた某は、寧ろ潔う身を退いて、あの若者に路を讓るが當然かと存じまする。

(道長) などてさやうな道理があらう。いか程定雲が上手なればとて、彼には彼に適はしい勤めがある筈、菩薩をこそは巧に彫め、まだ生若い腕前で、師匠の其方に委ねられたる大役を、あの男が引き受けるのは便ない事ぢや。

(定朝) では御承引下さりませぬか。

(道長) 氣の毒ながら聞き入れられぬわ。……麿が、かやうに申すのも、畢竟其方を信ずるからぢや。其方はあまりに自らを貶め過ぎて居るからぢや。氣を落さずに工夫を重ねて、一日も早う麿に安心させるやう、彌陀の尊容を作つてくれい。麿の方から頼んで置くぞ

(定朝) これほどお願ひ申しても、御聞き入れがござりませぬか。

(道長) 云ふ迄もない。其方の願は許し申さぬ。

道長冷やかに定朝を見やりて、渡殿を歩み去る。

(定朝、左の角の簀子の板敷にどつかりと胡坐を掻き、溜息を洩らしながら悩ましげに頭を抱いて勾欄に打ち伏す。)私の頭は源の盡きた泉のやうに涸れてしまうた。私はどうしたらいゝのであらう。……あゝ是非もない事ぢや。……

内陣の方に鋭い槌の音が鏗然と響いて、燈の影が一段と強くはためく。定雲が絹傘を捨てゝ、再び勢至菩薩を彫り始めたのである。

幕が靜かに下りろ。

第二幕

第一幕より二三日過ぎたる深夜の光景。今度は平舞臺全體が同じ阿彌陀堂の内部になつて居る。從つて第一幕に見えて居た内陣の佛像柱、裝飾具等が、大きく詳かに觀取される。本尊の首はまだ依然として出來て居ないが、その外に廣目天持國天等の四天王の像が二つ三つ出來かゝつて居る。左方の庇の間に念珠所があつて、三尺の障子を後ろへ立て掛け、蒔繪の花机、銀の多寶塔、瑠璃の花瓶(はないけ)などを置き、疊を半疊敷いてその上にわらうだを重ね、傍に脇息が据えてある。庇の間の向うは、例の渡殿へ通ずる出入口の扉である。扉は内側から鎖されて、板戸の面に描かれた佛畫が、朦朧と夢のやうな背景を作つて居る。

幕が開くと、暗澹たる夜半の堂内に二箇の燈明が微かに點ぜられて、幽靈のやうな三つの人影が闇に浮かんで居る。人影の一つは、二十歳前後の眉目の凉しい、あでやかな婦人の姿らしく、念珠所の机の傍に大海の摺袋(すりぶくろ)をひろげつつ、眠るが如く蹲踞まつて居る。前の太政大臣爲光の娘で、四の御方と呼ばれた女である。女のうしろに道長が柱に凭(もた)れて、薄氣味惡く微笑みながら佇んで居る。今一人の男は佛師の定雲である。彼は四の御方と對ひ合うた母屋の板敷に勢至菩薩の像を据え、婦人の容貌と見較べながら、繪筆を持つて彫像の額へ目鼻を描いて居る。二箇の燈明のうち、一箇は内陣の須彌壇の前に、一箇は四の御方と定雲との間に置かれてある。

三人共暫く無言。死んだやうな、寧ろ鬼氣を帶びた靜かさが舞臺を支配する。やゝありて、道長が皺嗄れた聲で、囁くが如くに語り出す。他の二人も幕の終るまで低い調子で、始終四隣を憚るやうに話をする。

(道長) あれを見い、燈(ともしび)のはためく影にあかあかと照らし出された、あの勢至菩薩の顏を見い。其方(そなた)の麗はしい目鼻立ちが、鏡へ物の映るやうに、彼處(あそこ)へまざまざと浮かんで居るわ。

(四の御方) あまり其のやうに仰つしやつて下さりますな。妾はどうやら恐ろしうござります。

(道長) 何で恐ろしいことがあらうぞ。うれしう思ふのが當りまへぢや。

(四の御方) さやうでござります。うれしいやうなさうして恐ろしいやうな心地がいたします。妾の顏がたとへいかほど美しいとて、大殿の妾を愛(いつく)しむお情がたとへいかほど深ければとて、妾に生寫しの觀音勢至をお作りなさらうとは、今も昔も例(ためし)のないこと、あま

り勿體なうて末恐ろしうござります。

(道長) いやいや、滿更例のない事でもないのぢや遠い古の話ぢやが、大和國の法華寺にある十一面觀世音は、忝くも天平の昔聖武帝の御后光明皇后の御顏を寫し奉つたものぢやと聞いて居る。さうして見れば、其方の姿を寫し取るのに何の不思議もないではないか。

(四の御方) いかさま其のやうな傳說は、妾も聽いて居ります。したが一天萬乘の帝の御后なら、人間とは云へ菩薩も同じ貴いお方。卑しい妾の身の上とは比べ物になりませぬ。

(道長) 其方が卑しい身の上とな？誰がそのやうなことを申さう。其方の父は大政大臣爲光ぢや。麿が叔父御の法住寺殿ぢや。其方の姉は花山院の御時に弘徽殿の女御と云はれたやむごとないお人ぢや。運命がよかつたなら、其方とても女御になれた身の上であらうに。

(四の御方) 成る程さうでござりませう。妾の生れは決して卑しうはござりませぬ。さりながら、生ればかりが卑しうないとて、貴い人とは申されませぬ。古の光明皇后は、申すも恐れ多けれど、妾の先祖の不比等の大臣の御女ぢやと聞きましたが、ほんに御佛のやうな、美しい、慈悲深い御心を持つたお方と承つて居ります。妾の顏は美しうても、妾の生れは貴くとも妾には氣高い德がござりませぬ。

(道長) 其方に氣高い德がないとな？誰がそのやうな事を申さう。麿が其方を慕うて居るのは、あながち其方の容貌の、世に優れたのが氣に入つたばかりでもない。麿は其方の淨らかな心が、水晶のやうに透き徹つた胸の中が、氣に入つたのぢや。

(四の御方) でも大殿は妾のことを、心の冷たい女子ぢやと、折々お怨み遊ばされるではござりませぬか。

(道長) うむ、それはさうぢや。さても冷たい女子ぢやと、怨み悶ゆる折もあるのぢや。さりながら、谷間の淸水も水晶の玉も手に觸れれば冷たいやうに、凡べて心の淨らかな女子は熱い情を持たぬが定ぢや。そな

たが麿にをり〳〵情なう見ゆるのは、其方の胸の淸しい證據ぢや。

(四の御方) それでは何故大殿は、妾のやうな淨い女子をお慕ひなさるのでござります。淸しい胸の女子より、熱い情の女子の方が、戀をするには適しうござりませうに。

(道長) おしなべてこの世の習慣はいづれにもせよ麿はそなたが氣に入つたのぢや。心の中の淸々しさをそのまゝ形に現はして居る器量のめでたさは云はずもあれ、紫式部や淸少納言に劣らぬほどの、賢しい性質まで備はつて居る、そなたのやうな女子は珍しい‥‥才があつて、みめ美しい女子の胸には、煩惱の炎も强いものぢやに、そなたの心が淨らかなのはほんに不思議ぢや。

(四の御方) いゝえ不思議ではござんせぬ。妾は大殿の思し召すやうな、淨らかな女子ではござりませぬ。妾の胸が淸しう見えるのは、いまだに戀を知らないためでござります。たとへ一遍でも戀の甘さを敎はつたなら、妾とてもいつまで冷たい女子ではござんせぬ。

(道長) 敎はらずとも、戀は自然に覺ゆるものを、そなたの心が淸ければこそ、戀の情が起らないのぢや。

(四の御方) いえいえさうではござんせぬ。妾の靜かな胸の中にも、世間の女子と同じやうに、情の炎の燃え上る、薪は潛んで居りまする。たゞ其の薪へ火をつける男子がないのでござります。妾を煩惱の闇路へ誘ふ、立派な戀人が見あたらないのでござります。

(道長) さりとはそなたも不埒な女子ぢや。今の言葉がほんたうなら、年は取つても麿こそは、其方に適はしい立派な男子ぢや。これほどいとしう思うて居る麿の心が解らぬかなう。

(四の御方) それは解つて居りまする。さればこそ妾の體は大殿へお任せ申したのでござります。しかし御推量下さりませ。妾はまだうら若い女子でござりまする。

(道長) ふむ、たとへ體は許しても、心は許さぬと

申すのぢやな。

(四の御方)　まあ其のやうなものでござりませう。大殿ばかりか、その外に言ひ寄る人は多勢あつても、妾の心にかなう男子は、今迄に一人もないのでござります。妾の心に描いて居る、相手の人はいまだに見えないのでござります。妾の胸に澱んで居る、情の泉は湛ることなく涸れ果てゝ、日陰に咲いた花のやうに、人に知られず長へに萎んでしまふのでござりませう。妾はもうあきらめて居りまする。戀の樂しみはあきらめて、たゞ大殿につめたい屍骸をお任せ申して居ります る。

(道長)　よいわ、よいわ。攝政關白の威光でも、人の心を思ふがまゝに動かすことは出來ない筈ぢや。淸うて冷たいそなたの心は、たゞ其のまゝにして置くがよい。麿はそなたの屍骸を得れば滿足ぢや。

(四の御方)　ほんに妾は不運な女子でござります。どうぞ來世には榮ある月日がめぐり來るやう、ひたすら御佛を信心するのが、今の妾にはたつた一つの賴みの綱でござりまする。

(道長)　成る程それはよい心掛けぢや。戀の甘さは一時の夢幻に過ぎないが、信心の功德は永劫の快樂の因となるであらう。そなたの殊勝な行ひは、麿に取つての此の上もない善知識ぢや。そなたの心を知れば知るほど、猶更そなたがいとしいわい。

(四の御方)　まことに妾を善知識ぢやと思し召すなら、いとしがるより敬うて下さりませ。妾の屍骸をも妾の心と同じやうに、大殿の御手から放れさせて下さりませ。大殿の御意に從うて居りますのは、もとく妾の本意ではござりませぬ。賴り少い兄弟たちに立身出世がさせたくて、いはば妾は犧牲となつたのでござります る。

(道長)　はて、又してもそのやうな事を云うてくれるな。佛の道に入りながら、そなたの色香に惹かされて居るのは、愚かなことと思うて居るが、此れほど麿を迷はせたのも、世に類ひないそなたの器量のなせる罪ぢや。そなたを手から放しては、御佛に捨てられる

より、麿はなか〳〵心さびしい。麿の妄念を若し淺ましいと思うなら、そなたの力で悟りの道へ導いてくれい。戀に溺れた麿の心を、そなたの信仰で救うてくれい。そなたはやつぱり麿の善知識ぢや。生き佛ぢや。そなたを敬うて居ればこそ、そなたの姿を菩薩の形に取らせて居るのぢや。

（四の御方）さりとは執念き煩惱に、捕はれておいでなさりまする。

（道長）煩惱と笑はゞ笑へ、此の菩薩こそ麿が歸依する隨一の佛ぢや。やがて堂宇が出來上れば、そなたにそつくりの顏を持つた、そなたの化身の觀音勢至が都合九つづゝ安置されるのぢや。そなたにはそれが嬉しうないのか。これ、いつもそのやうに拗ねて見せずと、うれしいならうれしいと云うてくれい。うれしさうに笑うてくれい。

（四の御方）でもあの菩薩のお姿が、あまり妾によう似た爲めに、世間の人が心付きはしないかと、それが何より氣づかひでござりまする。

（道長）何で氣づかひなことがあらう。菩薩がそなたに似て居ればとて、もと〳〵そなたの顏と心に曇りがなければ、御佛の威嚴を損ずる道理はないのぢや。菩薩がそなたの化身ぢやと知れたとて、世間の人はそなたの冥加を羨みこそすれ、誹りはすまい。生れながらに菩薩の相の備はつた、そなたの器量のめでたさは此の御寺のあらん限り、觀音勢至の形となつて、後の世までも傳はるのぢや。

（四の御方）さうして、大殿と妾との密事が、幾百年の末までも人の言の葉に上るのでござりませう。妾はそれが口惜しうござりまする。

（道長）夜な夜なかうして、人目を忍んで會うて居るのに、そのやうな事を誰が知らうぞ。そなたと麿との間柄を知つて居るのは、此處に居る定雲一人ぢや。……麿はそなたの屍骸ばかりを生捕つたが、此の定雲は屍骸ばかりかそなたの心の姿までも、見事に寫して刻み付けたわ。あの清淨な瞳の光を拜んだ者は、濁りに染まぬ蓮のやうな其方の胸の潔白を、ゆめゆめ疑ふ

筈はあるまい。誰しも其方を無垢な乙女と思ふであらう。

（四の御方）それでは大殿も妾も、世間の人を欺くことになりまする。

（道長）欺いたとてよいではないか。上はやむごとない殿上人から、下は卑しい奴婢の輩にいたるまで、いとしい麿の戀人の姿の前に跪いて、さても菩薩の有り難さよと合掌するのを眺めやつたら、此れに上越す喜びはなささうぢや。

（四の御方）そのやうな狂はしい事を仰つしやりますな。世を欺いた咎めは兎も角、御佛の罰が恐ろしうござります。

（道長）あはゝゝ、そなたは憶病な女子ぢやなう。

（四の御方）ほんに憶病でござります。こんな夜更けに御堂の闇にうづくまつて、此處に侍べる定雲とやらの、鬼のやうな恐らしい顔を見るさへ、そゞろに心が怯えまする。

（道長）あはゝゝゝ。いかほど面つきは物凄うても此の若者はそなたのためには大恩人ぢや。師の定朝も及ばぬ程の、立派な業を持ちながら、醜い男に生れついた此奴の不運を憐んでやるがよい。

（四の御方）妾の姿をとてもお寫しなさるなら、日本一の佛師と云はるゝあの定朝に、なにゆゑお頼み遊ばさないのでござります。此のむくつけき若者の、獸のやうな白い眼で睨まれるのが、妾は氣味惡うござります。

（道長）氣味が惡うても辛抱するがよい。麿は此奴の獸のやうな面構へが氣に入つたのぢや。此奴の眼には佛も人間も同じ姿に映りさうぢや。そなたの顔を正直に佛の姿に刻ませるには、究竟の若者ぢや。

二人は會話をやめて、定雲の方を凝視する。定雲は相變らず沈默して、冷然たる態度で製作を續けて居たが、ふと四の御方と顔を見合はせて、互に長い間睨み合つて居る。

（四の御方）……まあ此の男はほんに不思議でござります。先程からあのやうに、妾の顔を視凝めたまゝぢつと何やら考へて居るさうな。

（道長）大方そなたに物を云ひたいのであらう。

(四の御方) あまり此の男が默つて居るので、妾は話がして見たうござります。二た言三言、やさしい言葉をかけてやつてもよろしうござりますか。

(道長) いや／＼其れは許されぬ。かりそめにも貴い上臈の身分を考へて見るがよい。そなたはそなたの身の上で、あのやうな賤の男子と直き直きに言葉を交はすは無益の沙汰ぢや。

(四の御方) 浮世をあきらめた妾の身は、有髮の尼も同じこと、上下の差別は用のないことでござります

(道長) したがそなたは、あの男が恐ろしいと云ふたではないか。

(四の御方) それでもどうやら、急に話がして見たうなりました。成らう事なら、妾は定雲とたつた二人で、暫く此處に語らうて居たうござります。

(道長) さても物好きな言を申す。春とは云へど夜更けた故か、麿は大さう寒うなつた。そなたも定雲も定めし疲れたことであらう。あすの夜更けに又會うとして、今宵はこれで休まうではないか。

(四の御方) 妾はどうしても、二人で話がして見たうござります。どうぞ大殿は一と足お先へ、お退けなされて下さりませ。

(道長) そのやうな事を申さずに、麿と一緒に參るがよい。

(四の御方) いゝえ、お願ひでござります。大殿は今迄に、妾の願ひを聽いて下さらぬことはござりませぬ。どうぞ今宵もお許しなすつて下さりませ。妾を殘してお出でなされて下さりませ。

(道長) 此の若者の傍へ、そなたを殘して置いて行くのは、なぜか麿には氣がゝりぢや。

(四の御方) 何も御案じ遊ばす事はござりませぬ。妾の我が儘かは存じませぬが、ほんに容易(たやす)いお願ひでござりませうに。

(道長) 何で容易い事があらう。人目を忍んで逢うて居れば、片時そなたと別れるさへも辛いのぢや。

(四の御方) 人目を忍ぶ逢瀬とは云へ、毎夜のやうにお顔を拜んで居りまする。まだ夜明けには間のある

時刻、程なう後より參りますゆゑ、どうぞ彼方でお待ちなされて下さりませ。これほどお願ひ申すのに、聞し召しては下さりませぬか。

(道長) 聞き入れぬと云ふではないが、此の定雲の面魂が、麿にはどうも案じられる。此の若者は悧巧者やら愚者やら、胸の奥底にどのやうな事を考へて居るやら、麿にはさつぱり解らないのぢや。そなたを此奴に預けるのは、獸の鼻面へ餌食を捨てると同じやうな心地がするのぢや。

(四の御方) それでも大殿は、妾を憶病な女子ぢやと、お笑ひなされたではござりませぬか。唯今のお言葉では、妾よりも大殿の方が、あの定雲を恐れておいでなさります。

(道長) 麿は少しも恐しうない。そなたの爲めに恐ろしいと思うて居るのぢや。

(四の御方) 妾の爲めならば、どうぞ妾の好きなやうに、お任せなすつて下さりませ。かばかりの事をとやかうと仰しやるのは、日頃の優しい大殿に似つかはしうもござりませぬ。

(道長) よいわ、よいわ、さほどに其方が賴むとあれば、不本意ながら聞き屆けて進ぜよう。麿はいつでもそなたには優しうして居るつもりなのぢや。此れまで一度もそなたの願ひを許さぬ例はなかつた筈ぢや。

(四の御方) ほんにさやうでござりまする。妾は常々忝ないと、しみ〴〵思うて居りまする。

(道長) 天下の事はわが掌を覆すが如く、思ひのまゝに振る舞ふ麿も、そなたの一顰一笑には思ひのまゝに動かされるわい。

(四の御方) ほんにさやうでござりまする。妾はつく〴〵勿體ないと思うて居りまする。

(道長) はてどうなりと、そなたのよいやうに思ふがよい。そんなら麿は、あちらで其方を待つて居るぞ

道長、左の扉を開けて渡殿の闇に後ろ姿を消す。

(四の御方) これ定雲とやら、其方に言葉を交はすのは、妾は今宵が初めてぢや。其方は妾に云ひたい事があるのであらう。其方の重さうな唇で、妾に何とか

云うて賜れ。

（定雲、その時まで機械のやうに働いて居たが、聲をかけられると、繪筆を擱いて板敷に恭しく畏まる。）有り難うござりまする。……

（四の御方）妾に言葉をかけられるのを、其方は有り難いと思うて居やるか。

（定雲）有り難い、勿體ないと存じまする。――私は生得唇の重い男でもござりませぬ。世間の人が、私を唇の重い男にさせてしまうたのでござります。

（四の御方）さうして、其れは何故ぢや。

（定雲）私の顔の醜いためでござりまする。女は勿論男さへ、淺ましい私の姿を卑しみ嫌うて、近づかうとも致しませぬ。私は人と笑ひながら話をしたことがござりませぬ。

（四の御方）其方の姿は恐ろしう見えても、其方の言葉にはどうやら優しい節がある。ほんに其方は哀れな男ぢや。

（定雲）大殿樣のお指圖で、私はあなた樣と毎夜のやうに、此のお堂でお目に懸つて居りまする。此の觀世音と勢至菩薩と、二つのお姿を刻み出すまで、今宵でもはや十日程、あなた樣のお顔を拜んで居りまする。

（四の御方）いかさま其方の云ふ通り、今宵はちやうど十日目ぢや。

（定雲）十日の間私は、かうしてあなた樣と向ひ合うて、咳一ついたさずに、默つて仕事を續けて居りました。やむごとないあなた樣からお言葉賜はらうとは夢にも存ぜず、下界の人が月の光を拜むやうに、畜獸が人間を仰ぐやうに、あなた樣のお傍近くへ侍りながら、心の底をお知らせ申す便りを知らずに居りました。あなた樣と私とは、身分の高下があまり恐ろしう隔たつて居りました。私の口には世間の掟と云ふ、嚴重な銜が篏められて居りました。

（四の御方）その銜を、二人の爲めに妾が取り除けて進ぜるのぢや。世間の掟がそちの爲めに銜なら、妾の爲めにもやつぱり銜ぢや。――人々の寢靜まつた此の夜更けに、剩へ厚い扉で四方を鎖された御堂の中に

二人がどのやうな話をしたとて、誰にも洩れよう筈はない。貴賤の隔ては他人の見て居る前での事、妾が人なら其方も人ぢや。其方が獣なら妾も獣ぢや。心置きなう語るがよいぞえ。

(定雲) 下賤の女子供ですら、言葉を交はすのを汚はしいと思うて居る私へ、雲の上人のあなた様から其のやうに仰せ下さるのは、何だか夢のやうでござります。木で彫つた御佛の像が口をきくより、私には餘計不思議でござります。古への光明皇后は、癩病患者の乞に任せて、膿をすゝつておやりなされたとやら、私にはあなた様のお慈悲の深さが、それにも増して恭う覺えまする。

(四の御方) 醜い姿に生れついた、其方の身の上も不憫ながら、妾のやうにあまり美しう生れても、不運な月日を送らねばならぬぞえ。其方にはそれが解つて居やるか。

(定雲) 憚りながら、ようく解つて居りまする。あなた様の御不運は、お察し申して居りまする。

(四の御方) 解つて居るとは殊勝なことぢや。妾は其方を氣味の惡い若者ぢやと云うたが、あれはみんな僞りぢや。まことは其方を不憫な者と思うて居るのぢや。其方を不憫と思ふ代りに、其方は妾を不憫ぢやと思うてくれやれ。

(定雲) あなた様のお身の上を、數にも足らぬ私がいかほどお嘆き申しても、及ばぬことでござります。私はたゞ己れの命のあらん限り、精根の續かん限り、あなた様のお姿を、菩薩の形に作り出さうと努めるばかりでござります。私の拵へた御佛が、微妙の相を現はして、普く世上の歸依渴仰を受けたなら、せめてはそれが私の心づくしでござります。

(四の御方) 妾によう似た菩薩の像が、世間の人から歸依されるのを、其方はそのやうに望んで居やるか。佛を欺き世を欺いて、來世の報いが恐ろしいとは思はぬかや。

(定雲) 私のやうな凡夫には、來世の報いは恐ろしうても、現世の望みと樂しみを、抛つことは出來ませ

ぬ。醜く生れたばつかりに、ことし十九の春になるまで、戀を知らずに過して來た私は、あなた様のお顔を刻むのが、たつた一つの冥加でござります。今度の仕事にかゝつてから、私は始めて生きがひのある心地がいたして居ります。

(四の御方) それでも妾は、菩薩の形に直されるやうな、浄い心の女子ではないのぢや。――其方は妾を、どのやうな女子ぢやと思うて居やる。

(定雲) 菩薩よりも美しい、如來よりもたふとげな千萬人に禮拜されても、耻かしからぬお方と存じて居ります。いみじき聖大徳ならばいざ知らず、現世に生きとし生ける者は、まことの佛の御顔を拜まう筈はござりませぬ。たゞあなた様のやうな、すぐれて美しい御相を、菩薩の假形し給ふものと、崇め信ずるのみでござります。若し世の中に美しい人が居らずば、佛を信ずるよすがとてはござりませぬ。

(四の御方) 御佛の姿は美しいものと、其方はどうして知つて居るのぢや。

(定雲) 人間の苦患を救ふものは、美しい姿より外にござりませぬ。如來に紫磨金の肌がなくば、菩薩に頻婆果の脣がなくば、慈悲の大海がどのやう廣く、弘誓の光がどのやうに普くとも、などて佛を信ずる心が起りませう。かくては畢竟、穢土も浄土も同じことでござりまする。それ故、私は眼に見えぬ御佛よりも、眼に見ゆるあなた様のお姿に、穢土の苦しみを免れるのでござります。佛があなた様に似通うて居らずば、佛を捨てゝあなた様を信じまする。

(四の御方) 其方も大殿と同じやうに、佛の御手に救はるゝより、妾の手から救はれたいと、願うて居やるのぢやなう。

(定雲) 大殿様と私ばかりではござりませぬ。來世の幻に憧れるより、現世の眞實を賴みたいのは、誰しも同じ人情でござりまする。あなた様と一つ時代に生れ來て、幻ならぬ菩薩の色身を仰ぎ視る、今の世の人は皆仕合せでござりまする。

(四の御方) 大殿と云ひ、其方と云ひ、大方の世の

人と云ひ、頼るところのある者は仕合せぢや。菩薩の像に擬へた、妾の姿をまことの佛と伏し拜んで、穢土の苦患を免れる者は皆仕合せぢや。したが其のやうに世間の人から崇められる、妾自らは何としたものであらう。妾には妾を導く佛がない。妾の頼る美しいお姿は、何處にも見えぬのぢや。

（定雲）ほんにさうでござりまする。美しいあなた樣に拜まれるやうな、貴い相が此の世にあらうとは思はれませぬ。

（四の御方）其れは妾もよう知つて居る。妾に勝つた美男美女が、生きて居ようとは思ひも寄らぬ。さればこそ妾は御佛に頼りたいのぢや。たとへ此の世にうるはしい人間の相がなくとも、御佛の姿は妾よりも勝つて居る筈。そのお姿を考へ出すのが佛師の役目と云ふものぢや。此の世に見られぬ微妙の相を、此の世の人に見せてくれるのが佛師の勤めぢや。

（定雲）はてさて、其れはあまりに重い役目でござりまする。佛師の鑿も繪師の繪筆も、現世にないうつくしさを、作り出す事は出來ませぬ。佛も人間の形を備へて居る上は、人間を離れた微妙の相を、考へることは出來ぬ道理でござります。……あれをお覽なさいませ、彼處に半ば出來かゝつた、阿彌陀佛を御覽なさいませ。私の師匠の定朝は、當代一と持て囃される名工ながら、いまだに如來のおん顔を考へることが出來ないのでござります。毎日毎夜、血を吐くやうに思ひ惱んで、いかほど工夫を凝らしても、私の菩薩に勝る本尊を、刻み出す事が出來ないのでござります。されども其れは、強ちに私の師匠の不覺ではござりませぬ又私の腕前の優れた故でもござりませぬ。私は大殿樣の仰せを受けて、たゞ正直にあなた樣をお寫し申したばかりでござります。私の師匠の惱み苦むのは、あなた樣のお姿に勝る、人間の相が見付からぬ故でござります。

（四の御方）いみじき大德の敎を聽いても、御佛の姿を眼前に拜まねば、來迎の有り難さを會得することは出來まいものを、それでは妾は何としたらよいのぢ

や。信ずることも迷ふことも、聖の喜びも凡夫の樂しみも、等しく妾は止められたのぢや。妾の便りとなる者は、妾の爲めの御佛を、どうぞ妾に拜ませてくりやれ。

（定雲） あなた樣の禮拜遊ばす御佛は、やつぱりあなた樣のお姿より外にござりませぬ。

（四の御方） そのやうなおことなことが、何として出來ようぞい。妾の姿を妾が拜んでも、信心の便りにはならぬぞえ。

（定雲） いえ〳〵、ならぬことはござりませぬ。弘誓の船に救はるゝ衆生の數は多くとも、佛はもとより一つ佛でござりまする。此の世の中で最も美しい人間の形に、佛が假形し給ふものなら、あなた樣も此の菩薩を御禮拜なさるのが、當然でござりまする。此れより外にあなた樣の、お賴みなさるお姿はござりますまい。

（四の御方） 此の菩薩を信ぜよと云ふのは、妾の淺ましい肉身を信ぜよと云ふのと同じ道理ぢや。此の汚はしい肉身を、どうして妾に信ぜられうぞ。

（定雲） 汚はしいとは何故でござります。

（四の御方） たとへ形は美うても、妾の心は汚れて居ると、先にも度び度び云ふたではないか。

（定雲） でも此の菩薩は、たゞあなた樣の形を寫したばかりでござります。此の菩薩には、形より外に心はござりませぬ。此の菩薩の、形をお禮拜なさりませ。あなた樣のお心を除いた、肉身の美しさをお便りになさりませ。

（四の御方） 妾の肉身の美しさを、何で便りとすることが出來よう。たとへば彌生の空に咲く、櫻の花の盛りのやうに、やがて散り失せる肉身の色香を、いつまでも信ずることが出來よう。

（定雲） あなた樣の肉身の色香は枯れ萎んでも、私の刻んだ菩薩の色香は褪せる憂がござりませぬ。虚空を彩る虹のやうな、果敢ない現身（うつしみ）の美しさに、鑿の力が永劫の命を與へるのが、佛師の役目でござりまする。あなた樣と此の菩薩とは、同じ形を持ちながら、同じ

運命に縛られては居りませぬ。有爲轉變は浮世のこと、たとへ人間の肉身でも、一旦菩薩に作られたからは、生老病死の因果を斷ち、眞如の月の光のやうに、曇る時節はござりませぬ。

（四の御方）妾の屍骸は菩薩になつても、妾の心の救はれる折はないのぢや。美しい屍骸を此の世に留めて、妾の魂は焦熱地獄へ墮ちるのぢや。

（定雲）さればこそ、あなた樣は此の菩薩を御信仰遊ばすが宜ろしうござります。私が此の御像へ自分の魂を打ち込んだやうに、あなた樣も御自分の魂を、此の御佛の御姿の中へ、封じ込めてお了ひなさりませ。現在の肉身は魂の留る假の宿、此の菩薩こそ眞實のあなた樣と思し召して、御歸依遊ばしたがよろしうござります。

（四の御方）そのやうな理を、いかほど其方が繰り返しても、妾の迷ひは晴れはせぬ。なう定雲、其方は妾の恩人ぢやと、先程大殿が仰せられたのを、よもや忘れはしないであらう。

（定雲）いかにも覺えて居りまする。私はあなた樣の恩人でござりませう。さうして又、あなた樣も私の大恩人でござります。

（四の御方）ほんとうに其方が妾の恩人なら、妾は其方に賴みたい事がある。妾を菩薩に作つてくれた、其方の惠みは大きいけれど、妾はそれよりももつと大きな惠みを授けて貰ひたいのぢや。

（定雲）此れよりも大きな惠みを、私の力でお授け申す譯には參りませぬ。此れが私の及ぶ限りの仕事でござります。此れがあなた樣の、此の世で受ける仕合せの絶頂でござります。

（四の御方）生きながら菩薩の像に刻まれるのが、仕合はせの絶頂とは、妾にはどうしても信じられぬ。其方は妾に、もつと大きな惠みを授ける道があるぞえ。

（定雲）はて、もつと大きな惠みとは、どのやうなことでござりませう。

（四の御方）其方の師匠の定朝が工夫しかねて惱んで居る、御本尊の彌陀のお顏を、其方の腕前で仕出來

して賜れ。妾の姿に勝つて居る、貴く淨い如來の像を刻んで賜れ。其れが妾をほんたうに救うてくれる大きな惠みと云ふものぢや。其の如來こそ、妾の拜む眞實の御佛ぢや。

（定雲）いゑ／＼其れはかなはぬこと、此の定雲は云はずもがな、いかやうな名人上手が現れても、お望み通りの彌陀の尊容を作り出すことは出來ませぬ。必ず必ず其のやうな儀を仰せられぬがよろしうござります。此の世で一番尊いものは、御自分のお姿ぢやと、御信じ遊ばさねばなりませぬ。

（四の御方）自分を佛と信ぜよとは、何と云ふ淋しい訓へであらう。なべての人は、己れより貴い者を見出さないでは、生きて行くことはかなはぬぞゑ。

（定雲）なべての人とあなた様とは比べ物になりませぬ。あなた様はそのやうな、弱い卑しい人間ではおはしませぬ。自らを佛と恃む、強い貴いお心をお持ちなされば、もろ／＼の憂ひも悶えも、朝日に向ふ氷のやうに、一時に溶けてしまひまする。

（四の御方）妾がどうしてそのやうな強い心を持つて居ようぞ。妾はいやしい弱い女子ぢや。此の觀世音や勢至に勝る如來の像が刻まれずば、妾の迷ひは生涯晴れる折はないのぢや。

（定雲）いかやうに仰せられても詮ないことでござりまする。強いお心をお持ち遊ばす事が出來ずば、憚りながら、其れはあなた様の御不運と申すより外はござりませぬ。

（四の御方）ほんに其方の云ふ通り、妾は不運な女子ぢやなう。佛を餘所に求めることも、自ら佛となることも、妾には許されて居ないのぢや。胸の悶えの消ゆる時なく、妾は一生淋しい月日を送らねばならぬわいなう。・・・・

四の御方、重い溜息をついてうら悲しげに俯垂れる。其の幽鬱な表情を冷靜に凝視しながら、再び定雲は默々として菩薩の相を描きにかゝる。稍經てから四の御方が徐ろに立ち上つて、無言のまゝ左側の扉の方へ歩いて行く。

（定雲、繪筆を擱いて出で行く婦人の後ろ姿を眺めながら）もし、いづれへお越しになりまする。

(四の御方、扉の所で振り返つて答へる。)先の程から大殿が、妾の屍骸を待ち憧れてお居でゝあらう。もう夜明けにも間近い様子、こよひは此れで別れるとしようぞい。

(定雲) それでは又明日(あす)の夜、お目に懸りたう存じまする。

(四の御方) 明日の夜會うても、妾は其方と再び言葉を交はさぬ故、今宵の物語は夢と思うて忘れてくりやれ。決して人に洩らしてはならぬぞや。

(定雲) 勿體ないことながら、此れぎりお言葉を賜はらぬと思へば、どうやら悲しう覺えまする。

定雲が畏まつて兩手を衝いて居る間に、四の御方は扉を排して渡殿へ消える。一旦開かれた扉が外面から鎖されると、漸う定雲は頭を擡げて、ぢッと婦人の出で去つた方角を見守つて居たが、やがて今度は自分の作つた勢至菩薩に眼を轉じて恍惚とする。

(定雲、突然兩腕をひろげて菩薩の像を抱きながら、其の足もとへ轉ぶが如く打ち伏して、物狂はしげに叫ぶ。)四の御方様! 四の御方様! 此の定雲の切なる戀を憐み給へ!

第三幕

舞臺面は第二幕と同じ。其の明くる日の朝の出來事である。左側の扉格子など悉く開け放たれて、朝日が爽やかに板敷へさし込んで居る。

須彌壇の前に、定朝が唯獨り腕拱いて、定雲の作り上げた勢至と觀音とを、羨ましさうに見上げては嘆息して居る。女房の一、女房の二、左の扉から急ぎ足で這入つて來る。

(女房の一、つく〴〵と菩薩の相を眺め入つて後、竦然として罵るやうに云ふ。)此れぢや、此れぢや。此の菩薩に違ひござんせぬ。

(女房の二) てもまあ。そのやうな恐ろしい事があらうとも思はれませぬ。——定朝どの、貴方(そなた)は此の御堂に昨夜(ゆふべ)から籠つておいでなさりましたか。

(定朝) いやいや、某はつい先の程此れへ參つたところでござる。

(女房の二) それならあの、此の菩薩を拵へた定雲

とやら云ふ若者は、いづれに居るのでござります。

(定朝) 定雲は何處に居るか、あの男のことは知り申さぬ。したが彼奴は、夜な夜な人の寢靜まる頃仕事を勵んで、朝は休んで居りまする。さうして、あわたゞしいお許たちの御樣子は、いかゞなされたのでござります。

(女房の一) 其れでは其方は、此の定雲の菩薩について、不思議な噂のある事を、いまだに御聞きなさりませぬか。

(定朝) 不思議な噂とは? はてどのやうな事でござらう。某一向に存じ申さぬ。

(女房の二) 此の頃に、此の菩薩が毎夜毎夜御堂の中を脱け出して、さながら生きた人間のやうに、長い長い渡殿を徐かに歩んで、南殿の勾欄のあたりを徘徊すると云ふ噂が、專ら擴まつて居りまする。

(定朝) して其の怪しい人影を、誰ぞたしかに見とゞけた者がござらうか。

(女房の一) 誰彼と申さうより、妾が立派な證人でござんする。

(定朝) なに、お許が御覽なされたとな。

(女房の一) いかにも妾が、たしかにゆふべ見附けたのでござります。

(定朝) お許が御覽なされたとあれば、成る程まことらしい話ぢやが、……あはゝゝゝ(氣を換へて輕く笑ふ) 大方其れは何かのお見違ひでござらうも知れませぬ。そのやうな不思議なことが、あらう筈はござりますまい。

(女房の一) 妾とても人の噂を聞くうちは、よもやと思うて居りましたが、昨夜の樣子を見るからは、もう疑うては居られませぬ。定朝どの、ほんとうに不思議なことがあるのでござんすぞえ。

(定朝) ふん。たとへいぶかしい人影を御覽なされても、其れが菩薩の脱け出したものとは、どうして御判じなされたのぢや。菩薩でなうて、盜人などの徘徊するのやらわかりませぬ。

(女房の一) それでも妾は、二三尺の近さに擦れ違

うて、星の光にまざまざと、お顔を拜んだのでござります。此の觀世音や勢至菩薩に紛れもない、生きたお顔を眼のあたりに見たのでござります。

（定朝）してどのやうな裝束を纏うて居られた。やはり此の菩薩と同じお姿でござつたか。

（女房の一）さあ、妾が其れを拜んだ折は、たゞ恐ろしさに氣が怯えて、しかとは覺えて居りませねど、どうやらやんごとない上﨟のやうな御裝束を、纏うておいでなされました。西殿の東勾欄の曲り角で、妾とはつたり出で會うた時、あわたゞしう檜扇を面へかざして、大海の摺裳の音をさらさらと立てゝ、忽ちにいづこともなう消え失せておしまひなされました。

（女房の二）人に依つてはいろ〳〵の事を申しまする。さる女房の見た折には、お顔は愚か御衣まで、此の觀世音と寸分違はず、渡殿の板敷を音もなくお步きなさる眞白な御足裏が、闇夜ながらも雪のやうに思はれたと、人傳に聞いて居ります。

（定朝）して其の怪しい物影は、夜な〳〵御堂を脫け出して、そもそもいづれへ參るのでござらう。

（女房の二）いづれへ參りますのやら、誰も定かに見究めた者は居りませぬ。いつも夜更けの丑滿頃に姿を現はすばつかりで、夜明けまでには人知れず御堂へ戾つてしまひまする。

（女房の一）定朝どの、妾の申すことはほんたうでござりませうが。

（定朝）されぱでござる。古への百濟川成を初めとして、いみじき名工の手に成る物は、往々不思議を現ずる例がござる故、定雲の作つて觀音勢至が、自然と動き出さうとも、あながち怪しうはござるまい。彼奴の爲めには此の上もない面目でござりまする。

（女房の二）ほんにさうかも知れませぬ。大殿樣にもほのかに噂を聞し召されて、鬼神を欺く定雲の鑿の力で刻んだ菩薩に、いかさま其れ程の靈驗がなうてはかなはぬと、仰せられましたわいな。

（女房の一）さう仰つしやればめでたい話でござんすが、聞くと見るとは大きな相違、ゆふべ妾が拜んだ

節には、あまりの事に膽が潰れて、身の毛もよだつたやうにござりました。名人上手の丹精をこめた御佛も、却つて微妙に出來過ぎると、氣味が惡うござりまする。

(女房の二) そのやうな勿體ない事は仰つしやいますな。人間の亡靈ならば知らぬこと、生きた菩薩のお姿を御覧なさるゝ上からは、きつと何かの瑞祥でござんせう。――したがまあ、木で拵へた此の菩薩の御像が、どうして夜半に動き出すのやら、見れば見る程不思議な氣がして、いまだに妾は半信半疑でござんする。

(定朝) いや／＼決して恐るゝことも疑ふこともござりませぬ。某とても一應は不審に存じ申したが、斯くまで定かな證人の見えたるからは、ゆめゆめ噂に僞はござるまい。まつたく大殿の仰せの通り、かばかり見事な菩薩の像に、靈驗の現るゝは當然でござるわい。今のうちから其のやうな不思議を示す御佛ならば、嘸かしあらたかな功徳を持たるゝことでござらう。たとへ本尊の阿彌陀佛はどうあらうとも、此の菩薩だに御信仰なされたなら、後世安樂は望みのまゝぢや。さてもさても、あの定雲は古今隨一の佛師でござる。

(女房の一) それでは妾も昨夜の瑞祥を頼りにして、此の上ともに冥護を垂れさせ給うやう、お祈り申して置きまする。

女房兩人、觀音勢至の前に額づきて默禱する。

女房の三登場。扉の鴨居に佇んで、堂内を覗き込む。

(女房の三) もし、皆様にお伺ひ申しまする。夜な夜な戸外を徘徊するとか云ふ、噂の高い菩薩の像は、やつぱり其れでござんすかえ。

(定朝) いかにも此處に安置し奉る御木像に相違ござらぬ。此れでなうて、外にそのやうないみじき御佛が、おはさう筈はござるまい。

(女房の三) 丁度幸ひ叡山の院源律師がお見えなされて、一と目拜ませて貰ひたいとの仰せ故、唯今此れへお連れ申して參りました。

女房の三内陣の方へ歩み寄る。つゞいて其の後ろから院源律師が

道入つて來る。氣品のすぐれた老僧であるが、高德の聖と云ふよりも、寧ろ才智の穎脫した、鋭敏な性格らしく、眼光炯々たる威力ある容貌を持つ。

(院源)　いかに定朝、久しう其方に會はなんだが、此の度御堂建立の御企てに召し出されて、本尊の彌陀の御像を作り出さんと苦心を重ぬる趣は、愚僧もかねがね承つて、心强う覺えて居つたわ。

(定朝)　お心强う思さるゝとは、痛み入つたるお言葉でござりまする。如來の相を刻む可き大殿の仰せを畏みてより、晝夜の分ちなく肝膽を碎いて、種々に工夫を凝らしながら、遂に今以て心に適う思案も浮ばず、定めし世上の物笑ひにもなりつらんと、口惜しう耻かしう存じて居りまする。

(院源)　いやいや物笑ひなどの沙汰ではあるまい。千歳に傳ふべき伽藍巨刹の本尊を作り出だすに、一朝一夕の心勞で事足らぬのはあたり前ぢや。口惜しうても耻かしうても、氣を落さずに努めたなら、いつかは稀代の逸品の成就する日が來るであらう。其方の仕事の捗々しう參らぬのが、なかなか愚僧には賴もしう思はるゝのぢや。

(定朝)　某とても一旦は役目を免れて御暇を賜はるやうに、お願ひ申す覺悟でござりましたが、再び氣根を取りかへして、たとへ死すとも思案の着くまで此の場を去らじと、不退轉の志を堅めて居りまする。餘人は知らず律師までが、さほどに仰せ下さるからは、千萬力を得たる心地がいたしまする。

(院源)　かくてこそ其方は日本一の佛師ぢや。今の言葉を聞かれたなら、嘸かし御堂殿も御喜びなさるゝであらうわい。愚僧も私かに胸を痛めて居つたれど、其れで大きに安心いたした。

(定朝)　して律師には、何の御用で今日此れへお出でなされました。

(院源)　されば一つには其方の心を勵まして、元氣を奮ひ起させう爲め、一つには又噂に高い定雲とやらの菩薩の像の拜みたさに、夜の明け方に山を下つて唯今辿り着いたのぢや。不思議な菩薩の像と申すは、

かさせ此れであらうなう。

(定朝) さやうでござりまする。某は己れの役目が氣づかはしうて夢中になつて居りました故、叡山の律師のお耳にも響いた程の噂、つい先の程聞いたばかりでござりまする。

(院源) さうして其方は其の噂を何と思ふ。僞りと思ふか眞と信ずるか、其方の考へはどうぢや。

(定朝) 某の考へを申さうより、此の御像をつくづくと御覧下さりませ。此の御像を御覧なされて、其の噂を信ぜぬ譯には參りませぬ。木で作つた菩薩のお姿の動き出すのが不思議なら、人間の鑿の力で此のやうな立派なお姿の、刻まれたのが抑も不思議でござりまする。

(院源) 成る程なう。愚僧も今まで數知れず菩薩の像を拜んだが、いづこの御寺に參つても、此れに上越す觀音勢至は見あたり申さぬ。世上の噂は兎にもあれよも此のやうに巧みなものとは、夢にも思ひ及ばざりしに、聞きしに勝るあらたかな御佛ぢや。定雲とやら申す若者は、さすがに師匠の名を耻かしめぬ、立派な腕前と覺ゆるわい。

(女房の二) それでは律師も世間の噂を、ほんたうぢやと仰つしやるのでござりますか。此の御像が夜な〳〵ひとりで歩み出すと云ふ話を、御信じ遊ばすのでござりますか。

(女房の三) 此の木像のお姿に、魂があるのでござりますか。

(院源) 云ふまでもない事ぢや。魂がなくてはならぬ道理ぢや。

(女房の三) おこがましうござりますが、妾たちには其處の道理がわかりませぬ。木で拵へた菩薩の形がいかほど微妙なればとて、どうして其れに魂が宿つて居るのでござりませう。

(院源) でもお許達はおかしな事を仰せらるゝ。人間ばかりが魂を持つて居るのではござるまい。畜生は愚か庭前の一木一石にも、乃至は空行く雲のたゝずまひ、流るゝ水の面にも、悟りの眼もて觀ずれば、皆魂

御佛が宿つて居るのぢや。まいて人間よりも圓滿な、御佛の相を具備した木像に、などて魂の宿らぬ譯がござらうぞ。此觀世音の兩の腕から手足の甲の柔々しい肌の匂を御覧ぜられい。一本の指にも一片の爪先にも、一つ一つに血が通うて、悉く魂が宿つて居るやうに、お許たちは思し召さぬか。

(女房の二)　妾たちにもどうやら生ある人間の、手足を眺めて居るやうな心地がするのでござりまする。

(院源)　若しも魂が宿らぬものなら、いかほど器用に似せてあつても、そのやうな心地はせぬ筈ぢや。生ある人の手足のやうに覺ゆるのが、即ち魂の宿つて居る證據なのぢや。

(女房の一)　今の律師のお言葉で、いよ〳〵妾の出で遇うた、氣味の惡い昨夜の幻は、菩薩の化身に違ひないと存じまする。

(女房の二)　ほんに、ほんに、妾とてももう疑うては居りませぬ。そなたの御覧なされたのが、てつきり菩薩の化身でござんせう。妾も其のやうな果報にあづかりたうござんすわいな。

(女房の一)　果報を受くる瑞祥ならば嬉しけれど、萬一佛罰でも中りはせぬかと、いまだに妾は心配でなりませぬ。

(院源)　はてさて愚かしい心配はせぬものぢや。菩薩の出現にめぐり遇うのが果報でなくば、外にどのやうな果報がござらう。一昨年此の世を逝去つた華台院の惠心僧都は、愚僧の法の友でござつたが、嘗て横川の不二が峯で三尊の出現にめぐり遇うたと、歡喜の涙を催うしつゝ愚僧に語られた例がござる。僧都の如き大德ならばいざ知らず、愚僧のやうな下根の輩はいか程諸行の功を積み、念佛の數を重ねても、生きながら御佛のお姿拜まんことは思ひも寄らず、たゞ命終の際にこそ引接を受けんと願うて居るのに、いかなればお許は斯かる果報を得られたのぢや。愚僧は切に羨しう存じ申す。

(女房の一)　それを承つて妾も安心いたしまする。律師のやうな貴いお方から、羨しいと云はれる妾は、

どんなに仕合はせな身の上でござんせう。忝くも有り難いことでござんする。

（女房の二、女房の三）ほんに、ほんに、めでたい極みでござりまする。

（定朝）憚りながら律師にお願ひがござりまする。定雲の刻んだ菩薩の像が古今に稀なる出來榮えとは、誰しも信じて疑ひませぬが、其の評判の喧しいに從つて、某の苦衷はどれ程でござりませう。弟子の譽れを聞くにつけても、某の腕は鳴り心は躍るやうに覺えながら、いざ鑿を取れば妄念が雲のやうに群がり起つて一向纒まつた考へが浮びませぬ。此の定雲の菩薩を見てより、某の頭はどうやら惡魔に憑かれたやうに、働きが鈍うなつたのでござります。抑もいかにしたら、胸にわだかまる悶えを靜めて、定雲の腕前を凌ぐやうな、如來の相を考へ出すことが出來るのでござりませう。――定雲の眼の前には、いつも菩薩の妙相が現ともなく漂うて居ると申しまする。どうしたら其のやうな尊い境地に、己が心を導くことが出來ますやら、何卒某に教を垂れて下さりませ。律師のお力で、某の胸の妄念を拂ひ、眞如の光をお授けなされて下さりませ。某が一生のお願でござります。

（院源）佛師の修行も僧侶の覺悟も、二つとある可き道理なければ、いかさま心に妄想の影がさしたら、如來の相を考へることは出來ないであらう。愚僧の力で其方に安心の境地を開かせうとは、なか〳〵に覺束なうは存ずるが、しかしいさゝか教へて進ぜたい節もあるのぢや。若し觀念の便りともならばお互ひに此の上もないよろこび故、望みとあらば話して聞かさう。

（定朝）忝うござります。どうぞお聞かせ下さるやうに、ひたすらお願ひ申しまする。律師の御教へに導かれたら、妄想の影も忽ちに、晴れ渡ることでござりませう。

（院源）いやいや愚僧の說くことは、そのやうな高尙な教へではないのぢや。いみじき大德の聖にして丹靑の才をも備へて居つた、惠心僧都が世に在りし頃、佛工畫工の心得について、愚僧に語り聞かせた事があ

る。それを其方に教へて進ぜるのぢや。佛師の秘密を告げ知らさうと云ふまでぢや。

（定朝）はて、それならば猶更に、片時も早う伺ひたう存じまする。

（院源）うん、――お許たちは暫く彼方へ遠慮をして貰ひたい。

（女房三人）畏まりました。

女房三人の全く退場し去るを待つて、院源が徐ろに語り出す。

（院源）先づ其の教へを説く前に、愚僧は其方にももう一遍尋ねて見たい事がある。其方の門下の定雲が刻んだと云ふ此の觀世音と勢至菩薩を、其方は眞實どのやうに思うて居るのぢや。正直な其方の考を述べて見られい。

（定朝）某の考へは從前申し述べた通りでござりまする。門弟ながらも定雲は、某を凌ぐ古今の名工、此の御像は世にも稀なる逸品ぢやと、心から信じて居りまする。

（院源）ふうむ、然らば一點の批難を挿むべき餘地のない、圓滿な妙相ぢやと申さるゝか。

（定朝）さやうでござります。某の眼からは完全微妙なお姿のやうに拜まれまする。したが律師は何故あつて、今更其れをお尋ねなさるのでござります。此のお姿に難があると、思し召さるゝのでござりませうか。

（院源）愚僧とても先に賞揚した通り、此の御像を天下無類の絶品ぢやと、推稱するに躊躇はいたさぬ。いかさま非凡の佛師ならでは、斯ほどのお姿を刻まれまいと存ずるが、實を申さばいさゝか物足らぬところがあるわい。敢て完全無缺とは、申されまいと思ふまでぢや。

（定朝）さうして其れは、いかなる點でございまする。

（院源）成る程定雲の作つた菩薩には、たしかに魂が籠つて見ゆる。生き生きとして今にも動き出しさうに思はるゝ。されども愚僧が案ずるに、あまり生き生きし過ぎて居るのが難なのぢや。此の木像に魂が潜ん

で居るなら、よも御佛の魂ではあるまい。正しく現世(うつしよ)の人間の魂が籠つて居るのぢや。

（定朝）何と仰せられまする。

（院源）其方に合點が行かぬとあらば、仔細を說いて進ぜよう。――先づ何よりもいぶかしう存ぜらるゝは、此の木像の瞳の色ぢや。あの美しい瞳には解脫の光の冴ゆる代りに、怪しうも微かに煩惱の炎が搖いで見ゆる。あれは佛の慈眼でなうて、物に憧るゝ戀人の眼のやうぢや。それからあの生々しい唇を見るがよい。梵音相の氣品がなうて、求めて得られぬ情慾に顫へ悶えて居るやうぢや。あの蘭たけた兩頰の優しさと云ひ、なまめかしい項(うなじ)の肉の柔かみと云ひ、一歩あやまれば邪婬の相へ陷りさうに、どうやら危げな心のさまがほの見ゆるわ。淺ましい女人の魂を包んだ姿が、凡夫の眼(め)には微妙の菩薩と現じても、達者の眼(まなこ)を欺く事は出來ない道理、定雲とやらは何處から此の顏形を得て參つたか存ぜねど、さても恐ろしい菩薩ではあるわい。

（定朝）鑿を使うて萬物の形を整うる能はあつても、人の心の機微を見徹す眼力のない佛工の悲しさに、たゞ此の菩薩の不思議な美貌と嬌態に膽を奪はれ、一途にあらたかな御姿ぢやと驚嘆いたして居りましたが、今のお言葉で始めて夢の覺めたる心地、某にも漸う合點が參りました。恐れ入つたる律師の御鑑識、さすがに敬服いたしまする。

（院源）合點が行つたとは何よりぢや。それにつけても定雲とやらは、いみじき幻を見たものぢやなう。

（定朝）憎(にっく)き奴はあの定雲でござりまする。佛を蔑(なみ)し世を欺いて、莊嚴なる可き菩薩の相に邪婬の女の姿を混じ、此の靈場の土を汚した怪しかる振る舞ひ、早速引捕へてきつと究命いたさせまする。

（院源）あはゝゝ、何もそのやうに憤るには及ぶまい。其れは其方の短慮と云ふものぢや。愚僧は却つて定雲の企てた事を今の時代(ときよ)にふさはしい心掛けぢやと存じて居るのぢや。其方が定雲を凌ぐつもりなら、其の心掛けを見習ふがよいと申すのぢや。

(定朝) 此れは思ひも寄らぬこと、何故律師はそのやうな儀を仰せられまする。

(院源) されば佛工の秘密について、其方に敎へて進ぜたいのは此處の事ぢや。諸佛諸菩薩の妙相は、果してどのやうに尊いやら、凡夫の肉眼に映つた例のあらう筈なく、たゞ美しい人間の姿を選び出して、わづかに其れに擬へるより外はないのぢや。承れば其方の門弟の定雲は、卑しい漁夫の家に育つた若者の由、まいて其のやうな賤の男が、などて佛の美しさと、人間の美しさの差別を知らうぞ、彼(かれ)の幻に見るものは、畢竟菩薩の形に變じた女人の姿に過ぎぬは當然、其の木像をまことの菩薩と信仰して、禮拜するのが世間の衆生の常態なのぢや。

(定朝) いかさま其れも一應は道理のやうに聞えまするが、さるいかゞはしい佛像を禮拜したとならば、われ〳〵衆生はいづれの時にか解脫の善根授かることが出來ませうや。ます〳〵妄念の蔓るばかりで、やがては恐ろしい佛罰を蒙むる時節の來るは必然、日頃の律師のお言葉とも覺えませぬわい。

(院源) 日頃の愚僧が說くことは、無智の凡夫を導くための方便ぢや。今日は其方にその方便を明かして進ぜるのぢや。此のやうな靈場伽藍を建てゝ、有り難い淨土の景色を此の世に現じて見せるのも、一途に衆生を菩提に誘ふ方便に過ぎぬ故、凡夫の瞳を欺くことが出來たなら、それで佛師の役目は濟むのぢや。御佛の美しさを拜んだことのないわれ〳〵に、などてまことの菩薩の相が刻まれようぞ。たゞ人間の美しさを借りて、かりに菩薩と名づくるまでぢや。其の木像をまことの佛と心得て、ひたすら念佛をだに怠らねば、稱名の功德に依つて必ず往生は遂げらるゝのぢや。「命終の時までは一向に妄念の凡夫にてあるべきぞと心得て、念佛すれば來迎にあづかりて、蓮臺にのる時こそ妄念をひるがへし、悟の心がひらくる」と、惠心僧都も云はれた通り、彌陀の本願深さが故に、かりの佛を佛と信じて禮拜すれば、たとへ妄想が晴れずとも、念佛の力で救はるゝのぢや。妄念はもとより凡夫の地體、

一切衆生は皆煩惱の奴ながら、佛は我等を捨て給はず、きつと來迎し給ふのぢや。極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂。……なんと、此の理が解らぬかな。

(定朝) 一と通りは解つたやうでござりますが、若しも律師のお言葉に僞りがなくば、あまりに廣大な御佛の慈悲の有り難さに、空恐ろしい心地がいたしまする。

(院源) さうぞや。御佛の慈悲は空恐ろしい程廣大なのぢや。愚僧の言葉を疑うたなら、其の時にこそまことの佛罰を蒙むるであらうぞい。——されば一切の衆生は、三惡道を免れて、人間に生れしことを仕合せと觀じ、われ／＼の知れる限りの美しい姿を、三尊の像に象つて、尊崇するより外はあるまい。定雲の刻んだ菩薩の相に、惱みの影がほの見えたとて、もと／＼人間の作つた姿に、完きものは得られぬ道理、多少の批難は是非ない事ぢや。其方が定雲の菩薩に勝つた如來を作らうと企つるなら、此の木像より美しい人間の顏を搜すがよい。たゞ徒らに手を拱いて工夫するより、われ／＼凡夫の仲間から、最も上品な最も端嚴な、佛に近いと思はるゝ微妙の相を尋ね出すのが捷徑ぢや。

(定朝) さりながら、此の菩薩より美しい人間の相が、恐らく今の世にあらうとも思はれませぬ。殘念ではござりますが、尋ねたところで無益でござりませう。

(院源) そのやうにあきらめるには及ばぬことぢや。定雲の觀音勢至に匹敵す可き、如來の相を備へた男なら、其方が尋ねるまでもなく、愚僧が會はせて進ぜう。

(定朝) なに、其のやうな人に會はせて下さりますとな。さては律師には、お心あたりがござりまするか。

(院源) いさゝか憚ることがあつて、姓名だけは申されぬ。父はある時常陸の國司を勤めた男、母はさるやむごとない殿上人の御女ぢやが、二人の間に儲けられたみめ美しい淸らかな稚兒を、先年山へ預かつて、愚僧が手許に養うてあるのぢや。今年の春はねび整う

て、早や十八の男盛りと覺えたるに、あはれいかなる苦行をも堪へ忍びて、行くすゑは高德の上人になりたやと、切なる本人の望みのまゝに、つい先達て綠の髮を切り落し、名も良圓と改めてうら若い靑法師になり居つたわ。花も耻じらふ姿齡を持ちながら、厭離穢土の願ひのいかほど止め難しとて、斯くは勇ましう思ひ立ちけるぞと、愚僧もさすがに感涙を催したが、たとへ頭を圓めても、其の若法師の美しさは、今に少しも衰えぬのぢや。

（定朝）　さてさてめでたいことを承りまする。其の若法師の御相ならば、此の菩薩にも立ち勝つて、一段と美しうござりまするか。

（院源）　いかにも愚僧が請け合ひ申す。定雲の作つた菩薩には、煩惱の影が揺いで見ゆるが、其の若法師のみめ形には、微塵も汚濁の名殘りを留めず、瞳の色は淸淨無垢の水晶のやうに澄み渡つて、額から鼻筋の氣高さは、さながら白毫の光を放つかと疑はるゝ。人間にして人間ならぬ、寧ろ佛に近かるべき、世にも尊げな相貌なのぢや。己れの弟子でありながら、愚僧は時々あまりの威嚴に氣壓されて、思はず合掌するくらゐぢや。

（定朝）　あゝ有り難うござります。さやうな法師がおはすからには、此の定朝も救はれまする。まことの如來の出現よりも、今の某には忝うござりまする。さうして律師には、其の法師の御相を、いつ拜ませて下さりまする。

（院源）　今日しも愚僧を迎へかたがた、後刻此方へ參るであらう、片時も早う其方に會はせて進ぜたさに、實は手筈を定めて置いたのぢや。

女房の一、女房の二登場。

（女房の一）　律師にお伺ひ申しまする。

（院源）　おう、何事でござる。

（女房の一）　唯今叡山から律師のお迎へに參つたとて、其れは其れは玉のやうにうるはしい、御佛のやうに淨らかな、良圓と申さるゝ若い法師がお出でなされてござりまする。

(院源) うん、もう參つたか。

(女房の二) たゞ今お着きなされたばかりでござんすが、まあ何と云ふ品のよい、あでやかなお方でござんせう。あの法師こそ光源氏の再來ではおはさぬかと、お局の女房たちが俄かに騷ぎどよめいて、やんごとない上﨟の方々まで、几帳の隙より垣間見ながら、はしたなう褒めそやされて居られまする。

(院源) それは何よりよいところぢや。早速此れへ伴うて下されい。

(女房二人) 畏まりました。

女房二人、先を爭うて渡殿を走り行く。丁度彼等が舞臺を去らうとする時、出會がしらに良圓法師が女房の三に案內されて歩み來る。律師を始め女房達の讃嘆に背かぬ平安朝式美男の典型で、繪に畫いたやうな引目鉤鼻の、優婉豐麗な容貌を持つ小法師である。

(女房の三) 皆樣のお知らせを待つまでもなく、妾が此れへお伴れ申して參りました。

(女房の一) おゝ良圓さま、唯今お迎へに參らうと存じたところでござります。

(女房の二) どうぞ此方へお出でなされて下さりませ。

(良圓) 忝う存じまする。

女房の一、二も其處で一緒になり、慕はしさうに良圓の傍へ寄り添ひながら、手を取らんばかりにして本堂の方へ戻つて來る。しかし、良圓は極めて初々しい、無邪氣な、冷淡な態度を持して居る。

(良圓、院源の前に畏まる) 律師さま、仰せに從ひお迎へに參りましてござります。

(院源) おう御苦勞ぢや。申し付けて置いたよりも、大さう早う參つたやうぢや。――したが良圓、其方は愚僧に預けられてより、四年の間一遍も山を下つたことはない筈、久方ぶりで都に來て見れば、さすがに昔が戀ひしいであらうなう。

(女房の一) 此方のやうなうら若いお方が、むざむざ御出家なされたには、定めし深い因緣がござんせう。久々で都へお上りなされたついでに、ゆるゆる逗留遊ばして昔を偲ぶ知る邊なりともお尋ねなさるがよろしうござります。

(良圓) いえいえさうはして居られませぬ。律師をお迎へ申したからは、此處から直ぐに山へ歸らねばなりませぬ。

(女房の二) でもまあ其方は、都がなつかしうござんせぬか。

(良圓) はい、なつかしうないことはござりませぬど、浮世を捨てた法師の身で、剩へ修業の至らぬ若年の私、都に長う留まつたとて、何の利益がござりませう。早や早や山へ戻りたう存じまする。

(女房の三) ほんにいぢらしい事を仰つしやるお方ぢや。花ならば今が盛りの御年頃で、世に類ない御器量を持ちながら、よう御辛抱が出來ますわいなあ。

(良圓) 都は戀ひしうござりませぬが、此の頃名高い御堂建立の噂を聞いて、せめては一度有り難き靈場の土を蹈みたしと、常々願うて居りましたに、今日しも望みがかなうたれば、此れに上越す喜びはござりませぬ。何卒私に御佛を拜ませて下さりませ。

(院源) たやすい願ぢや。あれへ參つて拜むがよい。

良圓おもむろに内陣へ進んで、須彌壇のほとり額づきつゝ合掌する。暫く默禱をつゞけた後、項を擡げて先づ中央の阿彌陀如來の胴軀を見、次ぎに左右の觀音勢至へ眼を轉ずる。定朝は最初から一言一句も語らず、たゞ熱心と驚愕との相混じたる表情で、良圓の容貌を胸中へ刻み付けるやうにヂッと注視して居る。

(良圓、またゝきもせず觀音勢至を見つめたまゝ、人形のやうに動かなくなる。) 律師さま、如來のお顏はまだ二つながら出來上らぬのに、此の菩薩の御像はいかなる人が彫つたのでござります。

(院源) 其れこそ近頃世に鳴り響いた、定雲と申す若い名工の手に成るものぢや。此れなる菩薩があまり巧みに刻まれた爲め、却つて如來の御相が作り難うなつたのぢや。

院源の說明が耳に入らざるものゝ如く、依然として良圓は菩薩を見つめて端坐して居る。一坐漸く良圓の擧動に不審を抱き始める。

(女房の一) 良圓さま、どうなされたのでござります。先の程から菩薩のお前に蹲踞まつたまゝ、何を考へて居られまする。

（女房の二）　ほんに何やら思ひに沈んでお居での様子。大方あの菩薩のお姿の、あまり不思議な出來榮えに、見惚れて居られるのでござんせう。

（女房の三）　不思議と云へば菩薩のお姿に向ひ合うた、良圓さまの御顏を御覧なさりませ。いづれが菩薩と云うてよいやら判らぬほど、美しいではござんせぬか。

（良圓、縛られて居た人間が突然繩を解かれたやうに立ち上り、律師の前によろめき來つて跪き、戰慄しながら云ふ。）　律師さま、お願ひでござります。私を連れて早う山へお戻りなされて下さりませ。

（院源）　これ何事を申すのぢや。愚僧を迎へに參つた外に、其方にはまだ少し用事もある。次第に依つたら二三日、此處に滯留せねばなるまい。

（良圓）　いえ〳〵さうしては居られませぬ。どうぞ私を一刻も早う、山へ歸らせて下さりませ。律師さまお願ひでござりまする。

（院源、忽ち愕然としたる樣子にて、良圓の顏をハッタリと睨む。）　はて心得ぬこともあるもの、常日頃から佛にしても見まほしい、莊嚴無垢な其方の顏が、唯今菩薩を拜んでから、俄に邪淫の相を現はし、淨玻璃の如く冴え渡つて居た兩の瞳に、情慾の炎が燃え出したわ。

（良圓）　律師さま、其の通りでござります。其の通りでござります。もう何事も申しませぬ。どうぞ私を哀れと思うてお救ひなされて下さりませ。早う此の場を逃れさせて下さりませ。

（院源）　たとへ山まで逃れても、其方の心はやつぱり此の場に留つであらう。さるにてもいかなる宿世の惡緣で、此れなる菩薩が斯くも其方をば迷はせたのぢや。其方の道心はもつと堅固な筈であつたわ。

（良圓）　律師さま、早う私を連れて行つて下さりませ。私は恐ろしうござります。あの菩薩の眼は、私の瞳を視るために、私の姿に憧れるために、刻まれたやうでござります。あの菩薩の唇は、私の血を吸ふために、私の肉を啖うために、作られたやうでござります。

私には其れが一と眼で解りました。恐ろしいことでござります。

(院源) いかに定朝、此のやうに淺ましい相になつては、もう良圓は役には立たぬ。惜しい事をいたしたものぢや。

(定朝) 其の御懸念は御無用になさりませい。菩薩を禮拜なされし以前の、貴いお顏がはつきりと、某の胸へ彫り付けられてござります。もはや如來の尊像は出來上つたも同然でござります。良圓殿がお歸りなされても、憂ふる事はござりませぬ。

(良圓、物狂しく叫ぶ) お願ひでござります。早う私を山へ歸らせて下さりませ。

(定朝、歡喜に堪へざる如くに叫ぶ) 如來の像は出來上つたも同然ぢや。あゝ忝うござります。

女房達は呆然として始終の様子を眺めて居る。

第四幕

第二幕と同じ深夜、同じ場面。第三幕から四五日過ぎた頃である。堂の内部は殆んど眞暗で、此の間に一點の燈火が纔かにはためきつゝ、その周圍の二三尺ばかりの空間をぼんやり照らして居る。四の御方と定雲とが燈火の左右に唯二人相對して、朦朧と据わつて居る。其の他の部分は闇に包まれて全く判らない。

(四の御方) これ定雲、妾はもう一度其方と話がしたうなつた。妾は其方に賴みたい事があつて、こよひ再び大殿に席を外して頂いたのぢや。

(定雲) またいつぞやの夜のやうに私たちは二人きりになりました。あなた様からもはやお言葉を賜はらうとは思ひ設けず居りましたのに、有り難いことでござりまする。さうしてお賴みと仰せられますのは、どのやうな儀でござりませう。

(四の御方) 賴みと云ふは外でもない。其方の師匠の定朝は、此の頃漸う本尊の阿彌陀のお顏を作り上げたと云ふではないか。

(定雲) さやうでござりまする。……

(四の御方) 其の御顏が、其方の刻んだ菩薩よりも、更にすぐれて美しいと云ふではないか。

(定雲) ……。

(四の御方) それぱかりではない。噂に聞けば定朝は、叡山の律師の御弟子の良圓と云ふ、器量のめでたい若法師のみめ形を、其の儘ひそかに如來の御相へ寫し取つたと云ふ話。其方も定めて知つてゞあらう。

(定雲) 噂は聞いて居りますが、まだ私は良圓と云ふ法師を、一度も見たことはござりませぬ。

(四の御方) 良圓法師には會はないでも、如來のお顔は度び度び拜んで居るであらう。

(定雲) それは拜んで居りまする。お顔は既に出來上つて、昨日の朝から取り付けられてござりますが、あの通り今宵は内陣が暗闇ゆゑ、此處からは見えないのでござります。

(四の御方) 賴みと云ふは其の事ぢや。どうぞ内陣に燈明を灯して、妾に一と眼本尊の相恰を拜ませては賜らぬか。

(定雲) 外ならぬあなた樣のお賴みなれば、かなへて上げたう存じますれど、此ればつかりはお許しなされて下さりませ。

(四の御方) なに、妾の賴みをかなへる事が出來ぬとは、どうした譯ぢや。

(定雲) あなた樣がどのやうに仰せられても、あの御本尊を拜ませてはならぬとの、大殿樣の嚴しいお云ひ附けでござりまする。

(四の御方) そのやうな事を大殿が仰せられう筈はないぞや。其方は僞りを申すのぢや。

(定雲) 決して僞りではござりませぬ。此のやうに燈火の數を減らせて、わざと御堂を眞暗にして置きますのも、あなた樣に如來のお姿が見えないやうに、大殿樣のお計らひされた事でござりまする。

(四の御方) いえ／＼其れは僞りぢや。大殿の御名を騙つて、勝手に其方が計らうたのぢや。

(定雲) なか／＼さうではござりませぬ。

(四の御方) たとひ大殿のお云ひ附けがあらうとも、妾が賴みで見せたとあらば、其方に咎めのかゝる道理はないであらう。天下を動かす事は出來ても、妾

の言葉には背きかねると、つね〲大殿は仰せられるのぢや。

(定雲) 御尤もでござりますが、此ればつかりはお止まりなされて下さりませ。あの御本尊をお拜みなされても、決してあなた樣のお爲めにはなりませぬ。必ず何か忌まはしい事が起るでござりませう。私は心配でござりまする。

(四の御方) 忌まはしい事が起らうとも、此のまゝ拜まずに濟まれうか。……よいわ、よいわ、聽かぬと云ふなら妾は其方に頼はせぬ。頼まぬ代りに其方に指圖することがある。

(定雲) されば、いかなる御指圖でござりまする。

(四の御方) 此の燈火を內陣の阿彌陀佛のお前へ運んで賜れ。頼むのではない。指圖するのぢや。

(定雲) ……

(四の御方) これ、何をためらふて居やるのぢや。前太政大臣爲光の女、四の御方が其方に命令して居るのぢや。妾の頼みは聽かぬにもせよ、妾の指圖を拒むことは、其方の分際では出來ぬぞや。

(定雲) あゝ、是非もないことでござります。

定雲恐る恐る立ち上りて、燈火を須彌壇の方へ運ぶ。眞暗であつた內陣がうす明くなつて、阿彌彌如來と觀音勢至の像がまざまざと浮かび出る。定雲の話した通り、一番左端の本尊の首は既に完成されて胴に繫がつて居る。首は良圓法師の顏にそつくりである。

(四の御方、燈火を捧げて彳立して居る定雲を背後に侍らせ、跪いて恭しく如來を仰ぎ視る。) おゝ、此れぢや、此れぢや、此れこそ、妾が胸に描いて居る戀人のお姿ぢや。

(定雲) もし、あまりにお聲が高うござります。どうぞお靜かになされて下さりませ。

(四の御方) 良圓さま、良圓さま、どうして其方は山へお歸りなされたのぢや。物言はぬ、冷たい如來の御像よりも、生きた其方のお姿に會ひたうござります。

(定雲) もし、四の御方樣、其れ程御覽になれば、もう充分でござります。どうぞ彼方へお出でなされて下さりませ。今に恐ろしい事が起るかも知れませぬ。

道長がた側面の扉を開けて密かに入り來り、片隅の柱に凭れて

窃み聴きして居る。扉の外から皎々たる月光が、堂の板敷の一部を照らす。

(四の御方) 良圓さま、其方を慕ふ煩惱の炎が、妾の胸には絶ゆる隙なく燃えて居たのでござります。生れぬ先から其方は妾の戀人でござります。折角都を訪れながら、そのまゝ山へ歸られたとは、ほんに恨めしうござんする。

(定雲、月明りに心付きて後ろを振り返り、道長を認めて竦然とする。) 四の御方樣、お靜まりなされて下さりませ。大殿樣が彼處においでゞござります。

(道長、兩人の樣子を冷眼に見やり、戸外の方に向ひながら大聲に呼ばゝる。) これ、誰ぞ警護の者は居らぬか。

忽ち外の庭先から、警護の武士の逞ましげな豪壯な返辭が聞える。

(聲の一) 肥前の前司頼光が郎黨、坂田金時。

(聲の二) 渡邊綱。

(兩人の聲) 此處に控へて居りまする。

(道長) 御堂の中に狼籍者が這入つたやうぢや。此れへ參つて引捕へい。

(兩人の聲) はッ。

金時と綱とが簀子を踏み鳴らして戸口から走り出で、金時は四の御方を綱は定雲を鷲掴みにして疣の間に引き据える。騷ぎのうちに燈火が全く消えて、月の光がいよく冴え渡る。

(金時) 菩薩に似たる物怪の徘徊する由を承り、御堂を固め居つたるところ、唯今捕へし此の上﨟の顏こそ、噂に違はぬ曲者らしうござりまする。

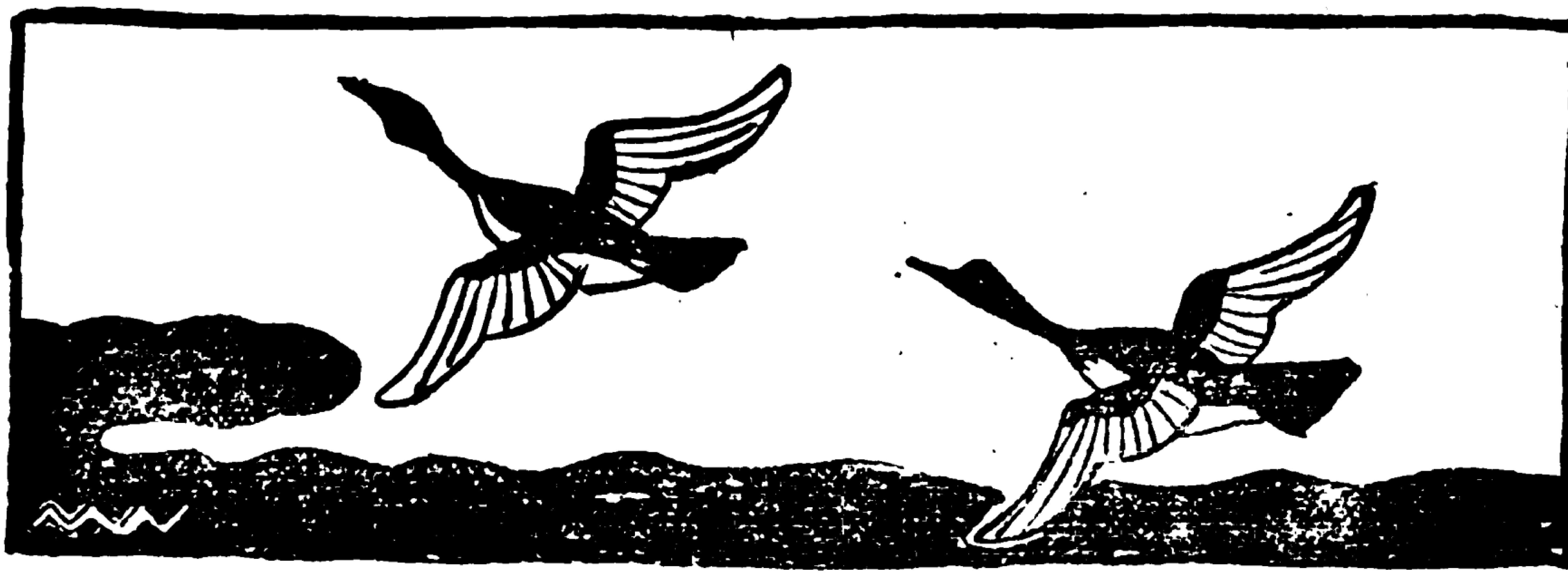
(綱) 月の光に定かならねど、某が捕へし男子の面は、羅生門の鬼のやうにむくつけく、人やら鵺やら判りませぬわい。

(道長) 其奴等の面は見るに及ばぬ。此の靈場の佛を汚した憎つくき痴者、急ぎ庭先へ曳き出して、有無を云はさず斬り捨てい。

(金時、綱) 畏まつてござります。

金時と綱とが二人の男女を荒々しく戸外へ曳き摺り出す。道長は獨り柱に凭れて腕を拱いて居る。やゝ暫くして兩人の斬り殺される呻り聲が物凄く響いて來る。道長嘆息しつゝ瞑目する。幕

大正四年五月稿



人形の踊り

田村俊子

空も、風も、陰鬱な日である、雲を漏れてくる薄光が青葉の上を這つて、その上に紗のやうな雨が降つてゐる。

Sは机の上で人形を踊らせてゐる。ゴムの球の穴を拇指で押して拍子を取ると人形は爪先を立てゝ上手に踊る。ちゝんがちゝんが、ちりちりが。ちゝんがちゝんが、ちりちりが。と云ふ樂の音が小さく忍ぶやうに箱の中から響いてくると、人形は淺黄いろの靴を穿いた足の先きで上手に踊る。その足の先きが輕く又に組まれたり、力が入つて八の字に開いたりする。小刻みに爪先きをだん／＼と寄せて行つて、くるりと廻つて、又だん／＼に爪先を開いてゆく。

帽子が青く、きものが赤い。きものの赤い裾が袋のやうに擴がつてゐる。絆の金ぼたんがてら／＼と光つてゐる。桃色のレース、眞つ赤な唇、胡粉のかたまつた手の甲を兩方並べて、何う云ふつもりか腕を上げてゐる。人形の足は踊つても手は踊らない。陰鬱な空の薄光が、人形の可愛らしい頰にもさまよつてゐる。

ちゝんがちゝんが、ちりちりが。ちゝんがちゝんが、ちりちりが。と拍子を取つて踊らせながら、それがあんまり上手に踊り出すと、Sはたまらない感激にその胸が苦しくなつてくる。魂のないものに、何う云つて賞めそやしてやつて好いか分らなくなつて、一時に沸した愛の遣り場がないのにSは苦しみながら、でも静に片手に頬杖を突いて人形の踊る足を見詰めてゐる。Sのその眼はいつぱいに悲しく笑つてゐる。Sの方をくるりと向く時、人形も、その顔の陰影が悲しく笑ふのである。

小刻みに爪先を刻んで拍子を取つてゐる時、人形の顔は一寸まじめに緊張する。くるりと廻る時は人形の顔が笑ふ。だが人形はSの眼が悲しく笑つてゐるので、自分も悲しく笑ふのである。Sはしばらく踊らせる手を止めて、赤く静止してゐる人形をぢつと見てゐると、Sはまた、人形の何にもしない空な姿が淋しくなつて、其れであわてゝ踊らせ初める。踊らせれば人形は直ぐに踊る。ちゝんがちゝんがと取り澄ました拍子に乗つて直ぐに踊り出す。人形は中々踊りに倦まない。ちゝんがちゝんが、ちりちりが。ちゝんがちゝんが、ちりちりが。とよく踊る。だん〳〵に何所かで人形の魂が技巧的に踊り初める。

Sの身體には、今非常に熱がある。手の先きにも熱が浮いてゐる。ぢり〳〵と腕から胸に慟悸が響いてゐる。倦るい壓されるやうな苦しい身體の悩みである。Sは人形を踊らせるのを止めにして、熱のある掌を唇に當てゝ見た。腕の付根が倦るくてSは息苦しいのである。Sは障子を開いてほつと強く息をして見た。昏々と、呼吸がやつぱり苦しいのである。

眼の前には楓の若葉がいつぱいに擴がつてゐる。その青い色がSの胸を苦しく壓迫する。青い色がSの呼吸を塞ぐやうに思つて、Sはまた急いで障子を閉めた。Sは静に机の廻りなどを見た。古る人形が

暗い紅色を塗つて棚の上に並んでゐる。河骨の葉が苦く眞つ青に、陰欝な薄光を受けて絹のやうな艶をのべてゐる。Sの好きな薔薇の花も散つて了つたし、チユーリツプの花も散つてしまつた。紅色のつゝぢが汚く群がつて縮れてゐる。Sはそれ等を見廻しながら、熱のある口の中を味つて見て唾をのんだ。咽喉の痛みは昨日よりは少し快くなつてゐるやうに思はれた。

　吸入器が、床の間の上に悲しさうに載せてある。鹽分を白く吹いてゐる硝子の器、金物の白い光り、その針のめどのやうな吸入の穴に、埃の入らないやうに三味線の三の糸が挿しこんである。吸入器に附いてゐた針金を失くしてしまつたからである。三の糸はぐるぐると先きの方が捲いてある。それが鬱金ざくらの花のやうな病的の淡い色を浮めてゐる。Sはそれを見付けると、吸入をしなくてはならないと思つた。

　吸入器を机の上に載せて、アルコール洋燈に火をつけて、コツプに藥を注いで、三の糸をSは指で取つた。アルコールの匂ひが魔睡を含んでSの鼻覺を刺戟する。Sはやつぱり机に頰杖を突いて、硝子の喇叭管の先きから蒸氣の出てくるのを待つてゐた。丁度その時に杜鵑が鳴いた。今年の初夏に入つてからこれで二度目に聞く聲だと思つて、Sは耳を澄ましながら眼を外に向けると、薄い日光のひろがつてゐる家根に雨がぱら〱と降つた。遠い空から遠くSの胸の中に憂鬱の影が落ちていつた。

「たいへんに熱が出てきた。」

とSは顏を押へながら考へてゐた。

　この頃Tと云ふ人に逢ふ度に、

「あなたの身體は惡るいよ。醫者に診てもらはなくちやいけない。ひどく疲れてゐる。今のうち海岸へでも行くといゝのだがなあ。」

とTはSに云つてゐた。その顏をしげじげと見詰めては、

「顏色がわるい。」

と云つた。Sはいつも笑つてゐて自分の身體を氣にもしないでゐたけれ共、この頃のやうに熱が身體に彌蔓してうつら／＼とした病ひに襲はれてゐるやうな氣分が續くと、Tと云ふ人の云つた言葉が思ひ出されて、Sはひどく不安であつた。Tと云ふ人の考へてゐるやうな恐しい病毒が、全くこの疲勞してゐる身體の内に潜んでゐるのではないかとも疑はれて、Sはその呼吸が一層苦しく切ないやうに感じられるのである。

Sは吸入を濟まして終ふと、また人形を踊らせて見たが、こんどは人形の足が少しぎこちなくなつた。それでぼんやりとゴムの球を押しながら、Sは自分の身體の健康について暗い思ひで考へてゐた。去年の春頃からSはすつかりとこの身體が弱つた。顏の色も、鏡に向ふのも氣になるやうに衰へて色を失つて來た。殊に今年の春、風邪が因で長く病つてから、Sの健康は舊のやうにならなかつた。そうして疲れ切つてゐるその氣力は、すべての上に何時も物憂く倦怠であつた。

Sはそんな事を思つてゐると悲しくなつた。疲れと衰弱が自身にもはつきりと感じられてきたと云ふことがSには、思ひがけない事のやうに今更恐しかつた。だん／＼に自分の身體が衰へてゆく。云ひ樣もない疲勞に襲はれる時のあの昏倒するやうな心持――それをSはこの頃度々自分の身に覺える。

「Tさんが云ふやうに、自分の身體にはもう病氣が廻つてゐるのではないか。」

Sは然う思ひ詰めた時に、瞼の皮が自然と剝げ落ちたやうな氣がした。慟悸がどき〳〵と胸先を傳はつて、息苦しく喘ぐやうな氣管の壓搾がSに感じられる。Sはうつとりした眼で自分の手の先きなどを見た。青い靜脈紫いろの靜脈が薄黃色く皺んだ手の甲に筋を描いてゐる。空氣にさらした手は熱が冷めてわな〳〵と戰えてゐる。Sは又袖口を捲つて自分の腕を見た。腕首は果敢なく細いけれ共、二の腕にはまだ膨くりとした白い肉がある。彼女の二の腕は可愛らしく盛り上つた肉を持つてゐて、そこだけに處女の美が消えずにゐるやうな恰好をしてゐる。Sは自分の二の腕を見る時に何時も然う思ふ。今も然うした仇氣ない肉の形は見ることが出來たけれ共、まるで石膏のやうにかす〳〵とした色をしてゐて、削ればぼろ〳〵と石の屑が落ちそうである。紫の靜脈が網のやうに流れてゐる。ぢつと見据えてゐると皮膚の色が青く〳〵變つてゆくやうである。二の腕が冷えて、忽ちの間にこんどは掌に熱が浮いてきた。

Sはこの熱が氣になつて堪らなかつた。それは確に風邪の熱とは違つてゐた。脂肪のやうに自然と身體の一部から搾られてくるやうな重い熱である。頸首を撫でるとそこにも熱が浮いてゐて熱かつた。Sはその手を袷のふところに入れて胸を擦つて見た。乳のまわりが燃えるやうに熱い。ぢり〳〵と擦つてゆくと肋骨がばら〳〵とSの手に觸つた。

「この間、あんまり歩き過ぎた疲れが出てゐるのだらう。」

とSは何氣なく思ひ捨てながら、又人形のゴムの球を握つた。この間、晴天が毎日つゞいた時、あの黄金のやうに晴れた日光と、綠玉のやうに透き徹つた若葉とに惑溺して、Sは毎日々々郊外を遊び廻つた

ことなどを思ひ浮べた。今年はまた、この五月にいろ〳〵な友達が遊びに來た。Kの雨の青葉、金泥のやうに落日の影の流れたOの松林。Mの若葉。S堤の若葉。Sは彼方此方と遊んだ多くの友達の上をなつかしく思ひやりながら、自分の疲弊した肉體がまるで青葉と太陽の光りに昏惑しつゝ馳けずり廻つた數日を聯想した。他の友達は誰れもみんな丈夫そうな肉體を青葉の光りに浸らせてゐたけれ共、Sはいつも其の强烈な青葉の光りによろ〳〵としてゐた。よろよろしながら、Sは丈夫そうな肉體を持つてゐるその友達といつしよになつて青葉の光りを聲を上げて歡んで步いてゐた。

Sは今思つても、その青葉の光りに刺されて昏倒するやうな心持になる。青い麥畑の上に光線が蛇のやうに迂曲つては消え、走つては隱れたあの金色の眩惑が、今もSの神經を攪亂するやうに思はれるのである。Sは思はず額に手を翳して自分の眼の前を暗くした。だが青と金の光りの惱亂は、Sの郊外を步いた聯想を深く綴つてゐてSは一層その眩惑の底に落ち込んでゆくやうに思はれる。

Sは苦しくてたまらないので、蓙の上に倒れて眼を瞑つたけれ共、青と金の光りはSの瞼を執拗く微動させてゐて止まなかつた。何とも云へぬ深淵の眞つ暗な底に、青と金の光りが射るやうに動いてゐる。

Sは丁度郊外を步いてゐた時に感じたやうに、その深淵の底を望みながら陰が欲しくて堪らなかつた。隈のない日光が天と地と青葉に漲つてゐたあの苦しさが、今もSの神經を苦しめてゐる。Sは泉を求めるやうにその青と金の光りの中からうらゝかな陰を苦しく求めてゐた。自分の呼吸がだん〳〵に切迫してくる。青と金の光りが銳く熱火のやうにSの眼の上に襲つてくる。――と思つてゐる內に、光りは消えてしまつて、眞つ暗な深淵の底にSはぢり〳〵と沈んで行つた。光りの眩惑から眞つ逆に暗黑に落ちて

いつたSは、その壓迫の苦しさにしばらく悶掻いてゐた。暗黒な世界の苦しさに、Sはまた强烈な青と金の光りを頻りに求めながら、暗黒そのものを抉るやうに視力を据ゑやうとしたが、その力もSの五體から拔けていつて終つて、Sはいつか暗黒なものゝ中に捲きこまれいつた。

やがてSが目を覺ました時には、その身體が汗に濡れてゐた。Sはぐつたりと疲れてゐた。誰れが開けたのか窓の障子が開いてゐた、そこから濕つぽい空氣がSの身體の方に吹き込んでゐた。薄い日は全く空から消えてしまつて、唯陰欝に暗くこまかい雨がしとしとと降つてゐる。楓の若葉が羽二重のやうに雨に濡れてゐるのがSの眼に入つた。Sはそれを見てゐる内にすつかり氣分が快くなつた。呼吸が平常のやうに樂になつてゐて、清新な濕やかなものが胸の内を洗つてくれたやうな心持になつてきた。Sは肌寒い冷えつくやうな感じはしながら、横に仆れたまゝで窓から雨の降るのを眺みてゐた。若葉が雨に媚びるやうに美しく濡れてゐる。Sはその不思議な媚を見付け出しておもしろく思ひながら若葉の上を見詰めてゐると、美しい若葉が雨に打たれるたびにいろ／＼な表情を見せてゐるのがSの眼に映る。濡れて葉と葉が重なる時に若葉は羞ぢがましく雨から顔を背向けるやうに見える。さらりと一と葉が群れから外れて梢を延ばす時に、若葉は雨の接吻にその心を戰はしてゐるやうに見える。悲しげに雨からはなれて瞼を瞬かしてゐるやうな若葉の表情は殊に哀れであつた。Sは氣持快く興がつて雨の若葉を眺めてゐたが、その疲れた身體を起すのは物憂かつた。熱はやつぱり先刻のやうにその身體に瀰蔓してゐる。

起きて見ると、Sの身體には惡寒があつた。頭痛がしてゐた。Sはまた自分の身體を不安に思ひながら

淋しく机に寄つて考へてゐた。Tと云ふ人が云ふやうに、醫者に診て貰はなくてはなるまいかと云ふことであつた。

斯うして衰へつゝ自分の命がだん／＼に枯れてしまふのである。然しそれは醫者に診てもらつてもその衰弱を取り留みることは出來ないとSは悲しく考へた。現在のこの勞動をやめなければ自分の身體を思ふやうに快くすると云ふことは出來ない。憖じい醫者などに診てもらつて厭な病名などをこの身體に附けられるよりは、診斷などされない方がSにはまだ／＼幸福の未來が殘つてゐるやうな氣がされるのである。せめてはTさんの云つて呉れるやうに海岸へでも行つて、のび／＼と暮らして見たい。然しそれを爲るのにも、Sは自身で要り用のものを調達しなくてはならないと思ふと憶劫になつた。

隣りの室で、Sの連合がこつ／＼と木を刻んでゐる音がする。この頃は連合はすつかり彫刻と云ふ新らしい仕事に打ち込んで、自分の長い間の生活の悶えは一と先づ片付いたやうな、安靜な日を送つてゐる。五年と云ふ完成の未來を區限つて、Sの連合は一生懸命に刀を握つてその仕事に執着してゐる。連合のその新らしく充實した生活を見るにつけて、Sは少しその連合の潑剌とした氣分に壓倒されるやうな時があつた。そうして連合のその緊張したもつとも好い生活の初まつたことがSには美しくつてたまらないのである。連合は一生懸命なのである。そこに自分の生活を見出してから、連合はその新らしい生活にほく／＼と喜んで、まつしぐらにその道を進んで行かうとする外には何にもなくつてゐる。

「五年の間だ。その間だけ面倒を見てくれ。」

と連合はSに頼んだ。Sは連合が何う生きてゆく術もなくつて深い苦悶に落ちてゐた時、時分もひとく

苦しかつた。自分の傍にゐるものゝ苦悶が、辛辣な唸きになつて絶えず自分の心を惱ましてゐると云ふことは、Sにはたまらなく苦しい事であつた。自分の生が幸福に展びてゆけば行くほど、Sは一層連合の生の苦悶が哀れであつた。自然の運命は意地わるく、まるで幸福と不幸を二人の頭上に劃然と色を分けて、各自の上に落してくるやうに思はれた。幸福はすべてSの上にばかり集つてきて、連合の上には不幸ばかりが影をひろげた。それは殊に、Sと連合が藝術に生きる人たちであつたからかも知れない。Sの藝術は兎に角幸福に輝いてゐるのに、連合の藝術は段々と不幸な底に沈淪してゆくばかりであつた。けれども連合は、とう〳〵その不幸から漸く拔け出すことが出來た。彼れはもう一度生れた最初に引つ返して行つて、そこで新たな努力と希望とを摑んだ。連合はもつとも初心になつてその新らしい仕事を大切に築き初めだ。あらゆる欲が連合の長い失望に萎えてゐた魂に勢ひよく火をつけた。連合はたゞ一心に進んで行かうとしてゐる。それは尊いやうな懸命な心持である。彫刻について世話をしてくれる人たちに對しても、連合は全く善良な純な心持で師事しやうとしてゐる。

Sは吃驚したやうな心持で連合の眞劍な態度を見詰める時があつた。新たな生活に生れ代らせる爲に、Sはずいぶん今までとは異つた生活に導かうとして一生懸命になつた事もあつたけれ共、かうして連合が全く無垢な眞つ白な心からある藝術の道筋に就き初めたことを見てゐると、Sは戰慄するやうにその新たな生活の最初が羨しくなつた。

連合はまるで傍目もふらなかつた。それと同時に、Sの生活の上にゝ拘泥しなくなつた。彼れはすつかりSから離れてしまふことが出來た。嫉妬も羨望もSの仕事に對する邪念な呪ひもみんな奇麗に消え

てしまつた。こうして自身はSよりは餘つ程離れた高いところに自分の生活を置くことが出來るやうになつた。そうして極めて穩やかな心持で彼れは毎日々々木を彫つてゐた。

　二人の生活は思ひ〳〵の別な道を進んでゆくことが出來るやうになつて、その狀態は安靜になつたけれ共、Sは何となく自分の生活がふやけたものに思はれて來て、そうして自分の前途が不安になつて來たのである。連合のこの頃の生命の輝きと、自分の生命の輝きとを比べて見てSはひそかに悲しく思つた。連合こそはほんとうに幸福に生き初めて來た。連合こそは今もつとも立派に生き初めてきたと思つた。そうして自分は一度築いたものゝ上から、だん〳〵と自身を引下されてくるやうに感じられた。誰れが引き下してくるのでもない。それは自身の疲れた困憊した精神が力を張りきれなくなつたのである。Sは其れを思ふとどんなにか悲しいのである。そうして、連合の仕事の完成を守るために、Sは五年の間の費用を供給すると約束してゐる。Sはまだ〳〵働かなくてはならない――。

「自分はすつかり疲れてしまつた。」

とSは熱のある額を指先で押へて見た。

「私が働けなくなつたら、あなたは何うします。」

　Sは後を振向いて、突然に向ふの部屋にゐる連合に聲をかけた。

「君が働けなくなつたら？　その時は自分が働くさ。」

と連合は低い聲で平淡に返事をした。Sはあとは默つて、机の上の人形を眺めてゐた。

「まあ、働けるまで働いてくれ。」

しばらくして、連合は木屑(きくづ)を吹くやうな響きに交(ま)ぢへて斯う云つてゐた。

「もし、私が病氣になつたら何うします。」

「そんな時が來たら、ずいぶん悲慘だ。僕には何うすることもできないから。」

連合はまた、深くも考へないやうな調子で云つた。木屑を頻りにふうふうと吹いてゐた。Sはそれを聞くと自然に悲しく一人で微笑まれた。連合はやつぱり自分よりは弱いのである。自分より弱いものを、自分の力の全(すべ)てで庇ひ育てゝ行くと云ふことはSには快いことなのであつた。自分はやつぱり強く生きなくてはならないと云ふ何時ものSの覺悟が、今もふとその胸に燃えたけれども、Sは今日は頻りに悲しかつた――。

Sはふと、自分の胸を絹糸房の縺れのやうに柔(やは)らかに搖(ゆす)るものがあるやうな氣がして、机の抽斗から一とつの手紙を出して見た。

「――先生窓の机によつて白雲のやはらかに散つてゐる青い〱深さうな空を見上げて、この眩(まぶ)しい光が眼前の壁をはつてゐるように先生のお居間にも流れ込んでゐるであらうと、なつかしい力強い思ひに茫然としてをります十八の小さい娘を、お心にお描き下さいましたら、あゝどんなによろこばしい事で御ざいませう。

我まゝ者、女らしくない、この上どんな不足があるんだ、身のほどを知らないとはお前の事だと、父母は唯小言をならべるので御座います。

私は何もいりませんから、どうか自由に勉强さして下さいと云つても、毎晩煩いほど勉強をしてゐて

もまだ足りないのか、一體お前は何になるつもりだとてんで取り上げてもくれません。

父母としては當然だとは思ひますが、子は親の犠牲になるもので御ざいませうか。

私はたとへまろびながらも心差した道を一すぢに進まうと愛人をまで捨てましたのでございますもの、私はなつかしい青春の情緒に、何時も〳〵その青年の面影を包んでをりました。

けれども、私は燃えるやうなあこがれ心に一時に湧き立つた異性に對する愛戀のために、すべてを忘れるやうな單純な心になり得ないので御ざいます。

美しくかざり立てゝ安らかに暮らしますよりは、生血をしぼる痛苦を味つても自分の欲するまゝに生きたうございます。

これから先き幾年かのあひだ、光輝のかげにつゝまれた暗い苦しい奮勵に、身も心も投げ込むことが出來ますれば、さうして自分の願ふ藝術に生きることが出來ますれば、それが私のしあはせなので御ざいます。

けれども〳〵先生に見捨てられゝばそれまでなので御ざいます、あゝ先生、私をそのお足許にひざまづかせておいて下さいませんか、どうぞお机の塵を拂はして下さいまし。

無理に思ひを通すので御座いますから、しぶ〳〵承知はさしても、親から滿足なことをしてもらはう等とは思ひません、淋しい辛い一人たとは考へますけれども、ちつとも悲しくございません。

只もし、先生が馬鹿〳〵しいとお取合下さらなかつた時はとそればかりに心は沈んでゆきます、先生何卒私に失望の慘めな思ひをさして下さいますな、生涯のお願ひで御ざいます、これをお讀み下さい

ましたら只一と筆鉛筆でも何でも結構でございますから御返事をお送り下さいまし、切にお願ひ申上げます、全身がおのゝいて熱い血汐がワク／＼と躍つてゐるやうな氣がいたします。

今私は三月の×××のお寫眞をかたくかたく抱きしめてをります。

お許し下さいまし。

やるせのない程お慕はしひので御座いますもの、おかたにくつついて居ります花に私は何うして成れなかつたので御座いませう。

はつきりと何かを見つめてゐらしやるお瞳に、このみだれにみだれた拙い文がするするとひらかれてゆくであらうかと思ひますと、不思議にも恥かしく、うれしくわけの分らぬ思ひに空に舞ふ風のうそぶきのような、目にみえぬ心の波はやがて、あついすきとほつた涙となつてこぼれます。

たとひ先生が惡魔でいらつしやらうともかまひませぬ、私は先生のお心のはしくれに生きたいともがいてゐるので御座います。

萬一、このまゝ半島の空を車に走る雲をうらやみ乍ら、むなしく涙で先生の御幸福をいのらなくてはならない樣な、儚ない運命にとらへられましたら、私は一層この魂をあの雲にやつてしまはうなどゝ考へてをります。

御迷惑をかへりみませず、厭なかず／＼を失禮をいたしました、拙い筆でさぞお讀み辛うございましたことゝ存じます、どうぞお許しをいたゞき度く存じます、それではこれで、涙はまだ止まりません。

先生の御名に生きる

二十八日　S

S先生さま

みもとに

Sは、昨日來たこの手紙に返事を書かなくてはならないと思つた。

若い女や男から、自分をなつかしんでくれると云ふやうな手紙が、Sのところに數々送られてくるけれ共、Sはこの手紙ほどに、その情を動かされたことがなかつた。この手紙にかくれた少女の心に玉のやうな純眞が輝いてゐると思つたからでもなかつたが、Sはこの手紙を見たその時から、その優しさに惹かれてこの少女が可愛しまれてならなかつたのである。そしてSはその時に、この少女に自分の命をやつて了つてもいゝと思ふやうな、輕い熱した情がその胸から迸つたことを、Sは今の靜な心で可笑しく思ひ出してゐる。

私は病氣なのです――。

その返事に斯う書き初めやうと思ひながら、Sは人形のゴム球を握つて拍子を取つた。ちりんがちりんがちりちりが。ちゝんがちゝんがちりちりが、と人形はSの手につれて直ぐに踊り初めた。

中央公論

臨時増刊

七月十五日發行

大正新機運號

内容は次號に詳細發表

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立誠堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　所	藤村梅松堂

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢
但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本鄉區片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるゝ虞なし

一振替貯金口座は東京三十四番なり

一郵券代用必ず一割增の事

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送達料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年五月廿九日印刷納本
大正四年六月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄉區駒込西片町十番地
中央公論社
電話長下谷九一一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.